

令和五年（二〇二三年）度

国際仏教学大学院大学

博士学位論文

円珍『法華論記』の研究

指導教員 藤井教公 教授

仏教学研究科 博士課程

学籍番号 一六一二 浅野 学

目次

円珍『法華論記』の研究

凡例	iv
序論	1
一、はじめに	1
二、問題の所在	1
三、研究史の回顧	3
四、研究の背景	4
五、範囲と方法	6
本論	10
第一章 円珍の唐留学と『法華論記』の撰述	10
第一節 円珍について	11
第二節 『法華論記』について	16
第三節 明詮との論議	19
第四節 唐留学について	23
第五節 『法華論記』の撰述経緯	26
小結	33
第二章 円珍の引用する『法華論』について	35
第一節 『法華論』諸本について	35
第一項 『法華論』の先行研究について	37
第二項 『法華論』諸本の本文系統について	42
第二節 『法華論記』所引の『法華論』について	53

第一項	本文系統をめぐる従来の両説……………	53
第二項	円珍撰述部から抽出した『法華論』……………	56
第三節	円珍所引『法華論』を中心とした諸本対校……………	59
小結……………	……………	73
第三章	七喻解釈について……………	76
第一節	『法華論』の七喻について……………	76
第二節	円珍と吉蔵の七喻解釈……………	78
小結……………	……………	88
第四章	三平等解釈について……………	89
第一節	『法華論』の三平等について……………	89
第二節	円珍の四種声聞授記解釈……………	91
第三節	卷第七末における天台章疏等の引用……………	96
小結……………	……………	101
第五章	十無上解釈について……………	102
第一節	『法華論』の十無上について……………	102
第二節	円珍の十無上解釈……………	103
第三節	十無上解釈中に見られる「吉基」について……………	105
第四節	吉蔵および基の解釈との比較検討……………	106
第五節	『叡山大師伝』の記述……………	117
小結……………	……………	118

初出一覧	426
文献表	409
『法華論』諸本対校 — 円珍『法華論記』十卷所引の『法華論』を中心として —	129
凡例	124
付録	124
結論	119

凡例

一、本論文で用いる『法華論記』テキストは、園城寺事務所編『智証大師全集』巻上所収（一九一八年）本を基本とし、必要に応じて日本大藏経編纂会編『日本大藏経』第二十三卷所収（一九一七年）本と、仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二十五卷所収『智証大師全集』第一、一九一七年）本も参照した。

二、略号については、以下のように表記した。

『大正新脩大藏経』（大正一切経刊行会）	『大正藏』
『新纂大日本続藏経』（国書刊行会）	『卅続藏経』
『智証大師全集』（園城寺事務所）	『智全』
『大日本仏教全書』（仏書刊行会）	『仏全』
『日本大藏経』（藏経書院）	『日藏』
『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』	叢書Ⅱ
金炳坤「資料」『法華論』諸本校合（二）	校合②

三、書名・經典名等には『』を付し、章節名・固有名詞・學術雜誌所收論文名等は「」を付した。

四、頻出のため、經典名の列挙や引用文以外の箇所では、法華経のみは『』を付さずに用いた。

五、注はすべて脚注の形式を取る。脚注番号にはアラビア数字を用い、序論・本論を通しての通し番号を付した。

六、原文中の二行割注は、「」を以て示した。

七、原文中の誤りと見られる箇所には、右傍に「ママ」を付した。

八、引証文献は、その末尾あるいは注に所在を記し、直ちに原典が参照出来る。

序論

一、はじめに

筆者はこれまでに、世親 (Yasubandhu, 四〇〇～四八〇年頃) 『妙法蓮華經憂波提舍』(以下、『法華論』)の末注書である智証大師円珍(八一四～八九一年)撰『法華論記』(以下、『論記』)に関する研究を行って来たが、本博士論文では、円珍による『論記』撰述の経緯、『論記』所引の『法華論』テキストに関する諸問題について、また思想研究として『論記』における七喻・三平等・十無上の解釈などについて検討する。

以前、筆者は『論記』における三平等の解釈について、立正大学大学院に在籍していた時に提出した修士論文で検討しており、また七喻の解釈については、国際仏教学大学院大学で修士課程の時に提出した修士論文の研究テーマであった。しかしながら、筆者にとって『論記』の七喻・三平等の解釈についての検討は、依然としてその余地が残されており、またその内容とも関連する十無上の解釈についての検討は、次に取り組むべき課題であった。それから、円珍による本書撰述の経緯や、本書で引用している『法華論』テキストの系統に関する問題や、『法華論』自体の文献学的研究に関する諸問題については、先行研究でも未だ論究されていない所が多々ある。

本論文では、『論記』撰述の背景や、『論記』及び『法華論』に関連する文献学的研究を主軸としながら、思想研究としては『法華論』所説の七喻・三平等・十無上に対する『論記』の解釈をめぐる諸問題について考察を試みる。

二、問題の所在

『論記』は円珍の唐留学中(唐代の大中七～十二年、西暦八五三～八五八年)に執筆が開始されているが、その経緯についての詳細な研究はこれまでになかった。円珍が残した五種の請来目録などからは、円珍一行が中国各地で得た経律論疏やその他の書などについて知ることができ、留学期間中に『論記』の執筆に関連した経論等を獲得したことが確認できる。これらの請来目録は、『論記』執筆の経緯を考える上で大いに参考となる。この請来目録に加えて、現存する円珍の伝記や、円珍帰朝後の比叡山東塔西谷の山王院における蔵書目録の記述を検討することで、これまでに論じられていなかった『論記』撰述の経緯について、ある程度探ることができると考えている。

円珍が『論記』撰述の際に用いた『法華論』テキストが、勒那摩提訳であったのか、菩提流支訳であったのかという問題については、研究者

の間で見解が異なっている。その内の幾つかを示すと、智全本『論記』の巻末にある識語では、校訂者が、円珍の『論記』撰述は菩提留支訳に依ったものとしている。『仏書解説大辞典』の『論記』の解説では、渡辺最昌「一九三五」は「菩提留支と曇林共訳の法華論を註釈せる不朽の名著である」としており、また木内央「一九七三」、高崎直道「一九七七」の解題でも、円珍は菩提留支訳に依ったとしている。一方、日下大癡「一九二六（一九三六）」は「嘉祥は留支訳を釈し智証は摩提訳を釈す」としている。また前川健一「一九九五」は『法華論』には菩提留支訳と勒那摩提訳とがあり、『論記』がどちらを注釈したものであるのかは従来定説がなかった。『論記』中に引用された『法華論』本文を検討すると、勒那摩提訳とりわけ敦煌本(S.250a)によく一致する」と指摘しており、その後、前川健一「二〇〇二」では、『法華論記』に引用されている本文は勒那摩提訳に近い。しかし、部分的には合致しない点もあり、『法華論』本文そのものについて検討が必要ではないかと思われる」と指摘している。近年では、金炳坤「二〇二〇」が、『論記』は摩提訳を底本にしていた可能性があると指摘している。しかしながら、更に踏み込んだ詳しい検証は未だ行われていない。本論文では、近年盛んに行われている『法華論』の文献学的研究成果なども踏まえ、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討する。

日本人学僧の著した『法華論』注釈書のうち、現存するものとして円珍の『論記』はよく知られており、しばしば中国三論宗の吉蔵（五四九～六三三年）の『法華論疏』（以下、『論疏』）と共に語られる。両書とも、これまで研究者によってある程度の先行研究が積み重ねられているが、全体的に論じ尽くされているとは言えず、検討すべき課題は未だ残されている。本論文で思想研究として取り上げる『論記』の七喻・三平等・十無上の解釈についても、これまでさほど研究はなされていなかったが、天台宗の学僧たる円珍の『法華論』解釈を詳らかにすることは、法相宗や三論宗の『法華論』解釈との違いを明らかにする上でも必要なことであり、課題として研究の進展が俟たれていたところと思われる。

先行研究では、法相宗に対峙する意味合いが強いと評されている『論記』であるが、一方で吉蔵や吉蔵門下への批判も確認でき、この点についての詳細な比較検討は未だあまり進展しておらず、『論記』研究において残されていた課題の一つであった。

『論記』の頻繁な天台章疏引用によって、円珍の伝統教学宣揚の立場が知られるが、一方で、法相宗や三論宗に対して名指しで批判する部分などについては、実際に法相宗・三論宗によって著された論書などを確認し、円珍の批判が妥当であるかを検討する必要がある。しかしながら、

1 渡辺最昌「一九三五」九二頁。

2 日下大癡「一九三六」一九三頁。初出は「法華論に就て」（『龍谷大学論叢』第二六九号、一九二六年、一一六五頁）

3 前川健一「一九九五」一〇〇頁。

4 同上「二〇〇二」一一頁。

このような検討はこれまでにさほどなされていなかった。そのため、こうした他宗の論書との比較を通じて、これまで明らかにされていなかった『論記』の教学的特徴について究明したい。

三、研究史の回顧

『論記』に関する先行研究としては、先ず池田魯参「二九七八A・二九七八B」による論考が、斯界ではよく知られた成果として挙げられる。池田論考では、円珍の解釈は湛然の解釈を踏まえているが、唐代の華嚴宗第四祖清涼大師澄観（七三八〇～八三九年）の華嚴学を評価している点などは、円珍独自の視点があると述べており、それ以外にも『論記』に含まれる特徴的な学説などをいくつか指摘している。

池田論考以前からあった『論記』関連の研究成果としては、大正時代末期に発表されていた日下大癡「一九二六（一九三六）」の論考が知られており、日下論考では『法華論』を解釈する上で、その末注書である『論記』及び『論疏』の所説を多く引いて考察している。

池田論考以降より現在に至るまでには、数名の学者が各々の着眼点から『論記』についての研究成果を発表しており、『論記』の研究は着々と積み重ねられてきている。具体的などころでは、丸山孝雄「一九八〇」による吉蔵の法華経注釈を取り上げた法華七喻解釈の展開についての論考、河村孝照「一九八九A・一九八九B・一九八九C」による十無上の解釈、特に『法華論』がその嚆矢である三身説などを中心とした『論記』の仏身観についての論考、奥野光賢「二〇〇二」による吉蔵と円珍の『法華論』に対する解釈上の問題点についての論考、前川健一「一九九五・一九九六」による未詳の引用文献についての論考、同「二〇〇二・二〇〇四・二〇〇五」の『論記』における慈恩大師基（六三二～六八二年）『妙法蓮華経玄賛』（以下、『玄賛』）批判についての一連の論考、ヴェルノ・ヘリッリース「二〇〇八」による円珍の法身観をめぐって、河村孝照氏とは異なる見解を示した論考などがあり、また、比較的最近の研究としては、道元徹心「二〇一五」による『論記』における「舍利」表現についての論考や、萩野翔太「二〇二三」による円珍の被接解釈についての論考などがある。

『論記』に関する先行研究では、これらの問題が考察されており、『論記』の教学思想的特徴や、基および吉蔵の解釈との比較、また『論記』に引用されている未詳文献などについての研究成果が公表されているが、本論文で検討するところの『論記』撰述の経緯や、『論記』所引の

⁵ 深浦正文「二九五四」は「彼の名が一般に窺基として知られているが、それはおそらく正鵠ではないと思われる。彼の自著の署名ならびに文中には、いずれも基の一字名を用い、また信すべき金石文・画讃銘等にも、何れも然うなっていて、未だ二字名のものとはないのである。（中略）彼の名は、基または大乘基を以て正とし、窺基は正当でないといわねばならぬ」（二五六頁）と述べている。

『法華論』をめぐる問題について、また、思想研究としての『論記』における七喻・三平等・十無上解釈などについては、これまでの先行研究では論じ尽くされていなかった。本論文では、それらの『論記』に関する従来の研究では明らかにされていないところを研究課題として定め、究明したい。

四、研究の背景

『論記』の著者円珍は、一般には台密の大家として知られており、また弘法大師空海（七七四～八三五年）の姪の子息（空海は円珍の従祖父）として生を享けながら比叡山に登り、初代天台座主の義真（七八一～八三三年）に師事した人物として注目される。なお円珍は伝教大師最澄（七六六～七六七～八三三年）と、その弟子である慈覚大師円仁（七九四～八六四年）と共に、日本天台の三聖の一人とされており、滋賀県大津市にある長等山園城寺（通称で三井寺）を総本山とする天台宗寺門派では派祖とされている。

『論記』が注釈対象とする『法華論』は、五世紀頃に唯識瑜伽行派の世親によって著された法華經注釈である。本書は、印度撰述の法華經注釈として唯一現存するものであり、梵本・藏訳は散逸しているが、漢訳の現行本二種類と、近年見出された日本古写経本・江戸期刊行本が伝える菩提流支訳の一卷本が現存する。新出の菩提流支訳一卷本については、本論文では、主に第二章第一節と付録の諸本対校において取り上げている。現行本の二種類は、『大正藏』第二十六巻に収録されており、一つは、中印度出身で元魏の正始五年（五〇八年）に来魏した勒那摩提三蔵（Ramapati, 生没年未詳）が、僧朗らと共に訳出した『妙法蓮華經論憂波提舍』一卷本で、もう一つは、北印度出身で永平元年（五〇八年）に来魏した菩提流支三蔵（Bodhiruci, ？～五二七年）が、曇林らと共に訳出した『妙法蓮華經憂波提舍』二巻本である。菩提流支と勒那摩提は、共に『十地經論』を訳した間柄であったが、後に考え方が合わずに離別したという。テキストとしては、菩提流支訳が古来多く用いられたようである。なお、この他に漢訳された『法華論』について、智昇（生没年未詳）撰『開元釈教録』巻第九には、「法華論五卷（莫知造者單重未悉景雲二年譯）」とあり、唐の義浄（六三三～七一三年）訳とされるが、現存しない。

『法華論』の訳注研究としては、①清水梁山「一九二」の国訳、②国訳者が明記されていない『昭和新聞国訳大蔵經』所収の国訳。（一九三二

6 『大正藏』第五十五卷、五六八頁中二行目。

7 『国訳大蔵經』論部第五卷、国民文庫刊行会。

8 三井晶史（昭和新聞国訳大蔵經編輯部代表、編『昭和新聞国訳大蔵經』論律部第九卷、東方書院。

年刊行)、『③Terry Rae Abbott「一九八五」(学位論文)の英訳、④藤井教公・池邊宏昭(ほか)「二〇〇一」・「二〇〇二」・「二〇〇三」の国訳¹³⁾(現代語訳付き)、⑤大竹晋「二〇一」の国訳¹⁴⁾が公表されている。『法華論』両訳の差異について、藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇二」には、「両テキストの間に内容的な相違は見られず、字句の相違や、語句の省略などの差に止まっている」¹⁵⁾とある。大竹晋「二〇一」には、「筆者は菩提流支訳を、菩提流支が梵文に基づいて行なった翻訳でなく、中国人が梵文を見ないまま勒那摩提訳をいじった代物でないかと考えている」¹⁶⁾とあるが、確証はない¹⁷⁾。

円珍の『論記』は全十巻から成る大部の末注書であり、古くからその内容によつて五章(七成就、五示現、七喻、三平等、十無上)に分けて解釈されている『法華論』を随文解釈している。池田魯参「一九七八B」は、

円珍の著述とされているもののなかで、量的に他を圧して大きな著述は、『法華論記』一〇巻である。(中略)円珍教学における法華論研究の意味は、質量共に大きなものがあることに相違なく、今日改めて研究されなければならないものと信ずる¹⁸⁾。

と述べている。

なお吉蔵の『論疏』は、『論記』に先だつて中国仏教で作成された末注書であり、吉蔵は、仏身の常住と仏性が法華経においても明かされていることを『法華論』に依拠して論証した。吉蔵における最初の法華経注釈書である『法華玄論』では、所引の『法華論』について「晚見法華論」と述べているが、これに関して奥野光賢「二〇〇二」は、

9 *Vasubandhu's commentary to the "Saddharmapuṇḍarīka-sūtra": A study of its History and Significance*. Ph.D. diss., University of California, Berkeley.

10 『北海道大学文学研究科紀要』一〇五号・一〇八号・一一一号。

11 『新国訳大蔵経一八 法華経論・無量寿経論他』大蔵出版。

12 藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇二」二二―二二頁。

13 大竹晋「二〇一」一一三頁。

14 『法華論』の両訳について、伊藤瑞叡「一九八三」には「流支訳法華論は摩提訳法華論と殆んど同様であり、摩提訳の極めて瑣末な諸点の重訂であるから、流支訳とはいっても事実の上で大部分は摩提訳の踏襲である。殆んどが摩提訳の踏襲である流支訳はたして通称の如く流支訳と云えるのであろうか。実質的には摩提主訳流支重訂といふべきであらう。そうであるけれども、摩提訳法華論が存在する以上、それに対峙せしめなければならず、したがって流支訳法華論とせられたのであろう」(二二三頁)とある。

15 池田魯参「一九七八B」三二二頁。

吉蔵は「晚見の法華論」と呼称することによって、最初の法華注疏を著そうとするまさにその直前になって『法華論』の存在を発見し、披見することができたという歎びを率直に告白するとともに、『法華論』に拠ったことをいうことによって、自説に正統性を付与せんとしたものと思われる¹⁶⁾。

と述べている。『法華論』の末注書として、吉蔵の『論疏』は、中国仏教の代表的な著述であり、円珍の『論記』は、日本仏教の代表的な著述である。

『論記』の撰述が開始された時期については、円珍の唐留学中であつたことが、尊通（二四二七～一五一六）編『智証大師年譜』（以下、『年譜』）から知られる。唐留学中の円珍が『論記』の撰述を決意した理由について、池田魯参「一九七八B」は、吉蔵の『論疏』が円珍に刺激を与えたのであると推測しているが、確証はない。円珍は『論記』において、吉蔵の『法華論』解釈を批判している。

『論記』の全体的な特徴としては、智者大師智顗（五三八～五九七年）説・章安大師灌頂（五六二～六三二年）記の著述や、妙楽大師湛然（七一～七八二年）、また東春智度（生没年不詳）の天台章疏を相当量、忠実に引用している点が挙げられる。

五、範囲と方法

本論文では、先述のように円珍による『論記』撰述の経緯や、本書所引の『法華論』テキストの系統に関する問題、及びそれに関連する『法華論』の文献学的研究における諸問題について、これらを研究の主軸としながら、『法華論』所説の七喻・三平等・十無上に対する『論記』の解釈に関連する諸問題について考察したい。

『論記』撰述の経緯については、これまでに詳細な研究がなされておらず、本論文では、円珍の伝記、請来目録、蔵書目録などの文献史料に拠りながら検討する。具体的には、三善清行（八四七～九一八年）撰『天台宗延暦寺座主円珍伝』、虎関師鍊（一二七八～一三四六年）撰『元亨釈書』中の円珍伝、尊通編『年譜』、『智全』巻下所収の五種の請来目録、円珍の蔵書目録とされる『山王院蔵書目録』などを用いて検討する。

円珍が『論記』で引用する『法華論』テキストの系統については、前川健一「一九九五」が指摘している敦煌本の勒那摩提訳を始めとして、『法華論』の写本大蔵経系テキストおよび刊本大蔵経系テキストなどを用いて検証する。

『論記』には、

自下釈十無上義。応知七喻三平即十無上。十種無上義。即三平七喻。何以故。喻平十義是能顕。十種無上是所顕。鉤鑢相連本無異路。皆約妙法皆約蓮花顕其円明。勿以間然。¹⁶

とあり、『法華論』の七喻・三平等と十無上とは、能顕・所顕の關係にあると説かれている。また円珍の『山王院藏書目録』には、「法花七喻三平十無上説 一卷」¹⁸という書名も見える。このように、『法華論』の後半三章は一具に扱われていて、本論文もその区分を参考にして範囲を設定した。本論文では『論記』における七喻・三平等・十無上の解釈内容から円珍の思想的特徴を検討する。

『論記』の活字本としては、①大正六年（一九一七年）六月刊行の日本大藏經編纂会編『日本大藏經（旧版）』（以下、『日藏』）第二十三卷、論蔵部、諸大乘論章疏第一所収本、②大正六年（一九一七年）十二月刊行の仏書刊行会編『大日本仏教全書（旧版）』（以下、『仏全』）第二十五卷、智証大師全集第一所収本、③大正七年（一九一八年）六月刊行の園城寺事務所編『智証大師全集（旧版）』（以下、『智全』）巻上所収本、④昭和二十四年（一九四九年）四月刊行の高楠順次郎・望月信亨編『知証大師全集』¹⁹第一巻所収本の四種類が知られる²⁰。なお、①②③の復刻版などについては以下の通り。

- ①の増補改訂版 鈴木学術財団編『日本大藏經』第四十九卷、論蔵部、諸大乘論章疏一、一九七五年
- ②の増補改訂版 鈴木学術財団編『大日本仏教全書』第十七卷、論疏部一、一九七〇年
- ②の復刻版 仏書刊行会編『大日本仏教全書』第二十五卷、智証大師全集第一、名著普及会、一九七八年五月
- ③の復刻版 園城寺編『智証大師全集』上巻、昭和五十三年、同朋舎、一九七八年二月

『日藏』と『仏全』については、この他にも近年に至るまでオンデマンド版や電子版DVD・ROMが世に出されている。また、天台宗典編纂所による『天台電子佛典CD3』（天台CD3）には、仏全本の『論記』が電子テキストデータとして収録されているが、

¹⁷ 『智全』巻上、二三八頁上。

¹⁸ 「山王院藏書目録」『叡山学報』第十三輯、一九頁。

¹⁹ 『知証大師全集』（全三巻か）は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧することができ、仏全本か智全本のどちらかを底本としたものと見られる。

²⁰ 『日藏』には、智証大師全集という括りがなく、円珍関連の著述は個別に扱われている。仏書刊行会編『仏全』第二十五巻と第二十八巻所収の智証大師全集は、全四巻から成り、一方、園城寺事務所編『智全』は、巻上・巻中・巻下の全三巻から成る。佐伯有清「一九八九」には『大日本仏教全書』本、ならびに『智証大師全集』本の二本は、版を同じくし、後者は前者の誤植を訂したところもある」（二二頁）とある。

筆者が確認した所、当該のテキストデータには誤脱などの不備が箇所々々に見られる。

『仏書解説大辞典』によると、『論記』の承応二年（二六五三年）版の刊本が、大正大学や東洋大学など、幾つかの大学・研究機関に所蔵されていることが知られる²⁰。承応二年本がどのような底本に依っているのかについては不明であるが、この承応二年本が現在確認される最古の『論記』テキストとなっている。

また、神田大輝「二〇二二」は、明応十年（一五〇一年）書写の日真『法華論科註』（『科註妙法蓮華經論』）の内容について取り上げており、その内容の大半が『論記』の注釈引用で占められていることを報告している。慶安五年（二六五二年）版『科註妙法蓮華經論』（以下、『科註』）六巻本刊本は、京都大学貴重資料デジタルアーカイブで閲覧することができ、筆者が確認した所、『科註』で引用されている『論記』テキストは、現行本と全同ではなく、現行本『論記』の不備を補い得る校本として、用いることができるであろう。

日藏本の『論記』には識語が付されていないが、智全本・仏全本の『論記』には巻末に識語が付されている。識語には、

右法華論記ハ承應二年ノ刻本に據リタリ。此本誤脱頗多ク。訓點ノ正シカラザル所モ亦尠カラズ。今類本ヲ得ザルガ故ニ校合スルコト能ハズ。因テ誤ノ著キ者ハ校者ノ意ヲ以テ之ヲ正シ。疑アル所ハ法華疏記及ヒ義續等ニ参照シタリ。然トモ尚恐クハ批謬アルベシ。後賢更ニ善本ヲ訪獲シテ校訂ヲ給ハバ甚幸ナリ。又後學尋對ノ勞ヲ省カンガ爲ニ愆妄ヲ顧ミズ本論ヲ會合シタリ。此法華論ニハ。元魏中天竺三藏勒那摩提ト僧朗等ノ共譯本ト及ヒ後魏天竺三藏菩提留支ト曇林等ノ共譯本トノ二譯アリ。大師ガ此記ヲ述作シタマヘル。一二後魏譯ニ依リタマヘリ。然ルニ此譯本モ亦藏經本と單行本ノ別アリ。今ノ牒文ハ單行本ヲ用キ。藏經本ノ差異ヲ考シテ之ヲ載セタリ。

年譜云。齊衡元年甲戌。大中八年師四十一歳七月。至越州開元寺。勘法華論記。天安二年戊寅。大中十二年師四十五歳。正月九日。在天台再勘法華論記。而修治未了。

大正六年十一月 校訂者識²¹

とある。校訂者²²は「此本誤脱頗多ク。訓點ノ正シカラザル所モ亦尠カラズ。（中略）後賢更ニ善本ヲ訪獲シテ校訂ヲ給ハバ甚幸ナリ」と記しており、底本とした承応二年本は、善本とは言えないものであったようだが、一応、底本について伝えている。一方、日藏本の底本については識語

²¹ 『仏書解説大辞典』第十巻、九三頁。

²² 『智全』巻上、三三〇頁。

²³ 『仏全』の出版に際して発行された機関紙『仏書研究』の第四十一号には、高瀬承厳氏による『論記』の解題が掲載されている。高瀬氏は「尚本書刊行に当り、園城寺直林敬範師は対校に従事せられ、園城寺は藏本を貸与せられたり、虔しんで謝す」（三頁下）と記している。

などがないため不明であるが²⁴、高崎直道「一九七七」は、「本書の底本は明らかではないが承応二年刊本かと思われる」²⁵と述べている。実際に承応二年本を確認したところ、現行本のように会本形式にはなっていない。なお、承応二年本は十卷全十七冊から成る²⁶。

先に引用した智全本の識語には「又後學尋對ノ勞ヲ省カンガ爲ニ愆妄ヲ顧ミズ本論ヲ會合シタリ。(中略)一二後魏譯ニ依リタマヘリ。(中略)今ノ牒文ハ單行本ヲ用半。藏經本ノ差異ヲ考シテ之ヲ載セタリ」とあり、この記述から、校訂者が菩提留支訳の単行本を底本とし、藏經本との差異を校注として付した『法華論』を、承応二年本を底本とした『論記』の該当箇所到会合したことが分かる²⁷。

本論文では、智全本を基本としながら、適宜、仏全本・日藏本および『科註』所引の『論記』も参照し、また閲覧することが容易ではないが、可能な限り承応二年刊本も確認する。

²⁴ 鈴木学術財団編『増補改訂日本大藏經』第一〇〇巻、目録・索引の二四五頁を確認したが、No.177の『論記』についての原本情報はない。

²⁵ 高崎直道「一九七七」三四五頁上。

²⁶ 全十七冊から成る承応二年本の巻構成は、巻第一本・末、巻第二、巻第三本・末、巻第四、巻第五、巻第六本・末、巻第七本・末、巻第八本・末、巻第九本・末、巻第十本・末となっており、巻第二と巻第四と巻第五には本・末がない。

²⁷ 日藏本における会合について『日本大藏經編纂会会報』第二十三号には「明治四十二年八月の交、東本願寺事務総長石川舜台老師より天平勝宝七年の願經を借覽して対校せしに、単行本遙に優れ居るを以て、此單行本に藏經本の差異を傍書して記に会合し、以て閲覽の便を計りたり、読者請ふ之れを諒せよ」(二頁上)とある。

本論

第一章 円珍の唐留学と『法華論記』の撰述

平安時代前期の天台僧智証大師円珍の唐留学については、現存する伝記によってその様相が伝えられている。『論記』の撰述については、尊通³⁰編『年譜』に、

齊衡元年甲戌。^{大中八年}師四十一歳。（中略）七月至越州開元寺。³⁰勘『法華論記』。
三年丙子。^{大中十年}師四十三歳。（中略）七月六日。師於『国清寺』得『法華論一卷』。³⁰
天安（中略）二年戊寅。^{大中十二年}師四十五歳。正月九日。在『天台』再勘『法華論記』。而修治未了。³¹

とあり、円珍の唐留学中（唐の大中七年八月に入唐、十二年六月に帰朝）に、その執筆がなされたとされる。『年譜』では、円珍が越州開元寺で『論記』を著したこと、国清寺で「法華論一卷」を得たこと、天台山で再び『論記』に手を加えたものの完成を見なかったことが記されている。³⁰『論記』十巻は、印度撰述の法華経注釈書である世親撰『法華論』を、随文解釈した末注書であり、中国撰述の吉藏『論疏』三巻と共によく知られている。³²

28 室町・戦国時代の天台寺門宗園城寺の学僧。著作に『科註養愚』七巻、『三井続灯記』十巻、『授決集扶老童稚鈔見聞』二巻、『年譜』一卷、『北林名目集』一卷などがある。

29 『智全』巻下、一三八六頁上。

30 同上、一三八八頁上。

31 同上、一三八八頁下。

32 池田魯参「一九七八B」は「円珍が法華論記を撰述したのは、入唐した翌年（八五四年）七月のことで、その後、修学の目的をほぼ完了し、帰朝する年（八五八年）にあつて、正月再び法華論記を勘したが、修治未了のままで、六月には帰路についたというのである」（三三四頁下）と述べている。『日本大蔵経仏書解題』で、『論記』の項目の執筆者は「本書は大師在唐中その精力を盡して成れるものである。大中八年稿を起し同十二年再治し、後帰朝の準備のために勘校を中止して遂にその功を終らざりしものであると見るべきである」（一九九頁）と述べている。

33 吉藏は仏身の常住と仏性が、法華経において明かされていることを『法華論』に依拠して論証した。吉藏における最初の法華経注釈である『法華玄論』では、『法華論』を引用する際に「晚見法華論」と称しており、奥野光賢「二〇〇二」は「最初の法華注疏を著そうとするまさにその直前になって『法華論』の存在を発見し、披見

小野勝年「一九八二」は、円珍の唐における求法について、

上陸の後の求法の経過を大観すると、天台の巡礼、長安の受法、さらに『法華経論』と『大日経義釈』の究明に重点が置かれたと評して過言ではない³⁶。

と述べており、『法華論』研鑽が唐留学の重要な課題の一つであったと評している。

しかしながら、円珍の唐留学前後における『法華論』の研鑽に関しては、先行研究で未だ論じ尽くされていない問題である。そこで本章では、円珍の唐留学の成果とされる『論記』撰述の経緯などについて、関連研究・各種資料に依りながら検討したい³⁷。

第一節 円珍について

第五世天台座主の円珍は、開祖の伝教大師最澄、第三世の慈覚大師円仁と共に、天台三聖の一人とされている人物であり、園城寺を総本山とする天台宗寺門派では開祖とされている。円珍は一般的には台密の大家として知られており、入唐八家の一人にも数えられている³⁸。また、特徴的な風貌でも知られており、そのことについて小野勝年「一九八二」は、

彫刻や絵画にあらわされた大師の肖像を見ると、一種独特の相貌を持っている。それは尖った臙頂に見られるものであって、これを靈骸という。所持するものは福利や智慧を得ることができるとし、巡歴中、中国の人々から身を固め用心するよう、しばしば警告された。しかし、大師は「もし宿業ならばこれを如何にせんや」と答えて敢てとり合わなかったという³⁹。

と記しており、円珍の人となりの一端が伺い知れる。

することができたという喜びを率直に告白するとともに、『法華論』に拠ったことをいうことによって、自説に正統性を付与せんとしたものと思われる⁴⁰（四一頁）と述べている。

³⁴ 小野勝年「一九八二」（はしがき、iv）。

³⁵ 池田魯参「九七八B」は「円珍の著述とされているもののなかで、量的に他を圧して大きな著述は、『論記』一〇巻である。（中略）円珍教学における法華論研究の意味は、質量共に大きなものがあることに相違なく、今日改めて研究されなければならないものと信ずる」（三三二頁）と述べている。

³⁶ 平安時代前期に入唐し、密教を学んだ八師。最澄、空海、円仁、円珍、常晁、円行、恵雲、宗叡の八人。

³⁷ 小野勝年「一九八二」三五頁。

円珍の伝記に関しては、志晃（一三九四～一四二八年？）撰『寺門伝記補録』二十卷の³⁸第十卷に収録されている『智証大師略譜』に、「大師家伝都有三撰」³⁹として、

一曰実録。延喜二年冬。翰林学士三善宿禰清行撰。二曰慧解伝。元亨二年。東福禅寺沙門虎関和尚撰。三曰年譜。応仁元年。三井沙門尊通和尚撰。古之高徳明師。皆有^レ伝。多是門人法族之所^レ記也。於^二吾大師伝^一也。官家記^レ之。他門撰^レ之。法孫録^レ之。可^レ謂備矣。今略譜者省^二略年譜^一以附^二于此^一。便^二其檢尋^一。卓犖事跡具在^二于三撰^一也。

と記されている。『智証大師略譜』では、「卓犖事跡」として、

- (一) 文章博士の三善清行（八四七～九一八年）撰『天台宗延暦寺座主円珍伝』（以下、『円珍伝』）一卷⁴⁰、延喜二年（九〇二年）十月成立。
- (二) 臨済宗の僧虎関師鍊（一二七八～一三四六年）撰『元亨釈書』三十卷⁴¹、第三卷所収の円珍の伝記、元亨二年（一三三二年）成立。
- (三) 園城寺の尊通編『年譜』一卷⁴²、応仁元年（一四六七年）成立。

の三つの伝記を挙げている。また、円珍が撰したとされる『在唐巡礼記』五卷は現存が確認されていないが⁴³、頼覚（生没年不詳）が永承四年（一〇四九年）に『在唐巡礼記』を抄録した『行歴抄』一卷⁴⁴が現存する。円珍の事跡を伝えるこれらの文献は、基本資料として現代の研究者にも重用されている。

³⁸ 『仏全』第一二七卷所収。本書の成立年代について、今枝愛真「二九八三」は「序文によると、園城寺慶音院の志晃が同寺の古記が散失するのを歎いて、応永年間（一三九四～一四二八年）に同寺別当海和大僧正のすすめによつて著わしたとされ（中略）しかし中には尊通抄『授決同童稚抄』のように応永四年を下るものも引用されており、成立年代には問題がある」（一九三頁上）と述べている。

³⁹ 『仏全』第一二七卷、二六六頁下。

⁴⁰ 同上。

⁴¹ 『智全』卷下所収。

⁴² 『仏全』第一〇一卷所収。

⁴³ 『智全』卷下所収。

⁴⁴ 龍堂（生没年不詳）編『山家祖徳撰述篇目集』の「山家六祖智証大師円珍撰」には「在唐巡礼記五卷」（『仏全』第二卷、二六七頁上）とある。

⁴⁵ 『智全』卷下所収。

円珍は讃岐国那珂郡金倉郷（香川県善通寺市金蔵寺町）に生まれ、本姓は因支首、幼名を広雄といった。家系図によると、福雄という弟がいたようである。⁴⁶『円珍伝』によると、円珍は八歳で『過去現在因果経』を誦し、十歳で『毛詩』『論語』『漢書』『文選』を読んでいたという⁴⁷、早熟な少年であった。

円珍の母は佐伯直氏の出で、弘法大師空海の姪であるので、空海は円珍の従祖父にあたる⁴⁸。また、伯父の道雄（？～八五一年）は、空海の弟子であった。

円珍の父は宅成といい、宅成の弟で円珍の叔父にあたる僧の仁徳（生没年不詳、俗名は宅麻呂）は、最澄の門弟であった。円珍は叔父の僧仁徳に伴われて、十五歳で比叡山に登り、第一世天台座主の義真に師事した。円珍は義真から『法華経』『金光明経』『大日経』などの大乘経および天台章疏などを教わった。

十九歳の時に年分度者の試験に合格し、その年に戒を受けて僧となった。その後、十二年間の籠山結界の制にしたがって、遮那・止観両業の習学に努めた⁴⁹。籠山中には、金色の不動明王を感じするなど、神秘体験をしたと伝えられている。棲山一紀の業を終えた翌年、三十三歳の時（八四六年）には、比叡山における密教の長である真言学頭に推挙された。

⁴⁶ 佐伯有清「一九九〇A」二八二頁を参照。

⁴⁷ 年始八歳語「其父云。内典之中可有因果経。羨令我誦習。其父驚異即求而与之。和尚得之大悦。朝夕誦説未嘗休廢。郷閭視之者莫不歎異。年十歳読「毛詩論語漢書文選」。一所「閑習」即以誦挙。『智全』巻下、一三六四頁上

⁴⁸ 福井康順「一九八八」は、『円珍伝』に見られる「母佐伯氏、故僧正空海阿闍梨之姪也」の記述について、ここでの「姪」は女性方の血筋の子としての意味で用いられているとして「円珍は、結局、空海の妹の子として生れているわけである。そこで、男子ではあるが、「姪」（甥ではなくて）と書かれている」（二〇四七頁）と述べており、空海は円珍の伯父にあたるとしている。佐伯有清「一九八九」は、『佐伯直系図』を示して「この系図にしたがえば、円珍の母は空海の姪であり、したがって空海は円珍の従祖父ということになる。空海は、宝龜五年（七七四）の生まれであり、円珍は弘仁五年（八一四）の誕生であるから、両者の間には四十年の差があり、この年齢差は、空海が円珍の従祖父であったことと矛盾しない」と述べている。小山田和夫「一九九〇」は「母佐伯氏、故僧正空海阿闍梨之姪也」の記述について「これは母佐伯氏に係るのであり、円珍に係る文言ではない。それゆえ、円珍の母は、空海の姪にあたるという通説が正しく、円珍が空海の姪（すなわち外甥）にあたるということにはならない」としており、また、注記（三八頁、注一一）に渋谷亮泰氏の関連論文を紹介している。筆者は、佐伯有清「一九八九」および小山田和夫「一九九〇」の説を支持する。

⁴⁹ 佐伯有清「一九九〇A」は、「円珍度縁」に付されている「公驗印信」から、円珍は止観業の年分度者であったことを指摘しており（二五―一六頁）、また、「円珍は、止観業の師義真の死によって、より自由に、より強力に遮那業の習学に専念できる身となったといえるであろう。かくして円珍は、籠山中に止観業よりも遮那業のほうに力をそそぎ、そのため後年、円珍はみずから遮那業の年分度者であったかのように言い做したのである」（二八頁）と述べている。

承和十四年（八四七年）の正月には、大極殿の吉祥齋会（最勝会）において、元興寺⁵⁰法相宗の明詮（七八九〜八六八年）と論議した。その翌年の三月には、唐から帰国し比叡山に戻った円仁から大日如来胎藏尊法を学び、無所不至印を授けられた。円珍は師兄の円仁が唐で身につけた新来の密教に刺激を受け、また、比叡山の守護神である山王明神から入唐求法についての夢告を受け、入唐留学を志したという。

嘉祥四年（八五一年）三月、右大臣藤原良房およびその弟の権中納言藤原良相の助力により、円珍の入唐が決定された。また、内供奉十禅師に任命された。

仁寿三年（八五三年）八月に入唐を果たした後、その求法はおよそ五年間に亘った。円珍の一行は、在唐中に求得した梵夾目錄等四百四十一部一千卷、道具宝物等十六品を携えて、天安二年（八五八年）六月に帰国した。

帰国後は、顕密の著作を多くしたため、天台宗の興隆に努めて、後には園城寺に灌頂壇を開いた。寛平三年（八九一年）十月二十九日、七十八歳で入滅。円珍の臨終について『円珍伝』には、

其日食時齊供如^レ常。日没之後。手結^二定印^一合^レ眼安坐。念仏懇至倍^二於尋常^一。至^二五更時^一。更起索^二袈裟^一手捧頂戴。取^レ水漱^レ口。右臥入^レ滅。終無^二病痛^一。

とある。入滅後、三十七年を経た延長五年（九二七年）十二月、円珍に僧の最高位である法印大和尚位と智証大師の諡号が贈られた。

円珍が晩年に書いた「垂誠三条」⁵¹には、

看^二護 慈覺大師之遺教^一。未^二曾一念非法行^一。念念存^二如在之礼^一。所以為^二我弟子^一者。慎肅謝^二大師法恩^一。瞬息莫^二違忘^一。

とあり、円仁の法恩に感謝して忘れてはならない、と弟子たちに示している。しかしながら、円珍が滅してから約一世紀後の正暦四年（九三三年）、円珍門流は比叡山を下り、園城寺を拠点として、延暦寺の円仁門流と争うようになった。以後、両門流は長きに亘って対立した。

⁵⁰ 法興寺（飛鳥寺）が平城遷都に伴い、官寺となって現在の場所に移されたのが元興寺。教学では、三論宗・法相宗の本拠地であった。吉蔵に師事し、日本に三論宗を伝えた慧灌（生没年不詳、玄奘（六〇二〜六六四年）に師事し、日本に法相宗を伝えた道昭（六二九〜七〇〇年）などが住んでいた。

⁵¹ 『智全』巻下、一三七五頁下。

⁵² 仁和四年（八八八年）の撰述。

⁵³ 『智全』巻下、一三四四頁下。

円珍の著作については、『論記』以外の主著に『授決集』二卷⁵⁴、『観普賢菩薩行法経文句』一卷⁵⁵および『観普賢菩薩行法経記』二卷⁵⁶、『大毘盧遮那経指帰』一卷⁵⁷、『菩提場経略義釈』五卷⁵⁸があり、その多くは『大正蔵』に収録されている。一方、十卷から成る『論記』は、円珍の著作中最も大部なものであるが、『大正蔵』に収録されていない。

『授決集』は、秘卷（カクレタルマキ）とも称され、円珍が在唐期間に越州開元寺の良諱（生没年不詳）から教えられたことや、覚え書きなどを五十項目選り出して集めたものである。そのうち、「天親七種仏性決二十六」⁵⁹および「論末者不也決三十八」⁶⁰の項目は、『法華論』の説に関連する所である。『授決集』は、元慶八年（八八四年）に弟子良勇のために著された書であり、天台宗寺門派の根本聖典とされている⁶¹。

『観普賢菩薩行法経文句』および『観普賢菩薩行法経記』は、法華三部経の結経である『観普賢菩薩行法経』の注釈書である。『観普賢菩薩行法経記』の卷末には、

隨分略集「観普賢經至要句義」。敢以莊嚴傳教祖師報恩之志⁶²。

と記されており、円珍が祖師最澄の恩に報いるため本書を著したことが知られる。成立時期については、

54 『大正蔵』第七十四卷、『智全』卷上所収。

55 『智全』卷中所収の『仏説観普賢菩薩行法経文句合記』四卷は、園城寺法明院の敬光（二七四〇～一七九五年）が、经文と円珍の『文句』と『記』とを会合したものである。

56 『大正蔵』第五十六卷所収。

57 『大正蔵』第五十八卷、『智全』卷中所収。

58 『大正蔵』第六十一卷、『智全』卷中所収。

59 『大正蔵』第七十四卷、二九九頁上。『智全』卷上、三六八頁下。

60 『大正蔵』第七十四卷、三〇三頁下。『智全』卷上、三七八頁上。

61 『智全』卷上には「授決集ハ三井門流ニ於ケル天台法華宗伝法ノ印信トシテ授クル所ノ秘訣ニシテ。古来論場ニ於テモ只秘卷（カクレタルマキ）ト称シテ直ニ授決集ト呼ブヲ憚リタリ。古人重法ノ志欽フベシ。故ニ祖門ノ流ヲ汲ムノ徒ハ必ズ古規ヲ守テ伝統ヲ素スベカラザルモノナリ」（三九三頁下）との識語がある。

赤尾栄慶「二九八九」は『授決集』全体は、顕教の教義のみを扱い、全く密教に触れることがないと言つてよい。そのことが後に円珍に仮託された『円多羅義集』を生む要因ともなったと思われる。円珍は『授決集』の中で、顕教の教義のみを扱うことにより空海によつて華嚴経より低く見なされた法華経を正しく評価し決着せんとしたといえるのではなからうか」（七八五頁）と述べている。

62 『大正蔵』第五十六卷、二五四頁上。『智全』卷中、五一頁上。

仁和四年六月二十一日略勘了⁶³⁾。

とあり、仁和四年（八八八年）の円珍が七十五歳の時の撰述であることがわかる。

『大毘盧遮那経指帰』は、空海の十住心説を破して、天台の四教判釈が密教の義と一致すると論じたものである。入唐前の仁寿二年（八五二年）の秋に、大宰府の城山四王院において著された⁶⁴⁾。

『菩提場経略義釈』は五部秘経の一つである『菩提場経』の注釈書で、台密では五大疏の一つとして尊重している円珍密教教学上の重要書である。一般には円珍晩年の著作と考えられている⁶⁵⁾。

そのほか多数あるが、『法華論』に関するものとしては、『智全』巻下所収の『法華論四種声聞日記』一卷がある。本書は『法華論』所説の四種声聞授記に関して、密教的な解釈を施した書であるが、仮託説がある。尊通撰『帙外新定智証大師書録』には、

法華論四種声聞記一卷 朝幸為^レ真如何⁶⁶⁾

と記されており、「偽録」部門に収められている。

第二節 『法華論記』について

『論記』は、全五章（七成就・五示現・七喻・三平等・十無上）で解釈される世親『法華論』の順序そのままに、随文解釈を施した末注書である。『法華論』は、先述の通り、現在、漢訳の現行本二種類と近年見出された菩提流支訳一卷本が知られる。以前、菩提流支訳と勒那摩提訳について、伊藤瑞叡「一九八三」は、

流支訳法華論は摩提訳法華論と殆んど同様であり、摩提訳の極めて瑣末な諸点の重訂であるから、流支訳とはいっても事実の上で大部分は摩提訳の踏襲である。

⁶³⁾ 同上二五四頁上。同上五一頁下。

⁶⁴⁾ 佐伯有清「一九九〇A」五五―五六頁を参照。

⁶⁵⁾ 清田寂雲「一九八三」一七頁下を参照。

⁶⁶⁾ 『智全』巻下、一四〇三頁下。

殆んどが摩提訳の踏襲である流支訳はたして通称の如く流支訳と云えるのであろうか。実質的には摩提主流支重訂というべきであらう。そうであるけれども、摩提訳法華論が存在する以上、それに対峙せしめなければならず、したがって流支訳法華論とせられたのであろう⁶⁹。

と述べている。また、大竹晋「二〇一一」は、

勒那摩提訳を先、菩提流支訳を後と記載する唐の諸文献の見解は、勒那摩提訳に協力した僧朗が北魏のいくつかの訳場において筆受を務めた人物であり、菩提流支訳に協力した曇林が東魏のいくつかの訳場において筆受を務めた人物であることから考えても、妥当なものである。すなわち、『妙法蓮華經憂波提舍』の訳文は、勒那摩提訳にせよ、その改訂版である菩提流支訳にせよ、僧朗の語癖を反映していると思われる⁷⁰。

と述べている。

尊通編『年譜』は、『論記』の撰述が円珍の在唐期間中に行われたことを伝えているが、撰述の際に円珍が実見した『法華論』が、勒那摩提訳であったのか菩提流支訳であったのかという疑問については、研究者の間で見解が異なる。この問題については次章で詳述する。

『論記』の構成上の特徴としては、智顗説・灌頂記『妙法蓮華經文句』（以下、『法華文句』）および湛然撰『法華文句記』（以下、『文句記』）をはじめとした著作、また、湛然の弟子の東春智度の『天台法華疏義續』（以下、『義續』）などの天台章疏からの引用が全体的に多くの分量を占めている⁷¹。

横超慧日「一九六九」は、

天台宗の智顗は法華經論を重視しなかったが、最澄や円珍に法華經論に対する研究のあるのは、三論宗及び法相宗に対抗する意味もあるか。但し天台教義と法華經論との会通を図りつつ、密教化の傾向を示している⁷²。

と述べている。三論宗に対しては、『論記』巻第八末に見られる三種の仏菩提に対する見解を示した箇所において、

今総案。他經他論明三数増減⁷³。非⁷⁴是今經久遠之旨⁷⁵。皆是迹仏世諦異名。人不識⁷⁶之。互相是非。却成⁷⁷増減⁷⁸。去⁷⁹仏彌曠。須⁸⁰下依⁸¹今經⁸²。知⁸³趣向⁸⁴處⁸⁵上。復吉門徒

67 伊藤瑞叡「一九八三」一一二頁。

68 大竹晋「二〇一一」一一頁。

69 池田魯参「一九七八B」の「本書にみられるという引用態度をも含めて、すでにそれも円珍のものである」（三三二頁上）という見解について、河村孝照「一九八九B」は「筆者も全く同意見である」（三頁下）と述べている。

70 横超慧日「一九六九」六一八—六一九頁。

噴。今本迹自立^二本迹^一。曾不^レ及^下今家六種本迹中一重一双^上。汝未^三曾讀^二法華^一。如下嗅鼻人不^レ馥^二梅檀^一。盲不^レ見^レ日。蛙不^レ知^レ海。不^レ識^二仏化之始終^一。永迷^二本迹之深理^一。汝尚如^レ此。況余黨乎。可^レ憐可^レ憐。汝本師吉焼^二却旧章^一。帰^二依天台^一。伏^二膺頂^一戴^二円頓之旨^一。汝須^三共^二吉先習^一我道^二。乳中問^二蘇地^一下。覓^レ金鑽^二水堀^一樹為^二何事^一耶。速見^下四教章並与十妙及両品疏^上。明鏡懸^レ目。何以不^レ看^下。

とあり、円珍は吉蔵門下を叱咤している⁷²。前川健一「二〇〇二」は、円珍の『論記』著述の意図について、

法相宗の『法華経』解釈の依拠となっている『法華論』について天台宗の立場からの解釈を示し、『玄賛』の解釈を批判しようとしたものと考えられる⁷³。

と述べており、『論記』は、基『玄賛』批判を通じて、法相宗を批判したものと解釈している。

池田「一九七八A」では、『論記』における円珍独自の視点として、いくつかの点を指摘している。一つには、『論記』において禅宗の法華学に触れている点である。『論記』巻第七末には、禅宗六祖慧能（六三八〜七一三年）の説法集である『六祖壇経』からの引用が見られる。該当箇所における引用は、禅宗の法華学に関するものであり、円珍の在唐時における禅宗の拡大を無視できなかったものと指摘している。

二つには、『大乘止観法門』を引用している点である。円珍は『大乘止観法門』を南岳大師慧思（五一五〜五七七年）の著作と見なして重要視したが、湛然の著作では一度も引かれたことがないと指摘している。

三つには、北宋の四明知礼（九六〇〜一〇二八年）が重要視した湛然の『金剛錚』『止観義例』を、円珍は重要視しなかった点である。『金剛錚』『止観義例』は、知礼教学において華嚴学と一線を画するものとして積極的に引用されたが、華嚴学と天台学との接点を認めていた円珍においてはそれをしなかった。『論記』では、華嚴宗の澄観（七三八〜八三九年）の学説を補助的に引用しており、華嚴宗の学説に権威を認めていたと指摘している。

71 『智全』巻上、二六〇頁下。

72 河村孝照「一九八九C」は、この箇所を取り上げて、「これが智証大師の評するところである。他経他論他師の仏身論は、天台家よりみればみな迹仏の異名をあげての所論に過ぎなく、皆、一樣に法華の久遠実成の本地の三身を弁えざる分齊である。中でも三論宗吉蔵門下の論ずる所は法華を読まず、従つて仏の化導の始終を知らず、長く本迹の深理に迷う輩である。かつて吉蔵は己れの旧書を焼いて天台の門に入り円頓の深旨を学んだが、吉蔵門下もまず師にならつてわが天台一家の学を修めよ。吉蔵門下の学問は、金を求めるのに水を切つたり樹を掘つたりしているようなもので一体何をやっているのか、という厳しい調子をもつて他師、中でも吉蔵門下に対してるところである」（九七三〜九七四頁）と述べているが、結びでは、「三論教学との関係は、大師の三論に対する極めて強い態度であつたにもかかわれず、ついにその素材を見出すことを得なかった。これはこんごの研究に俟つ次第である」（九七五頁）としている。

73 前川健一「二〇〇二」三頁。

四つには、湛然の弟子である智度の『義績』の学説に權威を認めていた点である。湛然と智度との間には、学説の違いがあるともいわれているが、円珍は智度の学説を湛然教学の新しい展開として見ていたと指摘している。

『日本大藏經仏書解題』（旧解題）では、『論記』の項目の執筆者は、

世親の法華觀は其の大乗と法身正意と性同修別との觀察にある。また龍樹の法華觀との間にも判然たる区別があつた。龍樹の思想を發展せしめた吉藏（法華論疏記等）の思想と、別個に發達した天台大師に大成した法華經觀との間の相違も大なるものがある。今智証大師はかかる印度支那に於ける二つの傾向を拉し来り、世親の法華論を詳解しつつ天台大師の正意を發揮するに力めたのである。その結果は仏身論に於て法身正意を主張したるに止まらず、その法身を大日同体とするに至つた。そして理平等を高調した世親に一步を進めて漸く事平等を談ぜんとして居る。それは至る処の註釈に於ける、本覺思想に之を求めることができる。而も此の理想を最もよく發展せしめその行く可き頂点に持来したものは智証大師を最も嫌つた日蓮上人であつた。蓋し法華論を知らんとする者、智証大師の重要な根本思想を探らんとする者は常にこの記を熟読玩味する必要があるのである⁷⁶。

と述べている。

第三節 明詮との論議

棲山一紀の業を終え、比叡山で真言学頭となつていた円珍は、唐へ向けて平安京を出発する四年程前の承和十四年（八四七年）に、大極殿において行われた最勝会で、元興寺法相宗の碩徳明詮と論議を行った。『智証大師略譜』には、

十四年丁卯正月。師預大極殿吉祥齋會聽衆⁷⁴。此日肆辯入^レ微。官僚聳^レ聽。更於^二御前^一与^二南京明詮法師^一決^二釈大義^一。師問難激揚。馳電懸河。詮酬答拙澁。詞理共屈。後日澄善繩致^二書於師^一歎美焉。今年 勅為^二定心院十禪師^一⁷⁵。

⁷⁴ 大村西崖・中野義照編『日本大藏經仏書解題』（旧解題）一二七—一二八頁。また、日蓮の円珍觀や教学的影響などに関する論文に、小松邦彰「日蓮聖人の智証大師觀について」『印度学仏教学研究』第十三卷第一号、一九六五年、小松邦彰「日蓮聖人教学と智証教学の思想的連関」『日蓮』日本名僧論集、第九卷、一九八二年、浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店、一九七五年）、浅井円道「日蓮の智証大師觀」『智証大師研究』一九八九年、高木豊「円珍の行実に関する日蓮の知識」『智証大師研究』一九八九年、窪田哲正「日蓮の師、俊範の未紹介資料について」『法華修行論の研究 円戒と觀心』二〇一七年）などがある。

⁷⁵ 『仏全』第二二七卷、二七〇頁上。なお、『智証大師年譜』には「十四年丁卯。師三十四歳。正月。師預大極殿吉祥會。肆辯入微。官僚聳聽。又与南京明詮決釈大義。

とある。公卿の春澄善繩（七九七～八七〇年）は、最勝会における円珍の弁論の鋭さに感服して、後日、書状を送ったという。『余芳編年雜集』収録の「参議春澄善繩上大師書」には、

昨日於_レ傾。對_二他宗之碩學_一。談_二經論之大義_一。捷辯如_レ流。遣_二他屈弱_一。是故一人諸臣。莫_レ不_二感激_一。而彼明詮法師者。法相之猛虎。獨_二步峨嶻_一者也。如今當_二于卷舌_一。幾何掩_レ面。可_レ謂台山光榮。祇在_二茲時_一。善繩身在_二槐林_一。心馳_二華頂_一。妙法淳味訪而未_レ得。冀闡梨。引_二入純円之義海_一。使_二断_二方便之疑綱_一。弟_二子善繩稽首和南_一。

とあり、善繩は十七歳年下の円珍に深い敬意を表して、自分のことを弟子とまで言っている。善繩が「法相之猛虎。獨_二步峨嶻_一者也」と評した明詮については、『日本高僧伝要文抄』に、

音石山大僧都伝云。和上諱明詮。俗姓大原氏。左京人。彦人皇子之後也。祖彈正尹從四位下桜井王。天平十一年賜_レ姓為_二大原氏_一。父石本早卒。母橘氏哀_二其少孤_一。加_レ意愛養。和上幼而聰惠。志操如_二老成人_一。年十五母氏亦卒。和上以_二早喪_一。考妣_一常自幽悼。終思_二歸_二無上道_一而報_二恩_一。便出家為_二沙門_一。就_二元興寺大德施_一。嚴_二受_二法華最勝等經_一。施公歎曰。子器宇弘遠非_二吾所_レ及_一。因受_二属之同寺大智者中継中公者_一。所謂法門之領袖也。

とある。明詮は元興寺の施嚴（生没年不詳）から『法華經』『金光明經』等を学び、また、その才能を見込まれて、同寺の長であった仲継（？～八四三年）から教えを受けたという。明詮が師事した仲継は、元興寺の護命（七五〇～八三四年）から法相・唯識を学んでいる。元興寺の勝虞（七三二～八二一年）に師事した護命は、空海が讃嘆する程の高僧で、また、南都仏教の僧綱を代表して最澄の大乘戒壇設立に反対したことも知られる。元興寺における勝虞から明詮に到るまでの系譜を示すと、

勝虞 — 護命 — 仲継 — 明詮

師問難激勵。馳雷懸河。詮酬答拙澁。詞理共屈。由是名喧朝野。是歲勅為定心院十禪師。九月円仁法師回自唐国」（『智全』巻下、一三八四頁下から一三八五頁上）とあり、春澄善繩について明記していない。

76 『智全』巻下、一二九五頁上。

77 『仏全』第一〇一卷、六二一六三頁。

78 田村晃祐「一九五八」には「護命僧正は、その人格極めて高潔にして、空海をして「名實僧正、実徳佛隣：卓彼人宝、可謂国珍」と嘆ぜしめ、一度、僧綱を辞した後にも、論旨によって再び僧正に推された程、僧俗の間にも亦朝廷にも信任厚かった名僧であった」（四二頁）とある。

となる。明詮の師仲継の師である護命には、『法華論抄』五巻の著作のあったことが、永超（一〇一四～一〇九五年）編『東域伝燈目録』の記述から知られる。『東域伝燈目録』において『法華論』の末注疏を列挙している箇所には、

法華論疏三巻 吉蔵

同論疏二巻 流支本

⁷⁹同論述記二巻 義寂
積義一撰

同論疏三巻 道采師

同論抄四巻

同論疏抄集記二巻

同論記十⁸⁰九巻 円珍

⁸¹同略記一卷 明一⁸²撰

同論釈一卷 行賀

同論抄五巻 三論護命

同論註三巻 梵釈寺常騰撰
又有子註三巻

七喻三平十無上述一卷 在前唐院⁸³

論分別功德品数義一卷⁸⁴

79 『大正蔵』の校注に「原本傍註有新一字」とある。

80 同上に「甲本傍註曰南本無」とある。

81 同上に「原本傍註曰新」とある。

82 同上に「撰述（甲）」とある。

83 延暦寺東塔にある前唐院は、円仁が唐から請来した典籍等が置かれていた堂宇。龍堂編『山家祖徳撰述篇目集』巻上の「山家四祖慈覚大師円仁撰」には「七喻三平等十無上義一卷」（『仏全』第二巻、二六四頁上）とある。

84 『大正蔵』第五十五巻、一一五六頁中。

とある。大竹晋「二〇一二」は、日本において作られた『法華論』注釈について、法相宗および天台宗の僧による著述を列举して⁸⁵、

明一（七二八〜七九八年）と行賀（七二九〜八〇三年）と常騰（七四〇〜八一五年）と護命との著作は『東域伝燈目録』のうちに記載されるが、現存は確認されていない。彼らはすべて法相宗の人である。最澄の著作は伝教大師全集別巻所収の各種目録やあるいは『山家祖徳撰述篇目集』巻上のうちに記載されるが、『法華論科文』以外現存が確認されていない。円珍の著作は二つとも現存するが、『法華論四種声聞日記』は円珍の真作であるか定かでない⁸⁶。

と述べている。

法相宗の僧による『法華論』注釈は、現存が確認されていないが、嘉保元年（一〇九四年）に成立した『東域伝燈目録』の記載から、法相宗に於いては八〜九世紀にかけて、盛んに『法華論』が研究されていたことが伺い知れる。

大極殿の最勝会で、当時三十四歳の円珍と論議をした法相宗の明詮（円珍より二十五歳上）は、護命の孫弟子にあたるので、おそらく護命の『法華論抄』をはじめとして、法相宗の先師による『法華論』注釈を研鑽していたであろう。

円珍の『山王院蔵書目録』においては、「法花論抄 一卷 叡山」⁸⁷との記載が見られる。これと同名の書は現存が確認されていないが、この「法花論抄」は最澄が著した『法華論』注釈と考えられ⁸⁸、円珍が比叡山東塔西谷の山王院（後唐院ともいう）において、本書を見ていたであろうことが伺われる。また、『山王院蔵書目録』には、日本法相宗関係の典籍として、

註最勝王經 二十卷一帙 東大明一 此倭註也

唯識僉議 四卷 行賀

唯識樞要義輝 二本各一卷 一本色紙 行賀

唯識義精 二本各一卷 一本色紙 行賀

⁸⁵ 大竹晋「二〇一二」一二九—一三〇頁には、以下の日本撰述の『法華論』注釈を挙げている。明一『法華論略記』一卷、行賀『法華論釈』一卷、常騰『法華論註』三卷、護命『法華論抄』五卷、最澄『法華論科文』一卷、最澄『註法華論』二卷（『法華論鈔』一卷）、最澄『法華論略頌』一卷、最澄『法華論集解』一卷、最澄『法華論通図』二卷、最澄『法華論決定諍抄』巻数不明、円珍『法華論記』十卷、円珍『法華論四種声聞日記』一卷。

⁸⁶ 大竹晋「二〇一二」一三〇頁。

⁸⁷ 「山王院蔵書目録」『叡山学報』第十三号、一四頁。

⁸⁸ 佐藤哲英「一九三七」に「円仁、円珍以前に於ける叡山の典籍が列ねてあり、伝教大師の著作が「叡山」と記されていることも興味深い」（一四頁）とある。

の六種が見える。東大寺の明一による『金光明經』の注釈書と、入唐留学僧の行賀による唯識に関する著作および行賀関連の目録とであるが、法相宗の明詮であれば見ていたであろうこれらの典籍を、天台宗の円珍も手元に置いて見ていたことが知られる。最勝会では、『金光明最勝王經』について講じられるので⁹⁰⁾、明一の『金光明經』注釈書の内容が取り上げられた可能性は高いであろう。

天台宗の円珍と法相宗の明詮とが論議した場合、『法華論』の研究が盛んであった当時においては、或いは最勝会の論議内容が、最澄と徳一との論争で知られる三一権実論争の範囲にまで及ぶこともあったのではなからうか。論議の詳細を伝える資料は、今の所発見することができていないため、推測になってしまうが、もし三一権実論争の範囲にまで議論が及んでいたとしたら、宗義に依った『法華論』解釈を以て、両者の間で議論が交わされていたかもしれない。

第四節 唐留学について⁹¹⁾

嘉祥四年⁹²⁾（八五一年）四月、円珍は平安京を出発し、翌月大宰府に到着した。唐へ渡航する船を待つため、城山の四王院に二年余り滞在した。仁寿三年（八五三年）七月、円珍は七人の従者を伴い、唐の商人欽良暉・王超・李延孝らの船に乗り組んだ。当時四十歳であった円珍の従者には、在唐十年の経験を持ち円仁の従者でもあった四十八歳の訳語の丁満、三十三歳の僧の豊智、三十一歳の沙弥の閑静、三十二歳の訳語の物忠宗、四十五歳の経生の的良、二十八歳の阿古満、二十三歳の大全吉がいた。また、唐での校勘に備え、経書四百五十巻を携行していた。

円珍の一行は、値嘉島の鳴浦で風を待ち、八月九日に大海に乗り出した。十四日、琉球の国（台湾）に漂着したが、翌十五日には唐の嶺南道福州の連江県の管内に着岸した。十七日、福州城に到着した。二十一日、觀察使の韋署に会い、福州開元寺に宿泊することになった。以後、一ヶ

⁸⁹⁾ 「山王院蔵書目録」『叡山学報』第十三号、一二五—一二六頁。

⁹⁰⁾ 円珍の『金光明最勝王經』に関する撰述としては、龍堂『山家祖徳撰述篇目集』（『仏全』第九五卷、一九八頁）によると、『金光明文句』四卷、『金光明最勝王經疏』四卷、『最勝王經文句』十卷があったという。

⁹¹⁾ 佐伯有清「一九九〇A」参照。

⁹²⁾ 当年四月二十八日に元号が仁寿に改められた。

月間滞在した。『円珍伝』には、

二十一日相看觀察使。非甚顧問。安堵於開元寺。優給生料。兼仰綱維供給熟食。即於寺中。遇中天竺摩揭陀国。大那蘭陀寺。三藏般若怛羅。受学梵字悉曇章。兼授金剛界大悲胎藏大日仏印七俱知曼素室利印法。梵夾經等。又遇当時講律大德僧存式。蒙捨与四分律東塔疏。及嘉祥。慈恩。両家法華經疏。華嚴。涅槃。俱舍等疏義。近三百卷更有処士林儒。自捨錢帛。与写本国所欠法文。遠宛流行⁹⁶。

とある。円珍は福州に滞在していた時、印度の那爛陀寺の僧である般若怛羅から梵字の『悉曇章』を学び、密教の印法を授けられ、梵夾等を授けられた。また、開元寺の存式から歓迎され、吉蔵や基の法華經注釈書をはじめ多数の經論疏を授けられた。九月二十一日には、『開元寺求得經疏記等目錄』（以下、『開元寺求法目錄』）を作成した⁹⁶。

十一月初旬、円珍一行は温州に到着した。温州刺史の裴闕から支給を受け、温州開元寺に宿泊することになった。

十一月二十六日、円珍一行は台州の開元寺に到着した。同寺の僧知建は、円珍の師である義真と同時に、天台山国清寺で戒を受けた人物であった。知建からは、經疏や最澄の求法に関する見聞記などを授けられた。

十二月九日、円珍一行は国清寺の僧元璋の案内によって台州から天台山に向かった。十三日、天台山国清寺に到着した。翌十四日、遣唐留学僧の円載（？～八七七年）が越州から国清寺に来て、円珍は十七年ぶりに再会した。しかし、期待を裏切る円載の言動に円珍は悪感情を抱き⁹⁷、以後、円載との確執が始まった。翌日、携えてきた伝燈大法師位を授ける勅牒を円載に手渡した。円珍は、国清寺の僧清観と物外（八一三～八八五年）から歓迎を受けた。天台山には九ヶ月間滞在し、禅林寺や華頂峯などを見学したり、典籍等の書写に励んだ。

大中八年（八五四年）九月二日には、福州・温州・台州において求得した典籍を整理した目錄である『福州温州台州求法目錄』を完成させた。

⁹³ 『智全』巻下、一三六六頁下―一三六七頁上。

⁹⁴ 『開元寺求法目錄』にある典籍等は、『福州温州台州求得經疏記外書等目錄』（以下、『福州温州台州求法目錄』）にも記載されている。『福州温州台州求法目錄』に見られる「大中」の記載から、『開元寺求法目錄』にある「華嚴經疏二十卷」「法華經疏十卷」「涅槃經疏十卷」「開四分律宗記十卷」「弘調伏録八卷」「四分開宗記八卷」「俱舍論頌疏十二卷」「俱舍論疏記五卷」等の典籍を福州の大中寺において得ていたことが知られる。

⁹⁵ 再会の日の円珍に対する円載の発言について、佐伯有清「二九〇A」は「円載は、おそらく筆談でもって、「牒を本国の太政官に送り、王の勅に因らざれば、人を令て来たらしめざれよ」と円珍に説き語ったのである。円珍は、「はなはだもつとも、はなはだもつとも」と相槌は打ったものの、内心では、いたく疵つけられた思いをしたであろう。円載のその言葉は、きわめて衝動的であった。なぜかといえば、円載の言外には、「自分は歴とした遣唐留学僧であるのに反して、お前は単なる私的求法僧ではないか」といった嫌味をふくんでいたからである」（九一頁）と述べている。

九月七日、円珍一行は天台山から出発し、同月二十日に越州開元寺に到着した。渡唐の際に連れていた従者七人の内、阿古満は円珍一行の唐到着を知らせるために、福州に着いた後帰国しており、円珍の弟子閑静、訳語の物忠宗、大全吉は国清寺に留まったので、越州に行ったのは、円珍、訳語の丁満、円珍の弟子豊智、経生の的良の四人であった。

越州開元寺には、当時の中国天台における最高峰の学僧である良諲が住していた。円珍は良諲から中国天台の宗旨を学び、疑問を解決した。円珍の主著である『授決集』には、

上来唐大中九年二月中旬。珍於越州開元寺天台林諲座主下面諮講了。座主曰。此間学人少有解問。爾乍致問甚々好々。

とあり、良諲の下での円珍の熱心な研鑽姿勢が伺われる。越州開元寺にはおよそ半年間滞在した。その間、良諲から教えを受け、また、典籍等の書写に励んだ。

大中九年二月二十九日、円珍一行は越州開元寺を出発し、四月初旬に蘇州に到着した。この頃、円珍は病を患っていたが、衙前の徐直の家で看病を受けた。

四月二十五日、円珍一行は蘇州から出発し、洛陽、陝州を経て、五月十五日に潼関に到着した。円珍の弟子豊智は、潼関において智聡に改名した⁹⁶。二十一日、円珍一行は長安に到着した。六月八日、長安城に入り、先に入城していた円載を訪ねた際、日本から来ていた巡礼僧の田口円覚（生没年不詳）に会った。後日、龍興寺に行き、新羅の僧である雲居和尚に会った⁹⁷。

青龍寺では、かつて円仁も法を授けられたことのある法全⁹⁸（生没年不詳）から、胎藏・金剛界・蘇悉地の三部大法を伝授された⁹⁹。また、『五部心観』一卷を授けられた。龍興寺においては、法全監修のもと両部の大曼荼羅像を図絵した¹⁰⁰。

96 『智全』巻上、三七五頁下。

97 小野勝年「一九八二」には「智聡と改名した理由は未詳であるが、『越州過所』によると、一行として上京を公認されたのは円珍の丁満のみで、豊智と的良とは非公認であったらしい。潼関における改名はあるいはそのことと関連があるかもしれない。彼は円珍と共に帰朝せず、在唐すること二十余年、元慶元年（八七七）に従者二人および唐人駱漢中らと帰国した」（一九六頁上）とある。

98 新羅人との交流に関する論文に、李炳魯「円珍の唐留学と新羅人」『桃山学院大学総合研究所紀要』第三四卷第三号）がある。

99 円珍は法全が円仁について「円仁闡梨開法甚細。闡梨与吾問法甚甚。雅操殊妙」（『智全』巻下、一三二〇下）と讃嘆する言葉を聞いたという。

100 玉城康四郎「一九八九」には「円珍の在当時におけるもつとも重要な宗教体験は、法全から伝教灌頂を受けたことにあるかと思われる。それが、円珍の前期の立場の根幹にあるといえよう」（八二六頁）とある。

101 佐伯有清「一九九〇A」には「良房は、皇太子の安泰を祈るため、円珍の入唐求法を強力に支援し、大曼荼羅像の図絵を「御願」のものとして日本に将来させること

大興善寺では不空の舍利塔を拝み、西域出身の僧智慧輪に会った。長安城滞在中は、城内の著名な寺院を見学して回った。十一月十五日には、『青龍寺求法目錄』を作成した。

十一月二十七日、円覚も加わった円珍一行は、長安から出発し、陝州を経て、十二月十七日に洛陽の龍門に到着した。広化寺では善無畏（？）七三五年の舍利塔を拝んだ。十八日、洛陽城に入り、新羅王子の邸宅に留まった。一ヶ月程の洛陽滞在中は、『大日経義釈』を校勘したり、大聖善寺や大敬愛寺などを見学した。

大中十年（八五六年）一月十五日、円珍一行は洛陽から出発し、蘇州を経て、五月二十三日に越州開元寺に到着した。越州開元寺では良諱と再会し、別れの際には智顗や湛然の天台章疏を授けられた。

六月四日、天台山国清寺に到着した。長安から同行していた円覚は、ここから広州へと旅立って行った。国清寺滞在中は、『大日経義釈』等の校勘や注釈書の撰述に励んだ。また、後に日本から訪れるであろう留学僧のために、国清寺境内に止観堂を建立した。

大中十一年（八五七年）十月には、『日本比丘円珍入唐求法目錄』を作成した。

大中十二年（八五八年）二月、台州刺史の嚴修睦に「請台州公驗牒案」を提出し、判印の下付を要請した。五月、台州開元寺から天台山国清寺に戻った円珍は、『智証大師請来目錄』を作成した¹⁰²。

六月八日、円珍一行は渡唐の際に同船した唐の商人李延孝の船で帰路につき、日本の天安二年（八五八年）六月十九日に、肥前国松浦郡美旻楽崎（長崎県南松浦郡三井楽町）に到着した。

円珍の在唐留学は、唐の大中七年（八五三年）八月から大中十二年（八五八年）六月までのおおよそ五年間に亘った。円珍一行は、天台山、長安などをはじめとして各地を歴遊し、最高峰の僧や学者から顕密の法を学び、新たな経書を求め、校勘や注釈書の作成に励み、五種の目錄を作成した。また、在唐中は唐の僧俗との交流を深めたのみならず、新羅、西域、印度の僧俗との交流もあった。

第五節 『法華論記』の撰述経緯

を円珍に依頼したのであった」（二四四頁）とある。

¹⁰² 『智証大師請来目錄』の巻尾には「巨唐大中十二年五月十五日／日本国上都比叡山延暦寺比丘円珍録／訳語従七位上丁勝男満／小師閑静禪宗／仁者大宅全吉」^行（『智全』巻下、一二八〇頁下）とあり、円珍ら四人の名が記されている。

大中七年（八五三年）九月二十一日、円珍は福州開元寺などにおいて求得した經論疏記等の一百五十六卷を記した『開元寺求法目録』を作成した。この目録には、「妙法蓮華經論一卷 勒那訳」¹⁰³との記載があり、これによって円珍が入唐後一ヶ月程の早い段階で、勒那摩提訳の『法華論』一卷を得ていたことが知られる。尊通編『年譜』は、このことに触れていないが、園城寺に伝わる円珍加筆の国宝『開元寺求法目録』には記されているので、円珍が福州で勒那摩提訳の『法華論』を得ていたことは確かであろう。

また、『円珍伝』には、福州開元寺における求得に関して、

又遇当寺講律大德僧存式。蒙捨与四分律東塔疏。及嘉祥。慈恩。兩家法華經疏。華嚴。涅槃。俱舍等疏義。近三百卷更有処士林儒。自捨錢帛。与写本国所欠法文。遠宛流行¹⁰⁴。

と記している。円珍は『論記』で古藏および基の説を批判しているが、その両家の法華經疏を、『開元寺求法目録』にあるように勒那摩提訳『法華論』と同時期に得ていた。この吉藏の法華經疏について、佐伯有清「一九八九」では、『円珍入唐求法目録』にある「妙法蓮華經義疏十卷」^{吉公}について、

『福州温州台州求得經律論疏外書等目録』に「法華經疏十卷 大中」とあるものに相当する。したがって、『法華經疏』は、『開元寺求得經疏記等目録』にも、「法華經疏十卷」とみえるが、実は福州の大中寺で求得したものである¹⁰⁵。

と述べている。一方、前川健一「一九九五」は、在唐時に作成した目録の検討などを通して、

『論記』述作の時点では円珍は『義疏』を入手できていなかったことになり、『論記』所引の『義疏』の文が『道進鈔』からの又引きである可能性はさらに高くなるであろう¹⁰⁶。

と述べている。

¹⁰³ 『智全』卷下、一二四〇頁上。

¹⁰⁴ 同上、一三六六頁下—一三六七頁上。

¹⁰⁵ 佐伯有清「一九八九」二三四頁。

¹⁰⁶ 前川健一「一九九五」九七—九八頁。

大中八年（八五四年）二月七日、円珍は天台山国清寺の西院において、これまで福州・温州・台州において求得した經典や外典類の目録を整理し始め、九月二日までに『福州温州台州求法目録』を作成し終えた。『智全』の『福州温州台州求法目録』を確認すると、「妙法蓮華經論一卷隨身（中略）已上写得」¹⁰⁷との記載があり、これは福州で得た勒那摩提訳の『法華論』であろう。『園城寺文書』第一卷所収の円珍親筆『福州温州台州求法目録』を確認すると、書名の上部に朱筆で「隨身」と注記されている¹⁰⁸。「隨身」の朱書きは、円珍が長安に携行するものを区別するために注記したものである¹⁰⁹。本目録に見られる典籍などは、全部で二一九種に上るが、「隨身」と記されているものは二十種あり、「隨」と記されているものは七種ある。円珍はそれまでに得ていた多数の典籍などの中から、『法華論』一卷を含め、いくつかのものを選んで長安への旅に携行した。その理由は、円珍に『法華論』の校勘や注釈書作成の意思があつたからではないだろうか。

また、『福州温州台州求法目録』には「天台法華疏義續六卷 智度和上述」¹¹⁰との記載が見られるが、東春智度『義續』は『論記』で多く引用されている¹¹¹。目録の該当箇所には「已上於天台山国清寺写取」¹¹²とあり、円珍が『義續』を国清寺で書写したことが分かる。湛然門下として知られる智度の『義續』は、智顗説・灌頂記『法華文句』の注釈である。一般的に天台第七祖は道邃（生没年不詳）とされるが、最澄の『伝教大師将来越州録』には、「天台第七祖智度和尚略伝一卷 沙門志明集」¹¹³とあり、ここでは智度を第七祖としている。松森秀幸「二〇一〇」は、

107 『智全』卷下、一二四二頁上—一二四三頁上。

108 『園城寺文書』第一卷、二二頁。

109 石田尚豊「一九八九」九八二頁を参照。

110 『智全』卷下、一二四六頁上。

111 池田魯参「一九七八」には「法華論記では、円珍の他著に出る、湛然門下の行満、道邃、智雲、明曠、道暹、法聰、明空などの著述を引用することは勿論、その名すら記されることはなく、専ら智度の義續だけが、異常な扱いを受けているのは、円珍の他著との関係において注意される点である」（二〇二頁上）とある。前川健一「一九九五」では、円珍が在唐中に得ていた智雲『妙經文句私志記』および法聰『釈観無量寿記』について「（求得した）時期的に見て、『論記』述作に利用することはできなかったと言わざるをえないであろう」（九八頁）と述べており、『論記』に智度の『義續』を引用するのは、撰述時点での資料入手状況によるものではないかと推測している。佐伯有清「一九九〇」には「円珍は、本書において智顗以下、窺基、道暹におよぶ『法華經』をめぐる論説を縦横に駆使して、円密一致などについての独創性豊かな考え方と立場とを明確にしている」とあり、道暹の名を挙げている。

112 『智全』卷下、一二四六頁下。

113 『大正蔵』第五十五卷、一〇五九頁上。

智度は伝がないため、その詳細な事跡は判明しないが、残されたわずかな史料からは当時彼は湛然門下として有名な人物であったことがうかがわれる¹¹⁵⁾。

と述べている。

『論記』の撰述時期について、前川健一「一九九五」は、

尊通『智証大師年譜』に「齊衡元年甲戌師四十一歳。（中略）七月。至越州開元寺。勘法華論記」とあるのにしたがって、大中八年七月に著されたとするのが定説となっている。（中略）大中十二年一月九日に円珍は『論記』を「再勘」しているが、智雲などを引用しないところからすると、それほど大きな改稿はなされなかったと考えることもできよう¹¹⁶⁾。

と述べている。『年譜』には、

齊衡元年甲戌^{大中八年} 師四十一歳（中略）七月至越州開元寺。勘法華論記。九月隨智者九世孫良諲開台教講¹¹⁷⁾。

とあるが、この記述について小野勝年「一九八二」は、

円珍は七月にはいまだ越州に居らず、あるいは台州開元寺の誤りか¹¹⁸⁾。

と述べている。『円珍伝』には、

大中八年（中略）九月七日出台山向越府。於開元寺相遇智者大師第九代。伝法弟子沙門良諲講授宗旨時。決旧疑兼抄法文。以補未足¹¹⁹⁾。

とある。国清寺から良諲の居る越州開元寺までは、およそ二週間かかる距離であり、国清寺から知建の居る台州開元寺までは、およそ五日間か

114 松森秀幸「二〇一〇」五〇頁。

115 前川健一「一九九五」九七—九八頁。

116 『智証大師略譜』には「七月至越州開元寺勘法華論記。九月相遇智者大師第九代伝法弟子沙門良諲講授宗旨」（『仏全』第二二七巻、二七四頁上）とある。『円珍伝』『元亨釈書』『行歴抄』は、『論記』の撰述について触れていない。

117 小野勝年「一九八二」八一頁。

118 『智全』巻下、一三六八頁上。

かる距離である¹¹⁹⁾。国清寺からの距離的には、越州開元寺よりも台州開元寺の方が近いので、小野勝年氏の「あるいは台州開元寺の誤りか」との指摘は、可能性として考えられる。もし越州開元寺で『論記』を撰述したのであれば、少なくとも大中八年の九月後半以降でなければ、『円珍伝』の記述とは整合性が取れない。

さて、長安青龍寺における円珍の密教求法に関連して、玉城康四郎「一九八九」は、

天台山において再び『法華論記』を勘えたが、修治未了とあるから、おそらく帰国後に完了したものであろうかと思われる。そうしてみると、これもまた大中九年十一月の伝法灌頂の体験に影響を受けていることが察知される¹²⁰⁾。

と述べており、法全からの受法が『論記』の撰述にも影響を与えたと捉えている。

長安から再び天台山国清寺に戻った円珍は、国清寺滞在中に一卷の『法華論』を得たという。『年譜』には、

齊衡三年丙子。^{大中}十年 師四十三歳。(中略) 七月六日。師於国清寺得法華論一卷¹²¹⁾。

とある。現行本の『法華論』は、勒那摩提訳のほうが一巻本であるが、大竹晋「二〇一一」は、

隋の彦琮『衆経目錄』巻一や隋の慧影『大智度論疏』や唐の静泰『衆経目錄』も菩提流支訳の巻数を一卷と表記しており、隋唐においては菩提流支訳について二巻本の他に一巻本が存在したようである¹²²⁾。

と述べているので、円珍が国清寺で得たという『法華論』が、勒那摩提訳であったかどうかは『年譜』の記述だけでは断定できない¹²³⁾。

円珍は帰朝の半年程前に、天台山において『論記』に手を加えている。『年譜』には、

119 佐伯有清「一九九〇A」八三頁および一一〇頁を参照。

120 玉城康四郎「一九八九」八二二頁。

121 『智全』巻下、一三八八頁上。

122 大竹晋「二〇一一」一〇八頁。

123 池田魯参「一九七八B」には「後に一巻本を得たことと、良諱に代表される天台系の諸師が一巻本を使用している現状に接したことから、それまで円珍が依用してきた二巻本との対校や吟味が必要と感ぜられたのであろう」(二三五頁上)とある。

天安（中略）二年戊寅。^{大中十} 師四十五歳。正月九日。在天台再勘法華論記。而修治未了¹²⁴。

とある。「修治未了」とあることから、『論記』の修治完了は帰朝後のことであつたと考えられるが、本書の現行本には成立年代に関する記載がないため確定できない。佐伯有清「一九九〇」は、

『法華論記』十卷は、その完成の年次が明らかではないが、いちおう貞観年間にその撰述を終えたものとしておこう¹²⁵。

と述べており、『論記』の成立年代を円珍帰朝後の貞観年間（八五九～八七七年）と仮定している。木内央「一九七三」は、

竜堂の『山家祖徳撰述篇目集』、そして尊通の『帙外新定智証大師書録』には、『論記草』なる一書の名が別に載せられ、それぞれ三巻といひ二巻とあつて、不同ではあるが、尊通がとくに『大師書録』巻第一の「真録」のはじめに、「論記九巻」を置き、つづけて「論記草二巻」と並べるのは、この草本を、あたかも『法華論記』の草本であると見なしているかのようである。それは、年譜のいう在唐中における『法華論記』勘考のある段階のものを指すのかもしれない¹²⁶。

と述べている¹²⁷。

吳鴻燕「二〇〇七」は、『論記』において湛然『法華五百問論』（以下、『五百問論』）の引用箇所が二十六箇所あることを指摘している¹²⁸。『論記』では、法相宗の基の説を批判する際に、頻りに『五百問論』を引いている。円珍の五種の請来目録には『五百問論』の名が見えないが、『山王院藏書目録』には「決疑 三帖 又云五百問論」とあり、円珍が手元に置いていたことが知られる。『五百問論』は、円載が唐の開成四年（八三九年）に天台山国清寺で書写して、承和十年（八四三年）に比叡山延暦寺に届けられたものである。『五百問論』は、円載によつてすでに日本に齎されていたので、おそらく円珍は請来しなかつたのであろう。『論記』で重要視された『五百問論』を、円珍は在唐中に見たのか、或いは帰朝後に見たのかについては今の所不明である。

¹²⁴ 『智全』巻下、一三八八頁下。

¹²⁵ 佐伯有清「一九九〇A」二二二頁。

¹²⁶ 木内央「一九七三」一四二頁中。

¹²⁷ 高崎直道「一九七七」には『年譜』を書いた尊通は、『帙外新定智証大師書目』で「論記九巻」に並べて「論記草二巻」を挙げるが、これが在唐中の草案をさすのかも知れない。ともあれ、現在「論記草二巻」は伝わらず、両書の関係は知る由もない。本書の完成が帰国後であつたことは確かであろう（三四五頁上）とある。

¹²⁸ 吳鴻燕「二〇〇七」一〇九頁。

円珍の『山王院蔵書目録』には、天台三大部および湛然の注釈書の他に、『法華論』および『論記』に関連する以下の著作が見られる。

法華論 二卷

決疑 三帖 又云五百問論

金剛鐺論 一卷 上三本並妙樂

大乘止観法門 一卷

法花論抄 一卷 叡山

法花玄賛 六卷 一二三四六七

法花七喻三平十無上述 一卷

法花論疏集記 三卷 此土

法華經義疏 一卷 第一 嘉祥

法華論述記 二卷 上 下末

法花論疏 三卷 欠上中 嘉祥

大乘三論大義抄 四卷 一帖

『山王院蔵書目録』に見られる「法華論」は「二卷」とあり、現行本の菩提留支訳の巻数と一致するが、『大正蔵』第二十六巻の目次には、勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』について「二卷或二卷」とあるので、どの『法華論』であるのか断定できない。なお、円珍が唐から請来した『法華論』は、『智証大師請来目録』によると「妙法蓮華經論一卷 勒那摩提」¹²⁹であった。

「法花七喻三平十無上述 一卷」とあるのは、『東域伝燈目録』に見られる作者不明の「七喻三平十無上述一卷 在前唐院」と同じものかもしれない。

大竹晋「二〇一一」は、

『東域伝燈目録』は『妙法蓮華經憂波提舍』に対する日本撰述の註釈を列挙したのち、著者名を記さないまま「『七喻三平十無上』一卷【在前唐院】」と述べる

129 『智全』巻下、一二六七頁上。

が、この『七喻三平等無上説』はおそらく淡延『法華經七喻三平等十無上説』であって、この書は『東域伝燈目録』の編纂期においてすでに著者名が判らなくなっていたと思われる¹³⁰⁾。

と述べている。最澄の『法華秀句』には、淡延の『法華經七喻三平等十無上説』が引用されているので¹³¹⁾、円珍の手元にあったものも同じ淡延の注釈であった可能性が高い。

「大乘三論大義抄 四卷 一帖」とあるのは、南都西大寺の三論宗の僧玄叡（？～八四〇年）の主著である¹³²⁾。前川健一「一九九五」は、

『論記』は日本撰述の書物を引用することが全くないが、一箇所だけ例外がある。それは以下に見るように玄叡『大乘三論大義抄』の引用と見なされるべきものである¹³³⁾。

と指摘している。

帰朝後、比叡山に戻った円珍は、東塔西谷の山王院において、これらの著作を参照しながら、草本の『論記』の修治を完了させたのかもしれない。

小 結

円珍のおよそ五年間に亘る在唐留学においては、当時その分野の最高峰であった越州開元寺の良諤や長安青龍寺の法全などから顕教・密教の法を学んだ。また、日本に伝わっていなかった典籍などを求得し、『大日経義釈』の校勘や『論記』の撰述などに励んだ。在唐中に作成した五種の目録からは、円珍一行の各地における求法の足跡が伺える。その歴遊を通じては、唐の僧俗のみならず、新羅、西域、印度出身の人々との交流もあり、また、日本から来ていた遣唐留学僧の円載との確執や、長安における円覚との出会いもあって、国際性豊かな唐ならではの留学であった。

『論記』に関する先行研究では指摘されたことがなかったが、円珍に南都法相宗の学説への関心が強くあったことと、唐留学中に作成した請来目録や『山王院蔵書目録』から円珍の『法華論』研鑽の状況を伺うことができることを、今回新たに筆者が指摘した。

130 大竹晋「二〇一」一二八頁。

131 同上。

132 平井俊栄「二九七八」七五頁上を参照。

133 前川健一「一九九五」九八頁。

入唐の数年前には、大極殿の最勝会において元興寺の明詮と論議をした円珍であったが、明詮の属する南都法相宗では、当時までに盛んに『法華論』が研究されていた。円珍の『山王院藏書目録』には、『法華論』の注釈を著したところのある明一や行賀の著作が見えることから、円珍が南都法相宗の学説に関心を寄せ、意識していたであろうことが伺えた。

『開元寺求法目録』によると、円珍が唐へ渡ってから間もない時期に、福州において勒那摩提訳の『法華論』一卷を得ていたことが知られ、また、『福州温州台州求法目録』に見える「隨身」の注記から、円珍が福州で得た『法華論』を長安への旅に携行していたことがわかった。『論記』の撰述に関して記している尊通の『年譜』では、福州において『法華論』を得たことに触れていないが、円珍加筆の『開元寺求法目録』が現存しており、本目録の記載から福州において、吉蔵および基の法華経注釈を得ていたのと共に、勒那摩提訳の『法華論』を得ていたことは確実であり、これら福州において求得した文献は、『論記』の撰述に大きく関わるものであったと考えられる。

在唐期間中には修治を完了し得なかった草本の『論記』であったが、佐伯有清「一九九〇A」で「經典の虫」¹³⁴と評されるような円珍の性格からして、帰朝後に必ずや本書を完成させたと思われる。円珍は、『山王院藏書目録』にある『法華論』および『論記』に関する著作を参照しながら、東塔西谷にある山王院において、今に伝わる十巻本の『論記』を完成させたのではないだろうか。

¹³⁴ 佐伯有清「一九九〇A」では、「臨終の朝にも、円珍は目ごろ手がけてきた唐本の『涅槃経疏』の写本を讎校したものを手にとっていたという『円珍伝』。まさに円珍は、『經典の虫』である生涯をつらぬいたのであった」（二八一頁）と評している。

第二章 円珍の引用する『法華論』について

第一節 『法華論』諸本について¹³⁵

印度撰述の法華經注釈¹³⁶である『法華論』には、梵本・藏訳が現存せず、漢訳の現行本二種類と、近年見出された日本古写経本・江戸期刊行本が伝える菩提流支訳一卷本が現存する。唐の智昇撰『開元釈教録』（七三〇年編纂）の巻第六には、

妙法蓮華經論一卷 婆藪槃豆菩薩造亦云法華經論侍中崔光僧朗等筆受見長房
錄初出与菩提留支訳者大同小異題云妙法蓮華經優波提舍（…中略…）沙門勒那摩提。或云婆提。魏言宝意。中印度人¹³⁷。

法華經論一卷 題云妙法蓮華經優波提舍或一卷曇琳筆受並製序第
二出与前宝意出者同本初有帰敬頌者是見統高僧伝（…中略…）沙門菩提留支。魏言道希。北印度人也¹³⁸。

とあり、巻第九には、

法華論五卷 莫知造者單重末
悉景雲二年訳（…中略…）沙門釈義淨。齊州人¹³⁹。

とあり、巻第十二別録之二には、

¹³⁵ 本節の内容は、日本古写経研究所の令和五年（二〇二三年）度第二回公開研究会で配布した資料の一部分を下敷きとして、訂正・加筆を施したものである。
¹³⁶ 清水梁山「一九二二」六頁や大竹晋「二〇一一」一〇一頁の解題で引用されているように、僧詳（生没年未詳）の『法華伝記』には、

眞諦三藏云。西方相傳。説法華大教。流演五天竺。造優婆提舍。釋其文義五十餘家。佛涅槃後五百年終。龍樹菩薩造法華論。六百年初。堅意菩薩造釋論。並未來此土。不測旨歸。九百年中。北天竺丈夫國師大婆羅門憍尸迦子婆藪槃豆。此云天親。亦製法華論。以六十四節法門。釋其大義。『大正藏』第五十一卷、五二頁下二五行目―五三頁上二行目

とあり、印度撰述の法華經注釈に関する眞諦の説を提示しているが、金山眞瓜・兜木正亨「一九四八」では『法華伝記』の当該箇所を引用した上で、

龍樹及び堅意にもまた法華論の作があつたが、支那に伝らなかつたといふのである。しかるに法華經伝記なる書は所謂玉石同架の甚しいもので、疑はしい記事を多く包含してゐるが、今の『眞諦三藏云』もその中で、陳末隋初の凌亂に荒廢した建康（南京）に止まつて大いに仏典を収聚し、博引の誉高き古藏の著作にも見当らず、龍樹を仏滅五百年終の人とするが如きは恐らく古藏の大乗玄論卷五の「龍樹菩薩出三三百年」破「諸異部」の文を誤解したものであつて、到底これを眞諦の伝説と認めることはできない。かゝる情況であるから、この法華經伝記によつて、龍樹及び堅意に法華論の作があつたと信ずるのは早計である。（三八頁）

と述べている。

¹³⁷ 『大正藏』第五十五卷、五四〇頁中四―一一行目。

¹³⁸ 同上五四一頁上一八一―中四行目。

¹³⁹ 同上五六八頁中二―五行目。

妙法蓮華經論一卷 婆藪槃豆 菩薩造／元魏中天竺三藏勒那摩提共僧朗等訳／第一譯／上五論十一卷同帙

法華經論一卷 初有歸敬頌 者或一卷／元魏北天竺三藏菩提留支共曇林等訳／拾遺編入第二訳／右二論同本異訳 其三藏義淨新訳法華論五卷尋本未獲

とある。『開元釈教録』では、現存する勒那摩提訳『妙法蓮華經論』一卷及び菩提留支訳『法華經論』二卷の他に、景雲二年（七一二年）に訳された義浄訳『法華論』五卷について触れているが、所在不明と記されている¹⁴¹。

『大正藏』第二十六卷には、菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』二卷と勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷の二種類のテキストが収録されており、関連する先行研究では、これまで専ら大正藏本の『法華論』テキストが用いられてきた。

近年、身延山大学教授の金炳坤氏を中心として、『法華論』の文献学的研究が盛んに行われており、その研究成果を代表するものが二〇二〇年に身延山大学国際日蓮学研究所から刊行された、望月海慧・金炳坤編『妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』法華經研究叢書Ⅱ（以下、叢書Ⅱ）である。叢書Ⅱでは、古形の菩提流支訳を伝えたと目される、円弘（七三三年以前か）¹⁴²撰『妙法蓮華經論子注』（以下、『子注』）所引の『法華論』（以下、子注法華論）や寛永二年（一六二五年）刊行の叡山版古活字本を始めとする和刻本¹⁴³『法華論』が、現行本とは異なる本文内容を有していること、その資料的意義などについて述べられている。

また、近年筆者は日本古写経本『法華論』のテキスト研究を行っており、新出の興聖寺本（写本・刊本）の本文内容を初めて斯界に報告した拙稿「二〇二二」を足懸りとして、これまでに興聖寺本をめぐっての拙稿「二〇二二A」・「二〇二二B」（解題・翻刻）、真福寺本をめぐっての拙稿「二〇二三B」を発表している¹⁴⁴。これらの成果の中では、七寺本・金剛寺本・聖語藏本の内容についても少しく触れている。真福寺本・興聖寺本・七

140 同上六〇七頁中二三―二二行目。

141 『開元釈教録』記載の義浄訳『法華論』五卷について、金山真瓜・兜木正亨「一九四八」は、

この標題から察すると法華經の釈論ではないかと考へられるが、智昇の記するところによれば、作者が何人かも判らず、従つて單訳か、或は世親の法華經論等の再訳か否かも不明で、その訳出の景雲二年から、開元録の完成した開元十八年（七三〇）までは僅かに二十年に過ぎないに關らずその本が既に逸亡してつたのであるから、当時あまり重要視されなかつたのではないかと思はれる。（三七頁下）

と述べている。

142 金炳坤「二〇二〇A」九三頁参照。

143 江戸期刊行の和刻本『法華論』に関する先行研究としては、金炳坤「二〇一七」・「二〇二〇B」・「二〇二〇C」（同「二〇二〇D」は付属資料）・「二〇二二A」・「二〇二二B」・「二〇二二C」・「二〇二二D」、桑名法晃「二〇一六」・「二〇二〇」がある。

144 岡本一平「二〇二二」の付記では、拙稿「二〇二二」に対する何点かの指摘があった。その後、投稿した拙稿「二〇二二B」の注（4）では、先の指摘に対して回答してい

寺本・聖語藏本の菩提流支訳一卷本（七寺本は菩提留支訳一卷本）は、現行本とは異なる本文内容を有しており、それらの本文系統は子注法華論（『子注』自体は、巻上現存、巻中散逸、巻下の半分程度散逸）に近似している場合が多く、叡山版に比して古い形を留めている。而も日本古写経本の菩提流支訳一卷本は完本で伝わっており、その資料的意義は極めて大きい。

本論文付録の諸本対校では、対校資料として用いた真福寺本と興聖寺本の本文の全文翻刻を提示しており、また本節第二項では、真福寺本・興聖寺本・七寺本・金剛寺本・聖語藏本などを用いて、『法華論』諸本の本文系統について検討している。

第一項 『法華論』の先行研究について

『法華論』関連の研究においてよく参照される先行研究としては、訳注研究では清水梁山「一九二二」、藤井教公・池邊宏昭（ほか）「二〇〇一」・「二〇〇二」・「二〇〇三」、大竹晋「二〇一」がある。この内、藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇二」では、カリフォルニア大学から刊行された Terry Rae Abbott 「一九八五」（学位論文）における『法華論』の英訳・訳注を斯界に初めて紹介しており¹⁴⁵、望月海慧「二〇二〇A」では BDK Tripitaka Translation Series に収録されたアボットの英訳（二〇一三年発行。Terry Rae Abbott 「一九八五」に基づく英訳）を紹介している¹⁴⁶。

また、『昭和新纂国訳大蔵経』論律部第九卷（一九三二年刊行）には、『法華論』の国訳が収録されているが、管見の限りこの国訳について触れている初出は金炳坤・桑名法晃「二〇一四」の参考文献欄であり¹⁴⁷、それ以前の主要な先行研究では触れられていない上、先の国訳の担当者が明らかではないこともあってか、依然として参照されにくい状況にある。なお、昭和新纂国訳大蔵経編輯部の代表者は三井晶史氏である¹⁴⁸。

る。併せて参照されたい。金炳坤「二〇一三A」・「二〇一三B」・「二〇一三C」・「二〇一三」では、筆者提供の興聖寺本『法華論』（院政期写本と鎌倉時代刊本）の翻刻資料が用いられている。

¹⁴⁵ 藤井教公・池邊宏昭ほか「二〇〇一」一三二―一四頁。

¹⁴⁶ 望月海慧「二〇二〇A」八頁。

¹⁴⁷ 金炳坤・桑名法晃「二〇一四」三〇頁。

¹⁴⁸ 『昭和新纂国訳大蔵経』論律部第九卷の奥付には、「編纂者 昭和新纂国訳大蔵経編輯部／代表者 三井晶史」とあり、三井晶史氏には鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜多經』や、『楞伽經』（主として実叉難陀訳『大乘入楞伽經』七卷に依って訳されているが、屢々菩提流支訳『入楞伽經』十卷に依って訳されたところがある）の現代語訳がある。三井晶史氏については、昭和四年十二月一日発行『昭和五年 佛教年鑑』創刊号「第五篇 人事」の「僧侶及佛教関係者（昭和四年九月調査）」に、

三井諦心 號、晶史○明治二十七年一月、山形縣鶴岡市生○淨○大正八年宗教大學卒業、十三年東方書院創設、常務取締役として宗教圖書出版、國譯大蔵経編輯主宰、其他創作『法然』

訳注研究以外では、奥野光賢「二〇〇二」はよく知られた研究成果であり、最近では望月海慧・金炳坤「二〇二〇B」も記憶に新しい。その他にも『法華論』関連の先行研究は数あるが、ここでは奥野光賢「二〇〇二」で従来の研究成果を列記している所を参考にして、奥野光賢「二〇〇二」以降に提出された『法華論』関連の研究成果を列記しておくたい。

「研究成果」

- (1) 渡辺宝陽「インド仏教の法華経観―世親の『法華論』―」（大法輪閣編集部編『法華経入門―永遠のいのちを生きる―』大法輪閣、二〇〇三年）¹⁵⁰
- (2) 奥野光賢「吉蔵の法華経観―『駒澤短期大学研究紀要』第三十三号、二〇〇五年」
- (3) 三友健容「義寂撰『法華論述記』の一考察」（村中祐生先生古稀記念論文集 大乘佛教思想の研究『二〇〇五年』）
- (4) 大竹晋「新国訳大蔵経 法華経論・無量寿経論他」大蔵出版、二〇一一年
- (5) 大竹晋『妙法蓮華経憂波提舍』（『元魏漢訳ヴァスバンドウ釈経論群の研究』大蔵出版、二〇一三年）
- (6) 金炳坤「紀国寺慧浄の『法華経續述』考(1)―新発見の史料をもとに―」（『身延論叢』第十五号、二〇一〇年）
- (7) 金炳坤「法華章疏における五分釈の展開」（『印度学仏教学研究』第五十九卷第二号、二〇一一年）
- (8) 金炳坤「紀国寺慧浄の『法華経續述』考(2)―韓国の現存本をもとに―」（『身延論叢』第十七号、二〇一二年）
- (9) 金炳坤「西域出土法華章疏について」（『印度学仏教学研究』第六十一卷第一号、二〇一二年）

『佛教思想概説』等の著あり○浄土教報主筆○東京府田端三八〇（五五四頁）

とある。オンデマンド版『昭和新纂國譯大蔵経』論律部第九巻の奥付によると、初版は一九三二年に東方書院から、覆刻版は一九七七年に名著普及会から、オンデマンド版は二〇〇九年に大法輪閣から発行されている。大法輪閣の公式サイトにある「昭和新纂日本大蔵経」のバナーをクリックすると開くPDF <https://www.daihorin-kaku.com/files/syouwasansan-kokuyaku.pdf>（参照：二〇一三年八月八日）には、

《昭和新纂國譯大蔵経の再刊を喜ぶ》東京大学名誉教授・東方学院院长中村 元

『昭和新纂 國譯大蔵経』の特徴は、日本の諸宗派の重要典籍を網羅するとともに、それらの背景となったインドや中国の主要な経論をも含めて、仏教を歴史的に俯瞰できるよう構成されていることにある。さらに、全文書き下し・総ふりがなつきであるということは、今日の書としても大きな意義をもっている本書は、日本仏教の立場から『大蔵経』の精粹を示すものと言えるであろう。（再刊当時のことば）より抜粋）

とある。

奥野光賢「二〇〇二」八―一一頁。

初出は、渡辺宝陽「法華論入門」（『大法輪』第四十二巻第十二号、一九七五年）

- (10) 金天鶴「金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華經論子注』について」『印度学仏教学研究』第六十卷第二号、二〇二二年
- (11) 金炳坤『法華章疏の研究―海東撰述・西域出土本を中心として―（平成二十四年度 課程博士学位請求論文）』法華弘通会、二〇一三年
- (12) 金炳坤「六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察」『身延論叢』第十八号、二〇一三年
- (13) 金炳坤「西域出土法華章疏の基礎的研究」『仏教学レビュー』第十三号、二〇一三年
- (14) 金炳坤「ウイグル語訳『妙法蓮華經玄賛』の研究状況と課題」『身延山大学仏教学部紀要』第十四号、二〇一三年
- (15) Terry Rae Abbott, 『The Commentary on the Lotus Sutra, *Triṇītai Lotus Texts, BDK Tripiṭaka Translation Series*. Berkeley: Bukkyō Dendō Kyōkai America, 2013.
- (16) 片山由美「コータン語『法華經綱要』の研究」『法華文化研究』第四十号、二〇一四年
- (17) 片山由美「コータン語『法華經綱要』の試訳」『身延論叢』第十九号、二〇一四年
- (18) KATAYAMA Yumi, *The Khotanese Summary of the "Saddharmapuṇḍarikasūtra" and the "Saddharmapuṇḍarikopadesa"* (Acta Tibetica et Buddhica 第七号、二〇一四年)
- (19) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』第十四号、二〇一三年
- (20) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳（一）」『身延山大学仏教学部紀要』第十八号、二〇一七年
- (21) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「序品」和訳（二）」『身延山大学仏教学部紀要』第十九号、二〇一八年
- (22) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳（一）」『身延論叢』第二十三号、二〇一八年
- (23) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「方便品」和訳（二）」『身延論叢』第二十四号、二〇一九年
- (24) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「譬喻品」和訳」『日蓮仏教研究』第十号、二〇一九年
- (25) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「信解品」和訳」『大崎学報』第一七三号、二〇一七年
- (26) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「藥草喻品」和訳」『東洋文化研究所報』第十九号、二〇一五年
- (27) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「授記品」和訳」『身延山大学仏教学部紀要』第十五号、二〇一四年
- (28) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「化城喻品」和訳」『身延論叢』第二十号、二〇一五年
- (29) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「五百弟子受記品」和訳」『身延論叢』第十九号、二〇一四年
- (30) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「授学無学人記品」和訳」（松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房佛書林、二〇一四年）
- (31) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「法師品」和訳」『法華文化研究』第三十九号、二〇一三年

- (32) 望月海慧「チベット語訳『妙法蓮華註』「見宝塔品」和訳」『日蓮仏教研究』第六号、二〇一四年
- (33) MOCHIZUKI Kaie, *Vasubandhu's Commentary on the Lotus Sutra in Tibetan Literature*.
- 邦題「チベット文献において言及される世親の『法華論』」『印度学仏教学研究』第六十五卷第三号、二〇一七年、(和文要旨)四〇九頁
- (34) 金炳坤「義寂釈義一撰『法華經論述記』について」『印度学仏教学研究』第六十三卷第一号、二〇一四年
- (35) 金炳坤・桑名法晃「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1)」『身延山大学仏教学部紀要』第十五号、二〇一四年
- (36) 金炳坤・桑名法晃「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(2)」『身延論叢』第二十号、二〇一五年
- (37) 金炳坤「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(3)」『法華文化研究』第四十一号、二〇一五年
- (38) 金炳坤・桑名法晃「義寂釈義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(4)」『身延山大学仏教学部紀要』第十六号、二〇一五年
- (39) 藤野泰二「吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について」『印度学仏教学研究』第六十三卷第二号、二〇一五年
- (40) 中井泰二「吉蔵による『法華論』帰敬偈の理解について」『仏教学論集』第三十一・三十二合併号、二〇一五年
- (41) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』における『法華論』科文(一)」『仏教学論集』第三十三号、二〇一六年
- (42) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』における法華經解釈について」『印度学仏教学研究』第六十六卷第一号、二〇一七年
- (43) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(1)」『智慧のともしびーアビダルマ佛教の展開—中国・朝鮮半島・日本篇』山喜房佛書林、二〇一六年
- (44) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(2)」『身延論叢』第二十二号、二〇一七年
- (45) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(3)」『法華文化研究』第四十三号、二〇一七年
- (46) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(4)」『法華文化研究』第四十六号、二〇二〇年
- (47) 中井本勝「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(5)」『身延論叢』第二十六号、二〇二二年
- (48) 桑名法晃「『法華論』版本の研究—清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として—」『東洋文化研究所所報』第二十号、二〇一六年
- (49) 金炳坤「流布本『妙法蓮華經優波提舍』考」『宗教研究』第九十巻別冊、二〇一七年
- (50) 金炳坤「『三平等義』の成立に関する研究」『身延山大学仏教学部紀要』第十七号、二〇一六年
- (51) 金炳坤「最澄と『妙法蓮華經論子注』」『元暁と新羅仏教学本』神奈川県立金沢文庫・東国大仏教文化研究院HK研究団、二〇一七年
- (52) 金炳坤「『三平等義』所引の「注三」について」『印度学仏教学研究』第六十六巻第一号、二〇一七年

- (53) 金天鶴「円弘は新羅僧侶か―『法華經論子注』の引用文献を中心として―」(『身延山大学仏教学部紀要』第二十号、二〇一九年)
- (54) 武本宗一郎「最澄鈔『法華論科文』訳注」(『論叢アジアの文化と思想』第二十八号、二〇二〇年)
- (55) 武本宗一郎『守護國界章』における『法華論』釋義とその系譜―『法華論』の「甚深」に關する最澄の釋義を中心に―(『東洋の思想と宗教』第三十七號、二〇二〇年)
- (56) 奥野光賢「三論宗關係文献の本文問題」(『駒澤大學佛教學部研究紀要』第七十八號、二〇二〇年)
- (57) 金天鶴『法華經論子注』写本の流通と思想」(『身延論叢』第二十五号、二〇二〇年)
- (58) 蓑輪顕量「金天鶴『法華經論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス」(同上)
- (59) 金炳坤「円弘撰『妙法蓮華經論子注』研究史概観」(同上)
- (60) 望月海慧「世親の『法華論』について」(『妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』法華經研究叢書Ⅱ、二〇二〇年)
- (61) 桑名法晃「清水梁山国訳『法華論』の底本について―版本『法華論』の流布と受容を視点として―」(同上)
- (62) 金炳坤「世親『法華論』の流伝に關する諸問題―見直されるべきテキストを中心として―」(同上)
- (63) 金炳坤「流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として―」(同上)
- (64) 金炳坤「資料」『法華論』諸本校合(二)(同上)
- (65) 望月海慧「世親『法華論』のチベット語訳は存在したのか」(『仏教思想の展開』花野充道博士古稀記念論文集、二〇二〇年)
- (66) 金炳坤「慧浄述『妙法蓮華經續述』の敦煌本について」(『身延山大学仏教学部紀要』第二十一号、二〇二〇年)
- (67) 神田大輝「広蔵院日辰の『法華論』受容について」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、二〇二二年)
- (68) 拙稿「興聖寺一切經本『妙法蓮華經優波提舍』について」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、二〇二二年)
- (69) 岡本一平「書評 望月海慧・金炳坤編『法華經研究叢書Ⅱ 妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』」(『日蓮学』第五号、二〇二二年)
- (70) 拙稿「興聖寺本『法華論』」(『いとく』第十一号、二〇二二年)
- (71) 金炳坤『法華論』諸本校合(三ノ二)「『身延山大学仏教学部紀要』第二十三号、二〇二二年)
- (72) 金炳坤『法華論』諸本校合(三ノ三)「『日蓮教学研究紀要』第五十号、二〇二三年)
- (73) 金炳坤『法華論』諸本校合(三ノ四)「『日蓮学』第六号、二〇二二年)
- (74) 武本宗一郎「最澄の『法華論』釈義とその系譜―「成就」解釈の枠組みをめぐって―」(『天台学报』第六十四号、二〇二二年)

- (75) 拙稿「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻」『仙石山仏教学論集』第十三号、二〇二二年
- (76) 拙稿「円珍『法華論記』所引の『法華論』について」『印度学仏教学研究』第七十一卷第二号、二〇二三年
- (77) 拙稿「真福寺本『法華論』の紹介と史料的价值」『いとくら』第十二号、二〇二三年
- (78) 中野直樹「真福寺蔵『法華論』は天平勝宝七年の訓点を伝えるか」『いとくら』第十二号、二〇二三年
- (79) 萩野翔太「初期日本天台における被接の解釈をめぐって―円珍『法華論記』と『授決集』を中心に―」『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第二十三号、二〇二三年

これらの研究成果の内、本章における主要参考文献は、子注法華論や叡山版『法華論』などに関する(57)(61)(62)(63)(64)、新出の日本古写経本『法華論』に関する拙稿の(68)(70)(75)(77)、『論記』所引の『法華論』に関する拙稿の(76)である。

第二項 『法華論』諸本の本文系統について

本項では、『論記』所引の『法華論』のテキスト系統を検討するにあたって、現行本とは異なる本文内容を有する日本古写経本『法華論』や、子注法華論・叡山版『法華論』などを含めた、『法華論』諸本の本文系統について検討する。

新出の『法華論』の諸相については、先述の研究成果を参照されたいが、『法華論』諸本の本文系統を検討するにあたっては、金炳坤氏が実施した諸本校合「二〇二〇D」(以下、校合②)などの研究成果が参考となる¹⁵¹⁾。

ここでは、『法華論』諸本の本文系統について検討するため、校合②に倣いつつ、真福寺本を始めとした新出の日本古写経本や、注釈書所引の『法華論』などから、新たに対校する意義が認められるテキストを私に選定し、諸本対校を実施する。以下の用例(1)の箇所は、金炳坤「二〇二二C」(二―三頁)で検討されている箇所であり、筆者はそれを受けて、新たに資料を追加して検討する。当該箇所は、『法華論』冒頭で法華経序品第一の文を引用した後、七種功德成就について論じている部分である。

各行頭の【】内に示した略号については、本論文の文献表(四〇九―四二頁)、諸本対校の表記方法については、付録の凡例(二四―二八

151 金炳坤「二〇二〇C」・「二〇二〇D」・「二〇二二A」・「二〇二二B」・「二〇二二C」では、『法華論』序品までの諸本校合が公表されている。

頁）を参照されたい。なお、煩雑を避けるため、ここでは些細な異体字は統一した。

諸本対校 用例(1) (校合②の一五八―一五九頁に該当)

(真福寺本注朱)

中

【真福寺本】 論曰此 法門◎初第一品 明七種功德成就

【子注法華論】 論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

【七寺一卷本】 論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就

【聖語藏甲本】 論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

【聖語藏乙本】 論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就此義應知

(興聖寺写本注)

示現

【興聖寺写本】 論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

【興聖寺刊本】 論曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就

【科註法華論】 論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就

【叡山版】 論曰此經法門中初第一品 明七種功德成就

【正保三年版】 論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就

【論疏補入本】 論曰此經法門中初第一品示現 七種功德成就

【咸潤校讎本】 此 法門 初一品 明 此義應知

【智全会入本】 論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

【日藏会入本】 論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就

【論記所引】 論此 法門已下…

初第一品者…

明七種功德成就者

【敦煌摩提訖】 此 法門 初第一品 明七種功德成就

【房山摩提訖】 此 法門 初第一品 明七種功德成就

【初雕摩提訖】 此 法門中初第一品 明七種功德成就

【福州摩提訖】 釋曰此 法門 初第一品 明七種功德成就 應知

【房山流支訳】 釋曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就此義應知
 【七寺二卷本】 釋曰此經法門 初□□□現 七種功德成就此義應知
 【金剛寺本】 釋曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就此義應知
 【聖語藏丙本】 釋曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就此義應知
 【再雕留支訳】 釋曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就此義應知
 【福州留支訳】 釋曰此經法門 初第一品示現 七種功德成就此義應知
 【論疏所引】 論曰下…

此 法門者…

初第一品者…

七種皆稱功德者

【論述記所引】	此 法門	初第一品示現	明七種功德成就
【文句記所引】	此 法門	初第一品	明七種功德成就
【私志記所引】	此 法門	初 品	明七種功德成就

用例(1)では、真福寺本が子注法華論・聖語藏甲本・興聖寺写本・智全会入本¹⁵²⁾の、菩提流支訳一卷本の系統と一致している。金炳坤「二〇二〇C」で云う和刻本¹⁵³⁾の系統に興聖寺刊本を加えて、諸刊本について注意深く見ると、科註法華論¹⁵⁴⁾・正保三年版・日藏会入本は一致しているが、

152 同上「二〇二〇C」では、『智全』所収の『論記』の巻末に付されている識語に対する木内央氏の解説を受けて、

敷衍すれば、『全集』の牒文『法華論』の本文は、単行本Ⅱ和刻本を底本に、藏經本Ⅱ『大日本校訂大藏經』(『縮刻』)を対校本として、その校勘記を考Ⅱ割注を以て示したということであるが、筆者の調べでは、この牒文が寛永二年版とも正保三年版とも一致しないため、これには校訂者の意が含まれているものと解される。なお、割注は『縮刻』(『大正』)と対応関係にあることが確認できた。(三五三頁)

と述べており、『論記』に会入された『法華論』が和刻本であり、校訂者の意が含まれているという。

153 同上には「見出し(4)(5)(6)の和刻本という表記は、これらのテキストの中に示される『法華論』の本文が、(3)に代表される和刻本(Ⅱ古形Ⅱ(1))を底本にしている(Ⅱ(6)か、古形に属する同系統のテキストに依っていることを指している」(三五四頁。なお、本論文の表記と照らし合わせると、(4)は科註法華論、(5)は論疏補入本、(6)は智全会入本、(3)は正保三年版、(1)は子注法華論に該当する」とある。

154 同上には「(4)は和刻本に全同ではないが、かなりの度合で一致していることが確かめられる」(三五四頁)とある。

興聖寺刊本・叡山版・論疏補入本¹⁵⁶⁾・智全会入本はすべて不一致である。故にこれらと刻本についての厳密な位置付けは、依然として研究の余地があるように思われる。特に『科註』は、神田大輝「二〇二二」が指摘するように、京都本隆寺に所蔵されている室町時代成立の常不輕院日真（一四四四～一五二八年）自筆本に由来する刊本であり¹⁵⁶⁾、叡山版（一六二五年刊行）を始めとする江戸期の和刻本の影響下にはない¹⁵⁷⁾。

「釋曰」「經」「示現」「此義應知」は菩提留支訳一卷本の系統・菩提留支訳二巻本の系統に見られ、「明」は勒那摩提訳の系統に由来するものと考えられる。江南系統の福州摩提訳に、「釋曰」「應知」とあるのは菩提留支訳二巻本の系統のようであり、「經」「示現」がなく、「明」とあるのは勒那摩提訳の系統のようである。このようなことから江南系統の勒那摩提訳は、勒那摩提訳の系統と菩提留支訳二巻本の系統との混合であると考えられ、房山摩提訳・敦煌摩提訳・初雕摩提訳とは区別して扱う必要がある。そのため本論文では、房山摩提訳・敦煌摩提訳・初雕摩提訳の系統を、「古形の勒那摩提訳」と称す。なお、江南系統の勒那摩提訳が混合された経緯については、今のところ不明であるが、福州摩提訳の首題の下には「論本内廣略具備」¹⁵⁸⁾とあり、或いはこの記述は両訳混合についての断りであろうか。『大正蔵』の校注によると、勒那摩提訳の宋本と元本にもこの記述がある¹⁵⁹⁾。

155 同上には「実観が分会に用いた本論のテキストは、必ずしも明了ではないが、①（此云天親・③帰命頌・⑩（亦云偈）を有することなどから、和刻本と同系統かその影響下にあるものとみられる。ちなみに前述の両版における異文情報との対比では、寛永二年版に近似（ $\frac{24}{28} \approx 86\%$ ）していることが確認できた」（三五三頁）とある。

156 神田大輝「二〇二二」三三―三四頁参照。神田氏は、『科註』の成立について、「明応十年（一五〇二）二月九日に智証大師円珍著『法華論記』に依拠して執筆されたものと分かる」（三四頁）と述べている。

157 桑名法晃「二〇二〇」には、

大蔵經所収テキストとは別系統のテキストが、近世日本においては少なくとも寛永二年（一六二五）に古活字版として刊行され、正保三年より整版として刊記部分を改めて刊行されていった。しかもそれは、慶安五年（一六五二）刊行の『科註妙法蓮華經論』並びに正徳四年（一七一四）刊行の『法華論疏』両書において用いられ補入されていることから、『法華論』の基本テキストとして広く流布していたことが窺えるのである。（六三頁）

とあり、当該箇所が付された注（39）には、「本書収録の金炳坤「世親『法華論』の流传に関する諸問題―見直されるべきテキストを中心として―」参照」（六六頁）とある。桑名氏が参照した金炳坤「二〇二〇」には、『科註』所引の『法華論』（＝筆者が本論文で「科註法華論」と称している『法華論』）について、「和刻本に全同ではないが、かなりの度合で一致していることが確かめられる」（三五四頁）とあり、また「(4)『科註』、(5)『論疏』（正徳四年版）、(6)『論記』（智証大師全集）」が和刻本より影響を受けていることを明らかにした」（二五一頁）とある。なお、金炳坤「二〇二〇」では、校合②まで用いていた科註法華論を、「和刻本の影響下にあるため」（二二頁）との理由から、『法華論』諸本校合（三）では対象外にすると記している。

158 宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベース―

https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bb_frame?id=007075_0577（参照日二〇二三年十月二日）

159 『大正蔵』第二十六巻「一〇頁下、校注一〇」。

江南系統に比べて、房山摩提訳・敦煌摩提訳・初雕摩提訳は内容がほぼ一致しているが、これら三種類のテキストの前後関係は明らかになっていない。用例(1)では、初雕摩提訳に「中」があり、日本成立の写本(七寺一卷本・聖語蔵乙本)や刊本(叡山版など)には、「中」を有するものがある。「中」の字は、唐代の李忠に由来する避諱であるが¹⁶¹、房山摩提訳・敦煌摩提訳では、他の箇所でも「中」が用いられているため、避諱ではないようである。

房山流支訳、七寺二卷本・金剛寺本・聖語蔵丙本・再雕留支訳・福州留支訳は、同系統か近似する系統の留支訳二卷本(房山流支訳を含む)である。この二卷本の系統を近年金炳坤氏は留支訳と称しており、一方「經曰帰命一切諸佛菩薩」(帰命頌)を有する子注法華論や、その新層と位置付けている¹⁶²。江戸時代成立の叡山版などの一卷本を流支訳と称している。傾向としては、帰命頌を有する一卷本系統のほとんどで「菩提流支」の訳者号が用いられており、帰命頌がない二卷本系統では「菩提留支」の訳者号が用いられている。しかし、房山流支訳(二卷本)では「菩提流支」の訳者号が用いられており、七寺一卷本では「菩提留支」の訳者号が用いられている。

論記所引・論疏所引・論述記所引・文句記所引・私志記所引は、撰者たちが撰述の際に引用した『法華論』を抽出したものである。論記所引と文句記所引は一致しており、また「第一」を略しているが私志記所引も似ている。論記所引・文句記所引・私志記所引は、房山摩提訳・敦煌摩提訳と一致している。論疏所引では、吉蔵が『法華論』を引用しながら独自に言い換えている可能性もあるが、諸本と比べると真福寺本などの菩提流支訳一卷本の系統に近い¹⁶³。論述記所引は、「明」を有する点では勒那摩提訳の系統・菩提流支訳一卷本の系統に近いが、「示現」を有する点では菩提留支訳二卷本の系統からの影響も窺える。論述記所引は、当該箇所では勒那摩提訳に近いようにも見えるが、「示現明」という用例には、菩提留支訳二卷本の系統からの影響も看取される。

勒那摩提訳に由来すると考えられるテキストについて述べると(菩提留支訳二卷本の要素と考えられる字については傍線を付した)、房山摩提訳の系統に「中」を加えれば初雕摩提訳の系統、房山摩提訳の系統に「論曰」を加えれば真福寺本の系統、房山摩提訳の系統に「示現」を加えれば論述記所引の系統、房山摩提訳の系統に「釋曰」と「應知」を加えれば福州摩提訳の系統、初雕摩提訳の系統に「論曰」を加えれば七寺一卷本の系

160 国家教育研究院語文教育及編訳研究中心編『教育部異体字字典』

161 https://dict.variants.moe.edu.tw/variants/rbt/avoid_files.rbt?pageId=2981934 (参照日二〇一三年十月二日)

162 金炳坤「二〇二二」三頁参照。

163 同上「二〇二〇B」には「例えば『論疏』でしかみられない「七種皆称功德」という引文は、逆に本論のその後における様々な展開を窺わせる好例と言えよう」(三六三頁)とある。

統、真福寺本の系統に「中」を加えれば七寺一卷本の系統、真福寺本の系統に「此義應知」を加えれば咸潤校讎本の系統、七寺一卷本の系統に「經」を加えれば叡山版の系統、七寺一卷本の系統に「此義應知」を加えれば聖語藏乙本の系統、咸潤校讎本の系統に「中」を加えれば聖語藏乙本の系統、叡山版の系統の「明」を「示現」に置き換えれば論疏補入本の系統となる。

一方、菩提留支訳二巻本に由来すると考えられるテキストについては、房山流支訳の系統の「釋」を「論」に置き換え、「此義應知」を削除すれば興聖寺刊本の系統となる。「論曰」の「論」は、菩提留支訳一卷本の特徴と見られる。

金炳坤「二〇三C」では、【興刊】は、現行の留支訳（再留→正留）に先行するテキストであることが確認できた。【興刊】と【寛永】の関係性については、なお検討を要する¹²³としているが、筆者は、興聖寺刊本の系統は菩提留支訳二巻本の系統に由来するものと考えているため、意見が異なっている。おそらく金氏は、興聖寺刊本の「論」を「釋」に改変して「此義應知」を加えたものが再雕留支訳の系統に当たると考えているかと思われるが、筆者は、日本で鎌倉時代に成立した興聖寺刊本は菩提留支訳二巻本の系統の変化形ではないかと考えている。また、菩提留支訳由来の「示現」を有し、かつ「中」を有しない興聖寺刊本と、勒那摩提訳由来の「明」を有し、かつ「中」を有する叡山版とは、興聖寺刊本が先行して鎌倉時代に成立していたことを踏まえると、当該箇所においては関係性がそれほど強くはないようにも考えられ、或いは関係がないかもしれない。これが論疏補入本の場合は、叡山版よりも後代に補入されたものであるため、菩提留支訳二巻本由来の「示現」を有しているも叡山版の後に位置付けることはそれほど不自然ではないが、なお検討を要する。当該箇所において、興聖寺刊本と論疏補入本は、「中」の有無の異なり以外は一致しているが、それは結果的に似ているのか、或いは関係があるから似ているのかは定かではない。これらの問題は部分的な検討では断定できないため、まだ仮の位置付けの段階にあることを予め断っておきたい。

次に、金天鶴「二〇二〇」で言及している箇所を取り上げる。金天鶴「二〇二〇」には、

次をみると『子注』は「摩提訳とまったく異なり、留支訳にほぼ一致するということが分かるであろう。七成就中、二つ目の「衆成就」に四つがあり、その中で二つ目が「行成就」である。この「行成就」にまた四つがあり、その三つ目が〈表⑤〉のようになっている¹²⁴。

とあり、当該の〈表⑤〉において『法華論』の六種類のテキストを提示している。まずは当該の表を転載する（なお、表の表記などは私に改めた）。

164 163 同上「二〇三C」三頁。【興刊】は興聖寺刊本、【寛永】は叡山版を指す。
金天鶴「二〇二〇」一五頁。

金天鶴「二〇二〇」〈表⑤〉諸本比較¹⁶⁵

【大正留支訳】	三者謂諸菩薩	神通自在	隨時示現能修行大乘如毘陀婆維菩薩等十六大賢士
【大正摩提訳】	三者 諸菩薩	隨時示現能	行大乘如毘陀婆維 等十六 人
【江南摩提訳】	三者謂諸菩薩	神通自在	隨時示現能修行大乘如毘陀婆維菩薩等十六 人 ¹⁶⁶
【論述記所引】	三者謂諸菩薩	神通自在	隨時示現能修行大乘如毘陀婆維 等十六 賢士
【子注法華論】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能 行衆行如毘陀婆維 等十六 賢士人
【智全会入本】	三者 諸菩薩	以神通自在	隨時示現能修行衆行如毘陀婆維菩薩等十六」賢士

この諸本比較の内容について、金天鶴氏は、

「十六大賢士」などをみる限り、「円弘の『子注』は」摩提訳とはまったく一致せず、「二字を欠くが」留支訳に一致する。一方、『子注』は両テキストと異なり、太字の部分が「能修行大乘」ではなく、「能行衆行」になっている。これは日本の円珍も「二字を除き」同じである。日本では『子注』のように「能行衆行」になっている『法華経論』のテキストも流通されたことが確認される¹⁶⁷。

と述べて、「能行衆行」を有する解脱房貞慶（一一五五～一二三年）撰『法華開示抄』（以下、『開示抄』）の用例を註（27）に示している¹⁶⁸。

しかし、注意深く見ると、子注法華論では「賢士人」となっており、勒那摩提訳に見られる「人」の字を有しているため、『摩提訳』とはまったく一致せず」とは言えず、「謂」「修」「菩薩（異同箇所）」がなく「婆」の字を用いている点などは、寧ろ高麗再雕本を底本とする大正摩提訳とよく一致している。なお、「神通自在」「賢士」の箇所は、子注法華論と大正留支訳において共通しているので、以上のことを踏まえると、当該箇所において子注法華論は、現行本の勒那摩提訳・菩提留支訳のどちらの系統とも関連のあることが看取され、「衆行」を有している点では現行本と異なる。

¹⁶⁵ 同上の〈表⑤〉を転載。なお、表中の傍線箇所はその記載内容が正確ではなかったため、筆者が改めた。福州開元寺版と嘉興蔵の摩提訳を確認したところ、「三者」の次に「謂」の字があり、『大正蔵』第二十六巻でも当該箇所の直前に付された校注⑥（二頁上七行目）に「者十（謂）〈三〉〈宮〉下同」とあるため、「謂」を加えた。

¹⁶⁶ 江南系統刊本大蔵経本（宋本・元本・明本・宮内庁書陵部蔵本）を校本としている『大正蔵』第二十六巻（二頁）の校注⑦⑧⑨から復元される摩提訳。

¹⁶⁷ 金天鶴「二〇二〇」一五頁。

¹⁶⁸ 同上二七頁。

なお、金天鶴氏は当該箇所について、「テキストと思想の関係を説明し得る例である」¹⁶⁹としており、

吉蔵の『法華論疏』には「衆行」に対する解釈がない。異本をみただけであろう。おそらく『子注』において、このような吉蔵の解釈を参照して、衆行を小乗行に同値させたであろうが、『子注』が「衆行」について関心を持ったのは、テキストによって思想性が変わり得る例であるといえよう¹⁷⁰。

と指摘している。金天鶴氏の指摘は、『法華論』のテキスト研究が関連する思想研究にとっても重要であることを示している。

続いて、金天鶴「二〇二〇」〈表⑤〉をめぐって、先の用例(1)と同様に、増広版の諸本対校を提示し、諸本の本文系統について検討する。

諸本対校 用例(2) (校合②の一六三―一六四頁に該当)

(真福寺本注墨)		謂		大乘	
【真福寺本】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能	行衆行	如毘陀婆羅 等十六 賢士
【子注法華論】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能	行衆行	如毘陀婆羅 等十六 賢士人
【七寺一卷本】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能	行衆行	如毘陀婆羅 等十六 賢十一
(聖語藏甲本注)		以		并	
【聖語藏甲本】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能	行衆行	如毘陀婆羅 等十六 賢士
【聖語藏乙本】	三者 謂諸菩薩	神通自在	隨時示現能	／衆行修	如毘陀婆羅菩薩 等十六 大賢士
(興聖寺写本注)				賢士	
【興聖寺写本】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能脩／諸行	如毘陀婆羅	等十六 人
【興聖寺刊本】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能脩行大乘	如毘陀婆羅	等十六 賢士
【科註法華論】	三者 諸菩薩	神通自在	隨時示現能 行衆行	如毘陀婆羅	等十六 賢士
【叡山版】	三者 謂諸菩薩	以神通自在	隨時示現能脩行衆行	如毘陀婆羅菩薩	等十六 賢士
【正保三年版】	三者 諸菩薩	以神通自在	隨時示現能脩行衆行	如毘陀婆羅菩薩	等十六 賢士
【論疏補入本】	三者 謂諸菩薩	神通自在	力隨時示現能脩行衆行	如毘陀婆羅菩薩	等十六 賢士
【咸潤校讎本】	者 諸	在 隨	能 行大乘	菩薩	

【智全会入本】	三者	諸菩薩以神通自在力隨時示現能修行衆行	如毘陀婆羅菩薩等十六	賢士
【日藏会入本】	三者	諸菩薩以神通自在力隨時示現能修行衆行	如毘陀婆羅菩薩等十六	賢士
【論記所引】	論三者	諸菩薩下：		
	初諸菩薩下通舉		二如毘陀下別示：	
	言隨時者：			
	示現等者：			
	自能修行六度四等：			
	大乘行法通四如前			
	二如毘陀下：			
	即毘陀			
	等			
	跋陀婆羅者：			
	十六			人者
【敦煌摩提記】	三者	諸菩薩	隨時示現能脩行／乘	如毘陀婆羅
【房山摩提記】	三者	諸菩薩	隨時示現能修行大乘	如毘陀婆羅
【初離摩提記】	三者	諸菩薩	隨時示現能修行大乘	如毘陀婆羅
【福州摩提記】	三者	謂諸菩薩	以神通自在力隨時示現能修行大乘	如毘陀婆羅菩薩等十六
【房山流支記】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【七寺二卷本】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【金剛寺本】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【聖語藏丙本】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【再離留支記】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【福州留支記】	三者	謂諸菩薩	神通自在	如毘陀婆羅菩薩等十六
【論疏所引】	菩薩		定脩 大行：	
	菩薩		雖大行：	
	如		十六	賢士：

【玄賛所引】 三 菩薩以神通 力隨時示現能修行大乘 如跋陀婆羅 等十六 人

【述文賛所引】 菩薩 修 大行求覺利有情以薩埵爲目

又以神通 力隨時示現能修行大乘 如跋陀婆羅 等十六 人

【論述記所引】 三者謂諸菩薩 神通自在 隨時示現能修行大乘 如跋陀婆羅 等十六 賢士

【開示抄所引】 三者 諸菩薩 神通自在 力隨時示現能修行衆行 如跋陀婆羅 等十六 賢士

用例(2)では、真福寺本は聖語藏甲本と一致している。また、七寺一卷本の「十一」は「士」の誤写と考えられ、科註法華論の「堅」は「賢」の誤写と考えられるため、これらもほぼ一致している。子注法華論は、真福寺本に「人」を加えた形となっているが、「人」は摩提訳に見られる「十六人」の「人」からの影響と考えられる。一見すると、真福寺本の方が子注法華論よりも古い形を留めているようにも思われるが、部分的な比較では断定できないため、今は当該箇所にも異同があることを指摘するに留める。

真福寺本には「能行衆行」とあり、「能行」の箇所が初雕摩提訳の「能行大乘」と一致している。これが房山摩提訳の場合には、「能修行大乘」となっており、「能修」の箇所は、興聖寺写本の「能脩諸行」に近い。勒那摩提訳・菩提留支訳二巻本の系統で「大乘」が用いられている箇所は、菩提留支訳一卷本の系統では「衆行」となっており特徴的である。用例(2)の箇所の初雕摩提訳のテキストに、仮に「神通自在」を加え、「大乘」を「衆行」に変更し、「人」を「賢士」に変更すると、真福寺本のテキストとなる。その内「神通自在」と「賢士」は、菩提留支訳二巻本からの影響と考えられるが、「衆行」は菩提留支訳一卷本独自の特徴となっている。「謂」「菩薩(異同箇所)」などを有する聖語藏乙本と叡山版は、真福寺本よりも更に菩提留支訳二巻本からの影響が看取され、そのうち江戸期成立の叡山版に至っては、十二世紀成立の福州摩提訳とも近似している。福州摩提訳に見られる「謂」「以神通自在力」「菩薩(異同箇所)」は、菩提留支訳二巻本からの影響と想定されるが、「以神通自在力」の「以」と「力」に関してはその由来が不明である。

叡山版は、正保三年版・論疏補入本と近似しており、金炳坤「二〇二〇」では、論疏補入本を江戸期成立の和刻本と同系統かその影響下にあるテキストと見ており¹⁷¹、正保三年版については、同「二〇二二」で【正保】は【寛永】を底本にして、複数の対校本(特定できないが、再摩・興刊との関係性は指摘できない)を用いて校勘した校訂テキストであるといえよう¹⁷²としている。興聖寺刊本・咸潤校讎本は、「神通自在」「大乘」

171 金炳坤「二〇二〇」二〇頁。【正保】は正保三年版を指す。
172 同上「二〇二二」四頁。

を有することから、菩提留支訳二巻本の流れを汲むテキストと想定される。

真福寺本・聖語藏甲本・興聖寺写本には校注が見られる。これらの校注の方針は定かではないが、真福寺本注墨の「謂」「大乘」は、菩提留支訳二巻本の特徴であり、聖語藏甲本注の「以」「并（『菩薩』）」は、福州摩提訳にも見られるものであり、興聖寺写本注の「賢士」は、菩提留支訳一巻本の特徴である。

論記所引には、「謂」と「以神通自在力」の箇所がなく、「十六人」とあることから、古形の勒那摩提訳と一致しており、「能修行」「大乘（行法）」の用例からすると房山摩提訳・敦煌摩提訳により近い。そのため円珍は『論記』撰述にあたって、古形の勒那摩提訳を見ていた可能性が高いであろう。

吉蔵の『論疏』では、当該箇所について、

二行成就下釋第二章也。就文又二。初總釋大小二衆。凡有四行。次別釋行體。四行凡有二。一對大小。二定不定。大小者聲聞定修小行。菩薩定修大行。次明定不定者。菩薩雖大行而能示無定無方之行。如十六賢士能示爲小乘四衆。即大包小故。大示小行也。次比丘出家聲聞定行者。畢定住出家威儀也。問。論何故舉十六大士。答。十六是在家菩薩。以對小乘出家明道俗明定不定也」。

と注釈しており、吉蔵は「大乘」でも「衆行」でもなく「大行」（「大乘行」の意味）の語を用いており、また「十六賢士」とも「十六大士」とも記している。勒那摩提訳の当該箇所は「十六人」であるため、同箇所の用例からは、『論疏』が勒那摩提訳を見ていないことが看取される。

基による玄賛所引・憬興（七世紀頃）による述文賛所引には、「以神通力」「修行大乘」「十六人」が共通して見られるため、『玄賛』『無量寿経連義述文賛』の依った『法華論』は同系統と考えられる。この内「以神通力」の用例は古形の勒那摩提訳にはなく、菩提留支訳二巻本の系統・菩提留支訳一巻本の系統とも一致しないが、福州摩提訳などの「以神通自在力」にはその影響が看取される。「修行大乘」は摩提・留支訳の特徴であり、「十六人」は摩提訳の特徴である。また述文賛所引には、論疏所引と同じく「大行」の用例が見られる。

論述記所引に見られる「神通自在」は留支訳・流支訳の影響、「謂」「修行大乘」は留支訳の影響、「婆羅等十六賢士」は流支訳の影響と考えられる。なお、続蔵本『論述記』の当該箇所につされた校注は、菩提留支訳二巻本の系統に依ったものと見られる。

貞慶の『開示抄』は、承元二年（一一〇八年）の成立で、『大正蔵』第五十六卷所収本（底本は薬師寺蔵写本）と旧版『仏全』第十九卷・第二十卷

所収本（底本は一七九四年書写本）がある¹⁷⁵。開示抄所引と菩提流支訳一卷本は近似しており、「力」の字がない仏全本では、真福寺本とほぼ一致している。そのため、『開示抄』では菩提流支訳一卷本の系統の『法華論』を参照していた可能性が高い。また『開示抄』では、当該箇所『玄賛』の文も忠実に引用している¹⁷⁵。

『論記』所引の『法華論』を、諸本対校の一資料として用いて検討した本項では、古形の勒那摩提訳に近似する『論記』所引の『法華論』の諸本中における位置をより把握することができた。また、近年見出された新出資料を含め、現在多種のものが存する『法華論』諸本の本文系統について、用例(1)・(2)の諸本対校によって概観した。『法華論』諸本の本文系統の全体的な検討・分析については別稿を期したいが、本論文の付録には、次節で述べる内容とも関連する、『論記』所引の『法華論』を中心とした『法華論』諸本対校を提示しているので、併せて参照されたい。

第二節 『法華論記』所引の『法華論』について

第一項 本文系統をめぐる従来の両説

『論記』では、主に「論○○者」や「論○○已下」などの形で、『法華論』の本文を逐語的に引用し随文解釈している。『論記』には、どの『法華論』テキストに依って本書を撰述したのかについての記述がなく、円珍が『論記』撰述の際に用いていた『法華論』テキストについては、これまで定説がなかった。前川健一「一九九五」や金炳坤「二〇二〇C」では、『論記』が摩提訳を底本にしていた可能性があることを指摘しているが、未だ詳しい検証は行われていない。

本節ではこれまで網羅的にはなされていなかった、『論記』所引の『法華論』テキストについて言及している先行研究を総括した上で、近年の『法華論』の文献学的研究の成果を踏まえ、日本古写経本などを含む『法華論』諸本との比較によって、『論記』所引の『法華論』テキストの属性について検討する。

『論記』に関する先行研究を時系列で追うと、円珍が『論記』撰述の際に用いた『法華論』テキストが勒那摩提訳であったのか、菩提留支（＝

174 藤谷昌紀「二〇〇五」三一―三七頁参照。

175 『開示抄』二十八帖之内第二には、「玄賛一云…（中略）…三菩薩以神通力隨時示現。能修行大乘。如跋陀婆羅等十六人」（『大正藏』第五十六卷、二七一頁上二―五行目）とある。

菩提留支 訳であつたのかという問題について、研究者間で見解の異なっていることが確認できる。『智全』所収の『論記』の巻末に付されている識語には（以下、傍線は筆者による）、

此法華論ニハ。元魏中天竺三藏勒那摩提ト僧朗等ノ共譯本ト及ヒ後魏天竺三藏菩提留支ト曇林等ノ共譯本トノ二譯アリ。大師ガ此記ヲ述作シタマヘル。一二後魏譯ニ依リタマヘリ¹⁸⁰。

とあり、『論記』は後魏訳（＝菩提留支訳）に依つたとしている。それ以降、『日本大藏經編纂會會報』第二十三号¹⁸¹（一九一七年）、高瀬承厳「一九一八」¹⁸²、田中智学監修『本化聖典大辞林』¹⁸³（一九二〇年）、『日本大藏經仏書解題』¹⁸⁴（一九三二年）の四本の関連研究では、同じく『論記』は菩提留支訳を註解したものであるとしている。一方、日下大癡「一九二六（一九三六）」は、

今案するに、嘉祥は留支譯を釋し智證は摩提譯を釋する¹⁸⁵。

と述べており、吉藏『論疏』は菩提留支訳に依り、『論記』は勒那摩提訳に依つたとして、それまでの研究者とは見解を異にしている。しかしその後、山川智応「一九三四」¹⁸⁶、渡辺最昌「一九三五」¹⁸⁷、宇井伯壽監修『佛教辞典』¹⁸⁸（一九三八年。以下、宇井辞典）において、『論記』は菩提留支訳を註釈したものとされている。戦後になると、木内央「一九七三」が、

本書の用いるところは、行文よりみて菩提留支等訳の二卷本と考えられる。（中略）勒那摩提等訳の一本の表題と勘案して、即決しがたいところもある¹⁸⁹。

『智全』巻上、三三〇頁。

『日本大藏經編纂會會報』第二十三号、一一二頁。

高瀬承厳「一九一八」三頁。

田中智学監修『本化聖典大辞林』下巻、二八八八頁。

『日本大藏經仏書解題』巻上、一一八一―一九頁。

日下大癡「一九三六」一九三頁。初出は日下大癡「一九二六」。

山川智応「一九三四」一二五頁。

渡辺最昌「一九三五」九二頁。

宇井伯壽監修『佛教辞典』九七五頁。

木内央「一九七三」一四二頁。

と述べており、木内氏は『論記』所引の『法華論』テキストからすると、円珍が『論記』で用いた『法華論』は菩提留支等訳の二巻本と考えられるが、勒那摩提訳の可能性が無いとも言えないとしている。また、浅井円道「一九七三」¹⁸⁶、高崎直道「一九七七」¹⁸⁷、池田魯参「一九七八」¹⁸⁸、多田孝正「一九八六」¹⁸⁹、苦米地誠一「一九八八」¹⁹⁰においても、『論記』は菩提留支訳に対する注釈であるとする。河村孝照「一九八九」では、日下大癡「一九二六（一九三六）」、智全本の巻末の識語、宇井辞典、などの異なる説があることを紹介している¹⁹¹。一方、前川健一「一九九五」は、

本書は世親の『法華論』（勒那摩提訳）を天台宗の立場から注釈したもので、円珍在唐中の著作と一般に考えられている。『論記』がどちらを注釈したものであるのかは従来定説がなかった。『論記』中に引用された『法華論』本文を検討すると、勒那摩提訳とりわけ敦煌本（S.2504）によく一致する¹⁹²。

と述べており、先に挙げた関連研究の中の言及に比して、最も踏み込んだ見解を示しており、また、『論記』が勒那摩提訳を注釈したものであるという立場を取るのには、ほとんど日下大癡「一九二六（一九三六）」以来のことである。とりわけ『論記』所引の『法華論』が、敦煌本（S.2504）の勒那摩提訳によく一致するという具体的な指摘は注目に値する。さらに、前川健一「二〇〇二」では、

『法華論』には、勒那摩提訳と菩提留支訳があるが、『法華論記』に引用されている本文は勒那摩提訳に近い。しかし、部分的には合致しない点もあり、『法華論』本文そのものについて検討が必要ではないかと思われる¹⁹³。

と新たに指摘し、『法華論』の本文についての検討が必要であろうという問題提起がなされている。

また、『論記』所引の『法華論』についてではないが、関連する指摘として奥野光賢「二〇〇二」は、

186 浅井円道「一九七三」三九一頁。
187 高崎直道「一九七七」三四四―三四五頁。
188 池田魯参「一九七八」九二頁。
189 多田孝正「一九八六」四八三頁。
190 苦米地誠一「一九八八」一五頁。
191 河村孝照「一九八九」一頁。及び二二頁・注（1）。
192 前川健一「一九九五」八九頁。及び一〇〇頁・注（1）。
193 同上「二〇〇二」二二頁。

円珍は『授決集』において、「一卷法華論云」としているから、その依用が勒那摩提訳であることは明らかである¹⁹⁴⁾。

と述べており、円珍撰『授決集』所引の『法華論』が、勒那摩提訳であると断定している。

最近の関連研究では、金炳坤「二〇二〇C」が、

検討の余地はあるものの、『論記』は摩提訳を底本にしていた可能性がある。そうならば『論記』は、入蔵以前の摩提訳の古形を伝えることになるであろう¹⁹⁵⁾。

と述べており、「摩提訳を底本にしていた可能性がある」という金氏の立場は、日下氏や前川氏の立場に近い。

第二項 円珍撰述部から抽出した『法華論』

承応二年本にはなく、大正時代刊行の現行本『智全』『日蔵』所収の『論記』から会入された『法華論』は、九世紀中葉の『論記』撰述時に円珍が見た『法華論』とは、直接的には何ら関係がない。円珍が『論記』撰述時に見た『法華論』の本文系統を探るためには、先ず円珍が『論記』で『法華論』を引用している部分を抽出する必要がある、その抽出されたテキストを、現在多くの種類がある『法華論』諸本と比較対校すること、『論記』所引本の本文の傾向が見えてくるであろう。従来の研究では、このような作業・検討が網羅的には行われていなかったが、本論文ではこれを網羅的に行い、『論記』所引の『法華論』の本文系統について全体的な把握を試みる。

はじめに『論記』の本文構成について述べると、『論記』の冒頭には、或る種類の『法華論』テキストによってはその冒頭に見られる、帰敬頌¹⁹⁶⁾と帰命頌¹⁹⁷⁾に対する注釈がなく、この点これらを注釈している古蔵の『論疏』とは性格を異にしている。

また、金炳坤「二〇二〇C」では「自此已下示現所説法因果相應知」の一文の有無とこれが置かれる位置によって諸本を五種(㉑㉒㉓㉔㉕)に分けているが¹⁹⁸⁾、この分類法に従って該当箇所を確認すると、『論記』巻第四には、

194 奥野光賢「二〇二二」二五六頁・注(7)。

195 金炳坤「二〇二〇C」三五二頁。

196 菩提留支訳の帰敬頌は、『大正蔵』第二十六卷一頁上八行目から一四行目にある。また、勒那摩提訳の宋本・元本・明本・宮内庁書陵部蔵本にも帰敬頌がある。

197 「経曰帰命一切諸仏菩薩」の一文のこと。帰命頌は、現行の『大正蔵』第二十六卷所収の『法華論』両訳(校本を含む)には見られない。

198 金炳坤「二〇二〇C」二五二―二五三頁には、諸本における「自此…應知」の有無と配置によって分けられる五種類について、以下のようにまとめている。

釋方便品（中略）論曰已下。論師解釋。釋中有二。初略示所說義。自後廣釋經文。論示現所說法因果相者。准大師釋略有兩義。一當品釋。二跨節釋。（中略）故云自此已下示現所說法因果相應知。自此已下。簡指正宗¹⁹⁹。

とあり、「自此已下示現所說法因果相應知」の一文が序品になく、方便品にある。よって『論記』所引の『法華論』は、①流支訳の古形、或いは②摩提訳の系統に分類される²⁰⁰。

さらに『論記』の本文から『法華論』引用部分を抽出して『法華論』諸本と比較すると、『論記』所引の『法華論』の特徴が浮き彫りとなる。先に本節において以下に示す用例は、『論記』巻第一本のなかの一部分を見たものに過ぎないが、『論記』からの『法華論』抽出例として幾つかを示すと、以下の通りである²⁰¹。『法華論』からの引用と見られる箇所には傍線を付した。また、塗りつぶしも筆者による。

【用例①】 論二行成就者。略舉三乘所修之行「顯其尊貴」²⁰²。

右の用例①では、「二行成就」の引文が、科註法華論、叡山版、智全会入本、日藏会入本などと一致しており、興聖寺写本の注記から復元されるテキストも一致している。また、「二者行」となっている真福寺本・子注法華論も近似している²⁰³。この用例①と各種勒那摩提訳等との差異については、次節で後述する。

【用例②】 示現等者。自能修二行六度四等「以利二益他」。如下不起二滅定「現中諸威儀等上」。大乘行法通レ四如レ前。（中略）十六人者。略舉二同類」。下經文曰二跋陀

①流支訳の古形…序品になく、方便品にある。

②摩提訳 …序品になく、方便品にある。

③摩提訳の別本…序品にあり、方便品にもある。

④留支訳の別本…序品にあり、方便品になし。

⑤留支訳 …序品にあり、方便品になし。

『智全』巻上、一一八頁下—一一九頁上。

金炳坤「二〇二〇」二五一頁。

『法華論』諸本に関しては、金炳坤「二〇二〇」、拙稿「二〇二二」を参照。

『智全』巻上、六頁上。

本論文付録一四一—一四二頁、校合②一六三頁。

婆羅等五百菩薩^{204c}。今略舉耳^{204c}。

右の用例②では、引用部分の内「十六人」の引文が、興聖寺写本、房山石經本・敦煌本・大正藏本・福州版の勒那摩提訳と一致している^{205c}。

【用例③】 論四者出家下。簡明^{206c}小儀。出家人者。其義多種。六蟲九猴非^{206c}眞出家。然此文中和約^{206c}聲聞^{206c}。

右の用例③では、引用部分の内「出家人」の引文が、房山石經本・敦煌本・大正藏本の勒那摩提訳と一致している^{207c}。

【用例④】 後示^{208c}現菩薩功德成就^{208c}兩段各^{208c}。初總標。後別釋。初皆是下。總標^{208c}聲聞功德^{208c}。次皆不退轉下。總標^{208c}菩薩功德^{208c}。阿羅漢下。別釋^{208c}小乘功德成就^{208c}。彼菩薩下。別釋^{208c}大乘功德成就^{208c}。兩段不同。今標^{208c}小乘功德^{208c}中。(中略)上來釋^{208c}示現聲聞功德成就中初標章^{208c}訖。論皆不退轉下。次標^{208c}菩薩功德成就^{208c}。至^{208c}下悉^{208c}之^{208c}。

右の用例④では、引用部分の内「皆不退転」の引文が、興聖寺写本、房山石經本・敦煌本・大正藏本・福州版の勒那摩提訳と一致している^{209c}。

【用例⑤】 論阿羅漢功德下。別釋^{210c}小乘功德成就^{210c}。於^{210c}中有^{210c}四。初阿羅漢功德成就者。標章引起。次彼十六句下。標^{210c}三種門^{210c}。次何等三門下。徵^{210c}列三門^{210c}並如^{210c}文^{210c}。

右の用例⑤では、引用部分の内「何等三門」の引文が、真福寺本、子注法華論、論述記所引、日藏会入本、房山石經本・大正藏本の勒那摩提訳、興聖寺刊本、大正藏本の菩提留支訳などと一致している^{211c}。なお当該箇所では、敦煌本の勒那摩提訳が「何等三種」となっており、興聖寺写本、福州版の勒那摩提訳が「何等三種門」となっている。

これらの用例のように、『論記』から抽出した『法華論』を以て、現行本やその他の諸本と対校してみると、『論記』所引の『法華論』は、大抵の場合は古形の勒那摩提訳に近似しているが、それとは少しく異なる特徴も備えたテキストであることが窺われてくる。その古形の勒那摩提

同上八頁上。

本論文付録一四二—一四三頁、校合②一六三—一六四頁。

同上九頁上。

本論文付録一四三—一四四頁、校合②一六四—一六五頁。

同上九頁下—一〇頁下。

本論文付録一四四—一四五頁・一六二—一六三頁、校合②一六五—一六六頁・一七九—一八〇頁。

同上二〇頁下。

本論文付録一四五—一四六頁、校合②一六六頁。

訳とは少しく異なる要素についても含め、更に詳しくは次節で論じる。

第三節 円珍所引『法華論』を中心とした諸本対校

本論文では、研究者の間で長年未解決であった、円珍が『論記』を執筆する際に依った『法華論』が具体的にどのような本であったのか、という問題を解決するため、『論記』全十巻を対象として、円珍の引用した『法華論』を網羅的に抽出した上で、現存する『法華論』諸本との対校を実施した。本諸本対校は、本論文の付録『法華論』諸本対校―円珍『法華論記』十巻所引の『法華論』を中心として―（二二九―四〇八頁）として後半に掲載しているので、本節で論じる内容と併せて参照されたい。

先に言及したように、『論記』所引の『法華論』について、前川健一「一九九五」では勒那摩提訳のうち特に敦煌本 (S.265) によく一致する、同「二〇〇二」では勒那摩提訳とは部分的に一致しない、という踏み込んだ指摘がなされていたが、その後、どのように一致しているのか、いなのか、についてのより具体的な言及は前川氏からなされていない。今回、筆者が実施した諸本対校では、現行本としてよく参照される『大正藏』第二十六巻所収の勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷と、前川氏が指摘する敦煌本勒那摩提訳のほか、これまで着目されていないが、た房山雲居寺石經本（遼金刻經）の勒那摩提訳、また江南系統の嚆矢たる福州開元寺版の勒那摩提訳なども用いた。また、勒那摩提訳ではないが、新出の日本古写經本（真福寺本・興聖寺写本）の菩提流支訳一卷本、菩提留支訳二巻本の興聖寺刊本、金炳坤氏の諸本校合では用いられたことがなかった『日藏』所収の『論記』に会入されている『法華論』（日藏会入本）、金炳坤「二〇二一A」・「二〇二一B」・「二〇二一C」では対象資料から外されているが筆者が見た所、依然としてその資料的意義が認められる日真『科註妙法蓮華經論』所引の『法華論』（科註法華論）なども用いた。

本論文の付録や本節で実施した諸本対校は、金炳坤氏による校合②などの研究成果に倣ったものであるが、その対象資料や対象範囲などを始めとする諸方針は、金炳坤氏と筆者とでは中程度に異なっている。詳しくは本論文付録の凡例（二二四―二二八頁）を参照されたい。

次に具体的な用例を示しながら、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討する。また、その他の『法華論』諸本・諸テキスト（科註法華論など）の本文系統についても特筆すべきことがあれば言及する。

※テキストの基本的な表記方法は、論文付録の凡例に準ずる。使用テキストの略号については、本論文の文献表（四〇九―四二一頁）を参照されたい。諸資料の配列は、付録の諸本対校のものから変えており、資料の属性によって区分し、区分毎に内容に基づく名称を付した。論記所引は各抽出箇所から復元されるテキストを示した。諸本の誤脱・衍字に関する行間・欄外などに記された校注・指示は、テキストに適宜反映し（敢えて反映しない場合もある）、当該箇所には薄い塗りつぶしを施した。

用例①（本論文付録三八二―三八三頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】注釈なし

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】なし

【房山摩提訳】なし

【初離摩提訳】なし

【再離摩提訳】なし

【大正摩提訳】なし

江南系統勒那摩提訳（一巻本²¹²）

【福州摩提訳】示現有八 一者塔二者量三者異四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

日本古写経本菩提流支訳（二巻本）

【真福寺本】示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

【興聖寺写本】示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶塔八者同一塔坐

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）

【興聖寺刊本】示現有八 一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

日真所引本（一五〇一年）

【科註法華論】なし

江戸期刊行本菩提流支訳（一巻本）

【叡山版】示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

【智全会入本】示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

【日藏会入本】示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

現行本菩提留支訳（二巻本）

【大正留支訳】示現有八 一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

用例①は、『法華論』で十無上を説く段の「五者示現清淨國土無上故示現多寶如來塔」²¹³の「示現」について、八つを列挙している箇所であるが、一見して分かるように、『論記』においては、菩提流支訳一巻本の系統・菩提留支訳二巻本の系統・江南系統の勒那摩提訳に見られる当該箇所

²¹² 江南系統大藏経本の勒那摩提訳は、福州開元寺版（宮内庁書陵部蔵本）と思溪蔵（宋本）では一巻本になっており、普寧蔵（元本）と嘉興蔵（明本）では二巻本になっている。

²¹³ 現行本の勒那摩提訳では、『大正蔵』第二十六卷、一八頁中二八―二九行目。

所について言及していない。それは円珍が、房山石経本・敦煌本・高麗版の古形の勒那摩提訳の系統を用いていたからであろう。

なお科註法華論について言及すると、用例①からは日真が室町時代の当時見ていた『法華論』が、古形の勒那摩提訳の要素を含むものであったことが看取される。

先述したが、用例①からも明らかなように、福州版の勒那摩提訳を始めとする江南系統の勒那摩提訳は全体的な特徴から、房山石経本・敦煌本・高麗版の古形の勒那摩提訳に比して、古い形を留めておらず、菩提留支訳二巻本の系統からの影響も受けた両訳混合的なテキストであることが看取される。かかる状況から、本論文では房山石経本・敦煌本・高麗版の勒那摩提訳を「古形の勒那摩提訳」²¹⁵⁾と称しており、江南系統大蔵経本（宋本・元本・明本・宮内庁書陵部蔵本）の勒那摩提訳とは区別している²¹⁶⁾。

用例②（本論文付録三九九―四〇〇頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中華）

【論記所引】 注釈なし

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】 なし

【房山摩提訳】 なし

【初雕摩提訳】 大正摩提訳と一致

【再雕摩提訳】 大正摩提訳と一致

【大正摩提訳】 修行力 者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

江南系統勒那摩提訳（二巻本）

²¹⁴ 金炳坤「二〇二〇」には「在唐中の円珍が『論記』の構想を練り始めたのは（註5）、彼が開元寺で摩提訳を入手した翌年のこと（註6）、この摩提訳を請求した彼は国内において本書を完成させているが、そこには帰敬頌に対する釈がなく、直ちに論に引かれる経の釈に入るため、もちろんこれには検討の余地はあるものの、『論記』は摩提訳を底本にしていた可能性がある。そうなれば『論記』は、入蔵以前の摩提訳の古形を伝えることになるであろう」（三五二頁）とあり、註5に「尊通（一四二七―一五一六年）撰『智証大師年譜』『齋衡元年甲戌（大中八（八五四）年）：七月至越州開元寺。勸法華論記」（二五〇頁）とあり、註6に「円珍撰（八五三年）『開元寺求得経疏記等目錄』に『妙法蓮華経論一卷（勒那訳）』と、同（八五九年）『智証大師請求目錄』に『妙法蓮華経一卷（勒那摩提）』とあるように、円珍は開元寺で入手した摩提訳を日本に請求している」（二五〇頁）とある。

石田尚豊「一九八九」（九八三―九八六頁）によると、『智証大師請求目錄』（『入唐求法総目錄』）は、円珍が天台山国清寺に滞在していた時に作成され、大中十二年（八五八年）の五月十五日に完成したという。現在園城寺と聖護院に伝存し、聖護院本は、天安三年（八五九年）に、円珍が入唐の強力な援護者であった太政大臣藤原良房に、帰国後呈上したものであるという。

²¹⁵ 金炳坤「二〇二〇B」には「摩提訳の別本とは、帰敬偈を有する二巻本のこと、このテキストは十二世紀に福州で開版された大蔵経を皮切りに、その後の多くの大蔵経において収録されていることが確認できるものである」（三六八頁）とある。

【福州摩提訳】修力無上者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力
日本古写經本菩提流支訳（二巻本）

【真福寺本】脩行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護力

【興聖寺写本】修行力

者五門示現一者説力二者行／／力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）

【興聖寺刊本】修行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

日真所引本（一五〇一年）

【科註法華論】修行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）

【叡山版】脩行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

【智全会入本】修行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【日藏会入本】修行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

現行本菩提留支訳（二巻本）

【大正留支訳】修行力

者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

用例②では、古形の勒那摩提訳の内、高麗版の勒那摩提訳だけ異なっており、『論記』が当該箇所について言及していないことから、『論記』所引の『法華論』は、房山石経本・敦煌本の勒那摩提訳により近いと言える。

なお科註法華論には当該箇所があり、先の用例①を鑑みると日真は高麗版の勒那摩提訳を参照していた可能性がある。但し科註法華論は冒頭に「經曰歸命一切諸佛菩薩」の歸命頌を有するなど、菩提流支訳一卷本の特徴も見られる。

用例③（本論文付録四〇二頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】護衆生

諸難者觀世音

品

陀羅尼品示現

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】護衆生

諸難力者觀世音

品

陀羅尼品示現

【房山摩提訳】護衆生

諸難者觀世音

品

陀羅尼品示現

【初雕摩提訳】大正摩提訳と一致。

【再雕摩提訳】大正摩提訳と一致。

【大正摩提訳】護衆生

難者觀世音

品

陀羅尼品示現

江南系統勒那摩提訳（二巻本）

【福州摩提訳】護衆生故護衆生諸難力者觀世音菩薩品

陀羅尼品示現

日本古写経本菩提流支訳（二巻本）			
【真福寺本】護衆生	諸難力者觀世音	菩薩品	陀羅尼品示現
【興聖寺写本】護衆生	諸難力者觀世音	品示現教化衆生故護衆生諸難力品	陀羅尼品示現
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）			
【興聖寺刊本】護衆生	諸難力者觀世音	菩薩品	陀羅尼品示現
日真所引本（一五〇一年）			
【科註法華論】護衆生	難	觀世音	品
江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）			
【叡山版】護衆生	諸難力者觀世音	菩薩品	陀羅尼品示現
活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）			
【智全会入本】護衆生	諸難力者觀世音	菩薩品	陀羅尼品示現
【日藏会入本】護衆生	諸難力者觀世音	菩薩品	陀羅尼品示現
現行本菩提留支訳（二巻本）			
【大正留支訳】護衆生	諸難力者觀世自在菩薩品		陀羅尼品示現

用例③では、『論記』所引の『法華論』は、房山石経本の勒那摩提訳とよく一致しており、敦煌本とは「力」字の有無で異なる。先の用例②と同じく、『論記』所引の『法華論』は、ここでも高麗版の勒那摩提訳と一致しないが、科註法華論の「難觀世音品」の箇所は、ここでも高麗版の勒那摩提訳とよく一致している。

なお叡山版の当該箇所は「諸難力者觀世音菩薩品」となっており、ここでは科註法華論が叡山版の影響下にないことは明らかである。

用例④（本論文付録一三七―一三八頁、校合②一六〇―一六一頁）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】	序分	示現二種勝義成就	何等	一者	一切諸法門中最勝
【授決集所引】	又序分成就者此法門	示現二種義成就	何等爲二	一者	一切諸法門中最勝
古形の勒那摩提訳（二巻本）					

故²¹⁶

『授決集』卷下、教證二道決二十九には、

法華論云。又序分成就者。此法門示現二種義成就。何等爲二。一者一切諸法門中最勝故。二者示現自在功德成就故。如王舍城勝餘一切城舍故。耆闍掘山勝餘諸山故。顯此勝故。如經佛住王舍城耆闍掘山故。諸佛智慧甚深無量者。爲諸大衆生尊重心。畢竟欲聞如來說故。甚深者。顯示二種甚深義。應知何等爲二。一者證甚深。謂諸佛智慧甚深無量故。二者阿含甚深。謂智慧門故（證有五。阿含八如文）（『大正藏』第七十四卷、三〇〇頁下一六一―二五行目）

とある。

【敦煌摩提訳】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者示現一切諸法門中寂勝	故
【房山摩提訳】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	何等爲二者者示現一切諸法門中最勝	故
【大正摩提訳】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	何等爲二者者示現一切諸法門中最勝	成就故
江南系統勒那摩提訳（二卷本）			
【福州摩提訳】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就此義應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就故		
日本古写經本菩提流支訳（二卷本）			
【真福寺本】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就	
【興聖寺写本】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就故	
円弘所引菩提流支訳（二卷本系統、八世紀初頭以前）			
【子注法華論】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中寂勝義成就故	
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二卷本）			
【興聖寺刊本】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就此義應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就		
日真所引本（二五〇一年）			
【科註法華論】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中寂勝義成就故	
江戸期刊行本菩提流支訳（二卷本）			
【觀山版】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中寂勝義成就故	
活字本に会入の菩提流支訳（二卷本系統）			
【智全会入本】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就故	
【日藏会入本】	又序分成就者此法門中示現二種勝義成就	應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就故	
現行本菩提留支訳（二卷本）			
【大正留支訳】	序分成就者此法門中示現二種勝義成就此義應知何等爲二者者示現一切諸法門中最勝義成就		

用例④では、『論記』が当該箇所『法華論』の全文を引いていないため、一部抽出できない箇所もあるが、「勝」を有する点では敦煌本と一致しており、「中」「應知」「示現」がそれぞれ見られない点では、房山石経本の勒那摩提訳と一致している。但し、当該箇所における『論記』での引用は、「論文序分下」「論示現二種勝義成就者」「何等下」「論一者已下」「言一切諸法門中最勝者」（傍線は『法華論』の文で筆者による、以下同）の形で細かく区切られているため、先の「中」「應知」「示現」が省略されている可能性もある。

しかしながら、円珍撰『授決集』巻下の「教證二道決二十九」²¹⁷で引用されている当該箇所の『法華論』は、房山石経本の勒那摩提訳とのみ完全に一致しており注目される。

217 『大正蔵』第七十四卷、三〇〇頁下四行目―三〇一頁上二〇行目。

なお科註法華論は、ここでは菩提流支訳一卷本の系統と近似している。

用例⑤（本論文付録二五一頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中葉）			
【論記所引】智慧門者謂説	阿含義甚深者		八種
古形の勒那摩提訳（二卷本）			
【敦煌摩提訳】説	阿含 甚深者示現有		八種
【房山摩提訳】智慧門者謂説	阿含義甚深者示現有		八種
【大正摩提訳】智慧門者謂説	阿含義甚深者示現有		八種
江南系統勒那摩提訳（二卷本）			
【福州摩提訳】智慧門者謂説	阿含義甚深者示現有		八種
日本古写経本菩提流支訳（二卷本）			
【真福寺本】説言阿含	甚深者示現有		八種
【興聖寺写本】説阿含	甚深者示現有	八種	
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二卷本）	阿含 甚深者		八種示現
日真所引本（二五〇一年）			
【科註法華論】言阿含	甚深者示現有		八種
江戸期刊行本菩提流支訳（二卷本）			
【叡山版】説阿含	甚深者示現有		八種
活字本に会入の菩提流支訳（二卷本系統）			
【智全会入本】説阿含	甚深者示現有		八種
【日藏会入本】説阿含	甚深者示現有		八種
現行本菩提留支訳（二卷本）			
【大正留支訳】阿含 甚深者			八種示現

用例⑤では、『論記』所引の『法華論』は、「論智慧門者謂説阿含義下」「甚深者下」「八種是別」の形で引用されているが、「智慧門者謂説阿含義」の一文が古形の勒那摩提訳の内、房山石経本・大正蔵本の勒那摩提訳と一致しており、「説阿含」となっている敦煌本の勒那摩提訳とは異なっている。また、ここでは福州版の勒那摩提訳も『論記』所引の『法華論』と一致している。ここで敦煌本の勒那摩提訳のように「説阿含」となっているのは、興聖寺写本・叡山版・智全会入本・日藏会入本の菩提流支訳一卷本の系統である。

前川健一「二九九五」には「敦煌本の勒那摩提訳とよく一致する」とあり、その後の同「二〇〇二」には「勒那摩提訳に近いが部分的には合致しな

い」とあるが、用例⑤の箇所については、『論記』所引の『法華論』は、敦煌本以外の勒那摩提訳とよく一致する。

用例⑥（本論文付録四〇―四〇二頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】 行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】 行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生

【房山摩提訳】 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生

【大正摩提訳】 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生

江南系統勒那摩提訳（二巻本）

【福州摩提訳】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

日本古写經本菩提流支訳（二巻本）

【真福寺本】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

【興聖寺写本】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）

【興聖寺刊本】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

日真所引本（一五〇一年）

【科註法華論】 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生

江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）

【叡山版】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

【智全会入本】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

【日藏会入本】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

現行本菩提留支訳（二巻本）

【大正留支訳】 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

用例⑥では、『論記』所引の『法華論』は、「行苦行力」となっている敦煌本の勒那摩提訳とのみ一致しており、房山石経本・大正蔵本の勒那摩提訳は、科註法華論と一致している。先の用例③④⑤とは異なり、ここでは円珍所引本が房山石経本の勒那摩提訳とは異同がある。

用例⑦（本論文付録二六五―二六六頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】 言著 者彼處處著或著 界

著 界

古形の勒那摩提訳（一巻本）

【敦煌摩提訳】諸著	者彼處と著或著	界或著諸地或著	分或著	乘故著	界者	著欲色无色界故
【房山摩提訳】諸著	者彼處處著或著	界或著諸地或著	分或著	乘故著	界者	著欲色無色界故
【大正摩提訳】諸著	者彼處處著或著	界或著諸地或著	分或著	乘故著	界者	著欲色無色界故
江南系統勒那摩提訳（一巻本）						
【福州摩提訳】言著	者彼處處著或著	界或著諸地或著	分或著	乘故著	界者	著欲色無色界故
日本古写經本菩提流支訳（二巻本）						
【真福寺本】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	界者	著欲色無色界故
【興聖寺写本】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	界者	著欲色无色／故
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）						
【興聖寺刊本】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	界者	著欲色無色界故
日真所引本（一五〇一年）						
【科註法華論】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	界者	著欲色无色界故
江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）						
【觀山版】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	諸界者	著欲色無色界故
活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）						
【智全会入本】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	諸界者	著欲色無色界故
【日藏会入本】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘故著	諸果者	著欲色無色界故
現行本菩提留支訳（二巻本）						
【大正留支訳】諸著	處者彼處處著或著	諸界或著諸地或著	諸分或著	諸乘	著諸界者	謂著欲色無色界故

用例⑦では、『論記』所引の『法華論』は、当該箇所『法華論』の全文を引用していないが、引用されている箇所は、「言著者」の用例から古形の勒那摩提訳よりも福州版の勒那摩提訳とよく一致している。

特に先の用例①では、菩提留支訳二巻本のものであった福州版の勒那摩提訳であるが、ここでの福州版は、古形の勒那摩提訳の形をよく留めている上、「論言著者」「言著者彼處處著者」と引用されている『論記』所引の『法華論』と唯一、一致していることは注目される。

この例と先に示した用例から導かれることを述べると、『論記』に関する研究において参照されるべき勒那摩提訳は、房山石經本・敦煌本を基本として、それに次ぐものが高麗版であり、また、一部に古形を伝える福州版を始めとした江南系統本になるかと思われる。

用例⑧（本論文付録一四一一四二頁、校合②一六三頁）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】二 行成就

一者 諸聲聞修小乘行二者 諸菩薩修大乘行

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
【房山摩提訳】	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
【大正摩提訳】	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
江南系統勒那摩提訳（二巻本）	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
【福州摩提訳】	行成就者有四種一者	謂諸聲聞脩小乘行二者	謂諸菩薩脩大乘行	
日本古写經本菩提流支訳（二巻本）	【真福寺本】二者	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行
【興聖寺写本】	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
円弘所引菩提流支訳（二巻本系統、八世紀初頭以前）	【子注法華論】二者	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）	【興聖寺刊本】	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行
日真所引本（一五〇一年）	【科註法華論】二	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行
江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）	【叡山版】二	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	謂諸菩薩脩大乘行
活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）	【智全会入本】二	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行
【日藏会入本】二	行成就者有四種一者	諸聲聞脩小乘行二者	諸菩薩脩大乘行	
現行本菩提留支訳（二巻本）	【大正留支訳】	行成就者有四種一者	謂諸聲聞脩小乘行二者	謂諸菩薩脩大乘行
【大正留支訳】	行成就者有四種一者	謂諸聲聞脩小乘行二者	謂諸菩薩脩大乘行	

用例⑧は前節で言及した箇所であるが、ここで『論記』所引の『法華論』と近似しているのは、「二」の有無から勒那摩提訳ではなく、「二行成就」となっており「謂」がない科註法華論・智全会入本・日藏会入本のテキスト、即ち「二」を有する菩提流支訳一巻本の系統である。『論記』所引の『法華論』は、全体的には古形の勒那摩提訳に近似する傾向を示しているが、箇所々々によつては用例⑧のような場合もある。

『論記』所引の『法華論』が部分的には勒那摩提訳と一致しないことは、先述した前川氏の指摘する所であるが、尊通『年譜』に「天安二年戊寅。〔大中十二年〕師四十五歳。正月九日。在天台再勘法華論記。而修治未了」²¹⁸とあるように、円珍は『論記』を修治していたことが伝えられていることから、そのように修治を行った際に、勒那摩提訳以外の『法華論』を参照して、『法華論』引用部分も見直した可能性はないであろう。

218 『智全』巻下、一三八八頁下。

か。推測の域を出ないが、もしそのような見直しが行われていたとしたら、用例⑧から導かれる可能性として、円珍の依った勒那摩提訳以外の
もう一本は、菩提留支訳二巻本の系統ではなく、菩提流支訳一巻本の系統のテキストであった可能性がある。

用例⑨（本論文付録一六二―一六三頁、校合②一七九―一八〇頁）

円珍所引本（九世紀中葉）					
【論記所引】彼 菩薩	十三句功德	一門攝	應知	一者上支下支門	
古形の勒那摩提訳（二巻本）					
【敦煌摩提訳】彼諸菩薩	十三句功德	一門攝	應知	一者上支下支門	二者攝取事門
【房山摩提訳】彼諸菩薩	十三句功德	一門攝	應知	一者上支下支門	二者攝取事門
【大正摩提訳】彼諸菩薩	十三句功德	一門攝	應知	一者上支下支門	二者攝取事門
江南系統勒那摩提訳（一巻本）					
【福州摩提訳】得諸菩薩功德成就者彼十三句功德	一門攝	義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
日本古写經本菩提流支訳（二巻本）					
【真福寺本】彼諸菩薩功德成就者有十三句功德	一門攝	義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
【興聖寺写本】彼諸并功德成就者有十三句功德	二門	巧／示現應知何等二門故	一者上支下支門	二者攝取事門	
円弘所引菩提流支訳（一巻本系統、八世紀初頭以前）					
【子注法華論】菩薩功德成就者有十三句	二門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）					
【興聖寺刊本】菩薩功德成就者彼十三句	二門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
日真所引本（一五〇一年）					
【科註法華論】彼諸菩薩功德成就者有十三句	二門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）					
【叡山版】諸菩薩功德成就者有十三句功德	一門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）					
【智全会入本】諸菩薩功德成就者有十三句功德	一門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
【日藏会入本】彼 菩薩功德成就者有十三句功德	二門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	
現行本菩提留支訳（二巻本）					
【大正留支訳】菩薩功德成就者彼十三句	二門	攝義示現應知何等二門	一者上支下支門	二者攝取事門	

用例⑨では、『論記』所引の『法華論』は、古形の勒那摩提訳と近似している。

なお「彼菩薩」の箇所は、『論記』所引の『法華論』が日藏会入本とのみ一致しており、「諸菩薩」となっている智全会入本とは一致していない。日藏会入本の当該箇所には「彼菩薩」の「彼」の字の右傍に「イ諸」との異本注記があるため、日藏会入本と智全会入本とはその行文が

明らかに異なっている。本論文付録の諸本対校によっても分かるように、日藏会入本と智全会入本のテキストを全体的に比較してみると、それらが底本とした『法華論』テキストが全く同じものではなかったことが看取され、この点については先行研究でも未だ指摘されていなかったことであるため、新たに指摘しておきたい。

用例⑩（本論文付録二一八―二一九頁、校合②二三七―二三八頁）

円珍所引本（九世紀中葉）

【論記所引】

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

【房山摩提訳】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

【大正摩提訳】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

江南系統勒那摩提訳（二巻本）

【福州摩提訳】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

日本古写經本菩提流支訳（二巻本）

【真福寺本】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

【興聖寺写本】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

円弘所引菩提流支訳（二巻本系統、八世紀初頭以前）

【子注法華論】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）

【興聖寺刊本】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

日真所引本（一五〇一年）

【科註法華論】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）

【觀山版】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

【智全会入本】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

【日藏会入本】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

現行本菩提留支訳（二巻本）

【大正留支訳】五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠹七者欲不斷大法鼓八者欲說大法

此八句

何等 八種

用例⑩では、『論記』が当該箇所では『法華論』の一部分であるが、「何等八種」の引用例からは、『論記』所引が房山石經本・大正藏本の勒那摩提訳と近似していることが窺われ、当該箇所が「何者八種」となっている敦煌本との間には、「等」と「者」の異同がある。先の用例⑨でも指摘したように、用例⑩における「等」と「者」の異同からも、智全会入本と日藏会入本のテキストが異なっていることが分かる。智全会入本のように「等」となっているのは、論記所引・房山摩提訳・大正摩提訳・興聖寺写本・興聖寺刊本・科註法華論・大正留支訳であり、日藏会入本のように「者」となっているのは、敦煌摩提訳・福州摩提訳・真福寺本・子注法華論・叡山版である。当該箇所には、このような諸本間の異同があるため、テキスト系統判定の一材料となり得る。

用例⑪（本論文付録三八六頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中華）

【論記所引】 自此 下示現法力 修行力應知

古形の勒那摩提訳（二巻本）

【敦煌摩提訳】 自此以下示現法力 脩行／應知

【房山摩提訳】 自此以下示現法力 修行力應知

【大正摩提訳】 自此以下示現法力 修行力應知

江南系統勒那摩提訳（二巻本）

【福州摩提訳】 自此以下示現法力 修行力應知

日本古写經本菩提流支訳（二巻本）

【真福寺本】 自此以下示現法力 修行力應知

【興聖寺写本】 自此以下示現法力 修行力應知

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）

【興聖寺刊本】 自此以下示現法力 修行力應知

日真所引本（一五〇一年）

【科註法華論】 自此以下示現法力 修行力應知

江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）

【叡山版】 自此以下示現法力 修行力應知

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

【智全会入本】 自此以下示現法力 修行力應知

【日藏会入本】 自此以下示現法力 修行力應知

現行本菩提留支訳（二巻本）

【大正留支訳】 自此以下示現法力 修行力應知

用例⑪では、『論記』所引の『法華論』は、勒那摩提訳の中では、大正蔵本の勒那摩提訳よりも、房山石経本・敦煌本の勒那摩提訳に近似しており、福州版の勒那摩提訳も近似している。

現行本の勒那摩提訳・菩提留支訳では共に「持力」を有しているが、『論記』所引の『法華論』には「持力」がない。この例も含めて言えることは、『論記』に関する研究を行うにあたって参照される『法華論』テキストは、現行の大正蔵本にのみ限定されるべきではない。先に示した幾つかの用例から鑑みれば、そこで優先的に使用されるべき『法華論』テキストは、房山石経本・敦煌本の勒那摩提訳である。また、この二種の勒那摩提訳は、特に先の用例②を決定的な根拠として、高麗版の勒那摩提訳よりも更に古形の勒那摩提訳であろう。それから、用例⑦のように福州版の勒那摩提訳がテキスト中の一部分で古形を伝える場合があることや、用例⑧のように『論記』所引は、僅かに菩提留支訳一卷本の系統に近似する場合があることも頭の片隅に意識しておくべきである。

なお智全会入本と日蔵会入本は、用例⑨⑩と同様に、「持力」の有無によってここでも異同が確認される。

用例⑫（本論文付録三三五―三三六頁、校合②になし）

円珍所引本（九世紀中華）

【論記所引】恭敬者	生無量	德依如來教得解脱故	人無我	法無我	一切	平等故
古形の勒那摩提訳（二巻本）						
【敦煌摩提訳】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	人无我	法无我	一切	平等故
【房山摩提訳】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	人無我	法無我	一切	平等故
【大正摩提訳】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	人無我	法無我	一切	平等故
江南系統勒那摩提訳（二巻本）						
【福州摩提訳】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	以人無我	法無我	一切	諸佛法悉皆平等故
日本古写経本菩提留支訳（二巻本）						
【真福寺本】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	以人無我	法無我	一切	諸佛法悉平等故
【興聖寺写本】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	以人無我	乘法无我法无我	一切	諸佛法悉平等故
鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）						
【興聖寺刊本】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	證人無我	法無我	一切	諸佛法悉平等故
日真所引本（一五〇一年）						
【科註法華論】恭敬者	生無量	德依如來教得解脱故	人無我	法無我	一切	佛法平等故
江戸期刊行本菩提留支訳（二巻本）						
【叡山版】恭敬者	生無量	福德依如來教得解脱故	以人無我及法無我	法無我	一切	諸佛法悉平等故
活字本に会入の菩提留支訳（二巻本系統）						
【智全会入本】恭敬者	生無量	福德依如來得解脱故	以人無我及法無我	法無我	一切	諸佛法悉平等故

【日藏会入本】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我及法無我 一切諸 法悉 平等故
現行本菩提留支訳（二卷本）

【大正留支訳】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我及法無我 一切諸 法悉皆平等

用例⑫では、『論記』所引の『法華論』は、古形の勒那摩提訳に近似しており、また、先に示した用例中でも古形の勒那摩提訳の要素を有していた科註法華論とは「無量徳」の箇所も含めてほぼ一致している。当該箇所においても、科註法華論は明らかに叡山版の影響下にはない。

なお智全会入本には、諸本中にある「生」と「教」がなく、脱字と見られる。本論文付録の諸本対校の中でも触れているが、筆者が『論記』所引の『法華論』を網羅的に抽出する作業を行っている際に気付いたこととして、『智全』巻上所収の『論記』『日藏』第二十三卷所収の『論記』『科註』所引の『論記』の各テキストには、それぞれ異なる箇所脱字・衍字の問題がある。そのため、厳密に『論記』を読む場合には、現存する全ての『論記』テキストに目を通す必要があるように思われる。

本節では特徴的な十二例の用例を諸本対校の形で示し、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討した。『論記』所引の『法華論』は、基本的には、古形の勒那摩提訳の内、高麗版の勒那摩提訳よりも更に古形と言える房山石経本・敦煌本の勒那摩提訳に近似したテキストであったが、福州版にのみ伝わる古形の部分と一致する場合があることや、僅かに菩提留支訳一卷本の系統の要素も有していることなどが分かった。敦煌本の勒那摩提訳との一致や、諸勒那摩提訳との不一致に関する、前川健一「一九九五」の「敦煌本の勒那摩提訳によく一致する」と、それに次ぐ同「二〇〇二」の「勒那摩提訳に近いが、部分的には合致しない」という指摘については、本節での検討からは、後者の方がより適切な指摘であったと言える。

房山石経本の勒那摩提訳が『論記』所引の『法華論』と近似しており、また、『授決集』所引の『法華論』とも一致していることについては、今回筆者の実施した諸本対校によって初めて明らかとなった。さらに、現行本の『智全』『日藏』所収の『論記』に会入された『法華論』が、異なるテキストであることなども初めて指摘した。

小 結

本章では、「円珍の引用する『法華論』について」との章題のもと、第一節の第一項では、『法華論』の文献学的研究を始めたとして、ここ二十年ほどの関連研究を回顧し、第二項では『論記』所引の『法華論』テキストなどを含め、『法華論』諸本の本文系統について諸本対校によって検討した。第二節の第一項では、『論記』所引『法華論』の本文系統をめぐる従来の両説を回顧し、第二項では、円珍撰述部分から抽出される『法

『法華論』について、抽出例を示しながら、次節での詳細な検討の備えとした。第三節では、第一節・第二節の内容を受け、『論記』所引の『法華論』を中心に、私に選定した諸本との対校を実施し、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討した。本章で論じた内容は、本論文付録の『法華論』諸本対校―円珍『法華論記』十卷所引の『法華論』を中心として―に依拠している。

金天鶴「二〇二〇」および金炳坤「二〇二二」の研究成果を踏まえて展開した第一節第二項における増広版の諸本対校では、現在多くの種類がある『法華論』諸本の本文系統の傾向や、古形の勒那摩提訳に近似する『論記』所引の『法華論』の諸本中における位置などをより把握することができた。特に新出の日本古写経本『法華論』の菩提流支訳一卷本については、叡山版に比して古い形を留めており、また、テキストの全体が残っていない子注法華論に比して完本であるため、その資料的意義は極めて大きい。『法華論』諸本の本文系統についての全体的な検討・分析は別稿を期したいが、本論文付録の『法華論』諸本対校は、今後の『法華論』の文献学的研究に少なからず資するものと考えられる。

円珍が『論記』で引用する『法華論』に関しては、長年に亘って研究者の間で意見が分かれており、未解決の研究課題であったことを再確認した。あつたのかという問題については、長年に亘って研究者の間で意見が分かれており、未解決の研究課題であったことを再確認した。

帰敬頌と帰命頌を注釈していない『論記』は、吉蔵が『論疏』で用いた『法華論』とは異なるものであるが、『論記』の本文から抽出した『法華論』と完全に一致するテキストは、現存の諸本中には存しない。『論記』所引の『法華論』は、勒那摩提訳と一致する場合が多いが、箇所々々では菩提流支訳一卷本とのみ一致する場合なども確認される。九世紀中葉頃の成立で時代的にも古く、或る特徴を有する『論記』所引の『法華論』テキストを、『法華論』の文献学的研究における諸本対校の一資料として用いることの意義は大きいと思われる。

本研究で、『論記』全十巻から円珍が引用した『法華論』を網羅的に抽出し諸本対校した結果、全体的な傾向として『論記』所引の『法華論』は、「古形の勒那摩提訳」（房山石経本・敦煌本・高麗版）の内、高麗版の勒那摩提訳よりも房山石経本・敦煌本により近似した形のテキストであることが分かった。但し、敦煌本よりも房山石経本・高麗版に一致する場合や、房山石経本とのみ一致する場合や、局所的に福州版とのみ一致する場合などもあるため、前川健一「一九九五」の「敦煌本によく一致する」との指摘は部分的には認められるが、同「二〇〇二」の「勒那摩提訳に近いが、部分的には合致しない」という指摘の方がより適切である。本研究で全体を見た筆者としては、『論記』所引の『法華論』は、勒那摩提訳のうち高麗版よりも房山石経本や敦煌本に近いが、部分的には江南系統本や、また菩提流支訳一卷本に近い場合もある、と指摘しておきたい。『論記』所引の『法華論』が房山石経本の勒那摩提訳と近似していることや、房山石経本の勒那摩提訳が円珍撰『授決集』の「教證二道決二十九」に引用されている『法華論』とよく一致していることについては、本研究で新たに明らかとなった。

また、現行本の『智全』と『日蔵』の『論記』に会入された『法華論』は、注意深く見ると、箇所々々で行文や異本注記が異なることから、

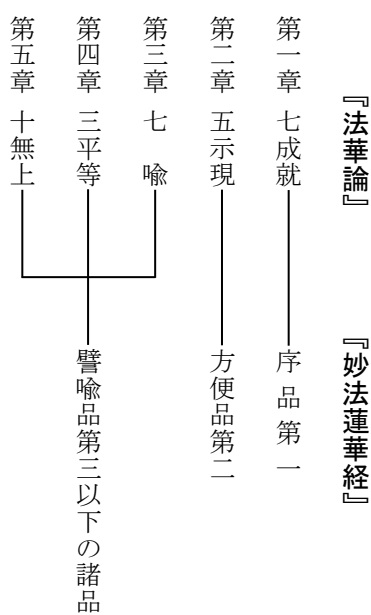
それら二種の現行本に会入された『法華論』の底本が同一ではないことを新たに指摘し、そのこととは別に、『智全』会入の『法華論』が『日藏』会入の『法華論』に比して、脱字が多い傾向にあることも示した。

本研究の結果から、『論記』に関する研究において参照すべき『法華論』テキストは、先ず第一に房山石経本および敦煌本の勒那摩提訳であり、現行の大正蔵本などの高麗版勒那摩提訳はそれに次ぐものである。また、菩提留支訳二巻本の影響を受けているが勒那摩提訳の古形を一部に伝えており、唯一『論記』所引と一致する箇所も確認された福州版を始めとする江南系統の勒那摩提訳や、『論記』所引に僅かにその要素が確認される菩提留支訳一巻本も、場合によっては参照する必要があるであろう。

第三章 七喻解釈について

第一節 『法華論』の七喻について

『法華論』は古来、注釈家によって五章に分けて解釈されている。第一章の七成就では法華經の序品第一を注釈し、第二章の五示現では方便品を注釈している。第三章の七喻、第四章の三平等、第五章の十無上では、譬喻品第三以下の諸品について注釈している。『法華論』と鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』諸品との対応関係を図示すると以下の通り。



『法華論』において、七喻と三平等は、内容的に一具のものとして扱われている。それは七喻と三平等では共に、対治される所（所治）と、対治する手立て（能治）について説いているためである。『法華論』では五示現の注釈を結んだ後、次のようにある。

此れより以下、次に七種に煩惱の染性を具足せる衆生の為に七種の喻を説きて、七種の増上慢心を対治す。此の義応に知るべし。又復た次に三種の染慢・無煩惱の人の三昧・解脱・身等の染慢の為に、此れを対治するが故に三種の平等を説く。此の義応に知るべし²²⁰。

220 訓読文は、藤井教公・池邊宏昭「二〇〇三」から引用。原文（菩提留支訳）は、「自此以下。次爲七種具足煩惱染性衆生。説七種喻。對治七種増上慢心。此義應知又復次

このように、七喩では衆生の七種の増上慢心、三平等では無煩惱の人（阿羅漢）の三種の染慢を対治するという。なお、『法華論』において規定される法華經における七喩とは、周知の如く次の七つの譬喩である。

- 一、譬喩品第三に説かれる「火宅譬喩」、迷いの世界（火事の屋敷）から導き出して、真実の教えを与える。
- 二、信解品第四に説かれる「窮子譬喩」、長者から窮子に、順々に真実の教えが与えられる。
- 三、藥草喩品第五に説かれる「雨譬喩」、雨は仏の慈悲心。仏の慈悲はすべてに平等である。
- 四、化城喩品第七に説かれる「化城譬喩」、仮の教えの向こうに真実の教えがある。
- 五、五百弟子品第八に説かれる「繫珠譬喩」、すべての人々の胸中には、仏になる可能性がある。
- 六、安樂行品第十四に説かれる「髻中珠譬喩」、煩惱を対治する勇者に、真実の教えを与える。
- 七、寿量品第十六に説かれる「医師譬喩」、医師（釈尊）は子どもたち（末法の衆生）に良薬（法華經）を与える。

なお先行研究では、円珍の七喩解釈について武覚超「二〇〇八」が、

天台口伝法門では、日蓮のごとき末法意識による時機観はあまり強調されていないようであるが、法華經の本迹二門に勝劣をたてる考え方は、すでに円珍あたりからみられるようである。すなわち、円珍の『法華論記』には、「今按、於迹門中一説六種譬一令三根熟」。而对本門「並皆未熟故示本地」、先熟之者令達久成之本。応云迹門已熟本門未熟。的実而言、前六方便、後一真実」〔智全〕卷上、二二七下と説かれ、機根の未熟、已熟という点からすれば、世親の『法華經論』に示された七喩のうち、迹門中の六譬は方便の説であって、本門の寿量品に示された医師の譬こそ真実を示したものであると主張している²²¹。

と述べている。

爲三種染慢無煩惱人三昧解脱身等染慢。對治此故説三種平等。此義應知」〔大正藏〕第二十六卷、八頁下。なお、菩提留支訳にある「三昧解脱身」の「身」は、勒那摩提訳や菩提留支訳一卷本では、全て「見」となっている（本論文付録の諸本対校三三七―三三八頁を参照）。

²²¹ 武覚超「二〇〇八」二九六頁。

第二節 円珍と吉蔵の七喩解釈

本節では、『法華論』所説の七喩について随文解釈がなされている、円珍の『論記』と吉蔵の『論疏』の当該箇所を挙げて、両者の七喩解釈を比較検討する。先に、『法華論』が規定する七喩によって対治される増上慢心と、それを対治する七喩を示す。以下の通りである。

煩惱のある衆生に備わる七種類の増上慢心		対治する法華經の七喩
一、顛倒せる諸功德を求むる増上慢心（勢力を求むる人）	……	火宅の譬喩
二、声聞の一向決定増上慢心（声聞の解脱を求むる人）	……	窮子の譬喩
三、大乘の一向決定増上慢心（大乘の人）	……	雲雨の譬喩
四、実には無きに有りと謂う増上慢心（定有る人）	……	化城の譬喩
五、散乱という増上慢心（定無き人）	……	繫宝珠の譬喩
六、実には功德有る増上慢心（功德を集むる人）	……	髻中明珠の譬喩
七、実には功德無き増上慢心（功德を集めざる人）	……	医師の譬喩

次に、円珍釈と吉蔵釈について比較検討する。ここでは著述の成立年代順に従って、先に吉蔵釈、後に円珍釈を示す。また、吉蔵『論疏』の当該箇所については、丸山孝雄「二九八〇」の現代語訳があるので、その丸山訳を用いるが、円珍『論記』には国訳がないため、ここでは『論記』原文と私に訓読したものを載せた。

一、顛倒せる諸功德を求むる増上慢心（所治、火宅の譬喩（能治）
『法華論』の文の「一者顛倒求諸功德増上慢心。謂世間中諸煩惱染熾然増上。而求天人勝妙境界有漏果報。對治此故爲說火宅譬喩應知」²²²について、吉蔵『論疏』では、

²²² 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「顛倒求功德増上慢。以世間諸煩惱熾然。而求天人妙境界報。對治此故。說火宅譬喩應知」（『大正蔵』第二十六卷、一七頁下）。

この増上慢心（所治之病）とは、世間の中の諸々の煩惱が熾然増上することを謂うのである。「而求天人勝妙境界」より下は、上の「顛倒求諸功德」を積するのである。三界は実には苦境であるのに、そこに常樂を求めるから顛倒というのである。²²³

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）顛倒求諸功德増上慢者。明第一慢。以世間諸煩惱下。釋其所治。對治已下明能治也。不求昇上之道覺輪迴之果。如人逆足故云顛倒。有漏持戒名爲功德。但以此求爲無上事。不求出離名増上慢。釋中世是不絶義。間是間隔義。分段生死是隔礙法。雖是隔礙。得繩相續故名世間。指貪瞋癡爲諸煩惱。引取無厭。忿怒如火。癡眠無盡。喧煩逼亂如火燒物。故云熾然。熾然盛也。以苦欲捨苦不求斷苦法。唯愛人天色欲僞弊果報。故云而求天妙境界報。能治中言對治者。對破治理。以不淨對破被貧。以忍辱對破瞋。以智慧對破癡。破病治身故云對治。說火宅譬喻者。即正對治。言人天境界名爲火宅。以喻三毒火。令物得驚悟。譬是譬況。喻是曉訓。就此比彼。寄淺訓深。故云譬喻。說喻之時在第二時。義含四種。今且附初²²⁴。

（訓読文）「顛倒求諸功德増上慢」とは、第一の慢を明かす。「以世間（間）諸煩惱」より下は、其の所治を釈す。「對治」より已下は、能治を明かすなり。昇上の道を求めずして、輪廻の果を見むること人の足を逆さまにするが如し。故に「顛倒」と云う。有漏の持戒を名づけて功德と爲す。但だ此の求を以て無上の事と爲して、出離を求めざるを、増上慢と名づく。積する中に、世は是れ不絶の義なり。間は是れ間隔の義なり。分段の生死は是れ隔礙の法なり。是れ隔礙なりと雖も、得繩相続す。故に世間と名づく。貪瞋癡を指して、諸の煩惱と爲す。引き取りて厭うこと無し。忿怒は火の如し。癡眠盡くること無し。喧煩逼亂火の物を焼くが如し。故に「熾然」と云う。熾然は盛んなり。苦を以て苦を捨てんと欲して、断苦の法を求めず。唯だ人天色欲の僞弊の果報を受するのみ。故に「而求天妙境界報」と云う。能治の中に「對治」と言うは、「對」は破、「治」は理なり。不淨を以て貪を對破す。忍辱を以て瞋を對破す。智慧を以て癡を對破す。病を破して身を治む。故に「對治」と云う。「說火宅譬喻」とは、即ち正しく對治なり。言わく、人天の境界を名づけて火宅と爲し、以て三毒の火に喩う。物を驚悟することを得せしむ。譬は是れ譬況にして、喩は是れ曉訓なり。此れに就いて彼れに比し、浅きに寄りて深きを訓ず。故に「譬喻」と云う。喩を説く時は、第二時に在り。義は四種を含む。今は且く初に附す。

と注釈している。『法華論』においては、「對治」という言葉が使われているが、「能治」「所治」という言葉自体は『法華論』全体を通して、一度も使用例が見られない。であるから、ここで古藏や円珍が使っている「能治」「所治」は、末注書独自の用法といえる。増上慢を所治とし、火

224 223 丸山孝雄「一九八〇」四四二頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正藏』第四十卷、八一五頁下。『智全』巻上、一九五頁中—一九六頁上。

宅喩を能治と規定している所は、吉蔵も円珍も同じ見方である。「顛倒」について、吉蔵は、「三界は実には是れ苦境であるのに、そこに常樂を求めるから顛倒という」と述べており、円珍は、「昇上の道を求めずして、輪廻の果を覓むること人の足を逆さまにするが如し、故に顛倒と云う」と述べている。言い回しは異なるが解釈の内容自体は同じである。なお、円珍の注釈において、「対治」の「対」「治」や「譬喩」の「譬」「喩」についてまで細かく述べている点は特徴的である。

二、声聞の一向決定増上慢心（所治）、窮子の譬喩（能治）

『法華論』の文の「二者聲聞一向決定増上慢心。自言我乘與如來乘等無差別。如是倒取。對治此故爲說窮子譬喩應知」²²⁵について、吉蔵『論疏』では、

「声聞人」とは其の人を標すのである。「一向決定増上慢」とは其の病を叙べるのである。「自言我乘與如來乘等無差別」とは上の病を釈するのである。二乗を求める人は次のように謂う。仏と二乗の人とは同じく三界の煩惱を断じ尽くし、同じく尽無生智を得、同じく是れ三無学人であつて、同じく無余を得ている、と。「如是倒取」とは、仏と二乗とは実には同じでないのに同じと言うから「倒取」と名づけるのである。この病を対治する為に「窮子譬喩」を説くのである。窮子を長者に比べ、草菴を大宅に方べて、二乗と仏とは同じでないことを知らしめるのである²²⁶。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）論聲聞人一向増上慢者。明第二人。聲聞衆生出火宅已。自謂究竟。不復進求無上佛果。未證謂證生増上慢。我生已盡梵行已立。所作已辦不受後有。更無所作。故云増上慢。我乘與如來乘無差別者。正明側相。小人自謂我證涅槃。佛已同我。我已同佛。此爲顛倒。惡取空者。說窮子譬。此爲能治。此定性人損驚怖攝。若言不定莫導一向。對治已下。如上可知²²⁷。

（訓読文）『論』に「声聞人一向増上慢」とは、第二の人を明かす。声聞の衆生は、火宅を出で已りて自ら究竟と謂う。復た無上の仏果を進み求めず。未だ證せざるを證せりと謂いて、増上慢を生ず。我生已に盡き、梵行已に立つ。所作已に辨じて後の有を受けず、更に所作無し。故に「増上慢」と云う。「我乘與如來

²²⁵ 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「聲聞人一向増上慢。我乘與如來乘無差別。如是顛倒取。對治此故說窮子譬喩應知」（『大正蔵』第二十六卷、一七頁下）。

²²⁶ 丸山孝雄「二九八〇」四四六頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正蔵』第四十卷、八一五頁下。
²²⁷ 『智全』卷上、一九六頁上—中。

乗無差別」とは、正しく倒相を明かす。小人自ら我れ涅槃を證せり、仏已に我れに同じ、我れ已に仏に同じと謂えり。此れを顛倒と為す。惡取空の者に、窮子の譬を説く。此れを能治と為す。此れは定性の人損驚怖の撰なり。若し不定を言わば、一向を導くこと莫し。「対治」より已下は、上の如く知るべし。

と注釈している。吉蔵は、「声聞人一向決定増上慢」について、「二乗」という言い方をしているが、円珍は「声聞人一向増上慢」について、「声聞」または「小人」という言い方をしている。なお、『論記』には、『論疏』に見られる「声聞人一向決定声聞」の「決定」の字がない。このことは、吉蔵と円珍とは見ていた『法華論』テキストが異なることを示している。吉蔵は菩提留支訳を見ていたと云われているが、²²⁹円珍が見ていたテキストは、本論文で指摘するように古形の摩提訳の系統である。

吉蔵は、ここでの増上慢について、「仏と二乗の人とは同じく三界の煩惱を断じ尽くし、同じく尽無生智を得、同じく是れ三無学人であって、同じく無余を得ている」という二乗を「倒取」であるとしており、一方、円珍は、「自ら我れ涅槃を證せり、仏已に我れに同じ、我れ已に仏に同じと謂えり」という小人を顛倒者としている。言い回しの違いがある程度で、吉蔵と円珍は同じような解釈をしている。

三、大乘の一向決定増上慢心（所治）、雲雨の譬喩（能治）

『法華論』の文の「三者大乘一向決定増上慢心。起如是意無別聲聞辟支佛乘。如是倒取。對治此故爲說雲雨譬喩應知」²³⁰について、吉蔵『論疏』では、

「大乘人」とは人を標すのである。「一向決定」とは病を標し、「起如是意」とは病を釈するのである。「別の二乗の人なし（無別二乗人）」と謂うから病と称するのである。此の人は初め一乗経を聞いて「唯、仏乗のみ有りて余乗有ることなし」と謂う。このような考え方には二つの失がある。一つには「一に於いて三と説く」ことを失し、二には「縁（衆生）に於いて三を成ず」ということを失する。「如是倒取」とは、（現）実には二種即ち二乗が有るのに「無い」と言うから「倒取」というのである。此れを對治する為に「雲雨譬喩」を説くのである。地と雨とは是れ一なりと雖も草木に於いて差を成じ、草木に随つて差を成ずるのである。理は是れ一なりと雖も縁に随つて三を成じ、縁に於いて三を成ずるのである。²³⁰

228 丸山孝雄「一九八〇」四三六頁参照。

229 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正藏』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「大乘人一向増上慢。無別聲聞辟支佛乘。顛倒取。對治此故說雨譬喩應知」（『大正藏』第二十六卷、一七頁下）。

230 丸山孝雄「一九八〇」四四九頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正藏』第四十卷、八一五頁下—八一六頁上。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

(原文) 論大乘人一向増上慢者。明第三人。恐人一向撥無所會。即増上慢所會。諸乘是能會之本。故說差別無差。無差別差。令悟不二是其良治。對治已下。如上可知²³²。
(訓読文) 『論』に「大乘人一向増上慢」とは、第三の人を明かす。恐らくは、人一向に所會を撥無す。即ち増上慢なり。所會の諸乘は是れ能會の本なり。故に差別即ち無差にして、無差別ち差なりと説きて、不二を悟らしむるは、是れ其の良治なり。「對治」より已下は、上の如く知るべし。

と注釈している。ここでは、円珍よりもやや吉藏の方が『法華論』の文について細かく解釈している。雲雨の譬喩で差を説くことについて、吉藏は、「地と雨とは是れ一なりと雖も草木に於いて差を成じ、草木に随つて差を成ずるのである。理は是れ一なりと雖も縁に随つて三を成じ、縁に於いて三を成ずるのである」と述べており、円珍は、「故に差別即ち無差にして、無差別ち差なりと説きて、不二を悟らしむるは、是れ其の良治なり」と述べている。言い回しは異なるが、同じように解釈している。

四、実には無きに有りと謂う増上慢心(所治)、化城の譬喩(能治)

『法華論』の文の「四者實無謂有増上慢心。以有世間三昧三摩跋提。實無涅槃生涅槃想。如是倒取。對治此故爲說化城譬喩應知」²³³について、吉藏『論疏』では、

所治の中、初めに、実には功德なきに「有り」と謂う増上慢心の章門を標す。此の人は有漏の定を得て、実には涅槃なきに涅槃の想を生ずる。此れに二(種の)人がある。一には内道の人であり、『智度論』に「有一比丘得初禪時謂得初果。乃至得四禪時謂得四果」と云う如き人である。二には外道の人であり、非想と無想の二つの定を得て、これを涅槃と為すが如き人である。「如是倒取」とは、実には涅槃なきに「是れ涅槃なり」と謂うから「倒取」という。此れを對治するために「化城譬喩」を説くのである。これに二義がある。一には、且く二乗の涅槃を説いて以て真城と為す。これは前の二種の人の虚偽之城を治せんが為である。二には、次に此の人の為に化城を説く。二乗の涅槃は尚お是れ化城である。「汝之得し所はどうして真実であろうか」と、その真実でないことを知らしめる。では、經文には但、化城を説く、と云うのみであるのに、どうして真城を説くのか、というに、化城品の中には具には今と昔とを叙べている。その意は、昔を叙べるのは「是れ

232 231 『智全』卷上、一九六頁中。

菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』(『大正藏』第二十六卷、八頁中)。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「實無而有。増上慢人。以有世間三昧三摩跋提。實無涅槃而生涅槃想。對治此故說化城譬喩應知」(『大正藏』第二十六卷、一七頁下)。

「真なり」と明かすにあり、今を叙べるのは「是れ化なり」と明かすにあるのである²³³。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）論實無而有増上慢人者下。明第四人。小乘涅槃曾無其實。猶如化城。而鈍根者未有其解。尚執爲實。故云實無而有増上慢。准前知之。以有已下釋。有漏禪定非成佛因。唯生人天不期出要。魚目非寶。執謂實有。故云以有世間乃至生涅槃想。三昧三摩跋提者。此定之異名。定有七名。論當初二。今云三摩跋提者。此復有五異名。一名三摩地。二名三摩提。三名三昧耶。四云三昧。五名三摩跋提。此並翻等持。瑜伽十一有二種解。第二解云。平等持心但於境轉名爲等持。故通定散。具如恩鈔。對治已下。如上可知。傍通外道。正治二乘。疑者云。二乘是出世聖人。何以世間三昧等爲無學所證耶。今爲通之。二乘唯人天。未曾云得佛。故總論之攝人天果。小斷煩惱勝外道耳。況復勝劣相對以二乘爲世間乎。此義可知²³⁴。

（訓読文）『論』に「実無而有増上慢人者」より下は、第四の人を明かす。小乗の涅槃、曾て其の実無きこと猶おして化城の如し。而るに鈍根の者の未だ其の解有らずして、尚お執して実と爲す。故に「実無而有増上慢」と云う。前に准じて之を知れ。「以有」より已下は釈して、有漏の禪定は成仏の因に非ず。唯だ人天に生じて、出要を期せず。魚の目は実に非ざるを、執して実有と謂う。故に「以有世間」乃至「生涅槃想」と云う。「三昧三摩跋提」とは、此れ定の異名なり。定に七の名有り。『論』は初の二に当れり。今「三摩跋提」と云うは、此れに復た五の異名有り。一には三摩地と名づく。二には三摩提と名づく。三には三昧耶と名づく。四には三昧と云う。五には三摩跋提と名づく。此れ並びに等持と翻ず。

と注釈している。吉蔵は、「有漏の定を得て実には涅槃なきに涅槃の想を生ずる」人について、内道と外道との二種に分けて論じている。

円珍は、内道・外道という分け方はしていない。また、円珍は「第四の人」を「鈍根の者」として、「有漏の禪定は成仏の因に非ず」と述べている。

なお、吉蔵も円珍も「有漏の（禪）定」という用語を使っているが、『法華論』においては「有漏の（禪）定」という用語は一度も見られないので、末注書独自の用法といえる。

吉蔵は、化城の譬喩を説くことに二義があるとして、「化」と「真」の二段構えで譬喩の内容を解釈している。円珍は「三摩跋提」の語を取り上げて、この異名について具体的に説明している。吉蔵はこの語について特段注釈は施していない。ここでは、吉蔵と円珍における『法華論』

234 233 丸山孝雄「二九八〇」四五二頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正蔵』第四十卷、八一六頁上。『智全』巻上、一九六頁中—一九七頁上。

の文に対する着目点のやや異なることが伺える。

五、散乱という増上慢心（所治）、繫宝珠の譬喩（能治）

『法華論』の文の「五者散亂増上慢心。實無有定。過去雖有大乘善根而不覺知。不覺知故不求大乘。狹劣心中生虛妄解。謂第一乘。如是倒取。對治此故爲說繫寶珠譬喩應知」²³⁵について、吉蔵『論疏』では、

「如是倒取」とは、小乗は「第一」ではないのに「第二」と謂うから「倒取」と名づけるのである。又、實に大乘があるのに大乘を求めず、實に小乗がないのに小乗を求める。これも亦「倒取」である。此れを對治する為に「繫珠譬喩」を説くのである。「繫珠譬」を説いて其の人に菩提心を想い起こさせ、小（乗）を捨てて大（乗）を求めさせるのである²³⁶。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）論散亂心下。明第五人。二障未斷未得少靜。狂亂放蕩。都無空時。故云散亂心實無有定。十六王子覆講法華。與繫寶珠。故云過去有大乘善根。無明深重。都不覺知。不覺知故廢忘不覺依裏重寶。故云而不覺知乃至大乘等。又入溢路不知直道。少有所得便以爲足。執於霜雹貴爲瑠璃珠。衣裏之珠。永沒泥中。心上之醉。久損識神。故云於狹劣心中生虛妄解以爲第一乘。治此慢癡與示衣珠。自恣五欲大封一國。故云對治此故說繫寶珠譬喩。繫者著也。言寶珠者。如意寶王。過去有善根句。偏明昔得散亂心不覺。乃至爲第一乘。總舉今昔失。治此已下。明今日得²³⁷。

（訓読文）『論』に「散亂心」より下は、第五の人を明かす。二障未だ断ぜず、未だ少靜を得ず。狂亂放蕩して都べて空時無し。故に「散亂心實無有定」と云う。十六王子は法華を覆講して、与に宝珠を繫げたり。故に「過去有大乘善根」と云う。無明深重にして都べて覺知せず、覺知せざるが故に廢忘して衣裏の重宝を覺らず。故に「而不覺知」乃至「大乘」等と云う。又、溢路に直道を知らず入り、少し所得有りて、便ち以て足と爲す。霜雹を執して貴びて瑠璃の珠と爲す。衣裏の珠、永く泥中に没す。心上の醉、久しく識神を損ず。故に「於狹劣心中生虛妄解以爲第一乘」と云う。此の慢癡を治するに与に、衣珠を示す。自ら五欲を恣にして、大いに一國を封ず。故に「對治此故說繫寶珠譬喩」と云う。「繫」とは著なり。「宝珠」と言うは、如意宝王なり。「過去有善根」の

²³⁵ 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「散亂心實無有定過去。有大乘善根而不覺知。彼不求大乘。於狹劣心中生虛妄解。以爲第一乘。對治此故說繫寶珠譬喩應知」（『大正蔵』第二十六卷、一七頁下）。

²³⁶ 丸山孝雄「二九八〇」四五五頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正蔵』第四十卷、八一六頁上—中。
²³⁷ 『智全』卷上、一九七頁上—中。

句は、偏に昔散乱の心を得て覺らざることを明かす。乃至「為第一乗」とは、摠じて今昔の失を挙り、「治此」より已下は、今日の得を明かす。

と注釈している。ここで吉蔵は、「如是倒取」の文を取り上げて、大乘を求めずに小乗を求める者は「倒取」しているのであり、その人の為に繫珠の譬喩を説いて菩提心を起させるのである、と簡潔に注釈している。

円珍は、ここでは吉蔵よりも細かく『法華論』の文について随文解釈を施している。円珍は「過去有大乗善根」とは、化城喩品第七で説かれる十六王子による法華覆講（大通覆講）に依るという解釈をしている。繫珠譬喩は、五百弟子受記品第八で説かれる内容であるが、ここで円珍は化城喩品第七の内容（大通結縁）と関連させて『法華論』の記述を解釈している。また、「過去有善根」とは、昔に散乱の心を得ていて悟っていないこと、を意味すると解釈しており、それらの失は、今日に得る繫珠譬喩によって対治されるとしている。

六、実に功德有る増上慢心（所治）、髻中明珠の譬喩（能治）

『法華論』の文の「六者實有功德増上慢心。聞大乘法取非大乘。如是倒取。對治此故爲説輪王解自髻中明珠與之譬喩應知」²³⁸について、吉蔵『論疏』では、

「聞大乘法取非大乘」とは、此の人は本、大乘を学んだが、但、有所得の学のみを作し、それ故、大乘を説くのを聞いても大（乗）から退（失）して小（乗）の果を取る。それは丁度、生まれたばかりの鳥が、翅もないのに飛ぶことを学んで下に落ちてしまうようなものである。有所得の人は、大心を発しても（智）慧も方便もないから、大乘を説くのを聞いても（大乘から）退（失）して小（乗）の果を取るのである。「如是倒取」とは、実に大乘があるのに大（乗）を取らず、実に小乗がないのに小乗を取るから「倒」と名づけるのである。又、実に大乘を学んだのに小（乗の果）を取るから「倒」というのである。頂髻之珠は最も尊貴なものであり、一乗は最も勝れたものである。此れを賜うとは、其の人に大（乗）を取らしめることである²³⁹。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）論有功德人説大乘法者。明第六人。七方便人聞説圓乘不信不解。取非大乘謂爲實大。自餘如下。故云説大乘法而取非大乘。有釋爲小未合經論。治此執故説最

²³⁸ 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「有功德人説大乘法而取非大乘。對治此故説王解髻中明珠與之譬喩應知」（『大正蔵』第二十六卷、一七頁下）。

²³⁹ 丸山孝雄「一九八〇」四五七頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正蔵』第四十卷、八一六頁中。

上乘。故譬王解髻中明珠與之。喻意應知²⁴⁰。

（訓読文）『論』に「有功德人説大乘法」とは、第六の人を明かす。七方便²⁴¹の人、円乗を説くを聞きて、信ぜず解せず。大乘に非ざるを取りて、実の大と為すと謂えり。自余は下の如し。故に「説大乘法而取非大乘」と云う。有るは釈して、小（乗を取る）と為す。未だ經論に合せず。此の執を治するが故に最上の乗を説く。故に王の髻中の明珠を解きて之を与うるに譬う。喻の意、応に知るべし。

と注釈している。ここで吉蔵は「聞大乘法取非大乘」の文について、有所得の人は大乘の法を聞いても退いて小乗の果を取るのです、そのように云うと解釈している。吉蔵は、前の繫珠譬喩の解釈においても、小乗は小乗を第一乗と思つて大乘を求めない、と述べているが、ここでは大乘を「聞いても」なお退いて小乗の果を取ると述べている。

一方、円珍は「説大乘法而取非大乘」とは、七方便の人が円乗を聞いても、信じないで大乘でないものを取り、それを実の大乘であると思うから、そのように云うと解釈している。

また、円珍は「有るは釈して、小と為す。未だ經論に合せず」として、「有る釈」は經論の文と合わないと斥けている。先の吉蔵『論疏』では、「大乘」との比較で「小乗」という言葉を使っているが、円珍は「七方便の人」と解釈している。七方便の用語は、一般的には、小乗の見道以前の修行位のことを指すが、円珍の属する天台宗においては、法華經の藥草喩品の三草二木の意に依つて、人乗・天乗・声聞乗・緣覺乗・藏教の菩薩乗・通教の菩薩乗・別教の菩薩乗を七方便の人と立てるのである。であるから、円珍においては、吉蔵のように小乗だけに限定して解釈をしていない。そのため、ここで円珍が斥けている「有る釈」とは吉蔵の説である可能性がある。

なお、髻中の明珠について、両者とも同じように解釈しており、吉蔵は「最も尊貴なもの、一乗は最も優れたもの」と述べており、円珍は「最上の乗」を意味するとしている。

七、実に功德無き増上慢心（所治）、医師の譬喩（能治）

『法華論』の文の「七者實無功德増上慢心。於第一乘不曾修集諸善根本聞第一乘心中不取以爲第一。如是倒取。對治此故爲説醫師譬喩應

241 240 『智全』卷上、一九七頁中。

七方便 天台宗では二種の七方便を立てる。一には人乗・天乗・声聞乗・緣覺乗・藏教の菩薩乗・通教の菩薩乗・別教の菩薩乗である。これは法華經藥草喩品の三草二木の意に依つて立てられる。二には藏教の声聞・緣覺と通教の声聞・緣覺・菩薩と別教の菩薩と円教の菩薩とである。見・思の二惑を断じる上において立てられる。

知」²⁴²について、吉蔵『論疏』では、

「於第一乘不修習諸善根故」とは、上の「実無功德」を釈するのであって、此の人は過去において大乘の善根を集しなかったから（功德がないの）である。「聞説大乘」より下は、上の増（上）慢心を釈する。「如是倒取」とは、第一法に於いて非第一と謂うから「倒取」と名づけるのである。此れを対治する為に「医師譬喩」を説く。良医は正に狂子を治する。仏は涅槃を示して大乘なる第一之薬を服せしめるのである²⁴³。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

（原文）論無功德人下。明第七人。常見深篤。故無功德。不覺欲過愛著三界。不習空法。唯依有著。佛説大乘心不喜樂。毒氣深入不以爲貴。故云於第一乘不集善根。聞説大乘不取爲大。治此病故非滅現滅。與示權去。其義可知²⁴⁴。

（訓読文）『論』に「無功德人」より下は、第七の人を明かす。常見深く篤し。故に功德無し。欲の過を寛らず、三界に愛著して空法を習わず。唯だ著有るに依て、仏大乘を説きたまへど、心に喜樂せず。毒氣深く入りて、以て貴しと爲さず。故に「於第一乘不集善根」と云う。大乘を説くを聞きて、取りて大と爲さず。此の病を治するが故に、非滅、滅を現じて、与に権に去ると示す。其の義、知るべし。

と注釈している。「無功德」の者について、吉蔵は「過去において大乘の善根を集しなかったからである」としており、円珍は「常見深く篤し、故に功德無し」としている。

また、吉蔵は「倒取」について、「第一法に於いて非第一と謂うから倒取と名づけるのである」と述べており、円珍は対治される病について「大乘を説くを聞きて、取りて大と爲さず」と述べている。

吉蔵と円珍とは、言い回しが異なるが、ここでは、大方同じような解釈をしている。

ここで、吉蔵の引用する『法華論』には「於第一乘不修習諸善根」とあり、円珍の引用する『法華論』には「於第一乘不集善根」とあって、文字の異同が見られる。このことから、やはり両者の見ていた『法華論』テキストは異なる系統のものであろう。

²⁴² 菩提留支訳『妙法蓮華經憂波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、八頁中）。なお、勒那摩提訳『妙法蓮華經論憂波提舍』の該当箇所は「無功德人於第一乘不集諸善根。説第一乘不取爲第一。對治此故説醫師譬喩應知」（『大正蔵』第二十六卷、一七頁下）。

²⁴³ 丸山孝雄「二九八〇」四五九頁の現代語訳を引用。『論疏』の原文は、『大正蔵』第四十卷、八一六頁中―下。

²⁴⁴ 『智全』巻上、一九八頁上。

小 結

本章では、『法華論』所説の七喩について、円珍『論記』と吉蔵『論疏』の注釈を比較検討した。両者は概ね共通の立場に立ちながらも、注釈の着眼点や語句の扱い方に違いが見られた。また、引用する『法華論』本文にも異同があり、両者が参照したテキストの系統差が示唆された。各喩における解釈の差異を見ると、たとえば火宅譬喩では、両者とも「顛倒」の理解は一致するが、円珍は「対治」や「譬喩」といった語の構成要素にまで踏み込み、字義的解釈を施している点が注目される。繫珠譬喩においては、円珍が化城喩品の十六王子との関連を持ち出し、「過去有善根」の由来を法華覆講に求めるなど、法華經品間の連関に着目する姿勢を示していた。

特に髻中明珠の譬喩では、円珍が「有釈」として明記せずに他説を否定する記述を残しており、文脈上それが吉蔵説を指していると思われることから、円珍の教学的立場の違いが浮かび上がる。また、円珍は「七方便」などの、天台教学の基本的な教理を用いて喩の解釈を展開しており、注釈に天台宗の立場を反映させようとする意図がうかがえる。一方、吉蔵は『法華論』本文に即した逐語的注釈を主とし、教学的背景の説明には比較的慎重であった。

以上の比較からは、円珍が『論記』を通して、天台教学の立場に立つ独自の読解を試みていた様子が明らかとなった。本章で明らかとなった七喩解釈の傾向は、次章で扱う三平等の注釈の比較にも連続し、教学的特徴のさらなる解明に資するものである。

第四章 三平等解釈について

第一節 『法華論』の三平等について

『法華論』では、法華經の優れた特質として、三平等が説き明かされているとしている。『法華論』に依ると、「三種の染、無煩惱の人の三昧、解脱、見等の染慢」²⁴⁵を対治するため、法華經では「乗平等（真理の平等）」「世間・涅槃平等（世界の平等）」「法身平等（存在の平等）」の三平等が説かれているという²⁴⁶。

渡辺宝陽「二〇〇三」は、『法華論』の三平等について、

乗平等とは、「種々の乗は異なるものだ」という異見に対して、授記品などで声聞に授記するように、声聞に菩提の記別を授けて、ただ大乘のみとなり二乗は存在しなくなる、との教示である。

世間・涅槃平等とは、「世間と涅槃とは異なるものだ」という異見に対して、見宝塔品で多宝如来が涅槃に入られて、世間にあつて仏が涅槃に入ることを現わしているように、世間と涅槃との平等にして無差別なることを示している、という教示である。

法身平等とは、「無煩惱の人が染慢であつて、彼と此との身は異なる」と信ずる者に対して、多宝如来は一度涅槃に入られてから法身の舍利で示現されたのだから、自身と他身とは法身平等であつて差別がない、という教示である。

このように、三種の無煩惱の人は仏性・法身がことごとく平等であることを知らず、差別観に墮していた。そこで、声聞への授記によって決定心を得させようとし

²⁴⁵ 勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』には「三種染無煩惱人三昧解脱見等染慢。對治此故説三平等應知」（『大正藏』第二十六卷、一七頁中）とある。大竹晋「二〇一一」は、当該箇所「見」字について「勒那摩提訳の「見」は「身」の誤写であろう」（二二二頁、脚注十六）と述べているが、敦煌本や房山石經本などの摩提訳でも当該箇所は「見」となっている。

²⁴⁶ 田村芳朗「一九六九」には「インドでは、『法華經』の普遍平等性や二乗作仏が高く評価され、種々の論書にそれがとりあげられた。たとえば、ナーガールジュナ（竜樹）の『大智度論』は『般若經』を注釈したものであるが、そこには『法華經』の各章が引用されており、『法華經』が二乗作仏を説く点、『般若經』よりすぐれているとしている。また、四世紀から五世紀にかけての諸論書、たとえば堅意の『入大乘論』やヴァスバンダウ（世親）の『法華經論』などにおいても、同様のことがとりあげられている。とくに世親の『法華經論』では、『法華經』に真理の平等（乗平等）、世界の平等（世間平等）、存在の平等（身平等）の三平等が説かれているとし、十種について無上の義（十無上）が説き明かされているとしている」（六六頁）とある。

たのであって、「如来は三平等に依つて一乗の法を説きたまふ」たのであるとこう²⁴⁷。

と解説している。横超慧日「一九六九」では、『法華論』所説の三平等について、

多宝の入涅槃と、入涅槃した多宝の現身とを以て、世間涅槃の平等だとか身平等だといって解釈を下すのはどんなものであろうか。竜樹の智度論には、宝塔及多宝出現を以て経を証説するためと解釈していたが、いまはそうした経本来の意図を全く考えていない。十方分身仏の集合にも、釈迦・多宝二仏並坐にも触れていない。もし私をしていwashめるならば、十方分身仏の集合こそ身平等であり、二仏並坐はまさに世間涅槃の平等だとみるとき、まさしく表現の意味も理解できるように思う。且つまたこれが三種無煩惱人の染慢だということも、どういう根拠によってそう解釈できるのかわからない。おそらく三種無煩惱人というのは、阿羅漢・辟支仏・菩薩を指し、前には有煩惱人を挙げたから次には無煩惱人を挙げる順序となり、無煩惱に三乗の果（阿羅漢・辟支仏・仏）が考えられるところから次第にこれを三平等に配当しそれにと当ると思われる象徴表現を経の中にさがしあてたものでなかろうか。何だか初めから構想を作っておいて、強いて经文の中からそれに配当するような説を求めているように思われてならぬが、これは私の僻見であらうか²⁴⁸。

と述べており、牽強付会な説とも取れる内容に、疑義を呈している。また、同「一九六九」は三平等が説かれる箇所を解説して、

三種無煩惱の人は仏性法身が悉く平等であることを知らなかった。そこで或る者は法身を証し或る者は証することができぬというように差別観に堕していた。よって声聞への授記によってその誤りを正したのであり、如来が一乗法を説くのは全くこの三種平等に根拠するものであるという。法華論はここで授記を論じ、併せて授記を得た声聞に四種ありという²⁴⁹。

と述べている。横超氏が解説しているように、『法華論』ではこの後、四種の声聞への授記について説かれる段となるが、当該箇所は天台宗と法相宗との間で起こった成仏論争で着目され、解釈が別れた箇所であり、『論記』でも円珍が注力して注釈した様子が看取されるため、次節で特に取り上げて、その内容などについて検討する。

247 渡辺宝陽「二〇〇三」から取意引用。

248 横超慧日「一九六九」二一八頁から引用。

249 同上二一八―二一九頁から引用。

第二節 円珍の四種声聞授記解釈

『論記』巻第七末には、『法華論』所説の所謂「四種声聞授記」の記述を注釈する段があり、円珍は智顗説・灌頂記『法華文句』や、湛然撰『文句記』『五百問論』、また智度撰『義續』などの天台章疏を頻繁に引用して注釈を施している。当該箇所注釈の分量は、他の箇所比べて一際多いものであり、円珍が特に注力して注釈した部分として注目される。先ず四種声聞授記の箇所を、勒那摩提訳の『法華論』で示すと、

言聲聞授記者。聲聞有四種。一者決定聲聞。二者増上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。二種聲聞如來與授記。謂應化聲聞。退已還發菩提心者。決定増上慢二種聲聞根未熟故。如來不與授記。菩薩與授記。菩薩授記者。方便令發心故²⁵⁰。

という内容になっている。記別を授かる声聞には、決定声聞・増上慢声聞・退菩提心声聞・応化声聞という四種の声聞があり、如来は応化声聞・退菩提心声聞に記別を与え、機根の未熟な決定声聞・増上慢声聞には菩提心を起こされる手立てとして菩薩が記別を与えるということが説示されている。

円珍の注釈内容を見る前に、便宜上、当該箇所円珍が天台章疏等をどのように用いていたのか、論述の順序に従って整理し、以下に一覧として示しておく。

『法華論記』巻第七末、四種声聞授記注釈箇所の構成一覧²⁵¹

- ① 大正六年に『智全』の校訂者が会入した菩提流支訳『妙法蓮華経優婆提舍』²⁵²（二二八頁上四―九行目） 六行
- ② 円珍の注釈（大略の部分）（二二八頁上一〇行目―下二三行目） 二十一行
- ③ 智顗説・灌頂記『法華文句』（二二八頁下一三一―一五行目） 三行
- ④ 神昉『種性差別集』（二二八頁下一五―一七行目） 三行

²⁵⁰ 『大正蔵』第二十六巻、一八頁中。菩提留支訳『妙法蓮華経憂波提舍』では「言聲聞人得授記者。聲聞有四種。一者決定聲聞。二者増上慢聲聞。三者退菩提心聲聞。四者應化聲聞。二種聲聞如來授記。謂應化者。退已還發菩提心者。若決定者増上慢者二種聲聞。根未熟故不與授記。菩薩與授記者。方便令發菩提心故」（『大正蔵』第二十六巻、九頁上）となっている。

²⁵¹ 以下の（ ）内の頁数・行数は、『智全』巻上に依る。

²⁵² 『智全』巻上、三三〇頁の識語を参照。以下、当該テキストを「智全会入の『法華論』」と略記する。

- ⑤ 円珍の注釈「大略釈見。更分文釈」(二三八頁下一七行目―三三九頁下一行目) 十九行
- ⑥ 智顗説・灌頂記『法華文句』(二三九頁下一―六行目) 六行
- ⑦ 湛然『文句記』(二二九頁下六行目―三三〇頁上一六行目) 二十八行
- ⑧ 円珍の注釈(三三〇頁上一七行目―下六行目) 七行
- ⑨ 湛然『文句記』(三三〇頁下六―八行目) 三行
- ⑩ 円珍の注釈(三三〇頁下八―一三行目) 六行
- ⑪ 智顗説・灌頂記『法華文句』(三三〇頁下一三行目―三三一頁上一四行目) 十九行
- ⑫ 湛然『文句記』(三三二頁上一五行目―下一七行目) 二十行
- ⑬ 円珍の注釈(三三一頁下一七行目―三三二頁上一四行目) 十五行
- ⑭ 基『玄贊』(三三二頁上一四行目―下八行目) 十二行
- ⑮ 湛然『五百問論』(三三二頁下八行目―三三三頁上一〇行目) 二十行
- ⑯ 基『玄贊』(三三三頁上一〇―一六行目) 七行
- ⑰ 湛然『五百問論』(三三三頁上一六行目―下五行目) 七行
- ⑱ 円珍の注釈(三三五頁下五―一〇行目) 六行
- ⑲ 智顗説・灌頂記『法華文句』(三三三頁下一〇行目―三三四頁上六行目) 十四行
- ⑳ 湛然『文句記』(三三四頁上七行目―下一一行目) 二十二行
- ㉑ 智顗説・灌頂記『法華文句』(三三四頁下一一行目―三三五頁上一〇行目) 十七行
- ㉒ 湛然『文句記』(三三五頁上一〇行目―下九行目) 十七行
- ㉓ 智度『義續』(三三五頁下九行目―三三六頁上一行目) 十行
- ㉔ 円珍の注釈(三三六頁上一二行目) 一行
- ㉕ 智度『義續』(三三六頁上一二―一〇行目) 九行
- ㉖ 円珍の注釈(三三六頁上一〇―一二行目) 三行

当該箇所における円珍独自の注釈を、その引用文の分量と比較してみると、自身の注釈はさほど多くないことがわかる。ここで最も顕著なのは、湛然の注釈書からの引用であり、次いで智顗説・灌頂記『法華文句』からの引用が多いことが分かる。

奥野光賢「二〇〇二」の研究では、円珍の四種声聞授記解釈について、次の(1)(2)の円珍自身の言葉によって、「円珍の基本的立場は最終的に四種声聞すべてが授記されるという立場にあることは明らかであろう」²⁵³と結論付けられている。

(1) 「論菩薩授記者下……不合疑之」(二二六頁下―一三行目)

(2) 「今按昔日上慢。……具如下文」(二二七頁下―一七行目―二二八頁上三行目)

右の(1)(2)においては、三世の化導によつて結縁したものは当機となり菩提記を受ける、と円珍が説いている。この(1)(2)の円珍の注釈は、その記載頁からわかる通り、『智全』における四種声聞授記の記述箇所(二二八頁上段四行目―九行目)よりも前の所の注釈である。

奥野光賢「二〇〇二」は、四種声聞授記の記述よりも前にある『法華論』の一節と、続く四種声聞授記の記述を一具の問題とみなして、円珍の注釈について考察している。しかしながら、筆者が一覧に示した②③の円珍による注釈・引用部分については、言及がなされていない。右の(2)の記述の最後の部分においては、円珍が「具如下文」と述べており、またこれに続いて一覧①②③(二二八頁上段四行目―二二六頁上段一〇行目)に示したように、『智全』で約九頁にも及ぶ長い注釈の一段があるため、この一段についての検討はなされるべきであろう。まず、一覧の「②円珍の注釈(大略)」の部分から見て行きたい。円珍はここで次のように言う。

『論』の「言声聞授記者」より已下は、第二に被る機を明かす²⁵⁴。中に三と為す。初に人を挙げ、数を標す。二に正しく名を列す。三に近遠を分別す。初に標する中に三あり。初に人を挙げ、二に法を標し、三に数を挙げ。並びに文の如く知んぬ。「一者決定」より下は、第二に名を列すること文の如し。「二種声聞」より下は、近遠を料簡す²⁵⁵。

ここでは『法華論』の原文に沿って、円珍が科段分けを施している。続いて、円珍は次のように言う。

奥野光賢「二〇〇二」二二五頁。

『智全』巻上、二二三頁上―下には「初明授記事。次明蒙記者」とある。

原文は「論言声聞授記者已下。第二明被機中為三。初挙人標数。二正列名。三分別近遠。初標中三。初挙人。二標法。三挙数。並如文知。一者決定下。第二列名如文。二種声聞下。料簡近遠」(『智全』巻上、二二八頁上―一〇―一三行目)。

謂く、近遠の記の二種なり。近記を与うは、根已に熟するが故なり。二種に未だ与えざるは、根未だ熟さざるが故なり。菩薩の与うる記は、是れ遠因の記なり²⁵⁶。

ここでは、根已熟の退菩提心と応化には、釈尊から近記が与えられるが、根未熟の決定と増上慢には、常不輕菩薩から遠因の記が与えられると述べている。円珍は続いて、

今謂く、平等の理は恒に三世に涉れども、近遠の記を与うは、熟未を分別す。今、六即²⁵⁷に約せば、觀行相似は根未だ純熟せざるが故に近記せず。名字は、已に熟するが故に遠記を与う。論文を検するが如し²⁵⁸。

と、天台学の六即を駆使しつつ、近・遠の記と、熟・未の分別を示し、觀行と相似は根未熟であつて近記されず、名字は已熟であつて遠記されると述べている。続いて、

今仏の世に約せば、菩薩の記無し。菩薩の記とは、此れ往時を指す。故に今、一義を立て、論文の意を会せしむ。「根未熟仏不与記」と言うは、是れ過去の威音王仏の未法の時、釈尊の位は初隨喜品に在り。礼拝を修行すれども、輕賤する者有て、名づけて決定上慢と為す。彼の時、道機未だ熟さず。平等の理を聞けども、心背いて信ぜず。近記に堪えず、且く遠記を与う。遠記の力は、今日逢値して、當機衆と作り、面に近記を受く。然れば則ち、遠を近因と為し、近を遠果と為す²⁵⁹。

と述べ、近記は今日の如来記であり、遠記は往時の菩薩記であつて、遠記は近記の因であり、近記は遠記の果である、と解釈している。続いて、

大通仏の時、疑惑を生ずる者、今當機と成て、初住の位に入る。彼の日、相似觀行に入る。則ち皆信受して分眞の位に入る。始め名字に在て、未だ堅信に入らず。心に疑惑を生じ、未だ能く敬受せず。今日信を生じて、仏慧分に入る。所以に、昔は決定上慢と名づけて、今は退大応化と為す。當に知るべし。論文は、今昔に約するに、合して四種と為す。三世の諸仏、悉く皆此の如し。今日の五千、略開の三を聞いて遠記に預かり、當機の種を納む。須らく經の旨を以て、望んで論文を検

256 原文は「謂近遠記二種。与二近記一根已熟故。二種未レ与。根未レ熟故。菩薩与記是遠因記」(『智全』卷上、二二八頁上二三—三四行目)。

257 六即 菩薩の階位である五十二位を、別教の菩薩の行位として、別に円教の菩薩の階次を六種類に分けたもの。

258 原文は「今謂。平等之理。恒涉三世。与二近遠記一分別熟未」。今約三六即。觀行相似根未二純熟。故不レ近記。名字已熟故与二遠記。如レ檢論文」(『智全』卷上、二二八頁上二五—二七行目)。

259 原文は「約二今仏世一無二菩薩記」。菩薩記者。此指二往時一。故今立二一義。令レ會論文意。言二根未熟仏不与記一者。是過去威音王仏。末法之時釈尊位在二初隨喜品一。修二行礼拝一。有二輕賤者一名為二決定上慢一。彼時道機未レ熟。聞二平等理一背レ心不レ信。不堪二近記一且与二遠記一。遠記之力今日逢値。作二當機衆一面受二近記一。然則遠為二近因一近為二遠果一」(『智全』卷上、二二八頁上二七行目—下六行目)。

すべし²⁶⁰。

として、往時の声聞を決定・増上慢といい、今日の声聞を退菩提心・応化という、と規定する。ここで円珍は、過去の大通智勝仏の時に疑いを持った者は、今日当機となつて初住の位に入る、と述べているが、法華経では初住という概念は、明文化されて説かれてはいない。湛然『文句記』第四には「故に三品盡きて方に初住に入り、爾して乃ち記を獲る」²⁶¹と説かれており、法華経において初住に入ることが初めて明かされた記述として知られるが、円珍もこのことは当然知っていたであろう。円珍は続いて、

若し決定上慢は、恒に本位を出でずんば、王子の結縁、不輕の遠記、極大に用無し。六祖の破するが如し²⁶²。

と、湛然が破折した通りであると言う。続いて円珍は、智顗説・灌頂記『法華文句』を次のように引用している。

大師釈して曰く、「今の開三顯一の正意は、決定退大の声聞をして、大乘の声聞と成らしめんが為なり。自行は既に立つれば、即ち能く化して声聞に応ず。若し此の意を得れば、則ち論意に達す」²⁶³と²⁶⁴。

さらに円珍は、玄奘の門下として知られる神昉（生没年不詳）の『種性差別集』からの引用と思われる一節を、次のように挙げている。

神昉²⁶⁵師は『種性集』に云く、『法華論』の中の決定声聞を親しく三蔵に問う。三蔵は答えて曰く、彼の『論』は且く方便の決定に拠る」²⁶⁶と²⁶⁷。

原文は「大通仏時生²⁶⁸疑惑²⁶⁹者。今成²⁷⁰当機²⁷¹入²⁷²初住位²⁷³。彼日入²⁷⁴於相似觀行²⁷⁵。則皆信受入²⁷⁶分眞位²⁷⁷。始在²⁷⁸名字²⁷⁹。未²⁸⁰入²⁸¹堅信²⁸²。心生²⁸³疑惑²⁸⁴。未²⁸⁵能敬受²⁸⁶。今日生²⁸⁷信入²⁸⁸仏慧分²⁸⁹。所以昔名²⁹⁰決定上慢²⁹¹。今為²⁹²退大²⁹³應化²⁹⁴。当²⁹⁵知論文約²⁹⁶於今昔²⁹⁷合為²⁹⁸四種²⁹⁹。三世諸仏悉皆如³⁰⁰此。今日五千問³⁰¹略開³⁰²三。預³⁰³于遠記³⁰⁴納³⁰⁵当機種³⁰⁶。須³⁰⁷下³⁰⁸以³⁰⁹經旨³¹⁰望³¹¹檢³¹²論文³¹³」(『智全』卷上、二二八頁下六一―二二行目)。

『文句記』巻第四中には、「故三品盡方入初住。爾乃獲記」(『大正藏』第三十四卷、二二七頁中一五行目)とある。

原文は「若決定上慢。恒不³¹⁴出³¹⁵本位³¹⁶。王子結縁。不輕遠記極大無³¹⁷用。如³¹⁸六祖破³¹⁹」(『智全』卷上、二二八頁下二二―二三行目)。

『法華文句』巻第四上には「今開三顯一正意。為決定退大聲聞令成大乘聲聞。自行既立即能化應聲聞。若得此意則達有無也」(『大正藏』第三十四卷、四六頁中一四―一七行目)とある。

原文は「大師釈曰。今開三顯一正意。為決定退大聲聞令³²⁰成³²¹大乘聲聞³²²。自行既立。既能化³²³應³²⁴聲聞³²⁵。若得³²⁶此意。則達³²⁷論意³²⁸」(『智全』卷上、二二八頁下三一―三五行目)。

神昉 唐代の人。唐の貞観十九年(六四五年)、玄奘が弘福寺において翻經を始めると召されて證義となり、後に門下の俊逸として常に訳場に列した。

神昉『種性差別集』三卷は、現存が確認されていない。

原文は「神昉師種性集云。法華論中決定声聞親問³²⁹三蔵³³⁰。三蔵答曰。彼論且³³¹抛³³²方便決定³³³」(『智全』卷上、二二八頁下一五―一七行目)。

円珍は、これまでの文脈を受けて、次のように言う。

今の『論』に云く、「菩薩与記」とは、方便して発心せしむるが故なり。根未だ熟さざる前に、方便摂引して、仏種を殖えしむ。是れ菩薩の慈なり。若し他の釈を作らば、永く難治と為す。大略を釈し見んぬ。²⁶⁸

円珍は、『法華論』の云う「菩薩、記を与う」とは、決定・上慢を発心させるために、菩薩が慈悲によって与える記であると解釈した。四種声聞授記の記述に対して、円珍は「大略」として、このように自身の解釈の基本的立場を明らかにしている。

『法華論』には、根未熟の決定・増上慢に菩薩記が与えられると説かれているが、法相宗ではこの如来記を与えられなかった者たちを、五性各別の立場から永不定仏者であると解釈して、『法華論』によって法華経の二乗作仏を否定した。一方、天台宗の円珍は、如来記を授けられた者は、過去において常不輕菩薩から菩薩記を授けられた者であり、今日に菩薩記を授けられた者は、未来に如来記を授かる者であると解釈して、『法華論』によって法華経の二乗作仏を肯定した。天台教理学の六即説と三世的な観点によって『法華論』を解釈した円珍の教説からは、天台教学における種熟脱の三益²⁶⁹の思想が窺える。

第三節 卷第七末における天台章疏等の引用

四種聲聞授記の一節に対する円珍の注釈・引用のうち、基本的解釈の立場を明かしている大略の注釈部分を、前節では具体的に検討した。ここでは『論記』卷第七末全体の論述構成について触れておきたい。まず、卷第七末全体の論述構成を、順序に従って以下に一覧として示す。なお『智全』に依って『法華論』が会合されている毎に区切って示した。

『法華論記』卷第七末の全注釈構成一覧

①智全会入の『法華論』（二二〇頁下三―五行目）三行

²⁶⁸ 原文は「今論云。菩薩与レ記者。方便令ニ発心ニ故。根未レ熟前方便摂引令レ殖ニ仏種ニ。是菩薩慈。若作ニ他釈ニ永為ニ難治ニ。大略釈見」『智全』卷上、二二八頁下一七行目―二二九頁上二行目。

²⁶⁹ 種熟脱の三益 下種・調熟・得脱。下種は、衆生に経を信じるように種子を下すこと。調熟は、衆生の機根を養成して経を信じるように心を調えて機を熟すること。得脱は、機が熟したのを見て衆生に解脱を得させること。

② 円珍の注釈（二二〇頁下六一―四行目） 九行

① 智全会入の『法華論』（二二〇頁下一五行目―二二一頁上二行目） 五行

② 円珍の注釈（二二一頁上三行目―下四行目） 十九行

③ 基『玄賛』（二二一頁下五―六行目） 二行

④ 円珍の注釈（二二一頁下六行目） 一行

⑤ 湛然『五百問論』（二二一頁下六一―六行目） 十一行

⑥ 湛然『文句記』（二二一頁下一六行目―二二三頁下一行目） 二十行

⑦ 智顗説・灌頂記『法華文句』（二二二頁下二―四行目） 三行

⑧ 湛然『文句記』（二二三頁下五―九行目） 五行

⑨ 円珍の注釈、智顗説・灌頂記『法華玄義』の引用（二二三頁下九―一三行目） 五行

⑩ 智顗説・灌頂記『法華文句』（二二三頁下一四―一七行目） 四行

⑪ 湛然『文句記』（二二三頁下一七行目―二二三頁上六行目） 七行

⑫ 智顗説・灌頂記『法華文句』（二二三頁上六一―一〇行目） 五行

⑬ 円珍の注釈（二二三頁上一〇行目） 一行

① 智全会入の『法華論』（二二三頁上一―一六行目） 六行

② 円珍の注釈：法華経「五百弟子品第八」「人記品第九」の引用あり。（二二三頁上一七行目―下一五行目） 十六行

① 智全会入の『法華論』（二二三頁下一六一―一七行目） 二行

② 円珍の注釈（二二四頁上一―六行目） 六行

③ 湛然『文句記』（二二四頁上六一―八行目） 三行

④ 円珍の注釈（二二四頁上八行目―下六行目） 十六行

※四種声聞授記の記述に対する注釈²⁷⁰

- ①智全会入の『法華論』（二二四頁下七―八行目）二行
- ②円珍の注釈：『大般涅槃經』、法華經「法師品第十」「藥王品第二十三」の引用あり。（二二四頁下九行目―二二五頁上二行目）十一行
- ③智顗説・灌頂記『法華文句』（二二五頁上二―九行目）八行
- ④湛然『文句記』（二二五頁上九行目―下四行目）十三行
- ⑤基『玄贊』（二二五頁下四―八行目）五行
- ⑥湛然『五百問論』（二二五頁下八―九行目）二行
- ⑦円珍の注釈（二二五頁下九―一〇行目）二行
- ⑧法華經「提婆達多品第十二」（二二五頁下一〇―一六行目）七行
- ⑨円珍の注釈（二二五頁下一六行目―二二六頁上一四行目）十六行
- ①智全会入の『法華論』（二二六頁上一五―一七行目）三行
- ②円珍の注釈（二二六頁下一―五行目）五行
- ③法華經「常不輕菩薩品第二十」（二二六頁下五―七行目）三行
- ④円珍の注釈（二二六頁下七―九行目）三行
- ⑤智顗説・灌頂記『法華文句』（二二六頁下九―一三行目）五行
- ⑥湛然『文句記』（二二六頁下一三行目―二二七頁下一行目）二十三行
- ⑦智顗説・灌頂記『法華文句』（二二七頁下二―四行目）三行
- ⑧湛然『文句記』（二二七頁下四―一七行目）十四行
- ⑨円珍の注釈（二二七頁下一七行目―二二八頁上三行目）四行

- ①智全会入の『法華論』(二三六頁上二三行目―下二行目) 七行
- ②円珍の注釈(二三六頁下三一―三行目) 十一行
- ③湛然『五百問論』(二三六頁下一四―一六行目) 三行
- ④円珍の注釈：法華經「藥草品第五」の引用あり。(二三六頁下一六行目―三七頁上二行目) 十四行
- ⑤法海『六祖壇經』²⁷¹(三七頁上二行目―三八頁上一行目) 二十四行
- ⑥円珍の注釈：三平等を釈し竟んぬ。(三八頁上一―五行目) 五行
- ⑦円珍の注釈：これより十無上を釈す。(三八頁上六―一七行目) 十二行

①智全会入の『法華論』(二三八頁下一―二行目) 二行

②円珍の注釈(二三八頁下三一―八行目) 六行

右の『論記』巻第七末の全注釈構成一覽を一見してもわかるように、円珍の天台章疏引用頻度は実に高く、特に湛然の『文句記』および『五百問論』の引用頻度と分量には特筆すべきものがあり、『論記』における湛然説重視の立場は注目される。

²⁷¹ 円珍の引用する『六祖壇經』と対応する箇所を、『大正蔵』第四十八巻所収の『南宗頓教最上乘摩訶般若波羅蜜經六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經』で示すと、以下の通り。

又有一僧。名法達。常誦法華經七年。心迷不知正法之處。經上有疑。大師智惠廣大。願爲時疑。大師言。法達。法即甚達。汝心不達。經上無癡。汝心自邪。而求正法。吾心正定。即是持經。吾一生已來不識文字。汝將法華經來對。吾讀一遍。吾問即之。法達取經到對。大師讀一遍。六祖問已即識佛意。便汝法達說法華經。六祖言。法達。法華經無多語。七卷盡是譬喻內緣。如來廣說三乘。只爲世人根鈍。經聞公明。無有餘乘。唯一佛乘。大師。法達。汝聽。一佛乘莫求二佛乘迷却。汝聖經中何處是一佛乘。汝與說。經云。諸佛世尊唯汝一大事因緣故出現於世已上十六家是正法法如何解。此法如何修。汝聽吾說。人心不思。本源空寂。離却邪見。即一大是因緣。內外不迷。即離兩邊。外迷看相。內迷著空。於相離相。於空離空。即是不空。迷吾此法。一念心開。出現於世。心開何物。開佛知見。佛猶如覺也。分爲四門。開覺知見。示覺知見。悟覺知見。入覺知見。開示悟入上一處入即覺知見。見自本性即得出世。大師言。法達。悟常願。一切世人心地。常自開佛知見。莫開衆生知見。世人心愚迷造惡。自開衆生知見。世人心正起智惠觀照。自開佛智見。莫開衆生智見。開佛智見即出世。大師言。法達。此是法達經一乘法。向下分三。爲名人故。汝但於一佛乘。大師言。法達。心行轉法華。不行法華轉。心正轉法華。心邪法華轉。開佛智見轉法華。開衆生智見被法華轉。大師言。努力依法修行。即是轉經。法達一聞言下大悟。涕淚悲泣自言。和尚實未僧轉法華七年。被法華轉。已後轉法華。念念修行佛行。大師言。即佛行是佛其時聽入無不悟者。(『大正蔵』第四十八巻、三四二頁下四行目―三四三頁上七行目)

当該箇所に関する言及としては、奥野光賢「二〇〇二」が『論記』巻第七末で引用している湛然『文句記』の、

論許此菩薩知一切衆生悉有佛性。故凡見者皆往禮之。此四衆中豈無滅種而妄說之。若具有者。論文不說。則過在天親。若唯識說正乃過在不輕及在於佛。而不先責不輕之過。猶却以爲弘經之人。豈有誤宣誤記之失。令現生後淨六根耶²⁷³。

という記述に注目しており、

この『法華文句記』の一文は、次節でも述べるように我が国におけるいわゆる三一権実論争に終止符を打ったとされる恵心僧都源信の『一乗要決』大文第一でも相
当の重きをもって引用されている。この他、『一乗要決』には数多くの『法華論』からの引用が認められるが、ここでは源信以前に円珍がすでにこの『法華文句記』
の記述に着目していたという事実のみを指摘しておきたい²⁷⁴。

と述べている。

巻第七末においては、「今案ずるに……」と述べてから円珍が独自の解釈を示す所よりも、圧倒的に湛然や智顗説・灌頂記などの天台章疏からの
引用が、全体を占める割合が高かった。わずかに智度の『義纘』を引用している部分もあるが、基本的には湛然の注釈書および智顗説・灌頂記
の注釈書の存在感が大きい。巻第七末において、基『玄賛』を引用している部分では、『玄賛』の文に続けるようにして、必ず湛然『五百問論』
を引用しており、これによって『玄賛』の説に反論する形をとっている。また巻第七末の後半においては「自宗の解釈は、具に上に説くが如し」
²⁷⁴とそれまでの注釈を一旦区切り、「今他釈を示して、妙義を助解す」²⁷⁵と述べて、『六祖壇経』の説を二十四行²⁷⁶にもわたって引用している点
も注目される。

『智全』巻上、二二七頁上五—九行目。

奥野光賢「二〇〇二」二五五頁。

原文は「自宗解釋。具如上説」『智全』巻上、一三七頁上一行目。

原文は「今示他釋」助「解妙義」『智全』巻上、一三七頁上一二行目。

『智全』巻上、二二七頁上一二行目—二三八頁上一行目。

『論記』は『六祖壇経』の依用が確認される著述としては最古の部類に入るものである。拙稿「二〇一九A」では、『論記』の依用した『六祖壇経』テキストをめぐっ
て、新出資料を含む六本の『六祖壇経』テキストと、『円珍』所引の『六祖壇経』との比較対校を行った。詳しくは、拙稿「二〇一九A」を参照されたい。

小 結

『論記』巻第七末において、円珍は『法華論』の規定する四種声聞について、退菩提心声聞と応化声聞には遠記の果である近記が与えられ、一方、決定声聞と増上慢声聞には近因の記である遠記が与えられる、と解釈していた。

また、円珍は天台教学の六即説によって三世に亘る階次の次第を述べ、第五の分真即に至って近記がなされると主張しており、このような円珍の教学的立場からは、天台における種熟脱三益の思想が窺える。

円珍は、『法華論』の解釈を通して、仏の三世に亘る化導による一切皆成、二乗作仏を主張しており、法相宗の五性各別のな解釈を難じるにあり、天台章疏を抛り所として数多く引用していた。『論記』巻第七末においては、徹底的とも言える円珍による天台章疏の引用が確認され、とりわけ湛然の『文句記』および『五百問論』からの引用については、智顗説・灌頂記『法華文句』からの引用よりも分量的には多いのであり、円珍教学が湛然説に大きく依っていることが看取されるのである。源信の『一乗要決』で相当の重きをもつて引用されている『文句記』の記述を円珍の『論記』ではすでに着目していた、と奥野光賢氏が指摘するように、天台章疏を駆使した円珍の『法華論』研究が、後世の日本天台教学に与えた影響が窺われるのである。

第五章 十無上解釈について

第一節 『法華論』の十無上について

『法華論』では最後に十無上が説かれる。七喻・三平等で説かれたことの他に、十種の無上義によって法華經の經旨が顕現されるという。『法華論』で十無上が説かれる部分の冒頭箇所では、法華經における無上義について、

無上義者。餘殘修多羅明無上義。無上義有十種應知。一者示現種子無上故。說雨譬喻。汝等所行是菩薩道者。謂發菩提心退已還發者。前所修行善根不滅。同後得果故。二者示現行無上故。說大通智勝如來本事等故。三者示現增長力無上故。說商主譬喻。四者示現令解無上故。說繫寶珠譬喻。五者示現清淨國土無上故。示現多寶如來塔。六者示現說無上故。說譬中明珠譬喻。七者示現教化衆生無上故。地中踊出無量菩薩摩訶薩等故。八者示現成大菩提無上者。示現三種佛菩提。一者應化佛菩提。隨所應見而爲示現故。如經皆謂如來出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提故。二者報佛菩提。十地行滿足得常涅槃證故。如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故。三者法佛菩提。謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變故。如經如來如實知見三界之相乃至不如三界見於三界故。三界相者。謂衆生界即涅槃界。不離衆生界有如來藏故。無有生死若退若出者。謂常恒清涼不變故。亦無在世及滅度者。謂如來藏眞如之體。不即衆生界不離衆生界故。非實非虛非如非異者。謂離四種相故。有四種相者是無常故。不如三界見三界者。如來能見能證眞如法身。凡夫不見故。是故經言如來明見無有錯謬故。我本行菩薩道今猶未滿者。以本願故。衆生界未盡願非究竟故。言未滿者。非謂菩提不滿足故。所成壽命復倍上數者。示現如來常命方便顯多數過上數量不可數知故。我淨土不毀而衆見燒盡者。報佛如來眞實淨土第一義諦攝故。九者示現涅槃無上故。說醫師譬喻。十者示現勝妙力無上故。說餘殘修多羅應知。

とあり、種子無上、行無上、增長力無上、令解無上、清淨國土無上、説無上、教化衆生無上、成大菩提無上、涅槃無上、勝妙力無上の十種について、無上の義が法華經に説き明かされているという²⁷⁸。

整理すると、第一の種子無上とは、これを示現するために三草二木喩が説かれる。第二の行無上とは、大通知勝如來の本事のことである。第三の增長力無上とは、長者窮子喩のことである。第四の令解無上とは、衣裏繫珠喩のことである。第五の清淨國土無上とは、多宝如來の示現である。第六の説無上とは、譬中明珠喩のことである。第七の教化衆生無上とは、地中から無量の菩薩摩訶薩が涌出することである。第八の成大

278 277 勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』（『大正藏』第二十六卷、一八頁中二行目—一九頁上九行目）。
田村芳朗「一九六九」六六頁参照。

菩提無上とは、三種仏菩提の示現である。第九に涅槃無上とは、良医治子喩のことである。第十に勝妙力無上とは、法華經の他の諸品を説くことである。

この十種のうち、如来寿命品を解釈する第八の成大菩提無上では、『法華論』がその嚆矢である三身説²⁸⁶（法身・報身・応身）が説かれており、先行研究でも注目されている所である²⁸⁷。河村孝照「二九八九B」では、世親の説く三種仏菩提について、

一に応化仏菩提、二に報仏菩提、三に法仏菩提であり、応化仏とは隨所に応見しうるために示現した仏であり、報仏とは十地の菩薩道を完成して常に涅槃の証を得られている仏であり、法仏とは如来藏真如の体をいい、その性清淨にして涅槃常住であり、清涼にして不變の義をもつ法性をいっただものである²⁸⁸。

と解説している。『法華論』と如来藏思想の關係について、渡辺宝陽「二〇〇三」は、「本書『法華論』には、如来藏思想との關係が隨所に表出している」²⁸⁹とし、その根拠として「积方便品」の「実相と言ふは、謂く如来藏、法身の体、不變の義なるが故に」²⁹⁰と「积譬喩品」の「三界の相とは、謂く衆生界即涅槃界なり。衆生界を離れずして、如来藏有るが故なり」²⁹¹の文を挙げている²⁹²。なお『法華論』は、注釈の全体にわたって世親が属する瑜伽行派の用語と思想とが散りばめられており、とりわけ『大乘莊嚴經論頌』からの援用が多い、という説もある²⁹³。

第二節 円珍の十無上解釈

279 田村芳朗「一九六九」には「四世紀ごろまでは右のような二身説がつづくが、ヴァスバンドウの『法華經論』には、三身説が見えてくる。応身・法身・報身の三つである。応身は具体性をおびているが有始終、法身は無始無終の普遍性にとむが抽象的、そこで両者の長短をおぎなうべく報身が立てられるにいたったのである。報身は、いわば普遍的にして具体的なるものである。因行果徳身といわれるゆえんである。仏身論は、三身説が出るにいたって、いちおうの完成を見たといえよう」（九四頁）とある。

280 芭米地誠「一九八八」、河村孝照「二九八九B」・「一九八九C」、ヴェルノ・ヘリッリス「二〇〇八」。

281 河村孝照「二九八九B」四頁引用。

282 渡辺宝陽「二〇〇三」一三三頁引用。

283 『大正藏』第二十六卷、一五頁中。

284 同上一八頁下。

285 渡辺宝陽「二〇〇三」一三三—一三四頁参照。

286 大竹晋「二〇一」参照。

『論記』では、卷第七末から卷第十末の卷末までかけて、第五の十無上について随文解釈されている。該当部分冒頭において『論記』は、

自下釈十無上義。応知七喻三平即十無上。十種無上義。即三平七喻。何以故。喻平十義是能顯。十種無上是所顯。鉤鎖相連本無異路。皆約妙法皆約蓮花顯其円明。勿以間然。問。上來經中何故不明十無上義。至雲雨譬方乃釈之。答。摠通而論之。一一首題。一一文句。何時不具十上妙義。觀心性理本来円満。一部始終皆是性心。心無増減。何所間隔。妙法融通何時有壅之。蓮華本淨有何染濁。界如依正平等円満。依此義理無文不明。約機悟論。起自譬說。身子頓悟。一念具足。中下未解。世尊重說。物類相待。能所相招。故待雲雨起種子義。論文分明。此義思之²⁸⁷。

と述べている。円珍は、これまで述べた七喻・三平等と、これから述べる十無上とについて、能顯・所顯の關係にあると解釈している。また、法華経菓草喻品以降において十無上の義が説かれる所以を、問答体を用いながら述べている。続いて、

論無上義者余殘修多羅明已下。第五釈十無上義。理致円満。曾無欠減。故明十種無上義也。文中為三。初摠標。次挙十数。後挙名釈義。除七喻三平正文之外。名為余殘修多羅。以七喻等為能顯法。十無上義即為所顯。如論思之²⁸⁸。

と述べており、ここでも「以七喻等為能顯法。十無上義即為所顯」として、能顯・所顯を規定している。この科段の文の後、十種の無上義について各各随文解釈が施される。一方、『論記』卷第十末の卷末部分では、

論第一序品已下。大文第二摠略料簡。序分七成顯円功德。方便五分破於頓漸。以顯醍醐。余二十六品喻平無上各各分雪。互相顯揚如来妙旨。兩品難解。今為易解。自余望風。処分太易²⁸⁹。

とあり、法華経序品の七成就と、方便品の五示現とは醍醐を顯しており、譬喻品以下の二十六品は、七喻・三平等・十無上によって、如来の玄妙なる旨を顯揚している、と解釈している。これ等の文からは、醍醐である七成就・五示現と、また、能顯の七喻・三平等とそれに続く所顯の十無上という關係を規定した、円珍の『法華論』解釈の一視点が伺える。

『智全』卷上、二三八頁上。

同上二三八頁下。

同上三三〇頁上。

第三節 十無上解釈中に見られる「吉基」について

『論記』における、基『玄賛』に対する批判、及び吉蔵の説に対する批判は、諸先行研究にも詳述されているが、十無上解釈を中心とした本研究の範疇において、新たに検出された特徴的な三箇所（例があったため、以下に挙げておく）。

円珍が、『法華論』の「是故経言如来明見無有錯謬故」²⁹⁰の文を解釈する段には、

他以迷久遠故判流通不識永異。論文甚妙釈者自迷。吉基之輩。釈於此文。多属二乘。法華非妙。幾何痛歟。具如別彈²⁹¹。

とあり、玄妙なる『法華論』の文について自ら迷う者として「吉基之輩」を名指しており、その解釈を弾じている。

また、円珍が、『法華論』の「九者示現涅槃無上故。説医師譬喩」²⁹²の文を解釈する段には、

問。吉基疏中四種良医。与今如何。答。当今四五両品医師。未及六七。況後三医夢所不聞。問。吉云。不煩作三世益物。与経無違耶。答。医他遠行帰已復去。尋便来帰。此事炳然。而不作三世益物之釈者。奪良医術。寔以可責失心之義。応見五怖四聞十義之海。自余不難²⁹³。

とあり、「吉基疏中」云々として、問答体でその解釈を非難しており、とりわけ吉蔵『法華義疏』の「不煩作三世益物」²⁹⁴の文について責め立てている。

また、円珍が、『法華論』の「依過去功德。彼童子有如是力故」²⁹⁵の文を解釈する段には、

吉基何以不識此趣。当知。初地為法眼淨。名同義殊。深允經論。声聞之名。本出小乘。今至法華。迦葉領云。我等今者真是声聞。以仏道声令一切聞。豈与昔同。破

290 勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、一九頁上）
『智全』卷上、二七〇頁下。

291 勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、一九頁上）
『智全』卷上、二八四頁下。

292 『大正蔵』第三十四卷、六〇七頁中。

293 勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、一九頁下）

294 勒那摩提訳『妙法蓮華経論優波提舍』（『大正蔵』第二十六卷、一九頁下）

經之責。彼家難免³⁹⁶。

とあり、經論の趣旨がわからない「吉基」を名指して、「破經之責。彼家難免」と批判している。

この三例においては、「吉基」という言い方で、円珍自ら吉藏と基とを批判している。この「吉基」の用例については、『大正藏』を調査したが、サンスクリットの音写語としての用例が僅かに見られるのみである。管見の限りでは日本天台の諸著作中にも、「吉基」の用例は見当たらず、また円珍の諸著作中においても、「吉基」の用例は『論記』でのみ見られる表現であることがわかった。「吉基」の用例は、先に述べたように十無上の注釈箇所三例が確認できたが、『論記』全体を調べた所、計五例が確認された。この「吉基」の用例に関しては、十無上の箇所を含め、改めて次の節で再検討したい。

第四節 吉藏および基の解釈との比較検討

「吉基」の用例は、『論記』全体で五箇所あり、五示現解釈の部分に二箇所、十無上解釈の部分に三箇所ある。本章ではその五箇所の用例について、対応する羅什訳『妙法蓮華經』³⁹⁷、世親『法華論』（勒那摩提訳）、吉藏『法華義疏』（横超慧日訳³⁹⁸）以下『義疏』、同『論疏』、基『玄贊』（布施浩岳訳³⁹⁹）の文を取り上げた上で示し、『論記』の論述内容を検討する⁴⁰⁰。

「吉基」の用例①（五示現部分）

方便品第二の經文の「所以者何。我以無數方便種種因緣譬喻言辭演說諸法。是法非思量分別之所能解。唯有諸佛乃能知之」⁴⁰¹について、『法華

『智全』卷上、三二二頁上。

清田寂雲「一九七三」には、「全般的にみて本論（法華論）所引の經文は、訳者が明らかに妙本を意識し、之に倣ったものと考えられるが、細部においては決して全同でなくて、妙本と異なる点も少なくないので、我々は論を通して、世親所用の法華經の特色を、ある程度まで知ることが出来るのである」（二七四頁）とある。

『国訳一切經』經疏部第三卷・第五卷に収録。
同上第四卷・第五卷に収録。

丸山孝雄「一九八〇」は、「吉藏の法華經諸撰述のうち『法華玄論』『法華義疏』『法華遊意』『法華統略』が現存し、この順序で著わされたとみられている。また、前述の如く、天親の『法華論』（菩提留支訳）の註釈書たる『法華論疏』があり、これは『法華遊意』の後に著わされたといわれる」（四四一頁）とある。

『大正藏』第九卷、七頁上。

論』は「説者、如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喩言辭演說諸法如是等。種種因緣者、謂三乘。彼三乘者、唯名字章句說非有實義故。以彼實義不可說故」³⁰²と注釈する。經文について、吉藏『義疏』では、

「所以者何」の下は、上の二門を釈す。初に隨宜門を釈し、次に意趣難解門を釈す。我れ無數の方便を以てとは、或いは邪或いは正或いは順或いは違、悉く是れ善巧なり。故に方便と名く。又悉く一道清淨に悟入せしめんとして種種の化を示す。一道の為に緣由階漸と作るが故に方便と名く。種種の因緣とは、邪正の不同違順等の化を示す所以は、是れ良に衆生の根性一に非ずして道に入ること各各由籍あるに由るが故なり。故に種種の因緣と云う。譬喩言辭をもつて諸法を演說すとは、上には無數の方便を明す。總じて八相成道の正を明し、及び九十六術の邪を示す。或いは調達・善星の違を作し、或いは阿難・羅云の順を示す。故に總じて一切の善巧を明す。今は別して說法の一事を明すなり。說法の内には二門を出でず。一には種種の譬喩、二には種種の言辭なり。無數の方便より種種の說法に至るまでは、總じて釈迦の一切の教を撰す。是の法は思量分別の能く解する所に非ずとは、此は意趣難解の章門を釈するなり³⁰³。

と注釈している。『法華論』の文について、吉藏『論疏』では、

「種種の因緣」は、此れ經を牒するなり。「所謂三乘」とは、「種種の因緣」を釈するなり。「種種の因緣」を以ての故に、三乘を説く。故に三乘を名づけて、「種種の因緣」と為す。又た三乘の入道、各おの由籍有り。故に「種種の因緣」と名づく。「彼三乘者唯有名字」は、解前の章名にして、所謂說なり。又た經を釈する中、「言辭演說」の句なり。「以彼實義不可說故」とは、實義に即ち是れ三無し。言忘慮絶するが故に不可說なり。問う。何故ぞ經の「無數方便」及び譬喩の語を解せざるや。答う。此の二句、後の文に當に釈すべし。又た「無數方便」の上、已に釈し竟んぬ³⁰⁴。

と注釈している。基『玄贊』では、『法華論』の文を引用しながら經文について、

此には釈するなり。論に釈して、種種因緣とは三乘の法を謂ふ、彼の三乘の法は唯名字章句の説にして實義有るに非ざるが故、彼の實義は説く可からざるを以ての故なりと。此の中の意は説けば、我れ方便を以て三乘の法を説く、此の法は唯名字章句有りて別の三体無し、宜しきに随つて三と説く、二乘等の思量し能く解す

302 『大正藏』第二十六卷、一六頁中。

303 『国訳一切經』經疏部第三卷（一四六—一四七頁）を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、四九五頁上。

304 種種因緣。此牒經也。所謂三乘者。釋種種因緣也。以種種因緣故說三乘。故名三乘爲種種因緣。又三乘入道各有由籍。故名種種因緣。彼三乘者唯有名字。解前章名。所謂說也。又釋經中言辭演說之句也。以彼實義不可說故者。實義即是無三。言忘慮絶故不可說也。問。何故不解經無數方便及譬喩語耶。答。此二句後文當釋。又無數方便上已釋竟（『大正藏』第四十卷、八一〇頁中）。

るに非ず、唯仏のみ能く知るなり。此に前に標せる智門の難了を説くなり。三乗の実義は即ち是れ真如、不可説なるが故なり。下は依何等即ち仏の智慧なり³⁰⁵。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、經文を引用しながら『法華論』の文について、

四時八教、悉く引撰の爲なり。皆な仮の名句にして、仏の意を談ぜず。故に実義無し。經の下文に「但だ仮の名字のみを以て、衆生を引導す」³⁰⁶と云う。即ち其の文なり。『論』に「彼の実義は不可説なるを以ての故なり」とは、乗の実義を示す。下の經文に云く、「仏の智慧を説くが故に、諸仏の世に出でたもうは、唯だ此の一事のみ実にして、余の二則ち真に非ず」³⁰⁷と。即ち其の意なり。四河八味、皆な一味に帰す。所謂仏海の一解脱味、一源一醎、純一無雜、九乘未だ此の実を聴聞するに堪えず。故に法華の前、未だ曾て之を説かず。故に「彼の実義は不可説なるを以ての故なり」と言う。我れ方便を以て、權に是の法を説く。爾前、未だ説かず。而今、權を歎ずれば、動執生疑して、所趣を知らず。故に三教思量分別の能く解する所に非ず。唯だ仏と仏とのみ乃ち能く了知す。稟教の者、三を謂えども、諸仏、一を知るのみ。『論』の「実義」の文、經の下の方を述べ、『論』の仮權の文、經の上の方を述べ。三權一実、星星、目に在り。吉基、何を以てか大陽を見ざる。怪しきかな、怪しきかな³⁰⁸。

と注釈している。円珍は、「三權一実、星星、目に在り。吉基、何を以てか大陽を見ざる。怪しきかな、怪しきかな」と述べており、吉藏と基を纏めて批判している。前川健一「二〇〇五」は、この箇所について考察しており、「この円珍の解釈に立つと、三乘方便・一乘真实（三權一実）が『法華論』そのものに記されていることになる。そこから、『法華論』を依用しながら三乘真实を主張する基（及び吉藏）に対して、最初に提示した文のような罵倒がなされることになる（もつとも、基や吉藏が、円珍の理解していたような三乘真实論者であるか否かは議論の余地があるが）」³⁰⁹と述べている。

305 『国訳一切經』經疏部第四卷（一六六頁）を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、七〇九頁下―七二〇頁上。

306 『妙法蓮華經』方便品第二の引用。原文は「但以假名字 引導於衆生」（『大正藏』第九卷、八頁上）。

307 同上の引用。原文は「說佛智慧故 諸佛出於世 唯此一事實 餘二則非眞」（『大正藏』第九卷、八頁上）。

308 四時八教悉く引撰。皆仮名句不談「仏意」故無「実義」。經下文云「但以仮名字引導於衆生」。即其文也。論以彼実義不可説故者。示「三乘実義」。下經文云。說「仏智慧」故諸仏出於世。唯此一事実。余二則非眞。即其意也。四河八味皆歸「一味」。所謂「仏海」一解脱味。一源一醎純一無雜。九乘未堪「聴聞此実」。故法華前未會説之。故言「以彼実義不可説故」。我以「方便」權説「是法」。爾前未説。而今歎「權動執生疑不了知所趣」。故非「三教思量分別之所能解」。唯仏与「仏」乃能了知。稟教者。謂「三諸仏知」一耳。論実義文述「經下句」。論仮權文述「經上句」。三種一実。星星在「目」。吉基何以不「見」大陽。怪哉怪哉（『智全』卷上、一六一頁上―下）。

309 前川健一「二〇〇五」四九頁。

「吉基」の用例②（五示現部分）

方便品第二の經文の「舍利弗。如来但以一仏乗故為衆生說法」³¹⁰について、『法華論』は「令住者、如經舍利弗如来但以一仏乗故。為衆生說法」³¹¹と注釈する。經文について、吉藏『義疏』では、

如来は但一仏乗を以ての故に、衆生の為に法を説きたまう、余乗の若しは二、若しは三あることなしとは、此の文の來ることある所以は、上の三句の義を釈成せんが為なり。良に道理は唯一のみあつて道理に三なきに由つて、是の故に諸仏唯一事の為の故に出世したまい、唯一人を教えんが為にして、乃至諸の所作あるも皆一事を顯さんが為なり。此の文に二句あり。第一句は、道理唯一のみあるが故に諸仏一理に依つて但一乗を説きたまうことを明す。故に、但一仏乗を以て衆生の為に法を説きたまうと云うなり。余乗の若しは二、若しは三あることなしとは、上には道理唯一仏乗のみありと明し、今は道理余乗あることなしと明す。余乗とは則ち縁覺と声聞との乗なり。縁覺乗を第二となし、声聞乗を第三となす。故に余乗の若しは二、若しは三あることなしと云う。問う。何が故に然ることを知るや。答う。数の次第にて、一二三と謂う。上に既に一仏乗を以てと云う。是の故に今は第二乗第三乗あることなしと明す。此は是れ上より数えて以て下に至るが故に次第とするなり。前に仏乗はありと明す所以は、上の唯一事のみありと云うを釈成せんと欲すれば、故に前に唯一のみありと明すなり。文相歴然たり、応に更に異釈あるべからず³¹²。

と注釈している。『法華論』の文について、吉藏『論疏』では、

既に唯だ一仏乗のみと称して余乗有ること無し。即ち二乗人等をして仏乗に住せしめ、余乗に住せず。故に住と云うなり。又た仏意門を釈して、一乗を説く所以は、一切衆生をして一仏乗に住せしめんと欲するが故なり。下の偈に、「仏自ら大乘に住して、其の所得の如きは、定慧の力もて莊嚴し、此れを以て衆生を度したまう」と云うが如きなり。仏、既に自ら大乘に住して、還た衆生をして仏の住する所に住せしむ。故に「住せしむ」と云うなり。亦た『涅槃』に「復た一行有りて、是の如来行、所謂大乘の般涅槃」³¹³と云うが如し。仏、大涅槃に住して、衆生の為に説法し、衆生をして住せしむるなり³¹⁴。

『大正蔵』第九卷、七頁中。

『大正蔵』第二十六卷、一六頁下。

『国訳一切經』經疏部第三卷（一五〇頁）を引用。原文は『大正蔵』第三十四卷、四九六頁上—中。

『大般涅槃經』聖行品第十九の引用。原文は「復有一行是如来行。所謂大乘大涅槃經」（『大正蔵』第十二卷、六七三頁中）。

既稱唯一佛乘無有餘乘。即令二乘人等住於佛乘不住餘乘。故云住也。又釋佛意門所以說一乘者。欲令一切衆生住一佛乘故也。如下偈云佛自住大乘如其所得定慧力莊嚴以此度衆生也。佛既自住大乘。還令衆生住佛所住。故言令住也。亦如涅槃云。又有一行。是如来行所謂大乘大般涅槃。佛住大涅槃與衆生說法令衆生住也（『大正蔵』

と注釈している。ここでは『大般涅槃經』を引用している。經文について、基『玄贊』では、

梵本を勘うるに第二第三無しと云い、今之れを翻じ略するが故に無二亦無三と云うなり³²⁰。(中略)此には与記の中の第四にて一乗に住せしむるなり。此の一乗を以て衆の為に法を説き、都べて第二の独覺、第三の聲聞は無し。勝從り劣に至りて次第を為すが故にして、修習の浅深難易を以て次第と為さざるなり。故に此の經の中の第一周に余の二は則ち真に非ずと云い、第二周に密かに二人を遣わすと云い、第三周に息処の故に二を説くと云う。三を説かざるが故に是れ總じて三乗を無しとせざるを知る、但応に今の所説の義の如くなるべきなり。彼の所修の教理行果を会して今の大因と為し大乘に住するを勧むるなり³²¹。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、經文を引用しながら『法華論』の文について、

問う。或る云く、「梵本を勘うるに第二第三無しと云い、今之を翻じ略するが故に無二亦無三と云うなり」³²²と。今家の会通、如何。

答う。此れ二家を会して、妄りに偽釈を立つ。言を為すに足らず。文に「願わくは、我等に三種の宝車を賜え」³²³と云うは、三を求めて三を許す。仏は方便力を以て示すに、三乗教を以てし、三は皆な方便、皆な權、皆な素なり。故に知んぬ、白牛、三の中の一に非ざることを。若し此の文を改めて、第二第三無しと云わば、亦た当に改めて「願わくは、我等に第二第三を賜え」と云うべきや。五本の經、二本の論、未だ曾て第の字を見ず。怪しきかな、爾許の三藏と吉基とは、何なる怨有りて第の字を置かざるや。更に何なる謀を懷きて、梵本に依らずして、略して第の字を去るや。若し偈頌に存略せば、長行応に載すべし。若し一人之を略さば、六人添うて合す。何を以てか一意に略して第の字を去ぬ。明かに知んぬ、爾許の翻經三藏の賚らす所の梵本、混りて第の字無きことを。公の勘うる所の本、応に是れ自ら出すべし。今家、經を釈するに、且く漢本に依る。爾、梵本に據りて、唯だ独り自ら用いて妨ぐることを得ず。今家、經に依りて無二無三を釈するなり。爾、若し翻訳せば、賚らす所の梵本、方に応に他義なるべし。未翻已前ならば、汝の義據ること無し。「唯だ此の一事のみ実ならば、余の二は則ち真に非ず」³²⁴と。其の義、大いに異なり。以て証と為すこと莫れ。何を以てか知んことを得ん³²⁵。

第四十卷、八二一頁下。

『国訳一切經』經疏部四（一八七頁）を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、七一五頁中。

同上（一九〇—一九一頁）を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、七一六頁下。

『玄贊』卷第四本の引用。原文は「勘梵本云無第二第三。今翻之略故云無二亦無三也」(『大正藏』第三十四卷、七一五頁中)。

『妙法蓮華經』譬喻品第三の引用。原文は「願賜我等三種寶車」(『大正藏』第九卷、一四頁下)。

『妙法蓮華經』方便品第二の引用。原文は「唯此一事實餘二則非真」(『大正藏』第九卷、八頁上)。

問。或云。勘「梵本」。云「無第二第三」。今翻「之略」。故云「無二亦無三」也。今家会通如何。答。此会「二家」妄立「偽釈」。不「足」為「言」。文云「願賜我等三種寶車」

と注釈している。円珍は、「五本の経、二本の論、未だ曾て第の字を見ず。怪しきかな、爾許三藏と吉基とは、何なる怨ありて第の字を置かざるや」と述べており、吉蔵と基を纏めて批判している。「五本の経、二本の論」とは、法華経と『法華論』を指したものであろうか。

ここで円珍が言う「或云」は、基『玄賛』のことである。『玄賛』には「梵本を勘うるに第二第二無しと云い、今之れを翻じ略するが故に無二亦無三と云うなり」とあり、これについて円珍は「妄りに偽釈を立つ」と難じている。また、法華経譬喩品第三の「願わくは我等に三種の宝車を賜え」の文を引いて、三乘方便を強調し、「白牛、三の中の一に非ず」と述べる。続いて、「第」という字は見たことがないし、吉蔵も基も実際に「第」の字を用いていないではないか、と疑問を呈している。このことに関する吉蔵の記述は検出できなかったが、円珍はここでも「吉基」として批判している。

「吉基」の用例③（十無上部分）

如来寿命品第十六の经文の「如斯之事。如来明見無有錯謬」³²¹について、『法華論』は「是故経言如来明見無有錯謬故」³²²と注釈する。经文について、吉蔵『義疏』では、

三界の三界を見るが如くならずとは、凡夫は三界を見るが故に三の三を見ず。如来は三界を見、又能く三の三を見たまう。故に法華論に云く、三界の三界を見るが如くならずとは、如来は真如法身を能く見、能く証したまえり。凡夫は見ること能わざるが故に。是の故に経に、如来明かに見て錯謬あることなしと云うが故に」³²³

と注釈している。『法華論』の文について、吉蔵『論疏』では、

者。索^レ三許^レ三。仏以^レ三方便力^レ示以^レ三乘教^一。三皆方便皆權皆索。故知白牛非^レ三中^一。若改^レ此文^二云無^レ第二第三^一亦當^レ改云^二願賜我等第二第三^一耶。五本経二本論未^レ曾見^レ第二之字^一。怪哉爾許三藏与^レ吉基^一有何怨^レ不^レ置^レ第字^一耶。更懷^レ何謀^レ不^レ依^レ梵本^一而略去^レ第字^一。若偈頌^レ存略長行^レ應^レ載。若一人略^レ之六人合^レ添。何以一意略去^レ第字^一。明知爾許翻經^二三藏所^レ實梵本混無^レ第字^一。公所^レ勘本^レ是出自^一。今家釈^レ経且依^レ漢本^一。爾據^レ梵本^一。唯独自用而不^レ得^レ妨。今家依^レ経釈^二無^レ二無^一三也。爾若翻訳所^レ實梵本方^レ他義^一。未翻已前^{ナラハ}汝義無^レ據。唯此一事実^{ナラハ}余二則非^レ真。其義大異。莫^レ以^レ為^レ證。何以得^レ知『智全』卷上、一七二頁上一下。

『大正蔵』第九卷、四二頁下。

『大正蔵』第二十六卷、一九頁上。

『国訳一切経』経疏部第五卷（六一―六二頁）を引用。原文は『大正蔵』第三十四卷、六〇六頁上。

此れ第三句にして、長く一經を取りて第五句を証するなり^{324b}。

と注釈している。『玄賛』では、『法華論』を引用しながら經文について、

法身を証するに由るが故なるも然も真理には本此の事無きなり。何の所以有りてか能く為に説示して皆虚しからざるや。実の如く此の真理を見るに由るが故なり。此に五句有り。如実に見るの言は五處を貫通す。(中略)第五句は仏の内証は凡の所得に非ざるに依りて以て法身を顯すなり。論に云く、「不如三界見三界とは、如来は真如の法身を能く見能く証するも凡夫は見ざるなり」と。是の故に經には如来明見無有錯謬と言うなり。論には此れを解して唯第五句に属するも、乍く総じて以上の諸句を結ぶに似たり。此の句に説いて、如来の正智の能分明見は三界の妄相の如くならずして能く三界の体性の真如法身を証見すと言うが故に、如来は明に見て錯無しと言うなり^{325a}。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、『法華論』の文について、

今案するに、本師の文中に只だ「他の身事」^{325b}と出づるは、意、随他意の辺を取るなり。若し両亦双取に約さば、亦た得。他は久遠に迷うを以ての故に流通と判ずるに、永異を識らず。論文甚だ妙なれども、釈する者自ら迷う。吉基の輩、此の文を釈するに、多く二乗に属す。法華妙に非ざるは、幾何か痛きか。具に別に弾ずるが如し。又た此の品中、「小法を樂う」³²⁶とは、南岳曰く、「近成を樂うを、樂小法と為す」³²⁷と。准じて知んぬ。七方便の教、及び人皆な是れ小法、亦た是れ小人なることを。論文分明なるが故に此の釈有り。『慈恩鈔』³²⁸の中に説不説を明かして、三四仏に通ず。四仏、『楞伽經』の文を引き、傍らに之を用うるのみ。(其の義、迹に在り。)³³⁰

此第三句。長取一經證第五句也(『大正藏』第四十卷、八二二頁中)。

『国訳一切經』經疏部第五卷(三三六—三三七頁)を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、八三〇頁下—八三一頁上。

『法華文句』卷第九下、釈寿量品には、「同於三界見於三界。皆是隨他意語。名爲或説他身事示他身事」(『大正藏』第三十四卷、一三二頁中—一七一八行目)とある。

『妙法蓮華經』如来寿量品第十六の引用。原文は「見諸衆生樂於小法德薄垢重者」(『大正藏』第九卷、四二頁下)。

未検。南岳慧思(五一五—五七七年)の著作の引用か。

『慈恩鈔』について、前川健一「一九九五(九五頁)では、『論記』の九箇所にその引用が見られる「慈恩」と「進公」について、「慈恩」は道進である可能性が強く、「進公」は道進のことであると考へてはば間違いないであろう。道進についての詳細は不明であるが、或いは大慈恩寺に住した僧であろうか(筆者要約)と述べている。今案。本師文中只出「他身事」者。意取「隨他意」也。若約「兩亦双取」亦得。他以「迷久遠」故判「流通」不「識永異」。論文甚妙釈者自迷。吉基之輩。釈「於此文」。多属「二乘」。法華非「妙」。幾何痛歟。具如「別弾」。又此品中樂「小法」者。南岳曰。樂「於近成」為「樂小法」。准知。七方便教及以人皆是小法。亦是小人。論文分

と注釈している。円珍は「論文甚だ妙なれども、吉基の輩、此の文を釈するに、多く二乗に属す。法華妙に非ざるは、幾何か痛きか。具に別に弾ずるが如し」と述べており、吉蔵と基を纏めて批判している。『義疏』と『玄賛』は、ここで同じ『法華論』の文を引いて注釈している。『義疏』の方で見ると、「三界の三界を見るが如くならずとは、如来は真如法身を能く見、能く証したまえり。凡夫は見ること能わざるが故に。是の故に經に、如来明かに見て錯謬あることなしと云うが故に」という文であるが、円珍は「吉基の輩、此の文を釈して、多く二乗に属す」と批判している。

「吉基」の用例④（十無上部分）

如来寿命品第十六の經文の「譬如良医智慧聰達。明練方藥善治衆病」³³¹について、『法華論』は「九者示現涅槃無上故。說醫師譬喩」³³²と注釈する。經文について、吉蔵『義疏』では、

「譬如良医」の下は、第二に譬說なり。此の譬の大意は、直に父は実に死せざれども狂子を治せんが為に方便して死せりと言う、而も虚妄なし。仏も亦是の如し、其れ実には滅せざれども、罪重の衆生を度せんが為に方便して滅を唱う、而も虚妄なしと明す。煩しく三世益物の譬を作らざるなり。（中略）良医とは、略して三種を明す。一には外道の五通、二には声聞緣覺、三には諸仏菩薩なり。外道は但能く衆生の三空已還の諸の煩惱の病を除く。名づけて下医となす。二乗は能く三界の病を治すれば称して中医となす。諸仏菩薩は能く遍く三界内外の諸病を治すれば名づけて上医となす。故に良医と云うなり³³³。

と注釈している。吉蔵『論疏』では、經文を引用しながら『法華論』の文について、

小乗の灰身滅智、実に無余に入る。此れは是れ上の涅槃有り。今、狂子の為に方便もて三徳の涅槃を滅すと言う。実に永滅に非ざるが故に、是れ無上なり。上に菩提無上を釈して、果の義を謂う。今、涅槃無上を釈して、果果の義を謂う。並びに『涅槃經』と意同じにして、昔に無常及び覆相の常を作して、以て法華を釈するは、一に何なる謬りや。

明。故有「此釈」。慈恩鈔中明「説不説」通「三四仏」。四仏引「楞伽經文」傍用「之耳」。（其義在「迹」）『智全』卷上、二七〇頁下）

『大正藏』第九卷、四三頁上。

『大正藏』第二十六卷、一九頁上。

333 332 331
『国訳一切經』經疏部第五卷（六六頁）を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、六〇七頁中—下。

問う。医師の譬は、是の長行、其の文前に在り。「我が浄土毀れず」³³⁴は、是の偈、其の文後に在り。論主何故ぞ文を回りにて釈するや。

答う。論主、前の三菩提を取りて正果と為し、浄土を依果と為す。此の二、並びに常の義を明かす。故に総じて菩提無上に属す。故に一处に之を釈す。涅槃無上、果の義を明かす。故に後に釈すること在于るなり³³⁵。

と注釈している。経文について、基『玄賛』では、

下は第二段の喩えて二身の常住起滅を説くなり。二有り。初に喩えて常住起滅を説き、後に喩えて問答して此の虚しからざることを弁ず。喩に十二有り。(中略)此の初の二喩は合して是れ初生にして、仏を見て俱に発心せしむるなり。第三と第四の喩は合して是れ第二生にして、根熟の嚴修者は本心を失わずして漸脩し、未熟の懶墮なる者は本心を失いて復退するなり。第五・第六・第七・第八・第九の喩は合して是れ第三生にして、根熟の嚴修者は釈迦仏を見て無学満じ、即ち大心を發して変易生を受け、未熟の懶墮なる者は今仏を見ると雖も而も猶未だ証せずして凡夫位に住するなり。第十・第十一・第十二は合して是れ第四生にして、昔の根未熟の懶墮なる者は弥勒仏に値いて並びに皆道を得て亦大心を發し、先に変易生を受けし根熟の得道に勤むる者も亦彼の仏を見るを得るが故に、並びに見るを得しむと言う。弥勒とは即ち我れなり。異名にて説くが故なり。或は総じて三生を説く³³⁶。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、

問う。吉基の疏の中、四種の良医あり。今と如何。

答う。当に今の四・五両品の医師なるべし。未だ六・七に及ばず。況や後の三医、夢にも聞かざる所をや。

問う。吉云く、「煩しく三世の益物を作らず」³³⁷と。經と違ふこと無きや。

答う。医は他に遠行し、帰り已りて復た去り、尋いで便ち来り帰る。此の事、炳然たり。而も「三世の益物」の釈を作らざるは、良医の術を奪う。寔に以て失心の義を責むべし。応に五怖、四聞、十義の海を見るべし。自余難からず。使者の四依、仏教を伝うるは、具に大疏の如し。

334 『妙法蓮華經』如来寿量品第十六の引用。原文は「我浄土不毀 而衆見燒盡 憂怖諸苦惱 如是悉充滿」(『大正藏』第九卷、四三頁下)。
335 小乘灰身滅智實入無餘。此是有上涅槃。今爲狂子方便言滅三德涅槃。實非永滅故是無上。上釋菩提無上謂果義。今釋涅槃無上謂果義。竝與涅槃經意同。而昔作無常及覆相常以釋法華者一何謬哉。問。醫師之譬是長行其文在前。我浄土不毀是偈其文在後。論主何故迴文釋耶。答。論主取前三菩提爲正果。浄土爲依果。此二竝明常義故總屬菩提無上。故一處釋之。涅槃無上明果義。故在後釋也(『大正藏』第四十卷、八三頁上—中)。

336 『国訳一切經』經疏部第五卷(三三九—三四〇頁)を引用。原文は『大正藏』第三十四卷、八三一頁下。

337 『義疏』卷第十、寿量品第十六注釈箇所の引用。原文は「不煩作三世益物譬也」(『大正藏』第三十四卷、六〇七頁中)。

問う。医師復た去る。事は何時に在るや。

答う。『疏』に云く、「事は涅槃に在り」と。今、『大經』を案ずるに、老比丘の仏双林に、滅を示して復去と名づく。此の義、知るべし³³⁸。

と述べられており、問答形式を以て、吉藏と基の「良医」解釈を批判している。智顗説・灌頂記『法華文句』卷第九下の積寿命量品には、「初良医者、医有十種」³³⁹とあり、十段階の医を規定している。円珍の論述は、この『法華文句』の説に依ったものである。なお、吉藏『義疏』には「良医とは、略して三種を明かす。一には外道の五通、二には声聞緣覚、三には諸仏菩薩なり」とあり、円珍が言うように四種ではないが、基『玄贊』は良医の喩を十二種に分けた上で、初生・第二生・第三生・第四生としているから、四種となっている。円珍は、「答う。（吉・基の解釈は）今の『法華文句』における十段階解釈の」四・五両品の医師に当たる。未だ六・七に及ばず。況や後の三医の夢にも聞かざる所をや」と扱き下ろすように言っている。また、吉藏『義疏』の「煩しく三世益物の譬を作らざるなり」の文を引いた後、「三世の益物の釈を作さざるは、良医の術を奪う。寔に以て失心の義を責むべし」として、吉藏の解釈が經と違っていると非難する。

「吉藏」の用例⑤（十無上部分）

妙莊嚴王本事品第二十七の經文の「彼仏法中有王。名妙莊嚴。其王夫人。名曰淨徳。有二子。一名淨藏。二名淨眼。是三子。有大神力福德智慧。久修菩薩所行之道。（中略）仏説是妙莊嚴王本事品時。八万四千人遠塵離垢。於諸法中得法眼淨」³⁴⁰について、『法華論』は「依過去功德。彼童子有如是力故」³⁴¹と注釈する。吉藏『義疏』では『法華論』に説に依りながら、經文について、

論に依るに、是れ第三に過去の勝功德力なり。能く父の邪見を廻して、發心得記せしむ。即ち是れ善知識の力をもって法華經を弘むるなり。此の品に猶お藥王の弘經を述す。（中略）法眼淨に二あり。一には小乗、是れ初果なり。二には大乘、是れ初地なり。此れ知り難し。但だ衆經に多く法眼は是れ小乗なりと明す。而るに大乘を聞いて小果を悟ることは、人あり鈍根にして大法を聞くと雖も巧方便なきが故に小果を証す。但し小果を証するに、凡そ二種あり。一には本と是れ大乘の人

338 問。吉藏疏中四種良医アリ。与レ今如何。答。当レ今四五両品医師。未レ及レ六七。況後三医夢ニモ所レ不レ聞。問。吉云。不三煩作三三三益物。与レ經無レ違耶。答。

医他遠行帰已復去。尋便来帰。此事炳然。而不レ作三三三益物之釈者。奪良医術。寔以可レ責失心之義。応レ見五怖四聞十義之海。自余不レ難。使者。四依伝三

仏教一者。具如三三三疏。問。医師復去事在何時。答。疏云。事在三涅槃。今案三三三大經。老比丘仏双林示滅名三復去。此義可レ知。『智全』卷上、二八四頁下。

『大正藏』第三十四卷、一三四頁上一九行目。

340 同上第九卷、五九頁下一六一頁上。

341 同上第二十六卷、一九頁下。

の大乘を説くを聞き退いて小果を証す。大品の六十の菩薩の如し。二には本と小乗を学せしが大乘を説くを聞いて小果を証するなり³⁴²。

と注釈している。『法華論』の文について、吉蔵『論疏』では、

「功德勝力」とは、正しく淨藏・淨眼の二童子、諸の三昧を得ることを明かす。又た六度・道品を得、又た神通を得、父の邪見を回す。衆人を引導し、仏に見えて法華を聴受す。故に「二童子有如是力」と言う³⁴³。

と注釈している。基『玄賛』では、『阿毘達磨大毘婆沙論』を引用しながら、經文について、

品の第四段の勝益を結成するなり。対法第九に云く、「無間の道は能く塵を遠ざけ、解脱の道は能く垢を離る」と。二の満に由るが故に法眼淨を得て初果を証するなり³⁴⁴。

と注釈している。一方、円珍『論記』では、基『玄賛』を引用しながら、

慈恩云く、得法眼淨とは、「対法十九に云く、「無間の道は能く塵を遠ざけ、解脱の道は能く垢を離る」³⁴⁵と。二の満に由るが故に法眼を得」³⁴⁶と。〔已上文〕今、宗旨を以て往きて經論を尋ぬるに、其の義灼然たり。『般若經』の中、正性離生に二種の義有り。一に小乗の初果已上に約して離生の位と為す。二に大乘の初地已上に約して離生の位と為す。若し此の義を得ば、部に随て位を判じ、百に一の差うこと無し。吉基、何を以てか此の趣を識らざる。当に知るべし、初地に法眼淨と為るは、名同じく義殊なり。深く經論に允う。声聞の名、本と小乗に出づ。今、法華に至りて迦葉領して云く、「我等今者、真に是れ声聞なり。仏道の声を以て一切を聞かしむ」³⁴⁷と。豈に昔と同じからんや。破經の責、彼の家免れ難し。上來、功德勝力竟んぬ³⁴⁸。

『国訳一切經』經疏部第五卷（一四四—一四六頁）を引用。原文は、『大正藏』第三十四卷、六三〇頁中—六三一頁上。

功德勝力者。正明淨藏淨眼二童子得諸三昧。又得六度道品又得神通回父邪見。引導衆人見佛聽受法華。故言二童子有如是力〔大正藏〕第四十卷、八二五頁下。

『国訳一切經』經疏部第五卷（四一七頁）を引用。原文は、『大正藏』第三十四卷、八五二頁上。

『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第六十四には「彼結盡即阿羅漢果攝故問爲無間道能斷諸結。爲解脱道能斷諸結」〔大正藏〕第二十七卷、三三三頁下）とある。

『玄賛』の引用。原文は「對法第九等云。無間道能遠塵。解脱道能離垢。由二滿故得法眼淨證初果也」〔大正藏〕第三十四卷、八五二頁上）。

『妙法蓮華經』信解品第四の引用。原文は「我等今者。眞是聲聞。以佛道聲。令一切聞」〔大正藏〕第九卷、一八頁下）。

慈恩云。得法眼淨者。対法十九云。無間道能遠塵解脱。道能離垢。由二滿。故得法眼。〔已上文〕今以三宗意往尋經論。其義灼然。般若經中。正性離生有

二種義。一約二小乗初果已上爲「離生位」。二約大乘初地已上爲「離生位」。若得此義。隨部判位。百無差一。吉基何以不識此趣。当知。初地爲法

と述べられている。ここでは円珍が、「吉基、何を以てか此の趣を識らざる。当に知るべし、初地に法眼淨と為るは、名同じく義殊なり。深く經論に允う」という解釈を示した後、信解品の「我等今者、真に是れ声聞なり。仏道の声を以て一切を聞かしむ」の文を經証として挙げ、吉藏と基に対しては「破經の責、彼の家免れ難し」と批判している。

第五節 『叡山大師伝』の記述

釈一乗忠撰『叡山大師伝』には、三論宗、法相宗について触れている箇所があり、天台宗の最澄の立場を含めて、当時の三宗の有り様が伺い知れる。高尾山寺において最澄の講義を聞いた南都三論宗の善議（七二九〜八二二年）が著した謝表には、「時に諸法師等、勅使の口宣を蒙り、謝表を製して云く。沙門善議等言す。（中略）三論・法相の久年の諍いも、渙焉として氷の如くに釈け、照然として既に明なり。猶お雲霧を披いて、三光を見るがごとし。聖徳の弘化よりこのかた、今において二百余年の間、講ずる所の經論、其の数多し。彼れ此れ理を争いて、其の疑い未だ解けず」³⁴⁹と述べたという。

義真に師事した円珍は、最澄からすると孫弟子にあたり、円珍と最澄とは凡そ五十歳ほど年が離れている。円珍が比叡山に登ったのは、最澄没後の時期であるが、『叡山大師伝』によると最澄在世の当時は、奈良南都仏教において三論、法相の激しい対立が続いていたという。最澄は、このような状況下において、經宗の僧としての自負を表明しており、論宗である三論、法相に対して、「本を捨てて末に随うは、猶お上に背いて下に向かうが如きなり。經を捨て論に随うは、根を捨てて葉を取るが如し」³⁵⁰と諫めていた。円珍の活躍した当時がどのような状況であったのかは明らかではないが、最澄が法相宗の徳一（八〜九世紀頃）と激しい論争を行った末、決着がつかなかったことを考えると、南都仏教との勢力争いは円珍の時代にも常にあつたであろう。尊通編『年譜』によると、十二年の籠山修行を終え、比叡山の真言学頭となっていた円珍が、三十四歳の時に、奈良元興寺法相宗の碩徳明詮と、大極殿の最勝会で論議を交わしたことが伝わっており、新進気鋭の円珍が大家の明詮を屈せしめたという³⁵¹。明詮のいた元興寺は、三論宗・法相宗の教学研究拠点であり、かつては、吉藏に師事し日本に三論宗を伝えた慧灌（生没年不詳）、

眼淨³⁵²。名同義殊。深允³⁵³經論³⁵⁴。声聞之名。本出³⁵⁵小乘³⁵⁶。今至³⁵⁷法華³⁵⁸。迦葉領云。我等今者真是声聞。以³⁵⁹三仏道声³⁶⁰令³⁶¹一切聞³⁶²。豈与³⁶³昔同³⁶⁴。破經之責。彼家難³⁶⁵免³⁶⁶。上來功德勝力竟³⁶⁷。『智全』卷上、三三二頁上。

『伝教大師全集』第五卷附録、一一〜一二頁参照。
同上二三頁。

351 尊通編『年譜』には、「（承和）十四年丁卯。師三十四歳。正月。師預³⁵²大極殿吉祥会³⁵³。肆辯入³⁵⁴微。官僚聳³⁵⁵聴。又与³⁵⁶南京明詮³⁵⁷決³⁵⁸大義³⁵⁹。師問難激勵。馳³⁶⁰雷懸³⁶¹

玄奘（六〇二～六六四年）に師事し、日本に法相宗を伝えた道昭（六二九～七〇〇年）などが住していた。論宗の奈良元興寺教学と対峙した、経宗天台宗の学僧たる円珍が、天台教学を以て退くことがなかったであろうことは、碩徳明詮との論議の結末が伝えるところである。

小 結

本章では、『論記』に関する諸先行研究を手掛かりとしながら、『論記』における十無上解釈を中心に円珍説について検討した。その結果、七喻・三平等を能顕とし、十無上を所顕と規定した円珍の『法華論』解釈の一視点が伺えた。また、十無上解釈の範疇においては、円珍自説による「吉基」の用例が、吉蔵と基とに向けられた批判的文脈で用いられており、この表現が円珍の諸著作中において『論記』でのみ見られる独自の表現であることが新たに分かった。『論記』における法相宗の基に対する批判は、三一権実論争との関係から本書の特徴としてこれまでも指摘されているが、一方、本書における吉蔵に対する批判が、どの辺りから起こって来るのかについては、引き続き検討を重ねたい。

『論記』の独自表現である「吉基」は、確認された五箇所すべてにおいて、吉蔵、基の解釈に対する批判的文脈で用いられていたことが確認できた。智顗説・灌頂記『法華文句』巻第九下の积寿命量品において規定された十種の医の解釈に基づく「吉基」批判や、「吉云」「或云」などとして、『義疏』『玄賛』から引用した文に直接批判を加えている箇所などは、批判の方向性が明確であったが、吉蔵と基とを纏めて批判する意図は判然としない。

本章で言及した吉蔵の『義疏』『論疏』について、『論記』の記述内容と関連性が高いのは、『論疏』よりも『義疏』の方であり、これは『論記』の執筆が開始された円珍在唐時の資料入手状況によるものである可能性を指摘しておきたい。

本章での検討箇所における円珍の経文引用や論述態度からは、『叡山大師伝』の伝える最澄が自負していたように、経宗の天台僧として法華経を主軸に置き、且つ伝統的な台家教学を駆使しながら、自宗を宣揚している様子が伺えた。論宗である三論、法相の争いに対して、経宗の立場から諫めていた最澄の思想を、円珍は真に受け継いでいたと考えられる。

河。詮酬答拙洩。詞理共屈。由是名喧「朝野」。是歳勅為「定心院十禪師」。九月円仁法師回「自唐国」。（当「唐宣宗大中元年」）『智全』卷下、一三八四頁下—一三八五頁上とある。

結論

円珍の唐留学では、当時その分野の最高峰であった越州開元寺の良諤や長安青龍寺の法全などから顯教・密教の法を学び、また、日本に伝わっていなかった典籍などを求得して、『大日經義釈』の校勘や『論記』の撰述などに励んだ。在唐中に作成した五種の目録からは、円珍一行の各地における求法の足跡が伺える。その歴遊を通じては、唐の僧俗のみならず、新羅、西域、印度出身の人々との交流もあり、また、日本から来ていた遣唐留学僧の円載との確執や、長安における円覚との出会いもあって、国際性豊かな唐ならではの留学であった。

入唐の数年前には、大極殿の最勝会において元興寺の明詮と論議をした円珍であったが、明詮の属する南都法相宗では、当時までに盛んに『法華論』が研究されていた。円珍の『山王院藏書目録』には、『法華論』の注釈を著したことのある明一や行賀の著作が見えることから、円珍が南都法相宗の学説に関心を寄せ、意識していたであろうことが伺えた。

『開元寺求法目録』によると、円珍が唐へ渡ってから間もない時期に、福州において勒那摩提訳の『法華論』一卷を得ていたことが知られ、また、『福州温州台州求法目録』に見える「隨身」の注記から、円珍が福州で得た『法華論』を長安への旅に携行していたことがわかった。『論記』の撰述に関して記している尊通の『年譜』では、福州において『法華論』を得たことに触れていないが、円珍加筆の『開元寺求法目録』が現存しており、本目録の記載から福州において、吉藏および基の法華經注釈を得ていたのと共に、勒那摩提訳の『法華論』を得ていたことは確実であり、これら福州において求得した文献は、『論記』の撰述に大きく関わるものであったと考えられる。

在唐期間中には修治を完了し得なかった草本の『論記』であったが、佐伯有清「一九九〇A」に「經典の虫」と評されるところの円珍の性格からして、帰朝後に必ずや本書を完成させたと思われる。円珍は、『山王院藏書目録』にある『法華論』および『論記』に関する著作を参照しながら、東塔西谷にある山王院において、今に伝わる十巻本の『論記』を完成させたのではないだろうか。

第二章では、「円珍の引用する『法華論』について」との章題のもと、第一節の第一項では、『法華論』の文献学的研究を始めたとして、ここ二十年ほどの関連研究を回顧し、第二項では『論記』所引の『法華論』テキストなどを含め、『法華論』諸本の本文系統について諸本対校によって検討した。第二節の第一項では、『論記』所引『法華論』の本文系統をめぐる従来の両説を回顧し、第二項では、円珍撰述部分から抽出される『法華論』について、抽出例を示しながら、次節での詳細な検討の備えとした。第三節では、第一節・第二節の内容を受け、『論記』所引の『法華論』を中心に、私に選定した諸本との対校を実施し、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討した。第二章で論じた内容は、本論文付録の「『法華論』諸本対校―円珍『法華論記』十卷所引の『法華論』を中心として―」に依拠している。

金天鶴「二〇二〇」および金炳坤「二〇二二」の研究成果を踏まえて展開した第二章の第一節第二項における増広版の諸本対校では、現在多くの種類がある『法華論』諸本の本文系統の傾向や、古形の勒那摩提訳に近似する『論記』所引の『法華論』の諸本中における位置などをより把握することができた。特に新出の日本古写経本『法華論』の菩提流支訳一卷本については、叡山版に比して古い形を留めており、また、テキストの全体が残っていない子注法華論に比して完本であるため、その資料的意義は極めて大きい。『法華論』諸本の本文系統についての全体的な検討・分析は別稿を期したいが、本論文付録の『法華論』諸本対校は、今後の『法華論』の文献学的研究に少なからず資するものと考ええる。

円珍が『論記』で引用する『法華論』に関して言及している先行研究を網羅し、時系列で確認した所、円珍の依った『法華論』がどの訳本であったのかという問題については、長年に亘って研究者の間で意見が分かれており、未解決の研究課題であったことを再確認した。

帰敬頌と帰命頌を注釈していない『論記』は、吉蔵が『論疏』で用いた『法華論』とは異なるものであるが、『論記』の本文から抽出した『法華論』と完全に一致するテキストは、現存の諸本中には存しない。『論記』所引の『法華論』は、勒那摩提訳と一致する場合が多いが、箇所々々では菩提流支訳一卷本とのみ一致する場合なども確認される。九世紀中葉頃の成立で時代的にも古く、或る特徴を有する『論記』所引の『法華論』テキストを、『法華論』の文献学的研究における諸本対校の一資料として用いることの意義は大きいと思われる。

本研究で、『論記』全十巻から円珍が引用した『法華論』を網羅的に抽出し諸本対校した結果、全体的な傾向として『論記』所引の『法華論』は、「古形の勒那摩提訳」（房山石経本・敦煌本・高麗版）の内、高麗版の勒那摩提訳よりも房山石経本・敦煌本により近似した形のテキストであることが分かった。但し、敦煌本よりも房山石経本・高麗版に一致する場合や、房山石経本とのみ一致する場合や、局所的に福州版とのみ一致する場合などもあるため、前川健一「一九九五」の「敦煌本によく一致する」との指摘は部分的には認められるが、同「二〇〇二」の「勒那摩提訳に近いが、部分的には合致しない」という指摘の方がより適切である。本研究で全体を見た筆者としては、『論記』所引の『法華論』は、勒那摩提訳のうち高麗版よりも房山石経本や敦煌本に近いが、部分的には江南系統本や、また菩提流支訳一卷本に近い場合もある、と指摘しておきたい。『論記』所引の『法華論』が房山石経本の勒那摩提訳と近似していることや、房山石経本の勒那摩提訳が円珍撰『授決集』の「教證二道決二十九」に引用されている『法華論』とよく一致していることについては、本研究で新たに明らかとなった。

また、現行本の『智全』と『日蔵』の『論記』に会入された『法華論』は、注意深く見ると、箇所々々で行文や異本注記が異なることから、それら二種の現行本に会入された『法華論』の底本が同一ではないことを新たに指摘し、そのこととは別に、『智全』会入の『法華論』が『日蔵』会入の『法華論』に比して、脱字が多い傾向にあることも示した。

本研究の結果から、『論記』に関する研究において参照すべき『法華論』テキストは、先ず第一に房山石経本および敦煌本の勒那摩提訳であり、

現行の大正蔵本などの高麗版勒那摩提訳はそれに次ぐものである。また、菩提留支訳二卷本の影響を受けているが勒那摩提訳の古形を一部に伝えており、唯一『論記』所引と一致する箇所も確認された福州版を始めとする江南系統の勒那摩提訳や、『論記』所引に僅かにその要素が確認される菩提流支訳一卷本も、場合によっては参照する必要があるであろう。

第三章では、『法華論』所説の七喻について、円珍『論記』と吉蔵『論疏』の注釈を比較検討した。両者は概ね共通の立場に立ちながらも、注釈の着眼点や語句の扱い方に違いが見られた。また、引用する『法華論』本文にも異同があり、両者が参照したテキストの系統差が示唆された。各喻における解釈の差異を見ると、たとえば火宅譬喻では、両者とも「顛倒」の理解は一致するが、円珍は「対治」や「譬喻」といった語の構成要素にまで踏み込み、字義的解釈を施している点が注目される。繫珠譬喻においては、円珍が化城喩品の十六王子との関連を持ち出し、「過去有善根」の由来を法華覆講に求めるなど、法華経品間の連関に着目する姿勢を示していた。

特に髻中明珠の譬喻では、円珍が「有釈」として明記せずに他説を否定する記述を残しており、文脈上それが吉蔵説を指していると思われることから、円珍の教学的立場の違いが浮かび上がる。また、円珍は「七方便」などの、天台教学の基本的な教理を用いて喩の解釈を展開しており、注釈に天台宗の立場を反映させようとする意図がうかがえる。一方、吉蔵は『法華論』本文に即した逐語的注釈を主とし、教学的背景の説明には比較的慎重であった。

以上の比較からは、円珍が『論記』を通して、天台教学の立場に立つ独自の読解を試みていた様子が明らかとなった。本章で明らかとなった七喻解釈の傾向は、次章で扱う三平等注釈の検討に連続し、教学的特徴のさらなる解明に資するものである。

第四章では『論記』の三平等解釈をめぐって、特に「四種聲聞授記」の注釈に着目し、円珍の解釈を検討した。『法華論』の「三平等」の段で説かれる「四種聲聞授記」は、成仏不成仏に関する記述として古来重要視され、諸学僧に取り上げられた。天台宗では法華一乗の思想に基づく一切皆成の立場から解釈され、法相宗では五性各別の立場から解釈された。一切皆成を標榜する天台宗にとっては、『法華論』で説かれる四種声聞も悉く成仏することが論証されなければならなかった。円珍の『論記』では、天台家伝統の章疏と教理学に依拠して『法華論』を解釈し、法華経の一切皆成・二乗作仏の思想が『法華論』にも読み込めることを説き明かそうとしたことが窺われる。

『論記』における「四種聲聞授記」の注釈は、先ず分量的に特筆すべきものがあり、これは「四種聲聞授記」の記述が、やはり円珍以前から議論の多かった部分であったことを示唆している。成仏論争で重視された『法華論』所説の「四種聲聞授記」を、円珍も重要な記述と認識し、天台教理学の立場から明確な回答を与えることで、法相宗の五性各別を改めて破折しようとしたのではないだろうか。

「四種聲聞授記」をめぐり、『論記』巻第七末の円珍釈では、応化声聞と退菩提心声聞には今日の近記である如来記が与えられ、決定声聞と

増上慢声聞には未来に近記を受けるための遠記が与えられる、とされていた。この円珍の解釈には、種熟脱の思想が窺えるが、近記、遠記という授記について、天台学の六即を駆使して論じているところなどは、円珍自身の論説として特徴的である。また円珍は、四種声聞のうち如来記を与えられなかった声聞たちも菩薩記が与えられるのであって、三世においては一切の声聞が悉く成仏するのである、と解釈していた。「四種声聞授記」の解釈から、二乗作仏を認めなかった法相宗の立場とは反対に、円珍はここで二乗作仏を完全に認めている。円珍の態度としては、あくまでも法相宗の『法華論』解釈についてはこれを認めず、智顗説・灌頂記および湛然撰述などの天台章疏における法華経・『法華論』解釈を熱烈に支持し、一貫して天台教理学を宣揚する立場に立っていた。

奥野光賢氏が指摘するように、最澄と徳一との間で起きた三一権実論争に終止符を打ったとされる源信『一乗要決』で重要視された湛然『文句記』の記述を、日本天台で源信以前の円珍が『論記』巻第七末で既に着目していたが、円珍が重要視したのは『文句記』だけではなく、湛然の『五百問論』も重要視して引用しており、『論記』における湛然説重視の立場は注目される。

第五章では『論記』に関する諸先行研究を手掛かりとしながら、『論記』における十無上解釈を中心に円珍説について検討した所、七喻・三平等を能顕とし、十無上を所顕と規定した円珍の『法華論』解釈の一視点が伺えた。また、十無上解釈の範疇においては、円珍自説による「吉基」の用例が、吉蔵と基とに向けられた批判的文脈で用いられており、この表現が円珍の諸著作中において『論記』でのみ見られる独自の表現であることが新たに分かった。『論記』における法相宗の基に対する批判は、三一権実論争との関係から本書の特徴としてこれまでも指摘されているが、一方、本書における吉蔵に対する批判が、どの辺りから起こって来るのかについては、引き続き検討を重ねたい。

『論記』における「吉基」の用例は、本書中に確認できた五箇所のすべてにおいて、吉蔵、基の解釈に対して批判を行う場合に二人を同時に名指す場面で用いられていた。智顗説・灌頂記『法華文句』巻第九下の积寿量品において規定された十種の医の解釈に基づく「吉基」批判や、「吉云」「或云」などとして、『義疏』『玄賛』から引用した文に直接批判を加えている箇所などは、批判の方向性が明確であったが、吉蔵と基とを纏めて批判する意図が不明瞭であった点などもあり、この点については今後更に検討したい。

吉蔵の著作である『義疏』『論疏』について述べると、『論記』の記述内容と関連性が高いのは、『論疏』よりも『義疏』の方であり、これは『論記』の執筆が開始された円珍在唐時の資料入手状況によるものである可能性について指摘した。

本論の検討箇所における円珍の経文引用や論述態度からは、『叡山大師伝』の伝える最澄が自負していたように、経宗の天台僧として法華経を主軸に置き、且つ伝統的な台家教学を駆使しながら、自宗を宣揚している様子が伺えた。論宗である三論、法相の争いに対して、経宗の立場から諫めていた最澄の思想を、円珍は真に受け継いでいたと考えられる。

「田珍『法華論記』の研究」と題した本研究では、思想研究の基盤となる撰述の背景・文献学的研究を主軸としながら、思想的な問題についても少しく論じた。本論文は、筆者がこれまでに研究を積み重ねてきた『論記』研究の集大成に当るものであるが、浅識非才なるが故に心許ない点が多々あることを承知している。本論文を新たな出発点としつつ、引き続きライフワークとして『論記』の研究を継続していく所存である。

付録

凡例

一、 本諸本対校は、『論記』所引の『法華論』の本文系統について検討することを眼目として、金炳坤「二〇二〇D」などの研究成果に倣いながら、実施したものであるが、諸本対校に用いた資料及び対校の範囲については、金氏の成果（『法華論』序品までの諸本校合が公表されている）とは、その内容と方針が中程度に異なる。

二、 本諸本対校の主たる特徴は、①円珍『論記』全十巻に引用されている『法華論』を網羅的に抽出し提示したこと、②それに伴い方便品以降、卷末までの『法華論』諸本対校を一举に提示したこと、③現行本とは異なる本文内容を有する、近年見出された日本古写経本『法華論』一卷本（菩提流支訳）の内、真福寺本と興聖寺本を対校資料として選定していることなどである。

三、 本諸本対校で用いた十四種の資料については以下の通り。

日本古写経本菩提流支訳（二巻本）

- ①【真福寺本】真福寺大須文庫蔵、菩提流支訳『妙法蓮華經憂波提舍』一卷、元久二年（一二〇五年）以前書写本。日本古写経研究所所持データ。
②【興聖寺写本】興聖寺蔵、菩提流支訳『妙法蓮華經憂波提舍』一卷、院政期書写本。日本古写経データベース所収。拙稿「二〇二二B」も参照。
円弘所引菩提流支訳（二巻本系統、八世紀初頭以前）

- ③【子注法華論】聖語蔵本『法華論經子注』卷上（No.196）、本書中に大字で示された『法華論』を使用。

『特別展 アンニョンハセヨ！元暁法師—日本がみつめた新羅・高麗仏教—』（八四頁）所収の影印を使用。

日真所引本（一五〇一年）

- ④【科註法華論】京都大学附属図書館蔵『科註妙法蓮華經論』六巻、慶安五年（一六五二年）版の刊本。

慶安五年版の底本は、明応十年（一五〇一年）日真書写本。本書中に大字で示された菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華經優婆提舍』を使用。

京都大学貴重資料デジタルアーカイブに掲載の画像（<https://rinda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00017876>）を参照。

江戸期刊行本菩提流支訳（二巻本）

- ⑤【叡山版】身延山大学国際日蓮学研究所蔵、菩提流支訳『妙法蓮華經優婆提舍』一卷、寛永二年（一六二五年）版の叡山版古活字本。

叢書Ⅱ（七一—一〇五頁）に掲載の影印を使用。

活字本に会入の菩提流支訳（二巻本系統）

- ⑥【智全会入本】『智全』卷上所収の『論記』に会入された菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華經優婆提舍』を使用。

- ⑦【日蔵会入本】『日蔵』第二十三卷所収『論記』に会入された菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華經優婆提舍』を使用。

円珍所引本（九世紀中葉）

⑧【論記所引】『智全』卷上所収の『論記』テキストを基本として、『論記』所引の『法華論』を私に抽出。

古形の勒那摩提訳（一巻本）

⑨【敦煌摩提訳】①中国国家図書館編『国家図書館藏敦煌遺書』第一一〇冊所収（二〇三頁下）の断簡、BD11838号（『法華論疏卷上』との表記は誤り）。

②黄永武博士主編『敦煌宝蔵』第二〇冊所収（三〇九頁上―三二二頁下）の首欠本、斯二五〇四号（s.2504）。①の断簡の続きが、②の首欠本。著録年代について、『国家図書館藏敦煌遺書』第一一〇冊には「七〇八世紀。唐写本」（三〇頁）とある。

⑩【房山摩提訳】『房山石経（遼金刻経）伝声虚堂習』所収（三九一―四〇三頁）の勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華経論優波提舍』一卷、遼代（無刻石年代）。

⑪【大正摩提訳】『大正蔵経第二十六卷所収（二〇頁下―二〇頁上）の勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華経論優波提舍』一卷（大正蔵番号一五二〇）、現行本の勒那摩提訳。江南系統勒那摩提訳（一巻本）

⑫【福州摩提訳】宮内庁書陵部蔵、福州開元寺版、勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華経論優波提舍』一卷、宋の建炎二年（一一二八年）刊行。

鎌倉期刊行本菩提留支訳（二巻本）
宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベースに掲載の画像（https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_frame?id=007075_0577）を参照。

⑬【興聖寺刊本】興聖寺蔵、菩提留支訳『妙法蓮華経優波提舍』二巻、鎌倉時代刊行本。日本古写経データベース所収。拙稿「二〇二二B」も参照。

現行本菩提留支訳（二巻本）

⑭【大正留支訳】『大正蔵』第二十六卷所収（二頁上―二〇頁中）の菩提留支共曇林等訳『妙法蓮華経憂波提舍』二巻（大正蔵番号一五一九）。

資料選定の理由については、⑧論記所引との近似が予想される古形の勒那摩提訳系統の⑨⑩⑪（⑪は現行本）、⑨⑩⑪に比して菩提留支訳二巻本の影響を受けているが、勒那摩提訳の一種である⑫、活字本『論記』に会入されている⑥⑦、新出の日本古写経本の①②、また②に関連する鎌倉時代刊本の⑬、叢書Ⅱの成果である菩提留支訳一卷本系統の③⑤、室町期に日真が見た④、現行本の菩提留支訳二巻本の⑭、という各テキストの有する特性を考慮して選んだ。

資料の配列については、⑧論記所引を中心として、その右に⑥⑦の会入本を配置、その右に新旧菩提留支訳一卷本系統（部分的には別系統の特徴も有する）の①②③④⑤を配置、⑧論記所引の左には古形の勒那摩提訳系統の⑨⑩⑪を配置、その左に江南系統勒那摩提訳の嚆矢たる⑫を配置、⑫⑬は⑭との関連が看取されるため⑭の右に配置した。

本諸本対校で選定した十四種の資料の内、①⑦⑧⑩⑫は、金炳坤「二〇二〇D」・「二〇二二A」・「二〇二二B」・「二〇二三」では一度も用いられない資料となる。

四、漢字は、原則として原文通りの字体を用いることに努めたが、入力が困難な異体字・難字などは最も近い字体を用いた場合もある。

五、諸本中に見られる仏教省文章体・略字・俗字は、原文通りに翻刻することに努めたが、敦煌摩提訳の「等」「乗」などの略字については、

入力可能な字体を用いた。

六、誤写・誤刻・衍字と認められる箇所でも、原文通りに翻刻した。

七、行間の書入れや本文中の割注などについては、本文との判別を容易にするため、フォントサイズを小さくするなどの措置を講じ、割注は原文通りに表記した。

八、本付録の注は脚注形式を取り、アラビア数字によって連番を付した。

九、見出しは、先行研究の藤井教公・池邊宏昭（ほか）「二〇〇一」・「二〇〇二」・「二〇〇三」、大竹晋「二〇一」、金炳坤「二〇二〇」・「二〇二一」の科段分けを参考にして付した。

十、字句の相違箇所（異文情報）の表記法は、金炳坤「二〇二〇」二三頁の凡例と、同「二〇二〇」・「二〇二一」などを参考に行っているが、一部の異体字の扱いについては、私に改めた。

幾つかの用例を示すと、「妙・妙」、「洴・法」、「佗・化」、「礼・禮」、「无・無」、「體・躰・體」、「余・尔・爾」、「處・處・處」、「惱・惚・惱・惱」、「旃・旃・彌・弥」、「熒・熒・熟・孰」、「揔・摠・惣・摠・總・摠」などは区別して表記しており、その内「妙・洴・佗」などはその箇所だけを黒・太字で示している。また、例えば「无・無」の異同がある箇所というと、諸本の中の本にだけ「无」が使われているような場合は、その一本の当該字「无」だけを黒・太字にして示したが、その他の諸本の「無」はグレーのまま太字にもしていない。なお、煩雑を避けるため、些細な異体字については適宜統一した。

十一、大正留支訳にのみに異同がある場合、その箇所は菩提留支訳二巻本の特徴として強調するため、その他の諸本の当該箇所も含めて、黒字・太字にして示したが、大正留支訳以外の或る一本（或いは二本程度）にのみ異同がある場合は、その当該箇所だけを黒・太字にし、或いは脱字疑い箇所を用いる全角スラッシュ（／）によって示した。

十二、本諸本対校で用いる『論記』テキストは、園城寺事務所編『智証大師全集（旧版）』巻上所収（一九一八年）本を基本とし、必要に応じて日本大蔵経編纂会編『日本大蔵経（旧版）』第二十三巻所収（一九一七年）本と、日真撰『科註妙法蓮華経論』（慶安五年版）所引の『論記』テキストも参照した。

十三、基本的に『論記』から抽出した『法華論』テキストは網羅的に提示しているが、円珍が『法華論』の同じ箇所を複数回引用している用例の内、それが諸本対校上あまり参考にならない重複である場合には、煩雑を避けるため適宜取捨選択して示している。

十四、『論記』における『法華論』の引用は、ほぼ全文引用に近いものであるが、完全な全文引用ではないため、抽出できない箇所については空白になっている。

十五、『論記』所引の天台章疏・その他の注釈書に引用されている『法華論』は、円珍自身の『法華論』引用ではないため、抽出していない。

十六、『論記』所引の『法華論』テキストは、前後に置かれる字（論」「者」「已下」など）を含めて示し、『法華論』の部分には薄い塗りつぶしを施した。表記上、抽出したテキストが一行で示せない場合には、二行以上を使つて示した。下方に「…」が付されている場合は、その次に提示する文章とテキストが連続していないことを示しており、一方、「…」が付されていない場合は、その次に提示する文章とテキストが連続していることを示している（会人の『法華論』は含めない）。最下方に付した括弧内には、『智全』巻上における頁数・行数を示した。

十七、子注法華論（『子注』巻中は散逸）は、閲覧可能な巻上の全体（聖語藏本 No.1987）と、巻下の一部（特別展 アンニョンハセヨ！元曉法師―日本がみつめた新羅・高麗仏教―）八四頁に影印掲載）のテキストを示した。

十八、真福寺本・興聖寺写本・敦煌摩提訳については、その行間や上下欄外に補入字が確認される場合、本文とは区別して示し、当該箇所の行頭には、それぞれ（真福寺本注墨）・（真福寺本注朱）・（興聖寺写本注）・（敦煌摩提傍書）と記した。真福寺本においては、墨書で書かれている場合と朱書で書かれている場合があるため、墨書の場合には（真福寺本注墨）の欄に記し、朱書の場合には（真福寺本注朱）の欄に記した。

十九、日本古写経本に見られる補入記号は「○」で示したが、真福寺本に見られる朱書の補入記号については、「●」（二重丸）で示した。

廿、真福寺本・興聖寺写本・子注法華論・房山摩提訳・福州摩提訳・興聖寺刊本は、原本各紙の冒頭に当たる箇所、叡山版は、原本の各丁表裏の冒頭に当たる箇所、智全会入本・日藏会入本は、活字本の各巻本末の冒頭に当たる箇所、敦煌摩提訳は、影印本の各頁上下の冒頭に当たる箇所、大正摩提訳・大正留支訳は、『大正蔵』第二十六巻の各頁各段の冒頭に当たる箇所、これら当該箇所の行末に紙数・丁付・頁数・段数のみを（ ）内に示した。科註法華論については、『論記』との関連度の高さから、各文毎に丁付を示した。

廿一、本諸本対校で提示した、真福寺本・興聖寺本（写本・刊本）の翻刻テキストは、真福寺本については初となる本文の全文翻刻であり、興聖寺写本については拙稿「二〇三B」翻刻篇で提示した全文翻刻の改訂版であり、興聖寺刊本については拙稿「二〇三B」翻刻篇で校本として用いたが、全文翻刻としては初めて公表するものである。

『法華論』諸本対校 — 円珍『法華論記』十卷所引の『法華論』を中心として —

首題・撰者・訳者

【真福寺本】	妙法蓮華經	憂波提舍	婆藪槃豆	菩薩造	三藏法師菩提流支	譯 (第一紙)
【興聖寺写本】	妙法蓮華經	憂波提舍	婆藪槃豆	菩薩造照玄沙門都	三藏法師菩提流支	譯 (第一紙)
【子注法華論】	欠					
【科註法華論】	妙法蓮華經	優婆提舍	婆藪槃豆	菩薩造	三藏法師菩提流支共沙門曇林等譯	(卷一、一表)
【叡山版】	法華論		婆藪槃豆 此云天親菩薩造			
	妙法蓮華經	優波提舍		三藏法師菩提流支	奉詔譯 (一表)	
【智全会入本】	妙法蓮華經	優婆提舍	婆藪槃豆	菩薩造	三藏法師菩提流支共沙門曇林等譯	(卷一本、一上)
【日藏会入本】	妙法蓮華經	優波提舍	婆藪槃豆	菩薩造	三藏法師菩提流支共沙門曇林等譯	(卷一本、一上)
【論記所引】	注釈なし					
【敦煌摩提訳】	欠					
【房山摩提訳】	妙法蓮華經論	優波提舍	婆藪槃豆	菩薩造元魏中天竺三藏	勒那摩提共	僧朗等譯 (第二紙)
【大正摩提訳】	妙法蓮華經論	優波提舍	婆藪槃豆	菩薩造元魏中天竺三藏	勒那摩提共	僧朗等譯 (一〇下)
【福州摩提訳】	妙法蓮華經	優波提舍 ¹	大乘論師婆藪槃豆	菩薩造元魏	天竺三藏法師勒那摩提共	僧朗等譯 (第二紙)
【興聖寺刊本】	妙法蓮華經	優波提舍卷上	婆藪槃豆	菩薩造	三藏法師菩提留支	譯 (卷上、第一紙)
【大正留支訳】	妙法蓮華經	憂波提舍卷上大乘論師婆藪槃豆		釋後魏北天竺三藏	菩提留支共沙門曇林等譯	(一上)

帰敬頌

【真福寺本】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	□出勒伽論
【興聖寺写本】	頂礼正覺海 ²	浄法无爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論
【子注法華論】	論曰頂礼正覺海	浄法无爲僧	爲深□智者	開示略伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論 (卷上、第一紙)

¹ 首題の下には、「十一」(帖次番号)、「論本内廣略俱備」、「虚」(千字文函号)の記載がある。

² 興聖寺写本では、帰敬頌が紙背に記されている。拙稿「二〇二二B」三五頁の注九参照。

【科註法華論】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論	(卷一、二表)
【叡山版】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論	
【智全会入本】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毘伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論	
【日藏会入本】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自利他	略出勒伽論	
【論記所引】	注釈なし								
【敦煌摩提訳】	欠								
【房山摩提訳】	なし								
【大正摩提訳】	なし								
【福州摩提訳】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自他利	略出勒伽辯	
【興聖寺刊本】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毗伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自他利	略出勒伽論	
【大正留支訳】	頂礼正覺海	浄法無爲僧	爲深利智者	開示毘伽典	祇虔牟尼尊	及菩薩聲聞	令法自他利	略出勒伽辯	
【真福寺本】	歸命過	未世	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	
【興聖寺写本】	歸命□	□□	□□	弘慈降神力	願施我無畏 ³				
【子注法華論】	歸命過	未世	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	(卷上、第二紙)
【科註法華論】	歸命過	未世	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	(卷一、三裏)
【叡山版】	歸命過	未世	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	
【智全会入本】	歸命過	未來	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	
【日藏会入本】	歸命過	未世	現在	佛菩薩	弘慈降神力	願施我無畏	大悲止四魔	護菩提增長	
【論記所引】	注釈なし								
【敦煌摩提訳】	欠								
【房山摩提訳】	なし								
【大正摩提訳】	なし								

【福州摩提訖】 歸命過去未來世 現在一切佛菩薩 弘慈降神力 願施我無畏 大悲止四魔 護菩提增長
 【興聖寺刊本】 歸命過 未 世 現在 佛菩薩 弘慈降神力 願施我無畏 大悲止四魔 護菩提增長
 【大正留支訖】 歸命過 未 世 現在 佛菩薩 弘慈降神力 願施我無畏 大悲止四魔 護菩提增長

歸命頌

【真福寺本】 經曰歸命一切諸佛菩薩
 【興聖寺寫本】 經曰歸命一切諸佛菩薩⁴
 【子注法華論】 經曰歸命一切諸佛菩薩
 【科註法華論】 經曰歸命一切諸佛菩薩（卷一、三裏）
 【叡山版】 經曰歸命一切諸佛菩薩
 【智全會入本】 經曰歸命一切諸佛菩薩
 【日藏會入本】 經曰歸命一切諸佛菩薩
 【論記所引】 注釈なし
 【敦煌摩提訖】 欠
 【房山摩提訖】 なし
 【大正摩提訖】 なし
 【福州摩提訖】 なし
 【興聖寺刊本】 なし
 【大正留支訖】 なし

序品

法華經本文引用

【真福寺本】 如是我聞一時 佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆万二千人俱
 【興聖寺寫本】 如是我聞一時 佛住王舍城耆闍崛山中与大比丘衆万二千人俱

⁴ 興聖寺寫本では、歸命頌が行間に細字で記されている。

【子注法華論】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆万二千人俱
【科註法華論】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱（卷一、四表）
【叡山版】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【智全会入本】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【日藏会入本】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【論記所引】	注釈なし	
【敦煌摩提訳】	欠	
【房山摩提訳】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆万二千人俱
【大正摩提訳】	如是我聞一時	佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【福州摩提訳】	妙法蓮華經序品第一	如是我聞一時 婆伽婆 佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【興聖寺刊本】	妙法蓮華經序品第一 經曰	如是我聞一時 佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆万二千人俱
【大正留支訳】	妙法蓮華經序品第一	如是我聞一時 佛住王舍城耆闍崛山中與大比丘衆萬二千人俱
【真福寺本】	皆是	阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脱善得慧解脱心善調伏人中大龍
【興聖寺写本】	皆是	阿羅漢諸漏已盡无復煩惱心得自在善得心解脱善得惠解脱心善調伏人中大龍
【子注法華論】	皆是 ⁵	阿羅漢諸漏已盡无復煩惱心得自在善得心解脱善得惠解脱心善調伏人中大龍（卷上、第三紙）
【科註法華論】	皆是	阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脱善得惠解脱心善調伏人中大龍（卷一、四裏）
【叡山版】	皆是	阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脱善得慧解脱心善調伏人中大龍（二裏）
【智全会入本】	皆是	阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脱善得慧解脱心善調伏人中大龍
【日藏会入本】	皆是	阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脱善得慧解脱心善調伏人中大龍
【論記所引】	注釈なし	
【敦煌摩提訳】	心得自在善得	龍（二〇三下） ⁷

5 「大」の右傍に見せ消ち記号が付されている。

6 原本では、「在」が「自」の下に細字で書かれており、後から補入されたものと見られる。

7 中國國家圖書館編『國家圖書館藏敦煌遺書』第一一〇冊の頁番号。

【房山摩提訖】皆是 阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中大龍
【大正摩提訖】皆是 阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中大龍
【福州摩提訖】皆是 阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中大龍
【興聖寺刊本】皆是 阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中大龍
【大正留支訖】皆是 阿羅漢諸漏已盡無復煩惱心得自在善得心解脫善得慧解脫心善調伏人中大龍

【真福寺本】□作者所作已辨離諸重擔逮得已利□諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【興聖寺写本】應作者所作已弁離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【子注法華論】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【科註法華論】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【叡山版】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【智全会入本】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【日藏会入本】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【論記所引】注釈なし
（敦煌摩提傍書） 作

【敦煌摩提訖】應作者／所 有結善得正智心

【房山摩提訖】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【大正摩提訖】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【福州摩提訖】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【興聖寺刊本】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸
【大正留支訖】應作者所作已辨離諸重擔逮得已利盡諸有結善得正智心解脫一切心得自在到第一彼岸

【真福寺本】菩薩摩訶薩八万人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉
【興聖寺写本】菩薩摩訶薩八万人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉
【子注法華論】菩薩摩訶薩八万人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【科註法華論】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉（卷一、五表）

【觀山版】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【智全会入本】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【日藏会入本】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】菩薩摩訶薩八万人□□□多羅三藐三菩提不退轉

【房山摩提訳】菩薩摩訶薩八万人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【大正摩提訳】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【福州摩提訳】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【興聖寺刊本】菩薩摩訶薩八万人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【大正留支訳】菩薩摩訶薩八萬人皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉

【真福寺本】皆得陀羅尼大辨才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【興聖寺写本】皆得陀羅尼大弁才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【子注法華論】皆得陀羅尼大辨才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【科註法華論】皆得陀羅尼大辨才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎（卷一、五表）

【觀山版】皆得陀羅尼大辨財樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【智全会入本】皆得陀羅尼大辨財樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【日藏会入本】皆得陀羅尼大辨財樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】皆得陀羅尼大辯才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【房山摩提訳】皆得陀羅尼大辯才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【大正摩提訳】皆得陀羅尼大辯才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【福州摩提訳】皆得陀羅尼大辯才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【興聖寺刊本】皆得陀羅尼大辨才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【大正留支訳】皆得陀羅尼大辯才樂說轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根常爲諸佛之所稱歎

【真福寺本】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【興聖寺写本】以大慈悲而脩身心善入佛／通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【子注法華論】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【科註法華論】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生（卷一、五表）

【叡山版】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【智全会入本】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【日藏会入本】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【房山摩提訳】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【大正摩提訳】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【福州摩提訳】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

【興聖寺刊本】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生（卷上、第二紙）

【大正留支訳】以大慈悲而脩身心善入佛惠通達大智到於彼岸名稱普聞無量世界能度無數百千衆生

七種功德成就

分段

（真福寺本注朱）

中

【真福寺本】論曰此 法門。初第一品 明七種功德成就

何等爲七一者序分□就二者衆成就三者□來欲說法時至成就

（興聖寺写本注）

示現イ

【興聖寺写本】論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【子注法華論】論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就

何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【科註法華論】論曰此 法門 中初第一品 明七種功德成就

何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就（卷一、五裏）

【叡山版】論曰此經法門中初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就（二表）

【智全会入本】論曰此 法門 初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【日藏会入本】論曰此 法門中初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【論記所引】論此 法門已下…（二上人）

初第一品者…（二上人）

明七種功德成就者…（二上二六一七）

論何等已下…（二下九）

一者序分下…（二下二〇）

【敦煌摩提訳】此 法門 初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【房山摩提訳】此 法門 初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【大正摩提訳】此 法門中初第一品 明七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【福州摩提訳】釋曰此 法門 初第一品 明七種功德成就 應知何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【興聖寺刊本】論曰此經法門 初第一品 示現七種功德成就 何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就

【大正留支訳】釋曰此經法門 初第一品 示現七種功德成就此義應知何等爲七一者序分成就二者衆成就三者如來欲說法時至成就（一中）

【真福寺本】四者 所依説法 隨順□ 儀住成就五者依止説因成就六者大衆 欲聞 現前成就七者文殊師利 答成就

【興聖寺写本】四者 所依説法 隨順威 儀住成就五者依止説因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就

【子注法華論】四者 所依説法 隨順威⁸ 儀住成就五者依止説因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就（卷上、第四紙）

【科註法華論】四者 所依説法 隨順威 儀住成就五者依止説因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就（卷一、六表）

【叡山版】四者 所依説法 隨順威 儀住成就五者依上説因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就

【智全会入本】四／ 所依説法 隨順威 儀住成就五者依上説因成就六者／ 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就

【日藏会入本】四者 所依説法 隨順威 儀住成就五者依上説因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就

【論記所引】注釈なし

8 「織」の右傍に見せ消ち記号が付されている。

【敦煌摩提訖】 四者 所依說法 隨順威儀 住成就五者依止說因成就六者大衆 欲聞法現前成就七者文殊師利 答成就
 【房山摩提訖】 四者 所依說法 隨順威儀 成就五者依止說因成就六者大衆現前欲聞法 成就七者文殊師利 答成就
 【大正摩提訖】 四者 所依說法 隨順威儀 住成就五者依止說因成就六者大衆現前欲聞法 成就七者文殊師利 答成就
 【福州摩提訖】 四者 所依說法 隨順威儀 住成就五者依止說因成就六者大衆 欲聞 現前成就七者文殊師利 答成就
 【興聖寺刊本】 四者 所依說法 隨順威儀 住成就五者依止說因成就六者大衆現前欲聞法 成就七者文殊師利菩薩 答成就
 【大正留支訖】 四者依所 說法威儀隨順 住成就五者依止說因成就六者大衆現前欲聞法 成就七者文殊師利菩薩 答成就

一 序分成就

【真福寺本】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中最勝義成就 (第二紙)
 (興聖寺写本注)

示

【興聖寺写本】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者。現一切諸法門中寂勝義成就故
 【子注法華論】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中寂勝義成就故
 【科註法華論】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中寂勝義成就故 (卷一、六裏)
 【觀山版】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中寂勝義成就故
 【智全会入本】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中最勝義成就故
 【日藏会入本】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中最勝義成就故
 【論記所引】 論文序分下… (二下二三)

論示現二種勝義成就者… (三上九)

何等下… (三上二〇)

論一者已下… (三上二三)

言一切諸法門中最勝者… (三上二三一—二四)

【敦煌摩提訖】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就 應知何等爲二二者示現一切諸法門中寂勝 故 (三〇九上)⁹⁾
 【房山摩提訖】 又序分成就者此法門 示現二種 義成就 何等爲二二者 一切諸法門中最勝 故

9 「又序分成就者…」以降は、黄永武博士主編『敦煌寶藏』第二〇冊の頁番号。

【大正摩提訳】 又序分成就者此法門 示現二種 義成就 何等爲二者示現一切諸法門中最勝 成就故
【福州摩提訳】 又序分成就者此法門中示現二種 義成就此義應知何等爲二者 一切諸法門中最勝義成就故
【興聖寺刊本】 又序分成就者此法門中示現二種勝義成就此義應知何等爲二者示現一切諸法門中最勝義成就
【大正留支訳】 序分成就者此法門中示現二種勝義成就此義應知何等爲二者示現 諸法門中最勝義成就

【真福寺本】 二者示現自在功德義成就 如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 耆闍崛山勝餘諸山 顯此法門最勝義故
【興聖寺写本】 二者示現自在功德義成就故如王舍城義勝於諸餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故
【子注法華論】 二者示現自在功德義成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故 (卷上、第五紙)
【科註法華論】 二者示現自在功德義成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故 (卷一、七裏)
【叡山版】 二者示現自在功德義成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故
【智全会入本】 二者示現自在功德義成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故
【日藏会入本】 二者示現自在功德義成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 耆闍崛山勝餘諸山故顯此法門最勝義故
【論記所引】 論示現自在功德 成就故者…(三下八)

論如王舍下…(三下八)

故言勝 餘一切 城舍…(三下二一一二)

次耆闍崛山勝者…(四上六)

【敦煌摩提訳】 二者示現自在功德 成就故如王舍城 勝 餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法 勝 故
【房山摩提訳】 二者示現自在功德 成就故如王舍城 勝 餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法 勝 故
【大正摩提訳】 二者示現自在功德 成就故如王舍城 勝 餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故¹⁰ (二一上)
【福州摩提訳】 二者示現自在功德 成就故如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 故耆闍崛山勝餘諸山故顯此法 最勝義故
【興聖寺刊本】 二者示現自在功德義成就 如王舍城 勝於諸餘一切 城舍 耆闍崛山勝餘諸山 顯此法門最勝義故
【大正留支訳】 二者示現自在功德義成就 如王舍城 勝於 一切諸餘 城舍 耆闍崛山勝餘諸山 顯此法門最勝義故

10 大正摩提訳は、「顯此法勝故」(敦煌摩提訳と房山摩提訳にあり)の五字が脱文か。

（真福寺本注墨）

王

【真福寺本】

如經如是我聞□時佛住／舍城耆闍崛山中故

【興聖寺写本】

如經 佛住王舍城耆闍崛山中故

【子注法華論】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【科註法華論】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故（卷一、八裏）

【叡山版】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【智全会入本】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【日藏会入本】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【論記所引】

論如經已下：（五上四）

【敦煌摩提訖】

如經 佛住王舍城耆闍崛山中故

【房山摩提訖】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【大正摩提訖】

如經如是我聞一時佛住王舍城耆闍崛山中故

【福州摩提訖】

如經 佛住王舍城耆闍崛山中故

【興聖寺刊本】

如經 佛住王舍城耆闍崛山中故

【大正留支訖】

如經 佛住王舍城耆闍崛山中故

二 衆成就 ○（分段）

【真福寺本】

衆成就者。四種義 成就

【興聖寺写本】

衆成就者有四種義 成就

【子注法華論】

衆成就者有四種義 成就

【科註法華論】

衆成就者有四種義 成就

【叡山版】

衆成就者有四種義 成就

【智全会入本】

衆成就者有四種義 成就

應知何等爲四有¹¹□□數成就二者□□□□□□德□□□四者威儀如法住成就

應知何等爲四種一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法住成就

應知何等爲四一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法住成就

應知何等爲四一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法住成就

應知何等爲四一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法住成就

應知何等爲四一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法住成就

（卷一、九表）

11 「有」は行末に書かれており、墨書で「四」の上に小さい丸印と「有」の右上に挿入符が付されている。

【日藏会入本】	衆成就者有四種義	成就	應知何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	成就
【論記所引】	論衆成就下…（五上七）		論一者數下列（五下二）		
【敦煌摩提訖】	衆成就者有四種義	／／	何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就
【房山摩提訖】	衆成就者有四種義	成就	何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就
【大正摩提訖】	衆成就者有四種義	成就	何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就
【福州摩提訖】	衆成就者有四種義	成就	應知何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就
【興聖寺刊本】	衆成就者有四種義	成就	應知何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就
【大正留支訖】	衆成就者有四種義	故成就	示現應知何等爲四	一者數成就二者行成就三者攝功德成就四者威儀如法	住成就

衆成就 一 數成就

【真福寺本】	一	數成就者謂大衆無數故			
（興聖寺写本注）	一				
【興聖寺写本】	○ ¹²	數成就者謂大衆无数故			
【子注法華論】	一	者數成就者謂大衆无数故			
【科註法華論】	一	數成就者謂大衆無數故（卷一、九裏）			
【叡山版】	一	數成就者謂大衆無數故			
【智全会入本】	一	數成就者謂大衆無數故			
【日藏会入本】	一	數成就者謂大衆無數故			
【論記所引】		論數成就者下…（五下一四）			
		大衆無數者…（五下一四—一五）			
【敦煌摩提訖】		數成就者謂大衆无数故			
【房山摩提訖】		數成就者謂大衆無數故（第二紙）			
【大正摩提訖】		數成就者謂大衆無數故			

¹² 拙稿「二〇二二B」三六頁では、当該箇所（二五行目）の補入記号と「一」の注について見落としている。

【福州摩提訖】 數成就者謂大衆無數故
【興聖寺刊本】 數成就者謂大衆無數故
【大正留支訖】 數成就者諸大衆無數故

衆成就 二 行成就

(真福寺本注墨) 行¹³

【真福寺本】 二者／成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行
(興聖寺写本注) 二

【興聖寺写本】 。 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行

【子注法華論】 二者行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二 諸者¹⁴菩薩脩大乘行

【科註法華論】 二 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行(卷一、十表)

【叡山版】 二 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 謂諸菩薩脩大乘行(二裏)

【智全会入本】 二 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行

【日藏会入本】 二 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行

【論記所引】 論二 行成就者…(六上九)

一者已下…(六上二〇)

諸聲聞者…(六上二一)

言脩小乘行者…(六下四)

論二者下…(六下二一)

諸菩薩者…(六下二二)

脩大乘行者…(七上二)

【敦煌摩提訖】 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行
【房山摩提訖】 行成就者有四種一者 諸聲聞脩小乘行二者 諸菩薩脩大乘行

13 「行」は、「二者」の「者」の右傍に書かれている。
14 「者」の右傍に倒置符が付されている。

【大正摩提訳】 行成就者有四種一者 諸聲聞修小乘行二者 諸菩薩修大乘行
【福州摩提訳】 行成就者有四種一者 謂諸聲聞修小乘行二者 謂諸菩薩修大乘行
【興聖寺刊本】 行成就者有四種一者 諸聲聞修小乘行二者 諸菩薩修大乘行
【大正留支訳】 行成就者有四種一者 謂諸聲聞修小乘行二者 謂諸菩薩修大乘行

（真福寺本注墨） 謂 大乘

【真福寺本】 三者 諸菩薩 神通自在 隨時示現能 行衆行如毘陀婆羅 等十六 賢士 具足菩薩不可思議事
（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】 三者 諸菩薩 神通自在 隨時示現能脩／諸行如毘陀婆羅 等十六 賢士¹⁵ 人具足菩薩不可思議事（第二紙）

【子注法華論】 三者 諸菩薩 神通自在 隨時示現能 行衆行如毘陀婆羅 等十六 賢士 人具足菩薩不可思議事

【科註法華論】 三者 諸菩薩 神通自在 隨時示現能 行衆行如毘陀婆羅 等十六 賢士 具足菩薩不可思議事（卷二、十一裏）

【叡山版】 三者 謂諸菩薩以神通自在力 隨時示現能脩行衆行如毘陀婆羅菩薩等十六 賢士 具足菩薩不可思議事

【智全会入本】 三者 諸菩薩以神通自在力 隨時示現能脩行衆行如毘陀婆羅菩薩等十六 賢士 具足菩薩不可思議事

【日藏会入本】 三者 諸菩薩以神通自在力 隨時示現能脩行衆行如毘陀婆羅菩薩等十六 賢士 具足菩薩不可思議事

【論記所引】 論三者 諸菩薩下…（七下二三） 初諸菩薩下通舉 二如毘陀下別示…（七下一四一五）

言隨時者…（七下一六）

示現等者…（八上九）

自能修行六度四等…（八上九一〇）

大乘行法通四如前（八上二二）

二如毘陀下…（八上二二）

即毘陀 等（八上二二一三）

跋陀婆羅者…（八上二三）

15 「人」の右に傍線が引かれており、その下方欄外に「賢士」とある。

十六 人者…（八上一四—一五）

二具足下…（八上一七）

菩薩略如上（八下六）

不可思議事者…（八下七）

【敦煌摩提訖】 三者 諸菩薩 隨時示現能脩行／乘如毘陀婆羅 等十六 人具足菩薩不可思議事

【房山摩提訖】 三者 諸菩薩 隨時示現能修大乘如毘陀婆羅 等十六 人具足菩薩不可思議事

【大正摩提訖】 三者 諸菩薩 隨時示現能行大乘如毘陀婆羅 等十六 人具足菩薩不可思議事

【福州摩提訖】 三者 謂諸菩薩以神通自在力隨時示現能修大乘如毘陀婆羅菩薩等十六 人具足菩薩不可思議事

【興聖寺刊本】 三者 諸菩薩 神通自在 隨時示現能修大乘如毘陀婆羅 等十六 賢士 具足菩薩不可思議事

【大正留支訖】 三者 謂諸菩薩 神通自在 隨時示現能修大乘如毘陀婆羅菩薩等十六大賢士 具足菩薩不可思議事

【真福寺本】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故

【興聖寺寫本】 而能示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家耳耳人威儀一定不同菩薩故

【子注法華論】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故

【科註法華論】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故（卷一、十二裏）

【叡山版】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故

【智全會入本】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故

【日藏會入本】 而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故

【論記所引】 三而能下…（八下一六）

四優婆塞下…（九上四） 論四者 出家下…（九上八）

出家 人者…（九上八）

威儀一定者…（九上一二）

不同菩薩者…（九下一二）

【敦煌摩提訖】 而能示現種種形相 優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家 人威儀一定不同菩薩故

【房山摩提訖】 而能示現種種形相 優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家 人威儀一定不同菩薩故

【大正摩提訖】而能示現種種形相 優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家 人威儀一定不同菩薩故
【福州摩提訖】而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故
【興聖寺刊本】而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等故四者 出家聲聞人威儀一定不同菩薩故（卷上、第三紙）
【大正留支訖】而常示現種種形相謂優婆塞優婆夷比丘比丘尼等 四者謂出家聲聞 威儀一定不同菩薩故

衆成就 三 攝功德成就 ○（分段）

【真福寺本】皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德□□故皆於 阿耨□□三三菩提不退轉等者 十三句示現菩薩功德成就故
【興聖寺寫本】皆是阿羅漢等者 十六句示現耳耳功德成就故皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提 等者 十三句示現菩薩功德成就故
【子注法華論】皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者 十三句示現菩薩功德成就故（卷上、第六紙）
【科註法華論】皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者 十三句示現菩薩功德成就故（卷一、十四表）
【觀山版】皆是阿羅漢等者有十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者有十三句示現菩薩功德成就故
【智全會入本】皆是阿羅漢等者有十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者有十三句示現菩薩功德成就故
【日藏會入本】皆是阿羅漢等者有十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者有十三句示現菩薩功德成就故
【論記所引】論皆是阿羅漢已下：（九下一五） 初示現聲聞功德成就：（九下一六） 後示現菩薩功德成就：（九下一七）

初皆是下：（一〇上一） 次皆不退轉下：（一〇上一）

皆是阿羅漢者：（一〇上一四）

所言皆者：（一〇上四）

所言是者：（一〇上六）

阿羅漢者：（一〇上一二）

所言等者：（一〇下四）

十六句者：（一〇下四）

示現聲聞如上釋之（一〇下六）

言功德者：（一〇下六七）

成就如上（一〇下九）

故者結也（二〇下九）

上來釋示現聲聞功德成就中…（二〇下九）

論皆不退轉下（二〇下一〇）

次標菩薩功德成就…（二〇下一〇）

皆是阿羅漢一（二一上二三）

【敦煌摩提訖】 比是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提 等者 十三句示現菩薩功德成就故

【房山摩提訖】 皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提 等者 十三句示現菩薩功德成就故

【大正摩提訖】 皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提 等者 十三句示現菩薩功德成就故

【福州摩提訖】 皆是阿羅漢等 有十六句示現聲聞功德成就故皆不退轉阿耨多羅三藐三菩提 等者有十三句示現菩薩功德成就故

【興聖寺刊本】 皆是阿羅漢等者 十六句示現聲聞功德成就故皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等者 十三句示現菩薩功德成就故

【大正留支訖】 皆是阿羅漢等 有十六句示現聲聞功德成就 皆於 阿耨多羅三藐三菩提不退轉等 有十三句示現菩薩功德成就

衆成就 三 攝功德成就 一（阿羅漢功德成就 ○ 分段）

【真福寺本】 阿羅漢功德成就者彼十□句示現三種門攝義 應知何等三 門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門

【興聖寺寫本】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三種門一者上上起門二者揔別相門三者攝最事門

【子注法華論】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三 門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門

【科註法華論】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三種門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門（卷一、十五表）

【叡山版】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三種門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門

【智全會入本】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三種門一者上上起門二者總別相門三者攝取事門

【日藏會入本】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義 應知何等三 門一者上上起門二者總別相門三者攝取事門

【論記所引】 阿羅漢下…（二〇上二）

論阿羅漢功德下…（二〇下一五）

初阿羅漢功德成就者…（二〇下一五—一六）

次彼十六句下標三種門

次何等三 門下…（二〇下一六—一七）

【敦煌摩提訖】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義

應知何等三種／一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門

【房山摩提訖】 阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義

應知何等三 門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門

【大正摩提訖】	阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義	應知何等三	門一者上上起門二者總別相門三者攝取事門
【福州摩提訖】	阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義	應知何等三	門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門
【興聖寺刊本】	阿羅漢功德成就者彼十六句示現三種門攝義	應知何等三	門一者上上起門二者揔別相門三者攝取事門
【大正留支訖】	聲聞功德成就者彼十六句	三	門攝義示現應知何等三
		門一者上上起門二者總別相門三者攝取事門	

衆成就 三 攝功德成就 一 (阿羅漢功德成就 一 上上起門)

【真福寺本】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 以 無復煩惱故名 心得自在

【興聖寺寫本】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲 羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 以 无 煩惱故名 心得自在

【子注法華論】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名 謂諸漏已盡 以 无復煩惱故名 心得自在

【科註法華論】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 以 無復煩惱故名 心得自在（卷一、十五裏）

【叡山版】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 諸漏已盡 諸漏已盡 羅漢以心無復煩惱故名 心得自在（三表）

【智全会入本】 上上起門者謂諸漏已盡／名爲阿羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 以 無復煩惱故名 心得自在

【日藏会入本】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名 諸漏已盡 以 無復煩惱故名 心得自在

【論記所引】 論上上起者已下：（一一上五）¹⁶

第一釋上上起門者：（二一下二）

論謂諸漏下：（二下二）

第一謂諸漏已盡故名爲羅漢者：（一二下三）

第二以心得自在故名 諸漏已盡者：（二三下一四）

第三以無煩惱故名心得自在者：（一四上一）

上上起門者謂諸漏已盡故名爲羅漢以心得自在故名諸漏已盡

上上起門者謂諸漏已盡故名爲羅漢以心得自在故名諸漏已盡

【大正摩提訖】
上上起門者謂諸漏已盡故名爲羅漢以心得自在故名
諸漏已盡諸漏已盡故名爲阿羅漢以心無煩惱故名
心得自在

16 『智全』巻上は「論上起者已下」となっているが、『目蔵』第二十三巻（二頁上一四行目）と『科註』巻一（十五丁裏）所引の『論記』は「論上上起者已下」となっている。ここでは、『目蔵』と『科註』に依って「上」を補う。

【福州摩提訳】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡
【興聖寺刊本】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡
【大正留支訳】 上上起門者謂諸漏已盡故名爲阿羅漢以心得自在故名爲諸漏已盡
以心無復煩惱故名爲心得自在
以無復煩惱故名爲心得自在
以無復煩惱故名爲心得自在（二下）

（真福寺本注墨）

以

【真福寺本】 以善得□解脱善得惠解脱故名 心得自在／遠離能見所見故名 無復煩惱以善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏
【興聖寺写本】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見／故名 无復煩惱以善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏
【子注法華論】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 无復煩惱以善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏（卷上、第七紙）
【科註法華論】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱以善得心解脱善得惠解脱故名 心善調伏（卷一、十八裏）
【叡山版】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱 善得心解脱善得惠解脱故名 心善調伏
【智全会入本】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱以善得心解脱善得惠解脱故名 心善調伏
【日藏会入本】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱以善得心解脱善得惠解脱故名 心善調伏
【論記所引】 善得心解脱 五（一一上一四）
善得慧解脱 六
心善調伏 七（二上一四）

第四以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在者：（一四下一三）

第五以遠離能見所見故名 無復煩惱者：（一五上一）

第六善得心解脱善得惠解脱 名 心善調伏者：（一五上四）

【敦煌摩提訳】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 无復煩惱以善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏
【房山摩提訳】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱以善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏
【大正摩提訳】 以善得心解脱善得惠解脱故名 心得自在以遠離能見所見故名 無復煩惱已 善得心解脱 惠解脱故名 心善調伏
【福州摩提訳】 以善得心解脱善得惠解脱故名 爲心得自在以遠離能見所見故名 爲無復煩惱以善得心解脱善得惠解脱故名 爲心善調伏
【興聖寺刊本】 以善得心解脱善得惠解脱故名 爲心得自在以遠離能見所見故名 爲無復煩惱以善得心解脱善得惠解脱故名 爲心善調伏

17 興聖寺写本には、「以善…自在」の部分がなく、脱文と見られる。

18 『智全』卷上は、「心解脱善得慧解脱」となっているが、『日藏』第二十三卷（一五頁上七行目）は、「心解脱善得慧解脱」となっている。なお、『科註』卷一には当該箇所「論記」の文がな
い。以下では『日藏』のテキストに従う。

【大正留支訳】以善得心解脱善得慧解脱故名爲心得自在以遠離能見所見故名爲無復煩惱以善得心解脱善得慧解脱故名爲心善調伏

(真福寺本注朱)

得

【真福寺本】人中龍者行諸惡道如平坦路無□□□□行者已□□□□□應□□作 人中龍已 對治降伏煩惱 □敵故 (第三紙)

【興聖寺写本】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘導應行者已行應到處已倒故應作者 作 人中龍已 對治降伏煩惱 恐敵故

【子注法華論】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘導應行者已行應到處已倒故應作者 作 人中龍已 對治降伏煩惱 怨敵故

【科註法華論】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘導應行者已行應到處已倒故應作者 作 人中龍已 對治降伏煩惱 怨敵故 (卷一、十九表)

【叡山版】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作者 人中龍已得對治降伏煩惱 怨敵故

【智全会入本】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作者 人中龍已得對治降伏煩惱 死敵故

【日藏会入本】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作者 人中龍已得對治降伏煩惱 怨敵故

【論記所引】人中龍八 應作者 作九 (一一上二四—一五)

第七人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙等者：(一五上九)

故言應行者已行應到處已到故 (一五上二四—一五)

第八應作者已作 人中龍已 對治降伏煩惱 怨敵故者：(一五上二六—一七)

故言人中龍已 對治降伏煩惱 怨敵等 (一五下二—三)

【敦煌摩提訳】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘導應行者已行應到處已到故應作者 作者 人中龍已 對治降伏煩惱 怨敵故 (三〇九下)

【房山摩提訳】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作 人中龍已盡對治降伏煩惱 怨敵故

【大正摩提訳】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作 人中龍已盡對治降伏煩惱 怨敵故

【福州摩提訳】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者已作 人中龍已得對治降伏煩惱 怨敵故

【興聖寺刊本】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘導應行者已行應到處已到故應作者 作 人中龍已得對治降伏煩惱 怨敵故

【大正留支訳】人中龍者行諸惡道如平坦路无所拘礙應行者已行應到處已到故應作者 作 人中龍已得對治降伏煩惱之怨敵故

【真福寺本】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【興聖寺写本】所作已弁者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已弁後生重擔已捨 故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【子注法華論】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【科註法華論】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故（卷一、十九裏）

【觀山版】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【智全会入本】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【日藏会入本】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【論記所引】所作已辨^十離諸重擔^{十一}逮得已利^{十二}（一一上一五）

第九所作已辨者更不後生如相應事已成就者…（一五下四）

第十離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故者…（一五下八—九）

第十一逮得已利者已捨重擔證涅槃故者…（一五下一四）

【敦煌摩提訖】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【房山摩提訖】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【大正摩提訖】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【福州摩提訖】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【興聖寺刊本】所作已辨者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者已應作者所作已辨後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【大正留支訖】所作已辦者更不後生如相應事已成就故離諸重擔者以應作者所作已辦後生重擔已捨離故逮得已利者已捨重擔證涅槃故

【真福寺本】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱□故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故

【興聖寺写本】盡諸有結者已逮得／斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故

【子注法華論】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道／智故（卷上、第八紙）

【科註法華論】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故（卷一、二十表）

【觀山版】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故（三裏）

【智全会入本】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故

【日藏会入本】盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故

【論記所引】盡諸有結^{十三}善得正智心解脫^{十四}一切心得自在^{十五}（一一上一六）

第十二盡諸有結者已逮得已利斷諸煩惱因故者…（一五下一七）

第十三善得正智心解脫者諸漏已盡故者…（一六上四）

第十四一切心得自在者善知見道修道智故者：（一六上七）

【敦煌摩提訖】盡諸有結者已速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道脩道智故
 【房山摩提訖】盡諸有結者已速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道修道智故
 【大正摩提訖】盡諸有結者已速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道修道智故（一一中）
 【福州摩提訖】盡諸有結者已速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道修道智故
 【興聖寺刊本】盡諸有結者已速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善過見道修道智故（卷上、第四紙）
 【大正留支訖】盡諸有結者以速得己利斷諸煩惱因故善得正智心解脫者諸漏已盡故一切心得自在者善知見道修道智故

【真福寺本】
到第一彼岸者善得正智心
解脱善得神通無諍三昧等諸功德□□□□
羅□□□□□□□□□□
故□□□□□□□□□□

【興聖寺寫本】
到第一彼圻者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大羅漢／者心得自在到彼圻故

【子注法華論】 到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通无諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到彼岸故

【科註法華論】
到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到彼岸故（卷一、二十一表）

【叡山版】
到第一彼岸者善得正智心得解脱善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到第一彼岸故

【智全会入本】
到第一彼岸者善得正智心得解脱善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到第一彼岸故

【日藏会入本】
到第一彼岸者善得正智心得解脱善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到第一彼岸故

【論記所引】
到第一彼岸 十六
(二一上一七)

第十五到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故者…（一六上一—二）

論大阿羅漢等者心得自在到彼岸故者：（二六下一〇）

【敦煌摩提訖】
到第一彼岸者善得正智心
解脱善得神通无諍三昧等諸功德故大
羅漢等者心得自在到彼岸故

【房山摩提訖】
到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大羅漢等者心得自在到彼岸故

【大正摩提訖】
到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大羅漢等者心得自在到彼岸故

【福州摩提訖】到第一彼岸者善得正智心得解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到彼岸故

【興聖寺刊本】
到第一彼岸者善得正智心
解脱善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到彼岸故

【大正留支記】 到第一彼岸者善得正智心 解脫善得神通無諍三昧等諸功德故大阿羅漢等者心得自在到 彼岸故

【真福寺本】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆 知識故又 聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識
【興聖寺寫本】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝尺 梵天王等皆 知識故 復耳耳并 佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識
【子注法華論】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆識知 故 復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善智 故名 衆所知識
【科註法華論】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆 知識故又 聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識(卷二、二十一裏)
【叡山版】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王 梵天王等皆 知識故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆悉善知是/名 衆所知識
【智全会入本】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王 梵天王等皆 知識故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆悉善知 故名 衆所知識
【日藏会入本】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王 梵天王等皆 知識故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆悉善知 故名 衆所知識
【論記所引】 衆所知識者已下…(一六下二三) 故言等也…(一六下一七一) 故言皆識知 故(一七上一)

論復聲聞下…(一七上四)

是勝智者者…(一七上五六)

故言復聲聞

乃至皆 善知

故(一七上一〇)

故名下結(一七上一〇)

言知識者…(一七上一〇一一)

【敦煌摩提記】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆識知 故 復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識
【房山摩提記】 衆所知識者諸王王子大臣 帝釋 梵天王等皆識知 故 復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識(第三紙)
【大正摩提記】 衆所知識者諸王王子大臣 帝釋 梵天王等皆識知 故 復聲聞菩薩佛等是勝智/彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識
【福州摩提記】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王 梵天王等皆識知 故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆悉善知是故名 衆所知識
【興聖寺刊本】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋 梵天王等皆識知 故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆 善知 故名 衆所知識
【大正留支記】 衆所知識者諸王王子大臣人民帝釋天王 梵天王等皆識知 故又復聲聞菩薩佛等是勝智者彼勝智者皆悉善知是故名爲衆所知識

衆成就 三 攝功德成就 一 (阿羅漢功德成就 二 總別相門)
(真福寺本注墨) 相

【真福寺本】 揔別 門者皆是 羅漢等十六句 初句是揔餘句別故皆是 羅漢者彼 羅漢 有十五種應義應知何等十五

【興聖寺寫本】 揔別相門者／是 羅漢等十六句 初句是揔餘句別故皆是 羅漢者彼 羅漢 有十五種應義應知

【子注法華論】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句 初句是揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 羅漢 有十五種應義應知 (卷上、第九紙)

【科註法華論】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句 初句是揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 阿羅漢 有十五種應義應知何等十五 (卷一、二十二裏)

【觀山版】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句中初句是揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 阿羅漢名之爲應 有十五種 義應知何等十五

【智全会入本】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句中初句是揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 阿羅漢名之爲應 有十五種應義應知何等十五

【日藏会入本】 總別相門者皆是 阿羅漢等十六句中初句是總餘句別故皆是 阿羅漢者彼 阿羅漢名之爲應 有十五種應義應知何等十五

【論記所引】 論揔別相門者以下：(一八下一)

論皆是 阿羅漢等下：(一八下一〇) 論皆是 羅漢者者：(一八下一一)

彼 羅漢者：(一八下一二)

有十五種 義者：(一八下一二)

應知者：(一八下一三)

【敦煌摩提訖】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句 初句 揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 羅漢 有十五種 義應知

【房山摩提訖】 揔別 門者皆是 羅漢等十六句 初句 揔餘句別故皆是 羅漢者彼 羅漢 有十五種 義應知

【大正摩提訖】 總別 門者皆是 羅漢等十六句 初句 總餘句別故皆是 羅漢者彼 羅漢名 有十五種 義應知

【福州摩提訖】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句等初句是揔餘句別故皆是 阿羅漢者彼 阿羅漢名之爲應 有十五種 義應知何等十五 (第三紙)

【興聖寺刊本】 揔別相門者皆是 阿羅漢等十六句 初句是揔餘句別故 彼 阿羅漢名之爲應 有十五種應義應知何等十五

【大正留支訖】 總別相門者皆是 阿羅漢等十六句 初句是總餘句別故 彼 阿羅漢名之爲應 有十五種應義應知何等十五

【真福寺本】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故

【興聖寺寫本】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故

【子注法華論】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故

【科註法華論】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故 (卷一、二十三表)

【觀山版】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故 (四表)

【智全会入本】 一者應受飲食卧具供養恭敬等故二者應將大衆教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故

【日藏会入本】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【論記所引】 論一者應受飲食 及恭敬等故下…（一九上八）

二者應將等者…（一九上二〇）

徒衆教化一切故（一九上二〇—二一）

三者應入聚落等者…（一九上二一）

堪入落 邑…（一九上二二）

四者應降等者…（一九上二二）

堪伏 外道…（一九上二三）

【敦煌摩提訖】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【房山摩提訖】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【大正摩提訖】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【福州摩提訖】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【興聖寺刊本】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故
【大正留支訖】 一者應受飲食臥具供養恭敬等故二者應將大眾教化一切故三者應入聚落城邑等故四者應降伏諸外道等故

（真福寺本注墨）

諸

【真福寺本】 五□□以智慧□□□ 洵故六者□不疾不□□法□□相應不疲倦故

【興聖寺写本】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【子注法華論】 五者應以智慧速觀察 法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【科註法華論】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故（卷一、二十三裏）

【叡山版】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【智全会入本】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【日藏会入本】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【論記所引】 五者應以智慧等者…（一九上二三）

能觀 諸法故（一九上二四）

六者應不疾 遲者：（一九上一四）

亦無疲倦（一九上一五）

【敦煌摩提訖】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【房山摩提訖】 五者應以智慧速觀察 法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【大正摩提訖】 五者應以智慧速觀察 法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【福州摩提訖】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【興聖寺刊本】 五者應以智慧速觀察諸法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【大正留支訖】 五者應以智慧速觀察 法故六者應不疾不遲說法如法相應不疲倦故

【真福寺本】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不□少欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故

【興聖寺寫本】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善得不著諸禪故九者應行空聖行故（第三紙）

【子注法華論】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善／不著諸禪故九者應行空聖行故（卷上、第十紙）

【科註法華論】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚小欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故（卷一、二十三裏）

【叡山版】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故

【智全会入本】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故

【日藏会入本】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故

【論記所引】 七者應靜坐等者：（一九上一五） 常知（一九上一七）

止足故（一九上一七）

八者應一向等者：（一九上一七）

行不樂（一九下一）

有漏禪：（一九下一）

九者應行空等者：（一九下一—二）

【敦煌摩提訖】 七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積不聚少欲知足故八者應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故

【房山摩提訖】七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積少欲知足故人應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故
【大正摩提訖】七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積少欲知足故人應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故
【福州摩提訖】七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積少欲知足故人應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故
【興聖寺刊本】七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積少欲知足故人應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故
【大正留支訖】七者應靜坐空閑處飲食衣服一切資生不積少欲知足故人應一向行善行不著諸禪故九者應行空聖行故（二上）

【真福寺本】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故（第四紙）
【興聖寺寫本】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【子注法華論】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【科註法華論】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故（卷一、二十四表）
【叡山版】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【智全會入本】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸神通勝功德故
【日藏會入本】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸神通勝功德故
【論記所引】十者應行無想等者：（一九下三）

十一 應行無願等者：（一九下四）

十二 應降伏世間禪等者：（一九下五）

十三者應起諸通等者：（一九下六—七）

起諸神通勝妙（一九下七）

功德利人天故（一九下七—八）

【敦煌摩提訖】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【房山摩提訖】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【大正摩提訖】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【福州摩提訖】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【興聖寺刊本】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故
【大正留支訖】十者應行無相聖行故十一者應行無願聖行故十二者應降伏世間禪淨心故十三者應起諸通勝功德故

【真福寺本】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生 衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【興聖寺写本】 十四者應證第一義勝功德故十五者應知²¹ 衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【子注法華論】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生 衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故（卷上、第十一紙）
 【科註法華論】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生 衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故（卷一、二十四裏）
 【叡山版】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生諸衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【智全会入本】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生諸衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【日藏会入本】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生諸衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【論記所引】 十四者應證第一義等者：（一九下八）

十五者應如實知等者：（一九下九）

【敦煌摩提詠】 十四者應 第一義 功德故十五者應如實知同生 衆 得諸功德爲利益一切 衆生故（三一〇上）
 【房山摩提詠】 十四者應 第一義 功德故十五者應如實知同生 衆 得諸功德爲利益一切 衆生故
 【大正摩提詠】 十四者應證第一義 功德故十五者應如實知同生 衆 得諸功德爲利益一切 衆生故
 【福州摩提詠】 十四者應證第一義 功德故十五者應如實知同生諸衆 得諸功德爲利益一切諸衆生故
 【興聖寺刊本】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生 衆生得諸功德爲利益一切諸衆生故（卷上、第五紙）
 【大正留支詠】 十四者應證第一義勝功德故十五者應如實知同生諸衆 得諸功德爲利益一切諸衆生故

衆成就 三 攝功德成就 一 （阿羅漢功德成就 三 攝取事門）

【真福寺本】 攝□□門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十
 【興聖寺写本】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十
 【子注法華論】 攝取事門者／十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十
 【科註法華論】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十（卷一、二十四裏）
 【叡山版】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十（四裏）

²¹ 同上の当該箇所（六四行目）では、「如」と翻刻しているが、字としては「知」に見えるため、ここに訂正する。

【智全会入本】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十
【日藏会入本】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十
【論記所引】 論攝取事門者以下…（一九下一六）

以此十五下…（二〇上三一四）

論攝取十種功德者…（二〇上四）

示現可說等者…（二〇上五）

爲可說果…（二〇上五）

爲不可說果…（二〇上六）

【敦煌摩提記】 攝取事門者此十五句攝取十種功德 示現可說果不可說果故

【房山摩提記】 攝取事門者此十五句攝取十種功德 示現可說果不可說果故

【大正摩提記】 攝取事門者此十五句攝取十種功德 示現可說果不可說果故

【福州摩提記】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十

【興聖寺刊本】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十

【大正留支記】 攝取事門者此十五句攝取十種功德應知示現可說果不可說果故何等爲十

【真福寺本】 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

（興聖寺写本注） 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

【興聖寺写本】 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

【子注法華論】 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

【科註法華論】 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故（卷一、二十五表）

【叡山版】 一者攝取 斷德功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

【智全会入本】 一者攝取 斷德功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

22 朱の補入記号の右傍は、欠損のため内容不明。

23 拙稿「二〇二二B」三八頁では、当該箇所（六八行目）を「句」と翻刻しているが、厳密には「句」の誤写であるため、「||」に変更する。なお、当該箇所には見せ消し記号が付されており、その上方欄外に「句」とある。

【日藏会入本】 一／攝取斷德功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【論記所引】 論一者攝取 功德下…（二〇下五）

二句 攝以漏業盡（二〇下六）

更無惑累…（二〇下六）

論二者三句等者…（二〇下七）

三箇（二〇下八）

句攝 諸功德…（二〇下八）

一 降伏世間…（二〇下八）

【敦煌摩提訖】 一者攝取 德功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【房山摩提訖】 一者攝取 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【大正摩提訖】 一者攝取得 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【福州摩提訖】 一者攝取得 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【興聖寺刊本】 一者攝取得 功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故
【大正留支訖】 一者攝取 德功德二句示現如經諸漏已盡無復煩惱故二者三句攝取諸功德一句降伏世間功德如經心得自在故

【真福寺本】 二句降伏出世間學人□德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經□善調伏故
【興聖寺写本】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得惠解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
【子注法華論】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得惠解脫故三／攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
【科註法華論】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故（卷一、二十五裏）
【叡山版】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
【智全会入本】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
【日藏会入本】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
【論記所引】 二 降伏出世 學人…（二〇下九）
論三者攝取不違等者…（二〇下十一）
隨順修行…（二〇下十二）

【敦煌摩提訖】 二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故

【房山摩提訳】二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
 【大正摩提訳】二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
 【福州摩提訳】二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
 【興聖寺刊本】二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故
 【大正留支訳】二句降伏出世間學人功德如經善得心解脫善得慧解脫故三者攝取不違功德隨順如來教行故如經心善調伏故

【真福寺本】四者攝取勝功德²⁴故如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【興聖寺写本】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【子注法華論】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來 如經 應作者作故（卷上、第十二紙）
 【科註法華論】四者攝取勝功德故如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故（卷一、二十六表）
 【叡山版】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【智全会入本】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【日藏会入本】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【論記所引】論四者攝取勝功德等者…（二〇下一四） 猶如 大龍…（二〇下一五）
 論五者攝取所應等者…（二〇下一五—一六）
 故言攝取所應作勝功德…（二〇下一七）

【敦煌摩提訳】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【房山摩提訳】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者 依法供養恭敬尊重如來故如經所應作者作故
 【大正摩提訳】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故（二一下）
 【福州摩提訳】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂能 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【興聖寺刊本】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂能 依法供養恭敬尊重如來故如經 應作者作故
 【大正留支訳】四者攝取勝功德 如經人中大龍故五者攝取所應作勝功德所應作者謂能 依法供養恭敬尊重如來 如經 應作者作故

「地」と「故」の間に補入記号があり、「力」は補入記号の右にある。

【真福寺本】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已□故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故
(興聖寺写本注)

力

【興聖寺写本】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已²⁵弁故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【子注法華論】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【科註法華論】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故(卷一、二十六裏)

【叡山版】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【智全会入本】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【日藏会入本】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【論記所引】 論六者攝取満足等者…(二一上) 論七者三句攝取過功德等者…(二一上三)

一者過愛者…(二一上五)

二者過求命供等…(二一上六)

故言過求命 養等(二一上八)

【敦煌摩提訳】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【房山摩提訳】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故(第四紙)

【大正摩提訳】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【福州摩提訳】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【興聖寺刊本】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛故二者過求命供養恭敬故

【大正留支訳】 六者攝取満足功德満足學地故如經所作已辨故七者三句攝取過功德一者過愛 二者過求命供養恭敬

(真福寺本注墨) 經

【真福寺本】 三者過上下界已過學地故□經離諸重擔 逮得已利 盡諸有□故八者攝取上上功德如○善得正智心 解脱故
(興聖寺写本注) 上イ

【興聖寺写本】	三者過上下界已過學地／如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上下功德如經善得正智心得解脫故
【子注法華論】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【科註法華論】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故 (卷一、二十六裏)
【叡山版】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故 (五表)
【智全会入本】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【日藏会入本】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【論記所引】	三者過上下界已過學地故者：(二一上八)	論八者攝取上上功德者：(二一上二〇—二一)	
(敦煌摩提傍書)		善	
【敦煌摩提認】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經／得正智心得解脫故
【房山摩提認】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【大正摩提認】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【福州摩提認】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【興聖寺刊本】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【大正留支認】	三者過上下界已過學地故如經離諸重擔	逮得已利	盡諸有結故八者攝取上上功德如經善得正智心得解脫故
【真福寺本】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【興聖寺写本】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【子注法華論】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【科註法華論】	九者攝取應／利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故 (卷一、二十七表)	
【叡山版】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【智全会入本】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【日藏会入本】	九者攝取應作利益衆生功德如經一切心	得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故	
【論記所引】	論九者攝取應作利益衆生功德者：(二一上三一—二一四)		

論十者攝取上首功德者…(二一上一六)

【敦煌摩提訖】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故
【房山摩提訖】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故
【大正摩提訖】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故
【福州摩提訖】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故
【興聖寺刊本】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故
【大正留支訖】 九者攝取應作利益衆生功德如經一切心 得自在故十者攝取上首功德如經到第一彼岸故

衆成就 三 攝功德成就 二 (菩薩功德成就 ○ 分段)

(真福寺本注墨)

諸²⁷ 就²⁸

【真福寺本】 彼 菩薩功德成就者有十三句功德²⁹ 一門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門

【興聖寺寫本】 彼諸并功德成就者有十三句功德 二門攝義示現應知何等二門故 一者上支下支門二者攝取事門

【子注法華論】 菩薩功德成就者有十三句 二門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門 (卷上、第十三紙)

【科註法華論】 彼諸菩薩功德成就者有十三句 二門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門 (卷一、二十九表)

【觀山版】 諸菩薩功德成就者有十三句功德 一門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門

【智全会入本】 諸菩薩功德成就者有十三句功德 二門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門 (卷一末、二四下)

【日藏会入本】 彼 菩薩功德成就者有十三句功德 二門攝義示現應知何等二門 一者上支下支門二者攝取事門 (卷一末、二五上)

【論記所引】 彼 菩薩下…(一〇上一)

論彼 菩薩 十三句功德 二門攝 應知者…(二四下五一六)

論一者已下…(二六下一七)

次上支下支門者…(二六下一七)

27 本文中の「彼」は行末にあり、「諸」はその下の欄外にある。

28 本文中の「徳」の中央には、朱書で小さい丸印が付されており、上方欄外に「𪛗」の異体字(𪛗+火)が記されているが、「火」(脚)の部分は朱で取り消し線が引かれており、「𪛗」「𪛗」の異体字)となっている。

29 「功德」の各字中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【敦煌摩提訖】	彼諸菩薩	十三句功德	二門攝	應知	一者上支下支門二者攝取事門
【房山摩提訖】	彼諸菩薩	十三句功德	二門攝	應知	一者上支下支門二者攝取事門
【大正摩提訖】	彼諸菩薩	十三句功德	二門攝	應知	一者上支下支門二者攝取事門
【福州摩提訖】	得諸菩薩功德成就者彼十三句功德	二門攝	義示現應知何等二門	一者上支下支門二者攝取事門	一者上支下支門二者攝取事門
【興聖寺刊本】	菩薩功德成就者彼十三句	二門攝	義示現應知何等二門	一者上支下支門二者攝取事門	一者上支下支門二者攝取事門
【大正留支訖】	菩薩功德成就者彼十三句	二門攝	義示現應知何等二門	一者上支下支門二者攝取事門	一者上支下支門二者攝取事門

衆成就 三 攝功德成就 二 (菩薩功德成就 一 上支下支門)

【真福寺本】	上支下支門者□□相別相	應知
【興聖寺寫本】	上支下支門者所謂揔相別相 ³⁰	應知
【子注法華論】	上支下支門者所謂揔相別相	應知
【科註法華論】	上支下支門者所謂惣相別相	應知 (卷一、二十九裏)
【叡山版】	上支下支門者所謂揔相別相比義應知	
【智全会入本】	上支下支門者所謂總相別相比義應知	
【日藏会入本】	上支下支門者所謂總相別相比義應知	
【論記所引】	上支下支門者：(二七上二)	

所謂揔相等者：(二七上二—三)

【敦煌摩提訖】	上支下支門者所謂揔相別相	應知
【房山摩提訖】	上支下支門者所謂揔相別相	應知
【大正摩提訖】	上支下支門者所謂總相別相	應知
【福州摩提訖】	上支下支門者所謂揔相別相比義應知	
【興聖寺刊本】	上支下支門者所謂揔相別相	應知
【大正留支訖】	上支下支門者所謂總相別相比義應知	

30 原本の字は、「相」のくずし字と見られる。

【真福寺本】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是捨相餘者是別相彼不退轉有十種示現³¹ 何等爲十 (第五紙)

【興聖寺写本】 皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是捨相餘者是別相彼不退轉有十種示現

【子注法華論】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別／彼不退轉 十種示現 何等爲十

【科註法華論】 皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉 十種示現 何等爲十 (卷一、二十九裏)

【叡山版】 皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現 應知何等爲十

【智全会入本】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現 應知何等爲十

【日藏会入本】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現 應知何等爲十

【論記所引】 皆得阿耨已下… (一七上三)

故言不退轉者 摠相餘者 別相也… (一七上四—五)

論彼不退轉 十種已下… (三〇上二)

【敦煌摩提記】 皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是捨相餘者是別相彼不退轉有十種示現

【房山摩提記】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現

【大正摩提記】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現

【福州摩提記】 皆得阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉有十種示現 應知何等爲十 (第四紙)

【興聖寺刊本】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是捨相餘者是別相彼不退轉 十種示現 何等爲十

【大正留支記】 皆於阿耨多羅三藐三菩提不退轉者是摠相餘者是別相彼不退轉 十種示現 此義應知何等爲十 (二中)

【真福寺本】 一者住聞海不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辨才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【興聖寺写本】 一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大弁才樂說故三者說不退³² 法輪故

【子注法華論】 一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辨才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【科註法華論】 一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼／二者樂說不退轉如經大辨才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故 (卷一、三十裏)

31 「有」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

32 凡例に従って「隨」と表記しているが、原本の字は厳密には「隨」である。

33 興聖寺写本は、「三者說不退」の後で改行するが、恐らく「轉如經轉不退」の六字が脱文していると見られる。

【叡山版】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯財樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故（五裏）

【智全会入本】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【日藏会入本】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯財樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【論記所引】一者住聞法下…（三〇七一一）

住聞法不退轉…（三〇上二一一—二一三）

故言得陀羅尼…（三二下一—二二）

論二者樂說不退轉等者…（三二下一四）

故言樂說辯才…（三二下一六）

論三者說不退轉等者…（三二上一）

故言能轉不退法輪…（三二上一—三）

【敦煌摩提記】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退法輪故（三一〇下）

【房山摩提記】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退法輪故

【大正摩提記】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退法輪故

【福州摩提記】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退法輪故

【興聖寺刊本】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【大正留支記】一者住聞法不退轉如經皆得陀羅尼故二者樂說不退轉如經大辯才樂說故三者說不退轉如經轉不退轉法輪故

【真福寺本】四者依止善知識不退轉以身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種善根故

【興聖寺写本】四者依止善知識不退轉以身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故（第四紙）

【子注法華論】四者依止善知識不退轉以身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛於諸佛所種諸善根故

【科註法華論】四者依止善知識不退轉以身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故（卷一、三十一裏）

【叡山版】四者依止善知識不退轉以己身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【智全会入本】四者依止善知識不退轉以己身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【日藏会入本】四者依止善知識不退轉以己身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【論記所引】論四者依止善知識不退轉等者…（三二上七）

故言種諸善根…（三二上九）

【敦煌摩提訊】 四者依止善知識不退轉以 身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛 於諸佛所種諸善根故

【房山摩提訊】 四者依止善知識不退轉以 身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【大正摩提訊】 四者依止善知識不退轉以 身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【福州摩提訊】 四者依止善知識不退轉以 己身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【興聖寺刊本】 四者依止善知識不退轉以 身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種 善根故

【大正留支訊】 四者依止善知識不退轉以 身心業依色身攝取故如經供養無量百千諸佛故於諸佛所種諸善根故

【真福寺本】 五者斷一切疑不退轉□經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說洺入彼彼法不退轉如經□大慈悲而脩身心故

【興聖寺寫本】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而脩身心故

【子注法華論】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼 法不退轉如經以大慈悲而脩身心故 (卷上、第十四紙)

【科註法華論】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等 事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故 (卷一、三十二表)

【叡山版】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【智全會入本】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【日藏會入本】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【論記所引】 論五者斷一切疑不退轉等者… (三十一上二)

故為 佛之所稱歎… (三十一上二)

論六者為何等 事說法入彼彼法不退轉等者… (三十一上七)

(敦煌摩提傍書)

何等

故言以大慈悲而修身心… (三十一上二)

【敦煌摩提訊】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而脩身心故

【房山摩提訊】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【大正摩提訊】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故 (二上)

【福州摩提訊】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【興聖寺刊本】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等 事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【大正留支訊】 五者斷一切疑不退轉如經常為諸佛之所稱嘆故六者為何等何等事說法入彼彼法不退轉如經以大慈悲而修身心故

【真福寺本】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【興聖寺写本】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛惠故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【子注法華論】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛惠故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【科註法華論】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故（卷一、三十二裏）
 【叡山版】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【智全会入本】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【日藏会入本】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【論記所引】 論七者入一切智如實境界不退轉等者…（三二下五）

故言善入佛慧…（三二下六）

論八者依我空法空不退轉等者…（三二下九）

故言通達大智…（三二下一〇）

法空

（敦煌摩提傍書）
 【敦煌摩提訊】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空／／不退轉如經通達大智故
 【房山摩提訊】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【大正摩提訊】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【福州摩提訊】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【興聖寺刊本】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故
 【大正留支訊】 七者入一切智如實境界不退轉如經善入佛慧故八者依我空法空不退轉如經通達大智故

【真福寺本】 九者入如實境界不退轉 如經到於彼岸故十者應³⁴ 所作住持 不退轉如經
 （興聖寺写本注）
 【興聖寺写本】 九者入如實境界不退轉如轉如經到於彼垢故十者 作應所 作住持 不退轉如。 經
 能度無量百千衆生故
 能度无量百千衆生故

34 朱書で「應」の上に小さい丸印と「作」の右傍に倒置符が付されている。

【子注法華論】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者	作	所應住持	不退轉如經	能度无量百千衆生故
【科註法華論】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經	能度無數百千衆生故（卷一、三十三表）
【觀山版】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經名稱普聞無量世界	能度無量百千衆生故
【智全会入本】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經名稱普聞無量世界	能度無量百千衆生故
【日藏会入本】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經名稱普聞無量世界	能度無量百千衆生故
【論記所引】	論九者入如實境界不退轉等者：（三二下二三）	故言到於彼岸：（三二下一四）	論十者應作	所作住持故不退轉等者：（三三上一）	故言名聞	度生：（三三上三）

【敦煌摩提訖】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經	能度无量百千衆生故
【房山摩提訖】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經	能度無量百千衆生故
【大正摩提訖】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經	能度無量百千衆生故
【福州摩提訖】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者應作	所	住持	不退轉如經名稱普聞無量世界	能度無量百千衆生故
【興聖寺刊本】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者	作	所應住持	不退轉如經名稱普聞無量世界	能度無數百千衆生故
【大正留支訖】	九者入如實境界不退轉	如經到於彼岸故十者	作	所應作	不退轉如經	能度無數百千衆生故

衆成就 三 攝功德成就 二 （菩薩功德成就 二 攝取事門 一）

【真福寺本】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中應作所	作故
【興聖寺写本】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便	何等境界中應作所 作故
【子注法華論】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中應作所	作故（卷上、第十五紙）
【科註法華論】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中應作所	作故（卷一、三十四表）
【觀山版】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中應作所	作故（六表）
【智全会入本】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於我等境界中應作所	作故
【日藏会入本】	攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中應作所	作故
【論記所引】	論攝取事門者下：（三五下九）	

論示現諸菩薩下：（三六上一）

論住何等清淨地中者：（三六上三一四）

因何等方便者：（三六上四）

何等境界中者：（三六上四—五）

應作等者：（三六上五）

故言應作所作故（三六上九）

（敦煌摩提傍書）

故

攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中**因**何等方便 何等境界中**應**作所作／

【房山摩提訖】攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中**因**何等方便 何等境界中**應**作所作故

【大正摩提訳】攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中**因**何等方便 何等境界中**應**作所作故

攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中**因何等方便於何等境界中應作所作故**

【興聖寺刊本】攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中因何等方便於何等境界中作所應作故

攝取事門者示現諸菩薩住何等清淨地中以何等方便於何等境界中作所應作故

【真福寺本】地清淨者八地已上三地無相行寂靜清淨故

地清淨者八地已上三地 无相行寂靜清淨故

地清淨者八地已上三地 无相行寂靜清淨故

地清淨者八地已上三地 無相行寂靜清淨故（卷一、三十四裏）

【叡山版】地清淨者八地以上三地 無相行寂靜清淨故

地清淨者八地以上三地也。無相行寂靜清淨故。

【日藏会入本】地清淨者八地以上三地無相行寂靜清淨故

【論記所引】論地清淨者已下：（三六上一二）

地清淨者八地已上三地等者：（三六上一二一三）

故言無相行：（三六上三一四）

故言寂靜清淨故：（三六上一四）

地清淨者八地已上三地 无相行寂靜清淨故

地清淨者八地已上三地無相行寂靜清淨故

【大正摩提訖】地清淨者八地已上三地 無相行寂靜清淨故
【福州摩提訖】地清淨者八地以上三地 無相行寂靜清淨故
【興聖寺刊本】地清淨者八地已上三地 無相行寂靜清淨故（卷上、第七紙）
【大正留支訖】地清淨者八地已上三地 無相行寂靜清淨故

【真福寺本】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識³⁵作所應作故
【興聖寺寫本】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所依³⁵作應作故
【子注法華論】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【科註法華論】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故（卷一、三十四裏）
【觀山版】地方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【智全會入本】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【日藏會入本】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【論記所引】方便者……（三六上一五）
有四種者……（三六上一六）
論³⁶一者攝取已下……（三六下三十四）
言攝取妙法方便者……（三六下四）
故言攝取妙法
乃至爲人說故……（三六下六）
二者攝取善知識方便等者……（三六下一三一—一四）
故言攝取善知識方便
應作等……（三六下一七）

【敦煌摩提訖】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【房山摩提訖】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故（第五紙）
【大正摩提訖】方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故
【福州摩提訖】地方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識所作應作故

36 35
「依」の左に見せ消し記号あり。
『智全』卷上の三六頁下三行目の行末にある「論」は、『日藏』第二十三卷（三七頁上一六行目）では『法華論』の本文ではなく、『論記』の本文となっており、『智全』は誤植である。

【興聖寺刊本】 方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識
【大正留支訳】 方便者有四種一者攝取妙法方便住持妙法以樂說力爲人說故二者攝取善知識方便以依善知識
作所應作故

【真福寺本】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解
(興聖寺写本注)

37 令

【興聖寺写本】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【子注法華論】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【科註法華論】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解 (卷一、三十五裏)

【叡山版】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【智全会入本】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【日藏会入本】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【論記所引】 三者攝取衆生方便等者… (三七上一二)

故言攝取衆生方便以不捨衆生故… (三七上六一七)

四者攝取智方便等者… (三七上七七)
故言攝取智方便 化生 入智等… (三七上一〇)

【敦煌摩提訳】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故

【房山摩提訳】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故

【大正摩提訳】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故境界者易解

【福州摩提訳】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故

【興聖寺刊本】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故

【大正留支訳】 三者攝取衆生方便以不捨衆生故四者攝取智方便以教化衆生 令入彼智故

衆成就 三 摂功德成就 二 (菩薩功德成就 二 摂取事門 二)

37 当該箇所は、「令」の誤写と見られるが、右傍に見せ消し記号が付されており、その下方欄外に「令」とある。

（真福寺本注朱）

諸

【真福寺本】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘。功德故

【興聖寺写本】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【子注法華論】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【科註法華論】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故（卷一、三十六裏）

【叡山版】

復更有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故

【智全会入本】

復更有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故

【日藏会入本】

復更有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故

【論記所引】

論復 有攝取事門示現諸地等者…（三七下四）

言示現諸地攝取勝功德者…（三七下八—九）

不同二乘 功德故者…（三七下一〇—一一）

【敦煌摩提訖】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【房山摩提訖】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【大正摩提訖】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【福州摩提訖】

又復更有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘 功德故

【興聖寺刊本】

復 有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故

【大正留支訖】

又復更有攝取事門示現諸地攝取勝功德不同二乘諸功德故

【真福寺本】

第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同□者上無相行不能動故自然□行故（第六紙）

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】

第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上无相行不能動故自然而行故

【子注法華論】

第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上无相行不能動故自然而行故（卷上、第十六紙）

【科註法華論】

第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上无相行不能動故自然而行故（卷一、三十七表）

【叡山版】 第八地中無功用智不同下上故不同下功者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故
 【智全会入本】 第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故
 【日藏会入本】 第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故
 【論記所引】 論第八地中無功用智下…(三七下一七)

言無功用智不同上下故者…(三八上二)

不同下功者下…(三八上三)

故言下功用行不能動故…(三八上四一五)

不同上者上無相行不能動 自然而行…(三八上五一六)

【敦煌摩提詁】 八地者无功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上无相行不能動 自然而行故
 【房山摩提詁】 八地者無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動 自然而行故
 【大正摩提詁】 八地者無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動 自然而行故
 【福州摩提詁】 謂 八地中無功用智不同下上故不同下功者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故
 【興聖寺刊本】 謂 第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動故自然而行故
 【大正留支詁】 謂 第八地中無功用智不同下上故不同下 者下功用行不能動故不同上者上無相行不能動 自然而行故

智

(真福寺本注朱)
 【真福寺本】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無尋自在。故
 【興聖寺写本】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四无尋自在 故
 【子注法華論】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四无尋自在 故
 【科註法華論】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無尋自在智故(卷一、三十七裏)
 【叡山版】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在智故(六裏)
 【智全会入本】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在智故
 【日藏会入本】 於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在智故

「動」は、『智全』巻上にはないが、『日藏』第二十三卷(三九頁上三行目)と『科註』巻一(三十七丁表)所引の『論記』にはある。ここでは、『日藏』と『科註』に依って「動」を補う。

【論記所引】論於第九地中下…(三八上一二)

故言於第九地中得勝進陀羅尼門…(三八上一二)

具足四無礙自在 故者…(三八上一三)

【敦煌摩提訖】於 九地中得勝進陀羅尼門具足四无尋自在 故

【房山摩提訖】於 九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在 故

【大正摩提訖】於 九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在 故

【福州摩提訖】於 九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在 故

【興聖寺刊本】於第九地中得勝進陀羅尼門具足四無尋自在智故

【大正留支訖】第九地中得勝進陀羅尼門具足四無礙自在智故

(真福寺本注墨)

轉

【真福寺本】於第十地中 不退轉洹輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故

【興聖寺写本】於第十地中 不退轉法輪得受佛位如轉輪王 子故以得同攝功德 故

【子注法華論】於第十地中轉⁴⁰不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故

【科註法華論】於第十地中轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故 (卷一、三十八表)

【叡山版】於第十地中轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故

【智全会入本】於第十地中轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故

【日藏会入本】於第十地中轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故

【論記所引】論於第十地下…(三八下一四)

言於第十地中 乃至如轉輪王 子故以得同攝功德 故者…(三九上八一九)

【敦煌摩提訖】於／十地中 不退轉法輪得佛受位如轉輪／ 子故以得同攝功德 故

【房山摩提訖】於第十地中 不退轉法輪得佛受位如轉輪王 子故以得同攝功德 故

【大正摩提訖】於第十地中 不退轉法輪得佛受位如轉輪王 子故以得同攝功德 故

40 原本では「十地中不退」となっており、「中」と「不」の間の右傍に、細字で「轉」(くずし字)とある。

【福州摩提訖】 於第十地中 不退轉法輪得佛受位如轉輪王之太子故以得同攝功德義故
【興聖寺刊本】 於第十地中轉不退轉法輪得受佛位如轉輪王 太子故以得同攝功德義故
【大正留支訖】 第十地中 不退轉法輪得受佛位如轉輪王之太子故以得同攝功德義故（二下）

衆成就 三 攝功德成就 三 （補足）

【真福寺本】 三攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 能辨故
（興聖寺寫本注） 四イ
【興聖寺寫本】 三攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 能弁故
【子注法華論】 三攝 功德成就者示現依何 處⁴¹依何心依何智依何等境界行 依何等 能辨故
【科註法華論】 攝取勝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 能弁故（卷一、三十九表）
【叡山版】 三攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 境界能辨故
【智全会入本】 三攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 能辨故（卷二、四二下）
【日藏会入本】 三攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何等境界行 依何等 能辨故（卷二、四二下）
【論記所引】 論攝 功德成就者已下：（四二下九）

一 依何 處（四二下一〇）

二 依何心（四二下一〇）

三 依何智（四二下一〇一一）

四 依何等境界行 五 依何等 能辨（四二下一一）

示現冠五

故字總結（四二下一一一二）

（敦煌摩提傍書）

處依何

【敦煌摩提訖】 攝 功德成就者示現依何 〃〃〃心依何智依何 境界行等 依何等 能辨故（三一上）
【房山摩提訖】 攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何 境界行 依何等 能辨故
【大正摩提訖】 攝 功德成就者示現依何 處依何心依何智依何 境界行 依何等 能辨故

41 原本では「處何心」となっており、「處」と「何」の間の右傍に、細字で「依」とある。

【福州摩提訢】攝 功德成就者示現依何心處依何心依何智依何等境界行 依何等境界能辦故
【興聖寺刊本】攝 功德成就者示現依何處依何心依何智依何等境界行 依何等能辦故
【大正留支訢】攝 功德成就者示現依何處依何心依何智依何等境界行 依何等能辦故

（真福寺本注墨）

處所 度⁴²

【真福寺本】依何處者依善知識。故依何心者我依。衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【興聖寺寫本】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【子注法華論】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故（卷上、第十七紙）

【科註法華論】依何處者依善知識 故依何心者我依度 衆生心教化畢竟利益一切衆生故（卷一、三十九表）

【叡山版】依何處者依善知識 故依何心者我依度 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【智全會入本】依何處者依善知識 故依何心者我依度 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【日藏會入本】依何處者依善知識 故依何心者我依度 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【論記所引】論依何處者下釋（四一下一三）

言依何處者依善知識 故者…（四一下一三）

依何心者…（四一下一五）

我依 衆生心教化者…（四一下一六）

畢竟利益一切衆生故者…（四一下二）

【敦煌摩提訢】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【房山摩提訢】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【大正摩提訢】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【福州摩提訢】依何處者依善知識 故依何心者我依 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【興聖寺刊本】依何處者依善知識 故依何心者我依度 衆生心教化畢竟利益一切衆生故

【大正留支訢】依何處者依善知識 故依何心者 依教化衆生心 畢竟利益一切衆生故

42 原本では、「處所」と「度」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。

（真福寺本注墨）

依

【真福寺本】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行／何等能辨者即三種智所攝應知
【興聖寺寫本】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能弁者即三種智所攝應知
【子注法華論】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【科註法華論】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能弁者即三種智所攝應知（卷一、三十九裏）
【叡山版】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【智全会入本】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【日藏会入本】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【論記所引】 依何智者依三種智者：（四二上四）
一者已下：（四二上六）

言授記密智者：（四二上六—七）

言諸通智者：（四二上九）

言真實智者：（四二上二〇）

依何等境界行者：（四二上二五）

依何等能辨者即三種智 應知者：（四二上二七）

【敦煌摩提詁】 依何智者依三種智一／授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智 攝應知
【房山摩提詁】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智 攝應知
【大正摩提詁】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智 攝應知
【福州摩提詁】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【興聖寺刊本】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知
【大正留支詁】 依何智者依三種智一者授記密智二者諸通智三者真實智依何等境界行依何等能辨者即三種智所攝應知

衆成就 四 威儀如法住成就

【真福寺本】 四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者 衆圍遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚歎

【興聖寺寫本】四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【子注法華論】四威儀如法／成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【科註法華論】四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆（卷一、四十一表）
 【叡山版】四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【智全會入本】四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【日藏會入本】四威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【論記所引】論威儀如法住成就者下：（四四上七）

論有四種示現者：（四五上二三）

何等已下：（四五上二三）

一 園遶 一 前後三 供養恭敬四 尊重讚歎：（四六下一一）
 論二者前後者：（五二下一）

【敦煌摩提訖】威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【房山摩提訖】威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【大正摩提訖】威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【福州摩提訖】威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆（第五紙）
 【興聖寺刊本】威儀如法住成就者有四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆
 【大正留支訖】威儀如法住成就者 四種示現何等爲四一者衆園遶二者前後三者供養恭敬四者尊重讚嘆

【真福寺本】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【興聖寺寫本】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故（第五紙）
 【子注法華論】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【科註法華論】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故（卷一、四十二表）
 【叡山版】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【智全會入本】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【日藏會入本】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故

【論記所引】如經已下…（四五上一四）
 【敦煌摩提訖】如經余時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【房山摩提訖】如經余時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【大正摩提訖】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故（一二中）
 【福州摩提訖】如經余時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故
 【興聖寺刊本】如經余時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故（卷上、第八紙）
 【大正留支訖】如經爾時世尊四衆圍繞供養恭敬尊重讚嘆故

三 如來欲說法時至成就

【真福寺本】如來欲說洵時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【興聖寺寫本】如來說欲⁴³ 時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【子注法華論】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【科註法華論】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故（卷二、一表）
 【叡山版】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故（七表）
 【智全会入本】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【日藏会入本】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【論記所引】論如來欲說 時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故已下…（五四上五）
 故曰欲說法時至成就…（五四上一〇一一）
 【敦煌摩提訖】如來欲說 時至成就者爲諸菩薩說大乘經 名无量義乃至法門等 故
 【房山摩提訖】如來欲說 時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【大正摩提訖】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【福州摩提訖】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故
 【興聖寺刊本】如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故

43 「說」の上に小さい丸印と「欲」の右下に倒置符が付されているが、拙稿「二〇二二B」四二頁の当該箇所（二二〇行目及び注一七二）では見落としている。

【大正留支訳】 如來欲說法時至成就者爲諸菩薩說大乘經 故

【真福寺本】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【興聖寺写本】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示⁴⁴

【子注法華論】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示（卷上、第十八紙）

【科註法華論】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示（卷二、一裏）

【叡山版】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【智全会入本】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【日藏会入本】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【論記所引】 論此大乘脩多羅有十七已下…（五五下二）

有十七種者…（五五下四—五）

顯示甚深功德者…（五五下五）

應知者…（五五下八）

【敦煌摩提訳】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知

【房山摩提訳】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知

【大正摩提訳】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知

【福州摩提訳】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【興聖寺刊本】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

【大正留支訳】 此大乘脩多羅有十七種名顯示甚深功德應知何等十七云何顯示

（真福寺本注朱）

【真福寺本】 一名無量義經者成就字義故以此洹門說方便⁴⁵ 彼 故彼甚深洹妙境界者諸佛如來最勝境界故
（興聖寺写本注） 妙^坎 妙^坎

44 「七」の上に小さい丸印と「十」の右下に倒置符が付されている。

45 「方便説」の各字右傍に、朱書で小さい丸印が付されており、その上方欄外には朱書で「或本无説／口便三字」とある。

【興聖寺写本】 一名无量義經者成就字義故以此法門說方便說彼甚深法少境界法故彼甚深法少境界者諸佛如來最勝境界法

【子注法華論】 一名无量義經者成就字義故以此法門說方便說／甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來取勝境界故

【科註法華論】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來取勝境界故 (卷二、二表)

【叡山版】 一名无量義經者成就字義故以此法門 方便說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來取勝境界故

【智全会入本】 一名无量義經者成就字義故以此法門 方便說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來最勝境界故

【日藏会入本】 一名无量義經者成就字義故以此法門 方便說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來最勝境界故

【論記所引】 論 一名无量義經者下：(五五下九)

論 一名无量義經者成就字義故者：(五五下一五)

以此法門下：(五六上三)

故曰以此法門

【敦煌摩提訖】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深 妙境界 故彼甚深 妙境界者下：(五六上六一七)

【房山摩提訖】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深 妙境界法故 甚深 妙境界者諸佛如來取勝境界故

【大正摩提訖】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深 妙境界法故 甚深 妙境界者諸佛如來最勝境界故

【福州摩提訖】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深法妙境界法故彼甚深法妙境界者諸佛如來最勝境界故

【興聖寺刊本】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來最勝境界故

【大正留支訖】 一名无量義經者成就字義故以此法門 說彼甚深法妙境界 故彼甚深法妙境界者諸佛如來最勝境界故

(真福寺本注墨)

【真福寺本】 二名最勝脩多羅 者於三藏中最勝妙藏 善成就故

(興聖寺写本注) 妙坎

【興聖寺写本】 二名最勝脩多羅 一者於三藏中最勝藏 善成就故

【子注法華論】 二名取勝脩多羅 者於三藏中取勝妙藏 義成就故

【科註法華論】 二名取勝脩多羅 者於三藏中取勝妙藏 善成就故 (卷二、三表)

【叡山版】 二名最勝修多羅 者於三藏中叡 勝妙藏此法門中善成就故

【智全会入本】 二名最勝修多羅 者於三藏中最 勝妙藏此法門中善成就故

【日藏会入本】 二名最勝修多羅 者於三藏中最 勝妙藏此法門中善成就故

【論記所引】 論 二名最勝修多羅 者於三藏中最妙勝 藏 成就故者…(五九上五)

【敦煌摩提訖】 二名叡勝脩多羅 者 三藏中叡妙勝 藏 成就故

【房山摩提訖】 二名最勝修多羅 者 三藏中最妙勝 藏 成就故

【大正摩提訖】 二名最勝修多羅 者 三藏中最妙勝 藏 成就故

【福州摩提訖】 二名最勝修多羅 者於三藏中最 勝妙藏此法門中善成就故

【興聖寺刊本】 二名最勝修多羅 者於三藏中最 勝妙藏 善成就故

【大正留支訖】 二名最勝修多羅 者於三藏中最 勝妙藏此法門中善成就故

【真福寺本】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨順衆生根 住持成就故

【興聖寺写本】 三名大方廣 者无量大乘 門 隨順衆生根 住持成就故

【子注法華論】 三名大方廣 者无量大乘 門 隨順衆生根 住持成就故

【科註法華論】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨順衆生根 住持成就故(卷二、三裏)

【叡山版】 三名大方廣 者無量大乘法門 隨順衆生根 住持成就故

【智全会入本】 三名大方廣 者無量大乘法門 隨順衆生根 住持成就故

【日藏会入本】 三名大方廣 者無量大乘法門 隨順衆生根 住持成就故

【論記所引】 論 三名大方廣 者無量大乘 門 隨 衆生根性住持成就者…(六〇上三)

【敦煌摩提訖】 三名大方廣 者无量大乘 門 隨 衆生根 住持成就故

【房山摩提訖】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨 衆生根 住持成就故

【大正摩提訖】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨 衆生根 住持成就故

【福州摩提訖】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨 衆生根 住持成就故

【興聖寺刊本】 三名大方廣 者無量大乘 門 隨順衆生根 住持成就故

【大正留支訖】 三名大方廣 者無量大乘 門 中善成就故隨順衆生根 住持成就故

（真福寺本注朱）

護

【真福寺本】

四名教菩薩海者 爲教化根熟菩薩隨順。器海⁴⁷善成就故五 名佛所。念者 依佛如來有此法故

【興聖寺写本】

四名教菩薩法者 爲教記根熟菩薩隨順 器法 成就故五者 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【子注法華論】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨順 器法善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故（卷上、第十九紙）

【科註法華論】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故（卷二、四裏）

【叡山版】

四名教菩薩法者以爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【智全会入本】

四名教菩薩法者以爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【日藏会入本】

四名教菩薩法者以爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【論記所引】

論四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨 法器 成就故者…（六〇下一七）

【敦煌摩提記】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨 器法 成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【房山摩提記】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨 器法 成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【大正摩提記】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨 器法 成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【福州摩提記】

四名教菩薩法者以爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【興聖寺刊本】

四名教菩薩法者 爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【大正留支記】

四名教菩薩法者以爲教化根熟菩薩隨順法器 善成就故五 名佛所護念者 依佛如來有此法故

【真福寺本】

六 名一切諸佛祕蜜海者此法甚深 如來知故七名一切諸佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故（第七紙）

【興聖寺写本】

六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故七名一切佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故

【子注法華論】

六 名一切諸佛祕蜜法者此法甚深 如來知故七名一切諸佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故

【科註法華論】

六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故七名一切諸佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故（卷二、六表）

【叡山版】

六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛如來知故七名一切諸佛之藏者如來功德三昧之藏在此經故（七裏）

47 朱書で「器」の上に小さい丸印と「法」の右傍に倒置符が付されている。
48 「者」の右傍に見せ消ち記号が付されている。

【智全会入本】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛如來知故七名一切諸佛之藏者如來功德三昧之藏在此經故
【日藏会入本】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛如來知故七名一切諸佛之藏者如來功德三昧之藏在此經故
【論記所引】 論六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故者：(六四上三)

論七名一切 佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故者：(六四下一二)

【敦煌摩提訊】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故七名一切 佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故

【房山摩提訊】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故七名一切 佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故 (第六紙)

【大正摩提訊】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深 如來知故七名一切 佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故

【福州摩提訊】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛如來知故七名一切 佛之藏者如來功德三昧之藏在此經故

【興聖寺刊本】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛 知故七名一切諸佛 藏者如來功德三昧之藏在此經故

【大正留支訊】 六 名一切諸佛祕密法者此法甚深唯佛 知故七名一切諸佛之藏者如來功德三昧之藏在此經故

【真福寺本】 八 名一切諸 佛祕蜜處者 根未熟衆生 非受洺器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【興聖寺写本】 八 名一切諸佛祕密處者 根未熟衆生 非 法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【子注法華論】 八 名一切諸 佛祕蜜處者 根未熟衆生 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【科註法華論】 八 名一切諸 佛祕密處者 根未熟衆生 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故 (卷二、七裏)

【叡山版】 八 名一切諸 佛祕密處者以根未熟衆生等 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【智全会入本】 八 名一切諸 佛祕密處者以根未熟衆生等 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【日藏会入本】 八 名一切諸 佛祕密處者以根未熟衆生等 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【論記所引】 論八 名一切諸 佛祕密處者 根未熟衆生 非 法器不授与故者：(六五上二—三)

論九名能生一切諸佛 者聞此法門能成 佛 菩提故者：(六五下一四)

【敦煌摩提訊】 八 名一切諸 佛 密處者 根未熟衆生 非 法器不 與故九名能生一切諸佛 者聞此法門能成 佛 菩提故

【房山摩提訊】 八 名一切諸 佛 密處者 根未熟衆生 非 法器不 與故九名能生一切諸佛 者聞此法門能成 佛 菩提故

【大正摩提訊】 八 名一切諸 佛 密處者 根未熟衆生 非 法器不 與故九名能生一切諸佛 者聞此法門能成 佛 菩提故

【福州摩提訊】 八 名一切諸 佛祕密處者以根未熟衆生等 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成 佛大菩提故

【興聖寺刊本】 八 名一切諸 佛祕密處者 根未熟衆生 非受法器不授与故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【大正留支記】 八名一切諸 佛祕密處者以根未熟衆生等非受法器不授與故九名能生一切諸佛經者聞此法門能成諸佛大菩提故

【真福寺本】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【興聖寺寫本】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【子注法華論】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【科註法華論】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故（卷二、九表）

【叡山版】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成諸佛 阿耨多羅三藐三菩提非余修多羅故

【智全会入本】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成諸佛 阿耨多羅三藐三菩提非餘修多羅故

【日藏会入本】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成諸佛 阿耨多羅三藐三菩提非餘修多羅故

【論記所引】 論 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘修多羅故者：（六六下一一二）

【敦煌摩提記】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故（三一一下）

【房山摩提記】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【大正摩提記】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 能成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【福州摩提記】 十名一切諸佛之道場者聞此法門 能成諸佛 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【興聖寺刊本】 十名一切諸佛 道場者聞此法門 成 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故

【大正留支記】 十名一切諸佛之道場者以此法門 能成諸佛 阿耨多羅三藐三菩提非餘脩多羅故（三上）

【真福寺本】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸部尋故

【興聖寺寫本】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸部尋故

【子注法華論】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸部尋故（卷上、第二十紙）

【科註法華論】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸部尋故（卷二、九裏）

【叡山版】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸障礙故

【智全会入本】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸障礙故

【日藏会入本】 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸障礙故

【論記所引】 論 十一名一切諸佛所轉法輪者以此法門 能破一切諸障礙故者：（六七上一一二）

「中」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

故曰一切諸佛所轉法 於乃至能破 諸障 故…(六七上一五—一六)

【敦煌摩提訖】 十一名一切諸佛所轉法輪者 此法門能破一切諸障 故

【房山摩提訖】 十一名一切諸佛所轉法輪者 此法門能破一切諸障 故

【大正摩提訖】 十一名一切諸佛所轉法輪者 此法門能破一切諸障 故

【福州摩提訖】 十一名一切諸佛所轉法輪者 以此法門能破一切諸障礙故

【興聖寺刊本】 十一名一切諸佛所轉法輪者 以此法門能破一切諸障尋故

【大正留支訖】 十一名一切諸佛所轉法輪者 以此法門能破一切諸障礙故

(真福寺本注朱)

【真福寺本】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 洹身於此脩多羅中⁴⁹不⁴⁹壞故

【興聖寺寫本】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如來法身於此脩多羅 不 壞故

【子注法華論】 十二名一切諸佛賢 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不 壞故

【科註法華論】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不敗壞故(卷二、十表)

【叡山版】 十二名一切諸佛 堅固舍利經者謂如來真如 法身於此脩多羅 不毀壞故

【智全会入本】 十二名一切諸佛 堅固舍利經者謂如來真如 法身於此脩多羅 不毀壞故

【日藏会入本】 十二名一切諸佛 堅固舍利經者謂如來真如 法身於此脩多羅 不毀壞故

【論記所引】 論 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不破壞故者…(六七下二—三)

故言如來真如 法身於此脩多羅 不 壞故…(六八上七)

【敦煌摩提訖】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不 壞故

【房山摩提訖】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不 壞故

【大正摩提訖】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不 壞故

【福州摩提訖】 十二名一切諸佛 堅固舍利經者謂如來真如 法身於此脩多羅 不敗壞故

【興聖寺刊本】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來真如 法身於此脩多羅 不敗壞故(卷上、第九紙)

敗

【大正留支訳】 十二名一切諸佛 堅固舍利 者謂如來**眞實** 法身於此修多羅 不敗壞故

【眞福寺本】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【興聖寺写本】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人**耳耳**辟支佛等**諸善根** 法故

【子注法華論】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【科註法華論】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故（卷二、十一表）

【叡山版】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【智全会入本】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【日藏会入本】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【論記所引】 論十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等 **故者**：（六八上二——一二）

【敦煌摩提訳】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等 法故

【房山摩提訳】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等 法故

【大正摩提訳】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等 法故

【福州摩提訳】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【興聖寺刊本】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

【大正留支訳】 十三名一切諸佛大巧方便經者依此法門成大菩提已爲衆生説天人聲聞辟支佛等**諸善** 法故

（眞福寺本注朱） **道 究**

【眞福寺本】 十四名説一乘經者以。法門顯示如來**此**⁵⁰阿耨多羅三藐三菩提究竟之**躰**彼二乘。非道⁵¹究竟故

【興聖寺写本】 十四名説一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之**躰**彼二乘 非究竟故

【子注法華論】 十四名説一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之**體**彼二乘 非究竟故

【科註法華論】 十四名説一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之**躰**彼二乘道非究竟故（卷二、十一裏）

【叡山版】 十四名説一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之**躰**彼二乘道非究竟故（八表）

50 墨書で「法」の上に小さい丸印と「此」の右傍に挿入符が付されている。
51 「道」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【智全会入本】 十四名說一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體彼二乘道非究竟故

【日藏会入本】 十四名說一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體彼二乘道非究竟故

【論記所引】 論十四名說一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體彼二乘道非究竟故者…（六九上二三）

【敦煌摩提訖】 十四名說一乘經者 此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體 二乘 非究竟故

【房山摩提訖】 十四名說一乘經者 此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體 二乘 非究竟故

【大正摩提訖】 十四名說一乘經者 此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體 二乘 非究竟故

【福州摩提訖】 十四名說一乘經者 此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體 二乘道非究竟故

【興聖寺刊本】 十四名說一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體彼二乘道非究竟故

【大正留支訖】 十四名說一乘經者以此法門顯示如來 阿耨多羅三藐三菩提究竟之體彼二乘道非究竟故

【真福寺本】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【興聖寺写本】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【子注法華論】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【科註法華論】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故（卷二、十二裏）

【叡山版】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【智全会入本】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【日藏会入本】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【論記所引】 論十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故者…（六九下四一五）

【敦煌摩提訖】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【房山摩提訖】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【大正摩提訖】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【福州摩提訖】 十五名第一義住者以此法門即是 如來法身究竟住處故

【興聖寺刊本】 十五名第一義住者 此法門即是 如來法身究竟住處故

【大正留支訖】 十五名第一義住者以此法門即是諸佛如來法身究竟住處故

【真福寺本】 十六名妙法蓮華 者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘溷濁水故

【興聖寺寫本】十六名妙法蓮花經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【子注法華論】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【科註法華論】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故（卷二、十三裏）
【叡山版】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【智全会入本】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【日藏会入本】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【論記所引】論十六名妙法蓮華經者下…（七〇下四）

有二種下…（七〇下五）

論一者出水下…（七〇下七）

出離下…（七〇下九）

論出離小乘泥濁水故者…（七一上二）

【敦煌摩提訖】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義 不可盡出離小乘泥濁水故
【房山摩提訖】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義 不可盡出離小乘泥濁水故
【大正摩提訖】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義 不可盡出離小乘泥濁水故
【福州摩提訖】十六名妙法蓮華經者有二種義何等爲 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【興聖寺刊本】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故
【大正留支訖】十六名妙法蓮華經者有二種義何等 二種一者出水義以不可盡出離小乘泥濁水故

【真福寺本】復有義如 蓮華出 迦水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故
【興聖寺寫本】復有義如 蓮花出 泥水喻諸耳耳得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來密藏故
【子注法華論】復有義如 蓮華出 迦水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故（卷上、第二十一紙）
【科註法華論】復有義如 蓮華出 泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故（卷二、十四裏）
【叡山版】復有義如 蓮華出 泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故
【智全会入本】復有義如 蓮華出 泥水喻諸聲聞得入如來大衆中座如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故
【日藏会入本】復有義如 蓮華出 泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深蜜藏故

【論記所引】復有義下…（七〇下九）

論復有義下…（七一下九）

如諸菩薩等者…（七一下一七）

聞說 無上智慧等者…（七二上二）

【敦煌摩提訖】復有義 蓮華出 迦水喻諸聲聞 入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說 無上智慧清淨境界 證如來 密藏故

【房山摩提訖】復有義 蓮華出 泥水喻諸聲聞 入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說 無上智慧清淨境界 證如來 密藏故

【大正摩提訖】復有義 蓮華出 泥水喻諸聲聞 入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說 無上智慧清淨境界 證如來 密藏故（二二下）

【福州摩提訖】又復有義如彼蓮華出於泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深密藏故

【興聖寺刊本】又復有義如彼蓮華出於泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深密藏故

【大正留支訖】又復有義如彼蓮華出於泥水喻諸聲聞得入如來大衆中坐如諸菩薩坐蓮華上聞說如來無上智慧清淨境界得證如來深密藏故

（真福寺本注墨）

【真福寺本】二者華開義 衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示 如來淨妙法二令生信心故

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】二。花開 者 衆生於大乘中 心怯弱不能生信 故開示 如來淨妙法身令生信心故（第六紙）

【子注法華論】二者華開義 衆生於大乘中其心性弱不能生信是故開示 如來淨妙法身令生信心故

【科註法華論】二者華開義 衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示 如來淨妙法身令生信心故（卷二、十六表）

【叡山版】二者華開義 以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故

【智全会入本】二者華開義 以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故

【日藏会入本】二者華開義 以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故

【論記所引】論一華開者…（七二下二一）

衆生於大乘中 心怯弱不能生信 故者…（七二下二一—二二）

故曰開示 如來淨妙法身令生信心故…（七二下二六—二七）

52 当該箇所は、『智全』卷上では「論復義有義下」となっているが、『日藏』第二十三卷（七三頁下一〇行目）と『科註』卷二（十四丁裏）所引の『論記』では「論復有義下」となっている。
「復」の下の「義」は『智全』の衍字と見られるため、ここでは削除する。

53 拙稿「二〇二二B」四二頁の当該箇所（二四八行目）では、「弱」と翻刻しているが、厳密には「弱」であるため、ここに訂正する。

【敦煌摩提訖】 二 花開者 衆生於大乘中 心怯弱不能生信 / 開示 如來淨妙法身令生信心故

【房山摩提訖】 二 華開者 衆生於大乘中 心怯弱不能生信 故開示 如來淨妙法身令生信心故

【大正摩提訖】 二 華開者 衆／於大乘中 心怯弱不能生信 故開示 如來淨妙法身令生信心故

【福州摩提訖】 二 華開義者以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故

【興聖寺刊本】 二 華開義 以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示 如來淨妙法身令生信心故

【大正留支訖】 二 華開義 以諸衆生於大乘中其心怯弱不能生信是故開示諸佛如來淨妙法身令生信心故

（真福寺本注朱）

取上⁵⁴

【真福寺本】

十七名。法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】

十七名 法門者攝成就故攝成就者攝取無量名⁵⁵ 身

頻婆羅阿閼婆等 偈故

【子注法華論】

十七名 法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故

【科註法華論】

十七名取上法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故（卷二、十六裏）

【觀山版】

十七名取勝法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故（八裏）

【智全会入本】

十七名最勝法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故

【日藏会入本】

十七名最勝法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身

頻婆羅阿閼婆等舒盧迦^{亦云} 故

【論記所引】

論十七名最上法門者攝成就故已下…（七三上六）

攝成就者下…（七三上七）

論攝成就者下…（七三下六）

言攝取者…（七三下七）

無量已下…（七三下七）

名句字身者…（七三下一六）

54

55 「最上」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。

拙稿「二〇二二B」四二頁では、当該箇所（一五〇行目）を「句字」と翻刻しているが、厳密には「句字」の誤写であるため、「||」に変更する。なお、「名」と誤写の「句」の間に、小さい丸印が付されている。

等取下諸數（七四下八）

偈梵語略：（七四下九）

故字結上（七四下一一）

【敦煌摩提訖】十七名 法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身 頻婆羅阿閼婆等

【房山摩提訖】十七名 法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身 頻婆羅阿閼婆等

【大正摩提訖】十七名 法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身 頻婆羅阿閼婆等

【福州摩提訖】十七名最上法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身 頻婆羅阿閼婆等 舒盧迦

【興聖寺刊本】十七名最上法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身 頻婆羅阿閼婆等 舒盧迦

【大正留支訖】十七名最上法門者攝成就故攝成就者攝取無量名句字身有頻婆羅阿閼婆等 舒盧迦

【真福寺本】此十七句法門者是揔餘句是別 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故（第八紙）
（興聖寺写本注）如

【興聖寺写本】此十七句法門者是揔餘句是別故。經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等

【子注法華論】此十七句法門者是揔餘句是別 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等

【科註法華論】此十七句法門者是揔餘句是別 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故（卷二、十八裏）

【叡山版】此十七句法門者是揔餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【智全会入本】此十七句法門者是總餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【日藏会入本】此十七句法門者是總餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【論記所引】論此十七句下：（七四下一四） 論如經已下：（七五上一）

【敦煌摩提訖】此十七句法門者是揔餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【房山摩提訖】此十七句法門者是揔餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等

【大正摩提訖】此十七句法門者是總餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等

【福州摩提訖】此十七句法門者是揔餘句是別故 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【興聖寺刊本】此十七句法門 是揔餘句是別 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

【大正留支訖】此十七句法門 是總餘句是別 如經爲諸菩薩說大乘經名無量義如是等故

四 所依說法隨順威儀住成就

【真福寺本】	所依說海	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【興聖寺寫本】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【子注法華論】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	／說法依三種法故
【科註法華論】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故（卷二、十九表）
【叡山版】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【智全會入本】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【日藏會入本】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【論記所引】	論所依說法	隨順威儀住成就者已下：（七五上八）	

示現已下：（七五上二）

示現依何等下：（七五上二—一三）

【敦煌摩提訖】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【房山摩提訖】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【大正摩提訖】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【福州摩提訖】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【興聖寺刊本】	所依說法	隨順威儀住成就者示現依何等	法說法依三種法故
【大正留支訖】	依所 說法威儀隨順	住成就者示現依何等	何等 法說法依三種法故

【真福寺本】	一者依三昧成就故以三昧成就二種	示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障	隨自在力故
【興聖寺寫本】	一者依三昧成就故以三昧成就二種	法示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障	隨自在力故
【子注法華論】	一者依三昧成就故	三昧成就二種	示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障尋隨自在力故（卷上、第二十二紙）
【科註法華論】	一者依三昧成就故以三昧成就二種	示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障	隨自在力故（卷二、二十表）
【叡山版】	一者依三昧成就故以三昧成就二種	法示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障障礙隨自在力故	
【智全會入本】	一者依三昧成就故以三昧成就二種	法示現何等爲二	者成就自在力身心不動故二	者離一切諸障障礙隨自在力故	

【日藏会入本】 一者依三昧成就故以三昧成就二種法示現何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切諸障礙隨自在力故
【論記所引】 一者已下…(七五上二三) 何等已下…(七五上二四)

論 一者已下…(七六上一)

依三昧成就故者…(七六上二)

以三昧成就者…(七六下一四)

二種 示現者…(七六下一四)

何等爲二…(七六下一五)

自在力者…(七六下一六)

故言成就自在力身心不動故…(七七上三一四)

離一切諸障者…(七七上六)

故曰離一切諸障 隨自在力故者…(七七上九)

【敦煌摩提訊】

一者依三昧成就故以三昧成就二種法示現何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切諸障 隨自在力故

【房山摩提訊】

一者依三昧成就故以三昧成就二種 示現何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切諸障 隨自在力故 (第七紙)

【大正摩提訊】

一／依三昧成就故以三昧成就二種 示現何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切諸障 隨自在力故

【福州摩提訊】

一者依三昧成就故以三昧成就二種法示現何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切諸障 隨自在力故

【興聖寺刊本】

一者依三昧成就 以三昧成就二種 示／何等爲二 者成就自在力身心不動故二者離一切 障 隨自在力故 (卷上、第十紙)

【大正留支訊】

一者依三昧成就 三昧成就二種 示現 一者成就自在力身心不動故二者離一切 障 隨自在力故

(真福寺本注朱)

不見⁵⁶

【真福寺本】

此自在力復有 二種一 爲隨順衆生 覓 對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故

【興聖寺写本】

此自在力復有 二種一 者爲隨順衆生不見 對治攝取覺菩提分法故二 者爲對治无量世 取來堅執煩惱故

【子注法華論】

此自在力復有 二種一 爲隨順衆生 覓 對治攝取覺菩提分法故二 爲對治无量世 來堅執煩惱故

【科註法華論】

此自在力復有 二種一 爲隨順衆生不見 對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故 (卷二、二十一表)

56 真福寺本では、本文中の「生」が行末にあり、その下の欄外に朱書で「不」とある。また「覓」「不見」を誤写したものと見られる。の右傍に朱書で「見」とある。

【叡山版】 此自在力復有示現二種一 爲隨順衆生不見對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅報煩惱故
【智全会入本】 此自在力復有示現二種一 爲隨順衆生不見對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故（卷三本、七七上）
【日藏会入本】 此自在力復有示現二種一 爲隨順衆生不見對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故（卷三本、七九上）
【論記所引】 此自在力等…（七五上一五）

一者已下…（七五上一五）

論此自在力等…（七七上一三）

一 爲隨順衆生不見對治攝取覺菩提分法故者…（七七上一三一—四）

論爲對治無量世 來堅執煩惱故者…（七八下一）

【敦煌摩提訖】 此自在力復有 二種一者 隨順衆生 覓 對治攝取覺菩提分法故二 者爲對治無量世 來堅執煩惱故（三二二上）
【房山摩提訖】 此自在力復有 二種一者 隨順衆生 示現對治攝取覺菩提分法故二 者爲對治無量世 來堅執煩惱故
【大正摩提訖】 此自在力／有 二種一者 爲隨順衆生 示現對治攝取覺菩提分法故二 者爲對治無量世 來堅執煩惱故
【福州摩提訖】 此自在力復有 二種一者 隨順衆生 不見對治攝取覺菩提分法故二 者爲對治無量世 來堅執煩惱故
【興聖寺刊本】 此自在力復有 二種一 爲隨順衆生 不見對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故
【大正留支訖】 此自在力復有 二種一 爲隨順衆生 不見對治攝取覺菩提分法故二 爲對治無量世 來堅執煩惱故

【真福寺本】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於無量義處二昧 等故
【興聖寺写本】 如經佛說此經 名无已結跏趺坐入於无量義處二昧 等故
【子注法華論】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於无量義處二昧 等故
【科註法華論】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於無量義處二昧 等故（卷二、二十二表）
【叡山版】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於無量義處二昧 等故
【智全会入本】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於無量義處二昧 等故
【日藏会入本】 如經佛說此經 已結跏趺坐入於無量義處二昧 等故
【論記所引】 如經已下…（七五上一五一—六）
論如經已下…（七八下一七）

說此經 已…（七九上一）

【敦煌摩提訖】如經 說此經名 已結 跏趺坐入於無量義處三昧 等
【房山摩提訖】如經 說此經名 已結 跏趺坐入於無量義處三昧 等
【大正摩提訖】如經 說此經 已結 跏趺坐入於無量義處三昧 等
【福州摩提訖】如經 佛說此經名 已結 跏趺坐入於無量義處三昧 身心不動如是等故
【興聖寺刊本】如經 佛說此經 已結 跏趺坐入於無量義處三昧 等故
【大正留支訖】如經 佛說此經 已結 加趺坐入於無量義處三昧 身心不動如是等故（三中）

【真福寺本】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故
（興聖寺写本注）
【興聖寺写本】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 小故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故
【子注法華論】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故
【科註法華論】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故（卷二、二十二裏）
【觀山版】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故（九表）
【智全会入本】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故
【日藏会入本】二者依器世間三者依衆生世間 振動世界及知過去無量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故
【論記所引】論一 依器世間已下…（八〇上一二）
衆生世間者…（八〇上一三一—四）
知過去世（八一上一〇）
無量劫事…（八一上一〇）
振動兩字…（八一上一二）
名爲世界…（八一上一二）

論如經是時天雨已下…（八一上一五）

歡喜合掌一心觀佛…（八一上一六—一七）

58 57
「振」の左傍に見せ消ち記号があり、下方欄外に「振」とある。
「等」の略字か。拙稿「二〇二二B」四三頁の注二四五を参照。

【敦煌摩提訖】二 依器世間三 依衆生世間 振動世界及知過去 无量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

【房山摩提訖】二 依器世間三 依衆生世間 震動世界及知過去 无量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

【大正摩提訖】二 依器世間三 依衆生世間 震動世界及知過去 无量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

【福州摩提訖】二 依器世間三 依衆生世間 震動世界及知過去 无量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

【興聖寺刊本】二 依器世間三 依衆生世間 振動世界及知過去 无量劫事 等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

【大正留支訖】二 依器世間三 依衆生世間 震動世界及知過去 无量劫事 如是等故如經是時天雨曼陀羅華 乃至歡喜合掌一心觀佛故

五 依止說因成就

（真福寺本注朱）

（真福寺本注墨）

見

大衆見已生希有心渴仰欲聞生如是念^四

【真福寺本】

依止說因成就者彼諸大衆 現 異相不可思議事

【興聖寺写本】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事

【子注法華論】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事

【科註法華論】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事（卷二、二十四表）

【叡山版】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事

【智全会入本】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事

【日藏会入本】

依止說因成就者彼諸大衆 現見異相不可思議事

【論記所引】

論 依止說因成就已下…（八七上一五）

論 彼諸已下…（八七下三）

彼諸大衆者…（八七下三）

現見異相者…（八七下四）

不思議…（八七下五）

衆見…（八七下六）

生希有心…（八七下六）

59 原本では、「大衆見已生希有心渴仰欲聞生如是念」（訓点・送り仮名が付されているが省略する）の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。

【敦煌摩提訖】 如來 應爲我 說
依止說因成就者彼諸大衆
／見異相不可思議事

【房山摩提訖】 如來 應爲我 說
依止說因成就者彼諸大衆
現見異相不可思議事

【大正摩提訖】 如來 應爲我 說
依止說因成就者彼諸大衆
現見異相不可思議事（二三上）

【福州摩提訖】 如來 應爲我 說
依止說因成就者彼諸大衆
現見異相不可思議事 大衆見已生希有心渴仰欲聞生如是念⁶⁰

【興聖寺刊本】 如來 應爲我 說
依止說因成就者彼諸大衆
現見異相不可思議事

【大正留支訖】 如來 應爲我 說
依止說因成就者爲諸大衆示現 異相不 思議事 大衆見已生希有心渴仰欲聞生如是念

（真福寺本注朱）

他方⁶¹

【真福寺本】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示□。◎ 諸世界中種種 事故

【興聖寺寫本】 如來今者應爲我諸 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現 諸世界中種／ 事故

【子注法華論】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現 諸世界中種 事故（卷上、第二十三紙）

【科註法華論】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現他方 諸世界中種種 事故（卷二、二十四表）

【叡山版】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現 諸世界中種種 事故

【智全会入本】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現 諸世界中種種 事故

【日藏会入本】 如來今者應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故如來放大光明示現 諸世界中種種 事故

【論記所引】 言渴仰者：（八七下七一八）
是依止說因成就之義：（八七下一一）
論是故已下：（八七下一四）
放大光明者：（八七下一四）

示現 世界 種種 事者：（八七下一四—一五）

【敦煌摩提訖】 如來 應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故 放大光明示現 諸世界中種種 事故

【房山摩提訖】 如來 應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故 放大光明示現 諸世界中種種 事故

【大正摩提訖】 如來 應爲我 說
渴仰欲聞生希有心依止說因成就就是故 放大光明示現 諸世界中種種 事故

60 原本では、当該箇所が「大衆見已生希有心渴仰欲聞生如 爲我說渴仰欲 是念如來今者應爲我說故如來應 聞生希有心」の形で割注になっている。

61 原本では、「他方」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。

【福州摩提訊】如來今者應爲我 說故如來應爲我說 渴仰欲聞生希有心⁶² 名依止說因成就是故如來放大光明示現他方諸世界中種種諸事故
【興聖寺刊本】如來今者應爲我 說 渴仰欲聞生希有心 名依止說因成就是故如來放大光明示現他方諸世界中種種 事故
【大正留支訊】如來今者應爲我 說故 名依止說因成就是故如來放大光明示現他方諸世界中種種諸事故

【真福寺本】先 示現外事六種振動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【興聖寺寫本】先 示現外事六種振動等次⁶³ 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【子注法華論】先 示現外事六種振動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【科註法華論】先 示現外事六種振動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故（卷二、二十四裏）
【叡山版】先爲大衆示現外事六種震動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【智全会入本】先爲大衆示現外事六種震動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【日藏会入本】先爲大衆示現外事六種震動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【論記所引】先 示現外事等者：（八七下一五）

論次 示現下：（八八上三）

此法門者：（八八上三）

內證 深 密 法故者：（八八上四）

【敦煌摩提訊】先 示現外事六種振動等次 示現此法門中內證 深 密 法故
【房山摩提訊】先 示現外事六種震動等次 示現此法門中內證 深 密 法故
【大正摩提訊】先 示現外事六種震動等次 示現此法門中內證 深 密 法故
【福州摩提訊】先爲大衆示現外事六種振動等次爲示現此法門中內證甚深微妙之法故
【興聖寺刊本】先 示現外事六種振動等次 示現此法門中內證甚深微妙 法故
【大正留支訊】先爲大衆示現外事六種震動等次爲示現此法門中內證甚深微妙之法

【真福寺本】又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱老別具足清淨老別佛海弟子老別示現三 寶故

⁶² 注60の通り。

⁶³ 拙稿「二〇二二B」四三頁の当該箇所（二六六行目）では、「振」と翻刻しているが、厳密には「擗」であるため、ここに訂正する。

【興聖寺写本】 又依器世間衆生世間衆生世間數種種 量種種具足煩惱⁶⁴老別具足清淨老別佛法弟子老別示現三種⁶⁵實故
 【子注法華論】 又依器世間衆生世間 數種と 量種と具足煩惱老別具足清淨老別佛法弟子老別示現三 實故
 【科註法華論】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱老別具足清淨老別佛法弟子老別示現三 實故（卷二、二十五裏）
 【叡山版】 又依器世間衆生世間 數種種無量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【智全会入本】 又依器世間衆生世間 數種種無量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【日藏会入本】 又依器世間衆生世間 數種種無量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【論記所引】 又依已下…（八七上一七）

論又依器世間下…（八八下一二）

衆生世間者…（八八下一四）

數種種者…（八八下一六）

量種種者…（八八下一六）

具足 差別者…（八八下一六一七）

具 淨差別者…（八九上一）

佛法弟子差別者 三 實差別也…（八九上三）

【敦煌摩提訳】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱老別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【房山摩提訳】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【大正摩提訳】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【福州摩提訳】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故
 【興聖寺刊本】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱老別具足清淨老別佛法弟子老別示現三 實故
 【大正留支訳】 又依器世間衆生世間 數種種 量種種具足煩惱差別具足清淨差別佛法弟子差別示現三 實故

【真福寺本】 復乘老別有世界有佛有世界無佛令衆生見脩行者未得果得道者已得果 如經諸脩行得道者故
 【興聖寺写本】 復乘老別有世界有佛有世界无佛令衆生見修行者未得果得道者已得果 如經／修行得道者故

⁶⁴ 同上の当該箇所（六八行目）では、「差」と翻刻しているが、厳密には「老」であるため、ここに訂正する。以降、同様の例は逐一注記しない。
⁶⁵ 同上の当該箇所（六九行目）では見落としているが、「種」の上に小さい丸印が付されている。

【子注法華論】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【科註法華論】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故（卷二、二十六表）

【觀山版】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果**故**如經諸**脩**行得道者故

【智全会入本】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果**故**如經諸**脩**行得道者故

【日藏会入本】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果**故**如經諸**脩**行得道者故

【論記所引】復乘**差別**者…（八九上七）

或世界有佛 衆生 已得果（八九上九一〇）

或世界**无**佛 衆生 未得果…（八九上二〇）

論如經已下…（八九上二三）

論文衆生…（八九上二三）

見**脩**行者…（八九上三一四）

【敦煌摩提訖】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【房山摩提訖】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【大正摩提訖】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【福州摩提訖】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果**故**如經諸**脩**行得道者故

【興聖寺刊本】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【大正留支訖】復乘**差別**有世界有佛有世界**无**佛令衆生見**脩**行者未得果得道者已得果 如經諸**脩**行得道者故

【真福寺本】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者□行四者樂

【興聖寺写本】數種種者示現種種**觀**故略說四種**觀**一者食二者聞法三者**脩**行四者樂

【子注法華論】數種々者示現種々觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者**脩**行四者樂

【科註法華論】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者**脩**行四者樂（卷二、二十六裏）

【觀山版】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者**脩**行四者樂（九裏）

【智全会入本】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者**脩**行四者樂

【日藏会入本】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食住二者聞法三者**脩**行四者樂

【論記所引】數種種者下…（八七上一七一下一）

論數種種者…（八九上一七）

一者食下…（八九下二）

聞法如文 修行如上（八九下三一四）

第四 樂…（八九下四）

【敦煌摩提訖】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者 脩行四者樂

【房山摩提訖】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者 修行四者樂

【大正摩提訖】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者明修行四者樂

【福州摩提訖】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者 修行四者樂

【興聖寺刊本】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者 修行四者樂（卷上、第十一紙）

【大正留支訖】數種種者示現種種觀故略說四種觀一者食 二者聞法三者 修行四者樂

【真福寺本】如經 尔時佛放眉間白豪相光 乃至以佛舍利起七寶塔故（第九紙）

【興聖寺写本】如經 尔時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【子注法華論】如經 尔時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故（卷上、第二十四紙）

【科註法華論】如經 尔時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故（卷二、二十七表）

【叡山版】如經 爾時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【智全会入本】如經 爾時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【日藏会入本】如經 爾時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【論記所引】論如經已下…（八九下九）

【敦煌摩提訖】如經 尔時佛放眉間白豪相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【房山摩提訖】如經 尔時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【大正摩提訖】如經 爾時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【福州摩提訖】如經 尔時佛放眉間白毫相光次第 乃至以佛舍利起七寶塔故

【興聖寺刊本】如經 尔時佛放眉間白毫相光 乃至以佛舍利起七寶塔故

【大正留支訖】如經 爾時佛放眉間白毫相光次第 乃至以佛舍利起七寶塔故

【真福寺本】行菩薩道者教化衆生依四攝 洵方便攝取 應知如經 所說當自推取

【興聖寺写本】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經中所說當自推取

【子注法華論】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經 所說當自推取

【科註法華論】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經 所說當自推取（卷二、二十七表）

【叡山版】行菩薩道者教化衆生依四攝取 法方便攝取 應知如經 所說當自推取

【智全会入本】行菩薩道者教化衆生依四攝取 法方便攝取 應知如經 所說當自推取

【日藏会入本】行菩薩道者教化衆生依四攝取 法方便攝取 應知如經 所說當自推取

【論記所引】行菩薩道者…（八九下一二） 應知如經 所說當自推取

故曰行菩薩道者教化衆生…（八九下一四—一五）

故曰依四攝 法方便攝取（八九下一六）

如經中下 推經義易知…（八九下一六一—一七）

【敦煌摩提訖】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經中 說當 推取

【房山摩提訖】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經中 說當 推取

【大正摩提訖】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經中 說當 推取

【福州摩提訖】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 此義應知如經中 說當自推取

【興聖寺刊本】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 應知如經 所說當自推取

【大正留支訖】行菩薩道者教化衆生依四攝 法方便攝取 此義應知如經 所說當自推取

六 大衆現前欲聞法成就

【真福寺本】自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【興聖寺写本】自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【子注法華論】自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【科註法華論】自此以下示現大衆 現前欲聞法成就（卷二、二十九裏）

【叡山版】自此已下示現大衆 現前欲聞法成就

【智全会入本】 自此已下示現大衆 現前欲聞法成就

【日藏会入本】 自此已下示現大衆 現前欲聞法成就

【論記所引】 論目 以下示現等者：(九二上六)

【敦煌摩提訖】 自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【房山摩提訖】 自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【大正摩提訖】 自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【福州摩提訖】 自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【興聖寺刊本】 自此以下示現大衆 現前欲聞法成就

【大正留支訖】 自此以下示現大衆 欲聞現前 成就

【真福寺本】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【興聖寺寫本】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故 (第七紙)

【子注法華論】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【科註法華論】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故 (卷二、二十九裏)

【觀山版】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【智全会入本】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【日藏会入本】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【論記所引】 論問於一人 多 欲聞下：(九二上二〇)

問於一人者：(九二上二一)

多人欲聞者：(九二上二二)

論如是下：(九二上二六)

故曰如是示現世尊弟子隨順 法不相違故：(九二下二二三)

【敦煌摩提訖】 問 一人 多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順 法不相違故

【房山摩提訖】 問 一人 多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順 法不相違故

【大正摩提訖】 問 一人 多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順 法不相違故

【福州摩提訖】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【興聖寺刊本】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故
【大正留支訳】 問 一人者多人欲聞生希有心是故唯問文殊師利如是示現世尊弟子隨順於法不相違故

【真福寺本】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【興聖寺写本】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【子注法華論】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【科註法華論】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故（卷二、三十裏）

【叡山版】 今佛世尊現神變相 爲何等 現義爲 現大相因故

【智全会入本】 今佛世尊現神變相 爲何等 現義爲 現大相因故

【日藏会入本】 今佛世尊現神變相者爲何等 現義爲 現大相因故

【論記所引】 論今佛下…（九三上六）

今佛世尊者…（九三上六）

現神變相者…（九三上六一七）

爲何等 義者…（九三下二）

論爲 現大相因故下…（九三下四）

【敦煌摩提訳】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【房山摩提訳】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【大正摩提訳】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【福州摩提訳】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【興聖寺刊本】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

【大正留支訳】 今佛世尊現神變相者爲何等 義爲 現大相因故

（真福寺本注朱）

【真福寺本】
（興聖寺写本注）
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文。句故

【興聖寺写本】
爲故 大相者爲說妙法蓮花經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文 句故

【子注法華論】
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文 句故

【科註法華論】
爲 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文 句故（卷二、三十裏）

【觀山版】
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故

【智全会入本】
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故

【日藏会入本】
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故

【論記所引】
爲 大相者下：（九三下五—六）

爲者作也（九三下六）

說字入聲：（九三下六）

妙法蓮華經如上所釋（九三下七）

故亦如前也（九三下七）

現大瑞相者：（九三下七—八）

論爲說 所得下（九三下一一）

妙法即：（九三下一二）

不可思議即：（九三下一一—一二）
文 句者：（九三下一三）

【敦煌摩提訳】
爲 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說 所得妙法不可思議等文 句故（三一二下）

【房山摩提訳】
爲 大相者爲說妙法蓮花經故現大瑞相爲說 所得妙法不可思議等文 句故

【大正摩提訳】
爲 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說 所得妙法不可思議等文 句故

【福州摩提訳】
現大相以爲說因緣爲 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故（第七紙）

【興聖寺刊本】
爲 現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故

【大正留支訳】
以爲說因現 大相者爲說妙法蓮華經故現大瑞相爲說如來所得妙法不可思議等文字章句故

（真福寺本注朱）

内

【真福寺本】 有二種義是故仰推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣唯自。心成就彼法故
【興聖寺写本】 有二種義是故仰推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故
【子注法華論】 有二種義是故仰推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故（卷上、第二十五紙）
【科註法華論】 有二種義是故仰推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故（卷二、三十一裏）
【觀山版】 有二種義是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故（十表）
【智全会入本】 有二種義是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故
【日藏会入本】 有二種義是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故
【論記所引】 論有二種法下…（九三下一六）
推是推讓…（九三下一七—九四上一）
推文殊…（九四上一）

論 一者現見下…（九四上六）

現見諸法者…（九四上七）

離諸因緣者…（九四上八）

故曰離諸因緣 自 心成就彼法故…（九四上一二—一三）

【敦煌摩提訖】 有二種法 故 推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣 自 心成就彼法故
【房山摩提訖】 有二種法 故 推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣 自 心成就彼法故（第八紙）
【大正摩提訖】 有二種法 故 推文殊師利 一者現見諸法 二者離諸因緣 自 心成就彼法故
【福州摩提訖】 有二種法是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故
【興聖寺刊本】 有二種義是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故
【大正留支訖】 有二種義是故仰推文殊師利何等爲二 一者現見諸法故 二者離諸因緣唯自 心成就彼法故（三下）

（真福寺本注朱）

以爲

67 原本では、当該箇所が「…諸法／者離…」と改行されており、「者」が行頭に置かれるが、その上方欄外に薄らと「二」が記されている。

（真福寺本注墨）

事故

【真福寺本】

示現種種 瑞相者 示現彼彼 如彼事相現沒住滅應 知

【興聖寺写本】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【子注法華論】

示現種々 瑞相者 現彼々事故如彼事相現設住滅應 知

【科註法華論】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知（卷二、三十二表）

【叡山版】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【智全会入本】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【日藏会入本】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【論記所引】

論示現種種 瑞相者下…（九四上一六）

示現彼彼事者…（九四上一七）

如彼事等者…（九四下一）

現者初生（九四下一）

沒者退沒（九四下一二）

住者居止（九四下一）

滅者入寂…（九四下一）

應 知者結也（九四下一四）

（敦煌摩提傍書）

如彼事

【敦煌摩提識】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事 現沒住滅應 知

【房山摩提識】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事 如彼事 現沒住滅應 知

【大正摩提識】

示現種種 瑞相者 示現彼彼事 如彼事 現沒住滅應 知

【福州摩提識】

示現種種諸瑞相者以爲 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【興聖寺刊本】

示現種種 瑞相者以爲 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應 知

【大正留支識】

示現種種諸瑞相者以爲 示現彼彼事故如彼事相現沒住滅應當善 知

（真福寺本注墨）

記

【真福寺本】以文殊師利能起彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【興聖寺寫本】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【子注法華論】以文殊師利能記彼／故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【科註法華論】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【叡山版】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【智全会入本】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【日藏会入本】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【論記所引】論以文殊下…(九四下七)

故曰以文殊師利能記彼事故以文殊師利下…(九四下九)

以文殊師利所作成就者…(九四下一〇一一)

因成就者…(九四下一一一二)

現見諸法故者…(九四下一三)

論所作成就者下…(九四下一七)

於中有二…(九四下一七)

一者下列(九五上一)

功德成就者…(九五上一)

智慧成就者…(九五上一二)

【敦煌摩提訖】以文殊師利能記彼事故 以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【房山摩提訖】以文殊師利能記彼事故 以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【大正摩提訖】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【福州摩提訖】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【興聖寺刊本】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 有二種一者功德成就二者智慧成就

【大正留支訖】以文殊師利能記彼事故以文殊師利所作成就**因果**成就現見彼法故所作成就者 此有二種一者功德成就二者智慧成就

(真福寺本注墨)
 【真福寺本】 因成就者一切智成就 又 復有因謂緣因故 緣因 成就者衆 相具足也⁷⁰ 果成就者說大法 也⁷¹
 (興聖寺写本注)
 【興聖寺写本】 因成就者一切智成就 又 緣因 成就者衆生相 也 果成就者說大法 也
 【子注法華論】 因成就者一切智成就 又 緣因 成就者衆 相 也 果成就者說大法 也 (卷上、第二十六紙)
 【科註法華論】 因成就者一切智成就緣又 緣因 成就者衆 相具足也 果成就者說大法 也 (卷二、三十二裏)
 【叡山版】 因成就者一切智成就 又 緣因 成就者衆 相具足也 果成就者說大法故也
 【智全会入本】 因成就者一切智成就 又 緣因 成就者衆 相具足也 果成就者說大法故也 (卷三末、九五下)
 【日藏会入本】 因成就者一切智成就 又 緣因 成就者衆 相具足也 果成就者說大法故也 (卷三末、九七下)
 【論記所引】 論因成就者下… (九五下六) 一切智者… (九五下七) 緣者… (九五下一〇) 相現下… (九五下二二)

成就
 論因 者 相現下… (九五下二二) 果 者說大法者… (九五下一三一—一四)
 【敦煌摩提訳】 因成就者一切智成就 緣因 者 相 也 果 者說大法
 【房山摩提訳】 因成就者一切智成就 因緣 者 相 也 果 者說大法
 【大正摩提訳】 因成就者一切智成就 因緣 者 相 也 果 者說大法
 【福州摩提訳】 因成就者一切智成就 又復有因謂緣因 因 成就者衆 相具足也 果成就者說大法 也
 【興聖寺刊本】 因成就者一切智成就 又復有因謂緣因故緣因 成就者衆 相具足故 果成就者說大法 也
 【大正留支訳】 因成就者一切智成就故又復有因謂緣因故緣因 成就者衆 相具足故 果成就者說大法故

68 原本では、「復有因謂緣因故」と「故」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。
 69 原本では、「故」は「也」の右傍に書かれている。また、「故」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。
 70 「也」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。
 71 原本では、「異」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」(注69で述べた「或本」に同じ)とある。

（真福寺本注墨）
異⁷¹

【真福寺本】	種○	佛國土者	示現彼	國土中種種	老別應知
【興聖寺写本】	種種	佛國土者	示現彼	國土中種種	老別應知
【子注法華論】	種と	佛國土者	示現彼	佛國土中種と	老別應知
【科註法華論】	種種	佛國土者	示現彼	國土中種種	老別應知（卷二、三十三裏）
【叡山版】	種種	佛國土者	示現彼	佛國土中種種	差別應知
【智全会入本】	種種	佛國土者	示現彼	佛國土中種種	差別應知
【日藏会入本】	種種	佛國土者	示現彼	佛國土中種種	差別應知
【論記所引】	論種種	佛國土者	下…（九六上一）		

論示現彼 國土中者下…（九六上一）

種種 差別者…（九六上一）

應知者結也（九六上一）

【敦煌摩提訖】	種種	佛國土者	示現彼	國土中種と	老別應知
【房山摩提訖】	種種	佛國土者	示現彼	國土中種種	差別應知
【大正摩提訖】	種種	佛國土者	示現彼	國土中種種	差別應知
【福州摩提訖】	種種異	佛國土者	爲此	示現彼	國土中種種異差別應知
【興聖寺刊本】	種種異	佛國土者	示現彼	國土中種種	老別應知
【大正留支訖】	種種異	佛國土者	爲此	示現彼	國土中種種異差別應知

（真福寺本注朱）
者

【真福寺本】	淨妙國土○	謂無煩惱衆生住處	故如經照於東方	万八千世界	乃至悉見彼	佛國界	莊嚴故
【興聖寺写本】	淨妙國土者	謂無煩惱衆生住處	故如經照於東方	万八千世界	乃至悉見彼	土佛國界	莊嚴故
【子注法華論】	淨妙國土者	諸 ⁷² 謂無煩惱衆生住處	故如經照於東方	万八千世界	乃至悉見彼	佛國界	莊嚴故
【科註法華論】	淨妙國土者	謂無煩惱衆生住處	故如經照於東方	萬八千世界	乃至悉見彼	佛國界	莊嚴故（卷二、三十三裏）

72 「諸」の右傍に見せ消ち記号が付されている。

【叡山版】 淨妙國土者 謂無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【智全会入本】 淨妙國土者 謂無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【日藏会入本】 淨妙國土者 謂無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【論記所引】 論淨妙國土者 無煩惱衆生住處故者…(九六上五一六)

論如經已下…(九六上二二)

萬八千者…(九六上二三)

論悉見彼 佛國界莊嚴故者…(九六上二五一六)

【敦煌摩提訖】 淨妙國土者 无煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【房山摩提訖】 淨妙國土者 無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【大正摩提訖】 淨妙國土者 無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故 (一三中)
【福州摩提訖】 淨妙國土者 無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故
【興聖寺刊本】 淨妙國土者 謂無煩惱衆生住處故如經照於東方萬八千世界 乃至悉見彼 佛國界莊嚴故 (卷上、第十二紙)
【大正留支訖】 淨妙國土者 謂無煩惱衆生住處 如經照於東方萬八千世界次第乃至悉見彼 佛國界莊嚴故

【真福寺本】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【興聖寺写本】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土一切大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【子注法華論】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【科註法華論】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故 (卷二、三十四表)
【叡山版】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故 (十裏)
【智全会入本】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【日藏会入本】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【論記所引】 論如來爲上首者下…(九六下五)

故曰如來爲首 乃至依佛住故 (九六下六一七)

73 当該箇所は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷(九八頁上一三—一四行目)では「論悉彼」となっているが、『科註』卷二(三十四丁表)所引の『論記』では「論悉見彼」となっている。こゝでは、『科註』に依って「見」を補う。

論以 如來下… (九六下七)

論如經已下… (九六下一二)

士兼淨穢義如上文 (九六下一二)

如是等故此總結矣 (九六下一二—一三)

【敦煌摩提訖】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以 如來於彼國土一切大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【房山摩提訖】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以 如來於彼國土一切大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【大正摩提訖】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以 如來於彼國土一切大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【福州摩提訖】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土一切大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【興聖寺刊本】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故
【大正留支訖】 如來爲上首者諸菩薩等依如來住故以彼如來於彼國土諸 大衆中得自在故如經又見彼土現在諸佛如是等故

七 文殊師利答成就

總說

【真福寺本】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答旃勒
【興聖寺寫本】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答旃勒
【子注法華論】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答旃勒
【科註法華論】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答旃勒
【叡山版】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答旃勒
【智全會入本】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答彌勒菩薩
【日藏會入本】 自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因相果相成就十種事如現在前是故能答彌勒菩薩
【論記所引】 論自此下 明聖者文殊師利菩薩已下… (九七上一)

初自此已下… (九七上一三)

次現見過去下… (九七上一三)

自此已下者… (九七上一四)

論以宿命智者… (九七上一六)

現見過去因 果相者… (九七上一八)

論成就十種者… (九七上一二)

故 答慈尊 (九七上一三)

【敦煌摩提訖】自此以下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒
【房山摩提訖】自此已下 答成就明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒
【大正摩提訖】自此以下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒
【福州摩提訖】自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒
【興聖寺刊本】自此已下 明聖者文殊師利菩薩以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒菩薩
【大正留支訖】自此以下次 明聖者文殊師利 以宿命智現見過去因 果相成就十種事如現在前是故能答弥勒菩薩

【真福寺本】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 脩 種種行事故 (第十紙)
【興聖寺写本】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【子注法華論】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼々諸佛 國土中 脩 種々行事故 (卷二、三十五裏)
【科註法華論】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【叡山版】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【智全会入本】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【日藏会入本】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【論記所引】論現見過去下… (九七上一七) 自見己身者… (九七下二) 於彼 佛世 中者… (九七下二) 修 種種行事故者… (九七下二)

【敦煌摩提訖】現見過去因相者 自見己身 於彼彼諸佛 國土中 脩 種種行事故
【房山摩提訖】現見過去因相者 自見己身 於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【大正摩提訖】現見過去因相者 自見己身 於彼／諸佛 國土中 修 種種行事故
【福州摩提訖】云何現見過去因相者 謂文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 處處修行種種行事故
【興聖寺刊本】現見過去因相者 文殊師利自見己身曾於彼彼諸佛 國土中 修 種種行事故
【大正留支訖】云何現見過去因相 謂文殊師利自見己身曾於彼彼諸 國土中 處處修行種種行事故

【真福寺本】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼⁷⁴佛所聞此⁷⁵海門爲衆生說故
(興聖寺写本注)

【興聖寺写本】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 仏所聞此法門爲衆生。故

【子注法華論】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故 (卷上、第二十七紙)

【科註法華論】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故 (卷二、三十六表)

【叡山版】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 世妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【智全会入本】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 世妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【日藏会入本】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 世妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【論記所引】 論現 過去果相者下… (九七下九)

文殊師利自見己身者… (九七下九)

是過去 妙光菩薩者… (九七下一〇)

於彼 佛所者… (九八上三一四)

聞此法者… (九八上四)

爲衆生說者… (九八上五)

【敦煌摩提訳】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【房山摩提訳】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【大正摩提訳】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【福州摩提訳】 云何現見過去果相謂文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【興聖寺刊本】 現見過去果相者文殊師利自見己身是過去 妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

【大正留支訳】 云何現見過去果相謂文殊師利自見己身是過去 世妙光菩薩於彼 佛所聞此法門爲衆生說故

成就十種事 ○ (分段)

【真福寺本】 成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就□者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就

⁷⁴ 「彼」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

⁷⁵ 本文中の「生」と「故」の間に補入記号が付されており、上方欄外に「説」とある。

【興聖寺写本】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【子注法華論】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【科註法華論】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就 (卷二、三十六裏)
 【叡山版】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【智全会入本】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【日藏会入本】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【論記所引】論成就十種事者已下… (九八下一四)

一者現見下… (九八下一四—一五)

大義因成就者… (九八下一五)

【敦煌摩提訖】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【房山摩提訖】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【大正摩提訖】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【福州摩提訖】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【興聖寺刊本】成就十種事者何等爲十一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 甚深意因成就三者現見希有因成就
 【大正留支訖】何等名爲成就十事 一者現見大義因成就二者現見世間文字章句 意甚深 因成就三者現見希有因成就

【真福寺本】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
 (興聖寺写本注) 者現見善堅實如來法輪因成就

【興聖寺写本】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七。

【子注法華論】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就 (卷二、三十六裏)
 【科註法華論】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就

【叡山版】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就 (十一表)

【智全会入本】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就

【日藏会入本】四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛轉法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訖】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
【房山摩提訖】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
【大正摩提訖】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
【福州摩提訖】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
【興聖寺刊本】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就
【大正留支訖】 四者現見勝妙因成就五者現見受用大因成就六者現見攝取一切諸佛 法輪因成就七者現見善堅實如來法輪因成就

【真福寺本】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事□成就
【興聖寺写本】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就
【子注法華論】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就
【科註法華論】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就（卷二、三十六裏）
【叡山版】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就
【智全会入本】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就
【日藏会入本】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就

【論記所引】 注釈なし

【敦煌摩提訖】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就（三一三上）

【房山摩提訖】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就

【大正摩提訖】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就

【福州摩提訖】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就

【興聖寺刊本】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就

【大正留支訖】 八者現見能進入因成就九者現見憶念因成就十者現見自身所逕事因成就（四上）

成就十種事 一 大義因成就

【真福寺本】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大 洳雨三者欲擊大法 皷四者欲建大法 幢
【興聖寺写本】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 皷 二者欲雨大法 雨三者欲擊大法 皷 四者欲建大法 幢（第八紙）

【子注法華論】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢（卷上、第二十八紙）

【科註法華論】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢（卷二、三十七表）

【觀山版】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【智全会入本】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【日藏会入本】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【論記所引】 論八句示現 應知者標起 一者欲論下：（九九上八）

【敦煌摩提訖】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【房山摩提訖】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲轉大法輪 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢（第九紙）

【大正摩提訖】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲轉大法輪 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【福州摩提訖】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

【興聖寺刊本】 大義因成就者八句示現 應知 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢（卷上、第十三紙）

【大正留支訖】 大義因成就者八句示現此義應知何等爲八 一者欲論大法 二者欲雨大法雨三者欲擊大法鼓四者欲建大法幢

（真福寺本注墨）

說

【真福寺本】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲論大法等故何者名爲八種大義

【興聖寺写本】 五者欲燃大法燃六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法義此八句 示現見如來欲論大法等故何者名爲八種大義

【子注法華論】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲論大法等故何者名爲八種大義

【科註法華論】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲說大法等故何者名爲八種大義（卷二、三十七裏）

【觀山版】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句欲示現 如來欲論大法等故何者名爲八種大義

【智全会入本】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句欲示現 如來欲說大／等故何等名爲八種大義

【日藏会入本】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句欲示現 如來欲說大法等故何者名爲八種大義

【論記所引】 此八句下：（九九上八一） 何等 八種下：（九九上九一一〇）

【敦煌摩提訖】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲論大法等故何者／八種大義

【房山摩提訖】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲論大法等故何等 爲八種大義

【大正摩提訖】 五者欲燃大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲說大法等故何等 爲八種大義

【福州摩提訊】五者欲然大法炬六者欲吹大法螺七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句欲示現 如來欲論大法等故何者 爲八種大義
【興聖寺刊本】五者欲然大法炬六者欲吹大法螺七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句 示現 如來欲論大法等故何等名爲八種大義
【大正留支訊】五者欲然大法燈六者欲吹大法蠶七者欲不斷大法鼓八者欲說大法 此八句欲示現 如來欲論大法等故何等名爲八種大義

(真福寺本注朱)

已也

【真福寺本】謂有疑者爲斷疑故以斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 密境界
(興聖寺写本注)

【興聖寺写本】謂有疑者爲疑故以斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂耳耳 蜜境界二謂菩薩 蜜境界

【子注法華論】謂有疑者爲斷疑故以斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 蜜境界(卷上、第二十九紙)

【科註法華論】謂有疑者爲斷疑故以斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 蜜境界(卷二、三十七裏)

【觀山版】謂有疑者爲斷疑故已斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 蜜境界

【智全会入本】謂有疑者爲斷疑故已斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 蜜境界

【日藏会入本】謂有疑者爲斷疑故已斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 蜜境界二謂菩薩 蜜境界

【論記所引】論謂 斷疑故者：(九九上一二)
論以斷疑者增長淳熟 智身故者：(九九上一四)

論根 熟者爲說二種 密境界者：(九九下四)

謂聲聞下：(九九下五)

【敦煌摩提訊】謂 疑者 斷疑故以斷疑者增長淳熟 智身故根 孰者爲說二種 密境界 謂聲聞 密境界 菩薩 密境界

【房山摩提訊】謂 疑者 斷疑故以斷疑者增長淳熟 智身故根 孰者爲說二種 密境界 謂聲聞 密境界 菩薩 密境界

【大正摩提訊】謂 疑者 斷疑故已斷疑者增長淳熟 智身故根 孰者爲說二種 密境界 謂聲聞 密境界 菩薩 密境界

【福州摩提訊】謂有疑者爲斷疑故以斷疑者增長淳熟彼智身故根 孰者爲說二種 微密境界一者謂聲聞 密境界二者菩薩 密境界(第八紙)

【興聖寺刊本】謂有疑者爲斷疑故已斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一 謂聲聞 密境界二謂菩薩 密境界

【大正留支訊】謂有疑者爲斷疑故已斷疑者增長淳熟彼智身故根淳熟者爲說二種 微密境界一者 聲聞微密境界二者菩薩微密境界

【真福寺本】□法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故

【興聖寺写本】 大法鼓者二句示現以遠聞故入蜜境界者令 進取上上清淨義故
 【子注法華論】 大法鼓者二句示現以遠聞故入蜜境界者令 進取上上清淨義故
 【科註法華論】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故（卷二、三十八表）
 【叡山版】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【智全会入本】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【日藏会入本】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【論記所引】 大法鼓下…（九九下五）

以遠聞故者…（九九下二—三）

論入密境界者令 進取上上清淨義故者…（九九下一六）

【敦煌摩提訖】 大法鼓 二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【房山摩提訖】 大法鼓 二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【大正摩提訖】 大法鼓 二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【福州摩提訖】 大法鼓 二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【興聖寺刊本】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 進取上上清淨義故
 【大正留支訖】 大法鼓者二句示現以遠聞故入密境界者令 彼進取上上清淨義故

（真福寺本注墨）

【真福寺本】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建◎名字章句義故
 【興聖寺写本】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現者 見⁷⁶ 爲一切法建立名字章句義故
 【子注法華論】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故
 【科註法華論】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故（卷二、三十九表）
 【叡山版】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故（十一裏）
 【智全会入本】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故

立

76 「者」の右上に小さい丸印と「見」の右傍に倒置符が付されている。

【日藏会入本】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故

【論記所引】 論取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故者…（二〇〇上六）

故曰進取一切智 現見故 論取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故者…（二〇〇上八一〇）

【敦煌摩提詁】 取上上清淨義者 進取一切智 現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故

【房山摩提詁】 取上上清淨義者 進取一切智 現見故 取一切智 現見故者爲一切法建立名字章句義故

【大正摩提詁】 取上上清淨義者 進取一切智 現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故（二三下）

【福州摩提詁】 取上上清淨義者令彼進取一切種智得現見故令彼進取一切種智得現見 者爲一切法建立名字章句義故

【興聖寺刊本】 取上上清淨義者令 進取一切種智得現見故 取一切智 現見 者爲一切法建立名字章句義故

【大正留支詁】 進取上上清淨義者令彼進取一切種智得現見故令彼進取一切種智得現見 者爲一切法建立名字章句義故

【真福寺本】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【興聖寺写本】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【子注法華論】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【科註法華論】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故（卷二、三十九裏）

【叡山版】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【智全会入本】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【日藏会入本】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【論記所引】 論建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故者…（二〇〇上一四）

【敦煌摩提詁】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【房山摩提詁】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【大正摩提詁】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【福州摩提詁】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【興聖寺刊本】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

【大正留支詁】 建立名字章句義者令入不可說證智轉法輪故

成就十種事 二 現見世間名字章句意甚深因成就

(真福寺本注朱)

說大教故⁷⁷

【真福寺本】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛所曾見此瑞

乃至故現斯瑞故(第十一紙)

【興聖寺写本】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故(卷上、第三十紙)

【子注法華論】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故(卷二、四十裏)

【科註法華論】

現見世間名字章句意甚深因成就者說大教故

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【叡山版】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【智全会入本】

現見世間名字章句意甚深因成就者說大教故

如我經於過諸去佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【日藏会入本】

現見世間名字章句意甚深因成就者說大教故

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【論記所引】

論現見世間名字章句意甚深因成就

故者：(一〇二下四)

曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【敦煌摩提詁】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【房山摩提詁】

現見世間名字章句意甚深因成就

故如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【大正摩提詁】

現見世間名字章句意甚深因成就

故如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【福州摩提詁】

現見世間名字章句意甚深因成就

故如經我於過去諸佛 曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【興聖寺刊本】

現見世間名字章句意甚深因成就者說大教故

如經我於過去諸佛所曾見此瑞

乃至故現斯瑞故

【大正留支詁】

現見世間名字章句意甚深因成就者

如經我於過去諸佛 曾見此瑞次第乃至故現斯瑞故

成就十種事 三 現見希有因成就

【真福寺本】

現見 希有因成就者以無量

時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【興聖寺写本】

現見 希有因成就者 无量者示現過彼阿僧祇劫不可

時不可得故不可思議／／不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【子注法華論】

現見⁷⁸ 希有因成就者以无量

時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【科註法華論】

現見 希有因成就者以无量

時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故(卷二、四十一裏)

【叡山版】

現見 希有因成就者以無量

時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

77 原本では、「說大教故」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。
78 「見」の右傍に見せ消し記号が付されている。

【智全会入本】 現見 希有因成就者以無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【日藏会入本】 現見 希有因成就者以無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【論記所引】 論現見 希有因成就者下… (一〇三上二七)

無量 時者… (一〇三上二二)

不可得故者… (一〇三下四)

不可思議者… (一〇三下四)

不可稱者… (一〇三下五)

不可量者… (一〇三下五)

示現過彼下… (一〇三下六)

【敦煌摩提訖】 現見 希有因成就者 無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【房山摩提訖】 現見 希有因成就者 無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【大正摩提訖】 現見 希有因成就者 無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【福州摩提訖】 現見 希有因成就者以無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【興聖寺刊本】 現見 希有因成就者以無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【大正留支訖】 現見 希有因成就者以無量
時不可得故不可思議不可稱不可量者示現過彼阿僧祇劫不可得故

【真福寺本】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫有故⁷⁹

【興聖寺写本】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【子注法華論】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故 (卷上、第三十一紙)

【科註法華論】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故 (卷二、四十二表)

【叡山版】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【智全会入本】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【日藏会入本】 復示現五種劫 一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【論記所引】 論復示現下… (一〇三下八)

五種劫中…（一〇四上一）

示現彼無量無邊劫 故者…（一〇五上一三）

（敦煌摩提傍書）

无量

【敦煌摩提記】

復示現五種劫

一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼／无邊劫 故

【房山摩提記】

復示現五種劫

一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【大正摩提記】

復示現五種劫

一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【福州摩提記】

復示現五種劫

一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【興聖寺刊本】

復示現五種劫

一者夜二者晝三者月四者時五者年示現彼無量無邊劫 故

【大正留支記】

又復示現五種劫故所謂

一夜二晝三四月五時五年示現 無量無邊諸法故

【真福寺本】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【興聖寺寫本】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種／故

【子注法華論】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛号日月燈明⁸⁰

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【科註法華論】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛号日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故（卷二、四十四表）

【叡山版】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛號日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【智全会入本】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛號日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【日藏会入本】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛號日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【論記所引】

如經已下…（一〇五上一五）

【敦煌摩提記】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【房山摩提記】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【大正摩提記】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛號日月燈明

乃至 得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【福州摩提記】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 令得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【興聖寺刊本】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫余時有佛号日月燈明

乃至 令得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

【大正留支記】

如經如過去無量無邊不可思議阿僧祇劫尔時有佛號日月燈明次第乃至令得阿耨多羅三藐三菩提成就 一切種智故

80 原本の字は、「明」のくずし字と見られる。以降、同様の例は逐一注記しない。

【日藏会入本】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於爾許時 不生疲倦心故

【論記所引】 論現見受用大因成就者已下…（二〇九上三）

故曰現見受用大因成就 是時王子受勝妙樂者…（二〇九上七）

復彼大衆 不生倦心者…（二〇九上二〇）

不生疲倦者⁸¹…（二〇九上一七）

【敦煌摩提訖】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於余許時 不生疲倦心故（三一三下）

【房山摩提訖】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於余許時 不生疲倦心故

【大正摩提訖】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於爾許時 不生疲倦心故

【福州摩提訖】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於余許時 不生疲倦心故

【興聖寺刊本】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於余許時 不生疲倦心故

【大正留支訖】 現見受用大因成就是時王子受勝妙樂各捨出家復彼大衆於爾許時心不疲倦故

【真福寺本】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

【興聖寺写本】 如經其最後佛未出家時 乃佛至授記已便於中夜入無餘⁸² 涅槃故

【子注法華論】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

【科註法華論】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故（卷二、四十五裏）

【叡山版】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無余 涅槃故

【智全会入本】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

【日藏会入本】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

【論記所引】 授記結會…（二一上一三）

佛授記已下…（二一二下八）

【敦煌摩提訖】 如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

81 当該箇所は、『智全』巻上では「不生疲倦者。心…」となっており、『日藏』第二十三卷（二二頁下五―六行目）では「不生疲倦者。信心…」となっており、『科註』巻二（四十六丁表）所引の『論記』では「不生疲倦者信心…」となっている。ここでは、『科註』のテキストに従う。

82 拙稿「二〇二二B」四七頁の当該箇所（二二三行目）の注三七五では見落としているが、『顯』の右傍には見せ消し記号が付されている。

【房山摩提訖】如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故
【大正摩提訖】如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故
【福州摩提訖】如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故
【興聖寺刊本】如經其最後佛未出家時 乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故
【大正留支訖】如經其最後佛未出家時次第乃至佛授記已便於中夜入無餘 涅槃故

成就十種事 六 現見撰取一切諸仏轉法輪因成就

【真福寺本】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 洵輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【興聖寺写本】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 故後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【子注法華論】見現攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不改故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故 (卷上、第三十二紙)
【科註法華論】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故 (卷二、四十六裏)
【叡山版】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【智全会入本】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【日藏会入本】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【論記所引】論現見 一切諸佛轉法輪因成就者…(一一一下一)
故曰現見 一切諸佛轉法輪因成就…(一一一下三)

故法輪不斷…(一一一下四)

如經已下…(一一一下四)

【敦煌摩提訖】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【房山摩提訖】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故 (第十紙)
【大正摩提訖】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故 (一四上)
【福州摩提訖】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【興聖寺刊本】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故
【大正留支訖】現見攝取一切諸佛轉法輪因成就者 法輪不斷故如經佛滅度 後妙光菩薩持妙法蓮華經滿八十小劫爲人演說故

成就十種事 七 現見善堅實如來法輪因成就

【真福寺本】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅／後無量時説	故
【興聖寺写本】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後无量時説	故
【子注法華論】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後无量時説	故
【科註法華論】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故（卷二、四十七裏）
【叡山版】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【智全会入本】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【日藏会入本】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【論記所引】	論現見 堅實如來法輪因成就者下…（一一二下一四）	
	故曰現見 堅實如來法輪因成就 佛滅度後無量時説	故者…（一一二下一七一—一二上二）
【敦煌摩提訳】	現見 堅實如來法輪因成就者佛滅度後无量時説	故
【房山摩提訳】	現見 堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【大正摩提訳】	現見 堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説法	故
【福州摩提訳】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【興聖寺刊本】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故
【大正留支訳】	現見善堅實如來法輪因成就者佛滅度後無量時説	故

【真福寺本】	如經日月燈明佛八 子皆師妙光	乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提	故
【興聖寺写本】	如經日月燈明佛八 字 ⁸³ 子皆師妙光	乃至皆得令其堅固阿耨多羅三藐三菩提	故（第九紙）
【子注法華論】	如經日月燈明佛八 子皆師妙光	乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提	故
【科註法華論】	如經日月燈明佛八 子皆師妙光	乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提	故（卷二、四十七裏）
【叡山版】	如經日月燈明佛八 子皆師妙光	乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提	故（十二裏）
【智全会入本】	如經日月燈明佛八 子皆師妙光	乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提心	故

83 同上の当該箇所（二三七行目）の注三七七では見落としているが、「字」には打ち消し線が引かれている。

【日藏会入本】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【論記所引】如經已下…（一二二二）

【敦煌摩提訖】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【房山摩提訖】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【大正摩提訖】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【福州摩提訖】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【興聖寺刊本】如經日月燈明佛八 子皆師妙光 乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提 故

【大正留支訖】如經日月燈明佛八 子皆師妙光次第乃至皆 令其堅固阿耨多羅三藐三菩提心 故

成就十種事 八 現見能進入因成就

【真福寺本】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【興聖寺寫本】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【子注法華論】現見 進入因成就者彼諸王子得大／獲故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【科註法華論】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故（卷二、四十八表）

【觀山版】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【智全会入本】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【日藏会入本】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【論記所引】論現見 進入因成就者已下…（一二二五）

彼諸王子得大菩提故者…（一二二六）

如經已下…（一二二一〇）

【敦煌摩提訖】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【房山摩提訖】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【大正摩提訖】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【福州摩提訖】現見 進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【興聖寺刊本】現見能進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子 乃至皆成佛道故

【大正留支訳】 現見能進入因成就者彼諸王子得大菩提故如經是諸王子次第乃至皆成佛道故

成就十種事 九 現見憶念因成就

(真福寺本注墨)

燃

【真福寺本】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名□／燈	乃至尊重讚嘆故
【興聖寺写本】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【子注法華論】	現見憶念因成就者爲他說法／益他故如經其取後成佛者名曰燃燈	乃至／重讚嘆故
【科註法華論】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其取後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故 (卷二、四十八裏)
【叡山版】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其取後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【智全会入本】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【日藏会入本】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【論記所引】	論見憶念因成就者…(一二下二三)	

爲他說法利益他故者…(一二下二四)

如經已下…(一一四上四—五)

燃燈…(一一四上五)

尊重讚歎…(一一四上五)

【敦煌摩提訳】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其取後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚嘆故
【房山摩提訳】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【大正摩提訳】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【福州摩提訳】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚歎故
【興聖寺刊本】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈	乃至尊重讚嘆故
【大正留支訳】	現見憶念因成就者爲他說法利益他故如經其最後成佛者名曰燃燈次第乃至尊重讚歎故	

成就十種事 十 現見自身所經事因成就

(真福寺本注墨)

文殊

【真福寺本】 現見自身所逕事因成就者以。自身受勝妙樂故（第十二紙）

【興聖寺写本】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【子注法華論】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【科註法華論】 現見自身所逕事因成就者以文殊自身受勝妙樂故（卷二、四十九裏）

【叡山版】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【智全会入本】 現見自身所逕事因成就者以文殊自身受勝妙樂故

【日藏会入本】 現見自身所逕事因成就者以文殊自身受勝妙樂故

【論記所引】 論現見自身所逕事因成就者已下…（一一四上一二）

以 自身受勝妙樂故者…（一一四上一五）

【敦煌摩提訳】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【房山摩提訳】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【大正摩提訳】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【福州摩提訳】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

【興聖寺刊本】 現見自身所逕事因成就者以文殊自身受勝妙樂故

【大正留支訳】 現見自身所逕事因成就者以 自身受勝妙樂故

（真福寺本注朱）

又 今

【真福寺本】 如經旃勒當知 乃至佛所□念故汝号求名者示現知彼過去事故。復示現今得彼法皆具足故

【興聖寺写本】 如經旃勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知 過去事故 復示現 得彼法 具足故

【子注法華論】 如經旃勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知彼過去事故 復示現 得彼法 具足故

【科註法華論】 如經旃勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知彼過去事故又復示現今得彼法皆具足故（卷二、四十九裏）

【叡山版】 如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝號求名者示現知彼過去事故 復示現 得彼法 具足故

【智全会入本】 如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝號求名者示現知彼過去事故 復示現 得彼法 具足故

【日藏会入本】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝號求名者示現知彼過去事故 復示現 得彼法 具足故
【論記所引】如經已下…（一一四二三） 汝號求名者已下…（一一四下五）

是則示現知 過去事…（一一四下六）

復示現 得彼法 具足故者…（一一四下八）

【敦煌摩提訖】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知 過去事故 復示現 得彼法 具足故

【房山摩提訖】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知 過去事故 復示現 得彼法 具足故

【大正摩提訖】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝號求名者示現知 過去事故 復示現 得彼法 具足故

【福州摩提訖】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知彼過去事故 復示現 得彼法 具足故

【興聖寺刊本】如經彌勒當知 乃至佛所護念故汝号求名者示現知彼過去事故又復示現今得彼法皆具足故

【大正留支訖】如經彌勒當知次第乃至佛所護念故汝號求名者示現知彼過去事故又復示現今得彼法皆具足故

依義撰三

【真福寺本】なし

【興聖寺写本】なし

【子注法華論】なし

【科註法華論】なし

【叡山版】なし

【智全会入本】なし

【日藏会入本】なし

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訖】なし

【房山摩提訖】なし

【大正摩提訖】なし

【福州摩提訖】なし

【興聖寺刊本】なし

【大正留支訳】又依義攝三故一與説故如經今佛世尊欲説大法等故二成如實説故如經我於過去曾見等故三令待説故如經諸人今當知等故

序品末

【真福寺本】自此以下示現所説法 因果相應知⁸⁵

【興聖寺写本】なし

【子注法華論】なし

【科註法華論】なし

【叡山版】なし

【智全会入本】なし

【日藏会入本】なし

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】なし

【房山摩提訳】なし

【大正摩提訳】なし

【福州摩提訳】自此已下示現所説法説因果相應知

【興聖寺刊本】自此已下示現所説法 因果相應知

【大正留支訳】自此已下示現所説法 因果相應知

方便品第二

【真福寺本】方便品

【興聖寺写本】方便品

【科註法華論】方便品 (巻三、一表)

【叡山版】方便品

85 原本では、「自此以下示現所説法因果相應知」の「自」と「知」の左傍に、朱書で小さい丸印が付されている。

【智全会入本】	釋方便品	(卷四、一一五下)
【日藏会入本】	釋方便品	(卷四、一一七下)
【論記所引】	故言方便品也…	(一一六上一)
【敦煌摩提訖】	方便品第二	
【房山摩提訖】	方便品第二	
【大正摩提訖】	方便品第二	
【福州摩提訖】	妙法蓮華經方便品第二	(第九紙)
【興聖寺刊本】	方便品第二	(卷上、第十五紙)
【大正留支訖】	方便品第二	

法華經本文

【真福寺本】	經曰余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	／	舍利弗
(興聖寺写本注)	經曰イ		
【興聖寺写本】	余時世尊入甚深三昧正念不動以來實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【科註法華論】	經曰爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【叡山版】	經曰爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【智全会入本】	經曰爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【日藏会入本】	經曰爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【論記所引】	注釈なし		
【敦煌摩提訖】	余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【房山摩提訖】	余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【大正摩提訖】	爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【福州摩提訖】	經余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【興聖寺刊本】	經曰余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已	告	舍利弗
【大正留支訖】	經曰爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已即告尊者舍利弗言(四下)		

【真福寺本注朱】

慧

【真福寺本】

諸佛智慧甚深無量其智。門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【興聖寺写本】

諸佛智慧甚深無量其智。門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【科註法華論】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知 (卷三、一裏)

【叡山版】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知 (十三表)

【智全会入本】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【日藏会入本】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【論記所引】

注釈なし

【敦煌摩提訳】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【房山摩提訳】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【大正摩提訳】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【福州摩提訳】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【興聖寺刊本】

諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【大正留支訳】

舍利弗 諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入如來 所證一切聲聞辟支佛等所不能知

【真福寺本】

何以故舍□弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他 諸佛

【興聖寺写本】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他 佛

【科註法華論】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他 佛 (卷三、二表)

【叡山版】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他無數諸佛

【智全会入本】

何以故舍利弗如來應供正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他無數諸佛

【日藏会入本】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他無數諸佛

【論記所引】

注釈なし

【敦煌摩提訳】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他 佛

【房山摩提訳】

何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千万億那由他 佛

【大正摩提訖】何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千萬億那由他 佛

【福州摩提訖】何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千萬億那由他 佛

【興聖寺刊本】何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千萬億那由他 佛

【大正留支訖】何以故舍利弗如來應 正遍知已曾親近供養無量百千萬億 無數諸佛

（真福寺本注朱）於

【真福寺本】。諸 佛所盡行諸佛所脩阿耨多羅三藐三菩提法

【興聖寺写本】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【科註法華論】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法（卷三、二表）

【觀山版】於諸 佛所盡行諸佛／修阿耨多羅三藐三菩提法

【智全会入本】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【日藏会入本】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訖】於諸 佛所盡行諸佛所脩阿耨多羅三藐三菩提法

【房山摩提訖】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【大正摩提訖】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【福州摩提訖】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【興聖寺刊本】於諸 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【大正留支訖】於百千億那由他 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法

【真福寺本】舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就

【興聖寺写本】舍利弗如來已於无量百千万億那由他劫勇猛精進所作成就

【科註法華論】舍利弗如來已於無量百千万億那由他劫勇猛精進所作成就（卷三、二表）

【觀山版】舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就

【智全会入本】舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就

【日藏会入本】舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就
【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】舍利弗如來已於无量百千 億那由他劫勇猛精進所作成就

【房山摩提訳】舍利弗如來已於無量百千 億那由他劫勇猛精進所作成就

【大正摩提訳】舍利弗如來已於無量百千 億那由他劫勇猛精進所作成就

【福州摩提訳】舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就

【興聖寺刊本】舍利弗如來已於無量百千万億那由他劫勇猛精進所作成就

【大正留支訳】舍利弗如來已於無量百千 億那由他劫勇猛精進所作成就

【真福寺本】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解⁸⁶

【興聖寺写本】名稱普那舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【科註法華論】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解 (卷三、二裏)

【叡山版】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【智全会入本】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【日藏会入本】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解 (三、四上)

【房山摩提訳】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【大正摩提訳】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【福州摩提訳】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【興聖寺刊本】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

【大正留支訳】名稱普聞舍利弗如來畢竟成就希有之法舍利弗難解之法如來能知舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說意趣難解

86 墨書で「解」の上に小さい丸印と「難」の右上に倒置符が付されている。

【真福寺本】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【興聖寺写本】一切聲聞辟支佛 所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【科註法華論】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便（卷三、二裏）
 【叡山版】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【智全会入本】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【日藏会入本】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【論記所引】注釈なし
 【敦煌摩提訳】一切聲聞辟支佛 所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種と方便
 【房山摩提訳】一切聲聞辟支佛 所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【大正摩提訳】一切聲聞辟支佛 所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【福州摩提訳】一切聲聞辟支佛 所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【興聖寺刊本】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便
 【大正留支訳】一切聲聞辟支佛等所不能知何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故舍利弗如來成就種種方便

（真福寺本注墨）

數

【真福寺本】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無量⁸⁷方便引導衆生於諸著處令得解脫
 【興聖寺写本】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教无数方便引導衆生於諸著處令得解脫
 【科註法華論】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫（卷三、三表）
 【叡山版】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫（十三裏）
 【智全会入本】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫
 【日藏会入本】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫
 【論記所引】注釈なし
 【敦煌摩提訳】種と知見種と念觀種と言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教无数方便引導衆生於諸著處令得解脫

【房山摩提訖】種種知見種種念觀種種言詞舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫（第十一紙）

【大正摩提訖】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫

【福州摩提訖】種種知見種種念觀種種言詞舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫

【興聖寺刊本】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫

【大正留支訖】種種知見種種念觀種種言辭舍利弗吾從成佛已來於彼彼處廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫

（真福寺本注墨）
所

【真福寺本】舍利弗如來知見方便到於彼塹舍利弗如來知見廣大深遠無障無尋力無。畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【興聖寺寫本】舍利弗如來知見方便到於彼垢舍利弗如來知見廣大深遠无鄣无尋力无。畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【科註法華論】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無尋力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足（卷三、三裏）

【叡山版】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【智全會入本】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【日藏會入本】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訖】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠无鄣无尋力无。畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【房山摩提訖】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無。畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【大正摩提訖】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無。畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足（一四中）

【福州摩提訖】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【興聖寺刊本】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無尋力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足（卷上、第十六紙）

【大正留支訖】舍利弗如來知見方便到於彼岸舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足

【真福寺本】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔湍悅可衆心止舍利弗不須復說（第十三紙）

【興聖寺寫本】舍利弗諸佛如來深入无際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔濡悅可衆心／舍利弗不須復說

【科註法華論】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說（卷三、三裏）

【叡山版】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔輭悅可衆心止舍利弗不須復說

【智全会入本】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【日藏会入本】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訳】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種々分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【房山摩提訳】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言詞柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【大正摩提訳】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【福州摩提訳】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言詞柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【興聖寺刊本】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說
 【大正留支訳】舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法舍利弗如來能種種分別巧說諸法言辭柔軟悅可衆心止舍利弗不須復說

(真福寺本注墨)

知

【真福寺本】舍利弗佛所成就第一希有難解之海舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能智彼法究竟諸法⁸⁸實相
 【興聖寺写本】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【科註法華論】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相 (卷三、四表)
 【叡山版】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【智全会入本】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【日藏会入本】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【論記所引】注釈なし
 【敦煌摩提訳】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【房山摩提訳】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【大正摩提訳】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【福州摩提訳】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相
 【興聖寺刊本】舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相

【大正留支訳】 舍利弗佛所成就第一希有難解之法舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟 實相

【真福寺本】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【興聖寺写本】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法（第十紙）

【科註法華論】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法（卷三、四表）

【叡山版】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【智全会入本】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【日藏会入本】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【論記所引】 注釈なし

【敦煌摩提訳】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【房山摩提訳】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【大正摩提訳】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【福州摩提訳】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【興聖寺刊本】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【大正留支訳】 舍利弗唯佛如來知一切法舍利弗唯佛如來能說一切法

【真福寺本】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見

【興聖寺写本】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見

【科註法華論】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見（卷三、四裏）

【叡山版】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見（十四表）

【智全会入本】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見

【日藏会入本】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何相何躰如是等一切法如來現見非不現見

【論記所引】 注釈なし

（敦煌摩提傍書）

II

相何

【敦煌摩提訳】 何等法云何法何似法何相法何躰法何等云何何似何／躰如是等一切法如來現見非不現見

【房山摩提訖】何等法云何法何似法何相法何體法何等云何何似何相何體如是等一切法如來現見非不現見
【大正摩提訖】何等法云何法何似法何相法何體法何等云何何似何相何體如是等一切法如來現見非不現見
【福州摩提訖】何等法云何法何似法何相法何體法何等云何何似何相何體如是等一切法如來現見非不現見
【興聖寺刊本】何等法云何法何似法何相法何體法何等云何何似何相何體如是等一切法如來現見非不現見
【大正留支訖】何等法云何法何似法何相法何體法何等云何何似何相何體如是等一切法如來現見非不現見

所說法因果相

【真福寺本】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【興聖寺寫本】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【科註法華論】論曰自此已下示現所說法因果相應知（卷三、四裏）
【叡山版】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【智全會入本】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【日藏會入本】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【論記所引】論曰自此已下：（一一八下八）

論示現所說法因果相者：（一一八下九）

故云自此已下示現所說法因果相應知：（一一九上五）

【敦煌摩提訖】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【房山摩提訖】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【大正摩提訖】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【福州摩提訖】論曰自此已下示現所說法因果相應知
【興聖寺刊本】論曰
【大正留支訖】釋曰

如來起定

【真福寺本】余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安詳而起起已告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【興聖寺寫本】 余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智現從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【科註法華論】 爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故（卷三、五表）

【觀山版】 爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【智全會入本】 爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【日藏會入本】 爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【論記所引】 論爾時世尊下…（二一九上一〇）

論爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故者…（二一九上一五—一七）

【敦煌摩提訖】 余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【房山摩提訖】 如經余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【大正摩提訖】 如經爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【福州摩提訖】 余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【興聖寺刊本】 余時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已 告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故

【大正留支訖】 爾時世尊入甚深三昧正念不動以如實智觀從三昧安祥而起起已即告舍利弗者示現如來得自在力故如來入定無能驚寤故（五上）

對揚之人

【真福寺本】 何故唯告 舍利弗不告 餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【興聖寺寫本】 何故唯告 舍利弗不告 餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【科註法華論】 何故唯告 舍利弗不告 餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故（卷三、六表）

【觀山版】 何故唯告 舍利弗不告 余聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【智全會入本】 何故唯告 舍利弗不告 餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【日藏會入本】 何故唯告 舍利弗不告 餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【論記所引】 論何故告 身子 不告 餘聲聞等者…（二一〇下一〇）

隨深智慧與佛 相應故者…（二一〇下一三一—一四）

【敦煌摩提訖】 何故告 舍利弗不告 餘聲聞等 隨深智慧與如來相應故

【房山摩提訖】 何故告 舍利弗不告 餘聲聞等 隨深智慧與如來相應故

【大正摩提訊】何故告舍利弗不告餘聲聞等隨深智慧與如來相應故

【福州摩提訊】何故唯告舍利弗不告餘聲聞等隨深智慧與如來相應故

【興聖寺刊本】何故唯告舍利弗不告餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

【大正留支訊】何故唯告尊者舍利弗不告其餘聲聞等者隨深智慧與如來相應故

（真福寺本注朱）向

【真福寺本】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【興聖寺写本】／不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【科註法華論】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故（卷三、六裏）

【叡山版】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【智全会入本】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【日藏会入本】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【論記所引】論何故不告諸菩薩下：（二二下一）

有五種義下：（二二下一一—二二）

一者為諸聲聞所應作事故下：（二二下一四）

是聲聞所作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故者：（二二下一六一—二七）

【敦煌摩提訊】何故不告諸菩薩有五種義一者為諸聲聞所作事故二者為諸聲聞迴取大菩提故

【房山摩提訊】何故不告諸菩薩有五種義一者為諸聲聞所作事故二者為令聲聞迴趣大菩提故

【大正摩提訊】何故不告諸菩薩有五種義一者為諸聲聞所作事故二者為令聲聞迴趣大菩提故

【福州摩提訊】何／不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴趣向大菩提故（第十紙）

【興聖寺刊本】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【大正留支訊】何故不告諸菩薩者有五種義一者為諸聲聞所應作事故二者為諸聲聞迴心趣向大菩提故

【真福寺本】三者護諸聲聞恐怯崩故四者為令餘人善思念故五者為諸聲聞不起所作已辨心故

【興聖寺写本】三者護／聲聞忍怯崩故四者為令餘人善思念故五者為讚聲聞不起所作已弁心故

【科註法華論】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故（卷三、七表）

【觀山版】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故（十四裏）

【智全会入本】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【日藏会入本】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【論記所引】三者護諸聲聞恐怯弱故者：（一二二上二）

四者爲令餘人善思念故者：（一二二上三一四）

五者爲諸聲聞不起所作已辨心故者：（一二二上五一六）

【敦煌摩提訖】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【房山摩提訖】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【大正摩提訖】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【福州摩提訖】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【興聖寺刊本】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

【大正留支訖】三者護諸聲聞恐怯弱故四者爲令餘人善思念故五者爲諸聲聞不起所作已辨心故

妙法功德具足

二種甚深

【真福寺本】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故

【興聖寺写本】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來／故

【科註法華論】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故（卷三、七裏）

【觀山版】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故

【智全会入本】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故

【日藏会入本】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故

【論記所引】論諸佛智慧甚深無量者下：（一二二下五）

論爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故者：（一二二下一〇）

【敦煌摩提訖】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故（三二四下）

【房山摩提訖】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故
【大正摩提訖】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故
【福州摩提訖】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故
【興聖寺刊本】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故
【大正留支訖】諸佛智慧甚深無量者爲諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故

【真福寺本】言甚深者顯示二種甚深 義應 知
【興聖寺写本】言甚深者顯示二種甚深者顯示二種甚深 義應 知
【科註法華論】言甚深者顯示二種甚深 義應 知(卷三、八表)
【觀山版】言甚深者顯示二種甚深之 義應如是知
【智全会入本】言甚深者顯示二種甚深之 義應 知
【日藏会入本】言甚深者顯示二種甚深之 義應 知
【論記所引】論甚深者下：(二二下一六)

標二種者：(二三上三一四)

【敦煌摩提訖】甚深者顯示二種甚深 義應 知
【房山摩提訖】甚深者顯示二種甚深 義應 知
【大正摩提訖】甚深者顯示二種甚深 義應 知
【福州摩提訖】言甚深者顯示二種甚深之 義應 知
【興聖寺刊本】言甚深者顯示二種甚深之 義應 知
【大正留支訖】言甚深者顯示二種甚深之 義應如是知

【真福寺本】何等爲二一者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門甚深無量故
(興聖寺写本注) 二

【興聖寺写本】何等爲。一者證甚深謂爲諸佛智惠甚深无量故二者阿含甚深謂 智惠門甚深无量故
【科註法華論】何等爲二一者證甚深謂 諸佛智慧甚深无量故二者阿含甚深謂 智慧門甚深无量故(卷三、八表)

【叡山版】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂其智慧門甚深無量故
 【智全会入本】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂其智慧門甚深無量故
 【日藏会入本】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂其智慧門甚深無量故
 【論記所引】 論何等爲二下…（一二三上八）
 一者證甚深下…（一二三上九）

諸佛智慧下…（一二五上二五）

論二者阿含甚深謂 智慧門 故者…（一二五下九）

【敦煌摩提訖】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 故

【房山摩提訖】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 故（第十二紙）

【大正摩提訖】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 故

【福州摩提訖】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 故

【興聖寺刊本】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 甚深無量故（卷上、第十七紙）

【大正留支訖】 何等爲二者證甚深謂 諸佛智慧甚深無量故二者阿含甚深謂 智慧門 甚深無量故

【真福寺本】 言甚深者 是捨相餘者是別相

【興聖寺写本】 甚深者 是捨相餘者是別

【科註法華論】 言甚深者 是惣相餘者是別相（卷三、九裏）

【叡山版】 言甚深者 是惣相餘者是別

【智全会入本】 言甚深者 是總相餘者／別相

【日藏会入本】 言甚深者 是總相餘者是別相

【論記所引】 論甚深者 是總 餘者是別者…（一二六上五）

【敦煌摩提訖】 甚深者 是惣 餘者是別

【房山摩提訖】 甚深者 是惣 餘者是別

89 『智全』卷上では「智慧門者故者」となっているが、『日藏』第二十三卷（一二八頁上一〇行目）では「智慧門故者」となっており、『科註』卷三（九丁表）所引の『論記』では「智慧門故者」となっている。『智全』にある「門」の下の「者」は、衍字と見られるため、ここでは削除する。

【大正摩提訖】甚深者 是總 餘者是別

【福州摩提訖】言甚深者此是摠相餘者是別相

【興聖寺刊本】言甚深者 是摠相餘者是別相

【大正留支訖】言甚深者此是總相餘 別相

証甚深

【真福寺本】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深（第十四紙）

【興聖寺写本】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【科註法華論】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深（卷三、九裏）

【叡山版】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【智全会入本】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【日藏会入本】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【論記所引】論証甚深者下…（二六上一〇）

一者義甚深 依何等義甚深故下…（二六上一三）

【敦煌摩提訖】証甚深者有五種 一者義甚深 依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【房山摩提訖】証甚深者有五種 一者義甚深 依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【大正摩提訖】証甚深者有五種 一者義甚深 依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【福州摩提訖】証甚深者有五種示現一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【興聖寺刊本】証甚深者 五種示現 一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【大正留支訖】証甚深者 五種示現 一者義甚深謂依何等義甚深故二者實躰甚深三者內證甚深四者依止甚深五者無上甚深

【真福寺本】何故無上甚深者謂大菩提故大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【興聖寺写本】何故五⁹⁰ 甚深者謂大菩提故大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

90 「五」は「无上」の誤写か。

「何故無上」に対して、「異本此四字无之」との傍注がある。

【科註法華論】何故無上⁹¹甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故（卷三、十表）

【觀山版】何故甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【智全会入本】何故甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【日藏会入本】何故甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【論記所引】甚深者下…（二六上一三一四）

論甚深者下…（二六下一〇）

大菩提者…（二六下一一）

【敦煌摩提訖】甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【房山摩提訖】甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【大正摩提訖】甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故（一四下）

【福州摩提訖】甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【興聖寺刊本】何故無上甚深者謂大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

【大正留支訖】何者甚深 謂大菩提 大菩提者如來所證阿耨多羅三藐三菩提故

（真福寺本注墨）

故

【真福寺本】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知／名甚深言智慧者謂一切種一切智智義故

【興聖寺写本】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深言智慧者謂一切種一切智二義故

【科註法華論】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深言智慧者謂一切種一切智智義故（卷三、十表）

【觀山版】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深言智慧者謂一切種一切智義故

【智全会入本】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深言智慧者謂一切種一切智義故

【日藏会入本】又甚深者一切聲聞辟支佛等所不能知故名甚深言智慧者謂一切種一切智義故

【論記所引】論又甚深者一切二乘所不能知故者…（二七上一二）

智慧者下…（二七上一三）

謂一切種者：（二七上四）

今謂一切智智即是：（二七上一）

義是所趣：（二七上一七）

【敦煌摩提訖】又甚深者一切聲聞辟支佛 所不能知故

智慧者謂一切種一切智智義故

【房山摩提訖】又甚深者一切聲聞辟支佛 所不能知故

智慧者謂一切種一切智智義故

【大正摩提訖】又甚深者一切聲聞辟支佛 所不能知故

智慧者謂一切種一切智智義故

【福州摩提訖】又甚深者一切聲聞辟支佛 所不能知故

名甚深言智慧者謂一切種一切智智義故

【興聖寺刊本】又甚深者一切聲聞辟支佛等 所不能知故

名甚深言智慧者謂一切種一切智智義故

【大正留支訖】云何甚深 一切聲聞辟支佛等 所不能知故

名甚深言智慧者謂一切種一切智 義故

（真福寺本注墨）

【真福寺本】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

難²觀

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【興聖寺寫本】如經諸／智惠甚深無量其智惠門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【科註法華論】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【觀山版】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【智全會入本】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【日藏會入本】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【論記所引】如經下：（二六上一四）

【敦煌摩提訖】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛 所不能知故

【房山摩提訖】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛 所不能知故

【大正摩提訖】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛 所不能知故

【福州摩提訖】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛 所不能知故

【興聖寺刊本】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見

覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【大正留支訳】如經諸佛智慧甚深無量其智慧門難見難覺難知難解難入一切聲聞辟支佛等所不能知故

阿含甚深

【真福寺本】説言⁹³阿含 甚深者示現有 八種

【興聖寺写本】説 阿含 甚深者示現有⁹⁴八種

【科註法華論】言阿含 甚深者示現有 八種 (卷三、十二表)

【叡山版】説 阿含 甚深者示現有 八種

【智全会入本】説 阿含 甚深者示現有 八種

【日藏会入本】説 阿含 甚深者示現有 八種

【論記所引】論智慧門者謂説 阿含義下…(二二八下七)

甚深者下…(二二八下八)

八種是別…(二二八下八九)

【敦煌摩提訳】説 阿含 甚深者示現有 八種

【房山摩提訳】智慧門者謂説 阿含義甚深者示現有 八種

【大正摩提訳】智慧門者謂説 阿含義甚深者示現有 八種

【福州摩提訳】智慧門者謂説 阿含義甚深者示現有 八種

【興聖寺刊本】阿含 甚深者 八種示現

【大正留支訳】阿含 甚深者 八種示現

【真福寺本】一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千万億無數諸佛故

【興聖寺写本】一者受持讀誦甚深如經佛 已曾親近供養無量百千万億無數諸佛故

【科註法華論】一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千万億無數諸佛故 (卷三、十二裏)

【叡山版】一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千万億無數諸佛故

93 「説」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。
94 「有」の下に「八」には、左傍に見せ消ち記号が付されており、また、その「八」および見せ消ち記号は擦り消されている。

【智全会入本】 一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故

【日藏会入本】 一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故

【論記所引】 一者受持下：（二二八下九—一〇）

故云受持讀誦甚深：（二二八下一三）

【敦煌摩提訖】 一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故

【房山摩提訖】 一者受持讀誦甚深如經舍利弗如來應正遍知已 曾親近供養無量百千萬億那由他佛故

【大正摩提訖】 一者受持讀誦甚深如經舍利弗如來應正遍知已 曾親近供養無量百千萬億那由他佛故

【福州摩提訖】 一者受持讀誦甚深如經舍利弗如來應正遍知已 曾親近供養無量百千萬億那由他佛故

【興聖寺刊本】 一者受持讀誦甚深如經佛 曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故

【大正留支訖】 一者受持讀誦甚深如經佛 已曾親近供養無量百千萬億無數諸佛故

【真福寺本】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所脩阿耨多羅三藐三菩提法故

【興聖寺寫本】 二者脩行甚深如經 百千萬億那由他於諸佛所盡／諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【科註法華論】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故（卷三、十二裏）

【觀山版】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【智全会入本】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【日藏会入本】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【論記所引】 論 二者脩行甚深者：（二二八下一四—一五）

【敦煌摩提訖】 二者脩行甚深如經 百千萬億那由他 佛所盡行諸佛所脩阿耨多羅三藐三菩提法故

【房山摩提訖】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【大正摩提訖】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【福州摩提訖】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【興聖寺刊本】 二者脩行甚深如經 於諸佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【大正留支訖】 二者脩行甚深如經 於百千萬億那由他 佛所盡行諸佛所修阿耨多羅三藐三菩提法故

【真福寺本】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【興聖寺写本】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於无量 劫勇猛精進所作成就故
 【科註法華論】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於无量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故 (卷三、十三表)
 【叡山版】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【智全会入本】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【日藏会入本】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【論記所引】 論三者果行甚深者：(二二八下一六一七)
 【敦煌摩提訳】 三者果行甚深如經舍利弗如來／於无量 劫勇猛精進所作成就故
 【房山摩提訳】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千 億 劫勇猛精進所作成就故
 【大正摩提訳】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千 億 劫勇猛精進所作成就故
 【福州摩提訳】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【興聖寺刊本】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千萬億那由他劫勇猛精進所作成就故
 【大正留支訳】 三者果行甚深如經舍利弗如來已於無量百千 億那由他劫勇猛精進所作成就故

【真福寺本】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故
 【興聖寺写本】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經 成就希有 法故 (第十一紙)
 【科註法華論】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故 (卷三、十三表)
 【叡山版】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故
 【智全会入本】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故
 【日藏会入本】 四者增長功德心甚深如經名稱普門故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故
 【論記所引】 論四者增長功德心甚深者：(二二九上一二)
 故名稱普聞：(二二九上一三四)
 論五者快妙事心甚深：(二二九上一七)

論云成就希有⁹⁵ 法故：(二二九上一二)

⁹⁵ 当該箇所は、『智全』巻上と『日藏』第二十三巻(一二二頁下一六行目)では「成就者有法故」となっているが、『科註』巻三(十三丁裏)所引の『論記』では「成就希有法故」となっている。
 以下では、『科註』のテキストに従う。

【敦煌摩提訖】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經 成就希有 法故

【房山摩提訖】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來 成就希有 法故

【大正摩提訖】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事／甚深如經 成就希有 法故

【福州摩提訖】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故

【興聖寺刊本】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故

【大正留支訖】 四者增長功德心甚深如經名稱普聞故五者快妙事心甚深如經舍利弗如來畢竟成就希有之法故（五中）

【真福寺本】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【興聖寺写本】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【科註法華論】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故（卷三、十四表）

【叡山版】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【智全会入本】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【日藏会入本】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【論記所引】 論六者無上甚深者：（二九上二二）

【敦煌摩提訖】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【房山摩提訖】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來／知故

【大正摩提訖】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【福州摩提訖】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【興聖寺刊本】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故（卷上、第十八紙）

【大正留支訖】 六者無上甚深如經舍利弗難解之法如來能知故

【真福寺本】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道說因緣法名爲甚深 如經舍利弗難解洩者諸佛如來隨宜所說 意趣難解故

【興聖寺写本】 七者入甚深入甚深諸者名字章句意難得故 自在住持不同 舍利外道說因緣法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說法意趣難解故

【科註法華論】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道說因緣法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說 意趣難解故（卷三、十四表）

【叡山版】 七者入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道說因緣法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所說 意趣難解故（十五裏）

「如」(偏の部分が、やや不鮮明)の下に小さい丸印があり、下方欄外に「如」とある。

【智全会入本】 七者入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【日藏会入本】 七者入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【論記所引】 論七者入甚深者…(二二九上一四)

入甚深 者下…(二二九上一五)

妙法名 句 (二二九上一五—一六)

其旨難解 佛自住持…(二二九上一六)

不同已下…(二二九上一六—一七)

故云不同 外道説…(二二九上一七—下二)

故云因縁法 甚深…(二二九下一—二)

(敦煌摩提傍書)

入甚深

【敦煌摩提記】 七者入甚深／／ 者名字章句意難得 自／住持不同 外道説因縁法 甚深故如雖舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【房山摩提記】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得 自在住持不同 外道説因縁法 甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【大正摩提記】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得 自在住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【福州摩提記】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得故以自在住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【興聖寺刊本】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得故 自在住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜所説 意趣難解故
 【大正留支記】 七者入甚深入甚深 者名字章句意難得故 自以住持不同 外道説因縁法名爲甚深 如經舍利弗難解法者諸佛如來隨宜 説法意趣難解故

【真福寺本】

八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【興聖寺写本】

八者不共耳辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【科註法華論】

八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故 (卷三、十四裏)

【叡山版】

八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【智全会入本】

八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【日藏会入本】

八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【論記所引】論八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深者…（一二九下五）

【敦煌摩提訖】八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如雖一切聲聞辟支佛 所不能知故（三一五上）

【房山摩提訖】八者不共聲聞辟支佛所作住持故 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【大正摩提訖】八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛 所不能知故

【福州摩提訖】八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【興聖寺刊本】八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛等 所不能知故

【大正留支訖】八者不共聲聞辟支佛所作住持 甚深如經一切聲聞辟支佛等 所不能知故

卷上卷末（二卷本のみ）

【興聖寺刊本】妙法蓮華經優波提舍卷上

【大正留支訖】妙法蓮華經憂波提舍卷上

卷下卷首（二卷本のみ）

【興聖寺刊本】妙法蓮華經優波提舍卷下 婆藪槃豆菩薩造 三藏法師菩提留支 譯（卷下、第一紙）

【大正留支訖】妙法蓮華經憂波提舍卷下 大乘論師婆藪槃豆 釋後魏北天竺三藏 菩提留支共沙門曇林等 譯

【興聖寺刊本】方便品之餘

【大正留支訖】方便品之餘

如来法師功德成就

【真福寺本】如是 說妙法功德 已

【興聖寺写本】如意 說妙法功德 已⁹⁷

【科註法華論】如是 說妙法功德 已（卷三、十五表）

97 拙稿「二〇二B」五一頁の当該箇所（三〇五行目）では、「足」と翻刻しているが、翻刻ミスであるため、「已」に訂正する。

【叡山版】如是說妙法功德已

【智全会入本】如是說妙法功德已

【日藏会入本】如是說妙法功德已

【論記所引】論如是說妙法功德已者：（二二九下一〇）

【敦煌摩提訖】如是說妙法功德已

【房山摩提訖】如是說妙法功德已

【大正摩提訖】如是說妙法功德已

【福州摩提訖】如是說妙法功德具已

【興聖寺刊本】如是說妙法功德具足

【大正留支訖】如是說妙法功德具足

【真福寺本】次說如來海師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故

【興聖寺寫本】次說如來法師功德成就應知如經何以故諸佛如來自在說因成就故

【科註法華論】次說如來法師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故（卷三、十五裏）

【叡山版】次說如來法師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故

【智全会入本】次說如來法師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故

【日藏会入本】次說如來法師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就故

【論記所引】論次說如來法師功德成就已下：（二三〇上一四）

論何以故徵諸佛如來舉能說人（二三〇下一一）

自在說因成就者：（二三〇下一二）

故云諸佛自在說因成就故（二三〇下八）

【敦煌摩提訖】次說如來法師功德成就應知如雖何以故諸佛如來自在說因成就故

【房山摩提訖】次說如來法師功德成就應知如經何以故諸佛如來自在說因成就故

【大正摩提訖】次說如來法師功德成就應知如經何以故諸佛如來自在說因成就故（二五上）

【福州摩提訖】次說如來法師功德成就應知如經何以故舍利弗諸佛如來自在說因成就／

【興聖寺刊本】次說如來法師功德成就應知如經何以故**舍利弗**諸佛如來自在說因成就故
【大正留支訳】次說如來法師功德成就應知如經何以故**舍利弗**諸佛如來自在說因成就故

如來成就四種功德

【真福寺本】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四（第十五紙）

【興聖寺写本】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【科註法華論】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四（卷三、十六表）

【叡山版】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【智全会入本】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【日藏会入本】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【論記所引】論如來成就四種功德故能度衆生已下：（一三一上二）

何等者徴（二三上二二三）

【敦煌摩提訳】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【房山摩提訳】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【大正摩提訳】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【福州摩提訳】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【興聖寺刊本】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【大正留支訳】如來成就四種功德故能度衆生何等爲四

【真福寺本】一者往成就如經**舍利弗**如來成就種種方便故種種方便者從**堯**率天退乃至示現入涅槃故

【興聖寺写本】一者往成就如經如來成就種種方便故種種方便者從**堯**率天退乃至示現入**炎**故

【科註法華論】一者往成就如經**舍利弗**如來成就種種方便故種種方便者從**堯**率天退乃至示現入涅槃故（卷三、十六裏）

【叡山版】一者往成就如經**舍利弗**如來成就種種方便故種種方便者從**堯**率天退乃至示現入涅槃故

【智全会入本】一者往成就如經**舍利弗**如來成就種種方便故種種方便者從**兜卒**天退乃至示現入涅槃故

【日藏会入本】一者往成就如經**舍利弗**如來成就種種方便故種種方便者從**兜率**天退乃至示現入涅槃故

【論記所引】一者已下…（一二一上四）

所言往者…（一二一上四）

種種方便者…（一二一上五）

（敦煌摩提傍書）

如

【敦煌摩提識】一者往成就如雖

／來成就種々方便故種々方便者 從兜率天 退 乃至示現入涅槃故

【房山摩提識】一者往成就如經

如來成就種種方便故種種方便者 從兜率天 退 乃至示現入涅槃故（第十三紙）

【大正摩提識】一者往成就如經

如來成就種種方便故種種方便者 從兜率天 退 乃至示現入涅槃故

【福州摩提識】一者住成就如經舍利弗

如來成就種種方便故種種方便者 謂從兜率天中退沒乃至示現入涅槃故（第十一紙）

【興聖寺刊本】一者住成就如經舍利弗

如來成就種種方便故種種方便者 從兜率天 退 乃至示現入涅槃故

【大正留支識】一者住成就如經舍利弗

如來成就種種方便故種種方便者 謂從兜率天中退沒乃至示現入涅槃故

【真福寺本】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【興聖寺寫本】二者教化成就如經種種知見故種種知

知見者示現 染淨諸因故

【科註法華論】二者教化成就如經種々知見故種々知

見者示現 染淨諸因故（卷三、十七表）

【觀山版】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【智全會入本】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【日藏會入本】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【論記所引】言教化者…（一二一下二）

故云教化成就…（一二一下五—六）

種種知

見者下…（一二一下六）

故云示現 染淨諸因故（一二一下九）

【敦煌摩提識】二者教化成就如雖種々知見故種々知

見者示現 染淨諸因故

【房山摩提識】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【大正摩提識】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【福州摩提識】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【興聖寺刊本】二者教化成就如經種種知見故種種知

見者示現 染淨諸因故

【大正留支訳】二者教化成就如經種種知見故種種知 見者示現染淨諸因故

【真福寺本】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【興聖寺写本】三者功德畢竟成就如經種種念現故種種念現者以説彼法成就因縁如法相應故

【科註法華論】三者功德畢竟成就如經種々念觀故種々念觀者以説彼法成就因縁如法相應故（卷三、十七裏）

【叡山版】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故（十六表）

【智全会入本】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【日藏会入本】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【論記所引】功德畢竟者…（二二下一〇）

種種念觀者下…（二二下一七）

故云以説彼法成就因縁如法相應故（一二三上九一〇）

【敦煌摩提訳】三者功德畢竟成就如雖種と念觀故種と念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【房山摩提訳】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【大正摩提訳】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【福州摩提訳】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【興聖寺刊本】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【大正留支訳】三者功德畢竟成就如經種種念觀故種種念觀者以説彼法成就因縁如法相應故

【真福寺本】四者説成就如經種種言辭故

【興聖寺写本】四者説成就如經種種言辭并⁹⁸故

【科註法華論】四者説成就如經種々言辭故（卷三、十八裏）

【叡山版】四者説成就如經種種言辭故

【智全会入本】四者説成就如經種種言辭故

98 拙稿「二〇二二B」五一頁の当該箇所（三一三行目）では、字面から「并」と翻刻しているが、字面および意味上からも「并」に訂正する。

【日藏会入本】 四者說成就如經種種言辭 故

【論記所引】 說者：（一三二上一）

（敦煌摩提傍書） 經

【敦煌摩提訖】 四者說成就如雖種々言辭 故

【房山摩提訖】 四者說成就如經種種言詞 故

【大正摩提訖】 四者說成就如經種種言辭 故

【福州摩提訖】 四者說成就如經種種言辭 故

【興聖寺刊本】 四者說成就如經種種言辭 故

【大正留支訖】 四者說成就如經種種言辭 故

（真福寺本注墨） 等

【真福寺本】 種種言辭者以四無尋智依何等何。名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

【興聖寺寫本】 種種言辭者以四無尋智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

【科註法華論】 種々言辭者以四無尋智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故（卷三、十八裏）

【觀山版】 種種言辭者以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

【智全会入本】 種種言辭者以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

【日藏会入本】 種種言辭者以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

【論記所引】 種種下釋 四無礙者：（一三二上一）

依何等者：（一三二上一四）

諸法名 句（一三二上一五）

隨何等者：（一三二上一五）

故云隨 生能生能受 爲說故…（一三二上一六—一七）

（敦煌摩提傍書）

【敦煌摩提訖】 種々言辭者以四无尋 依何等何等名字章句隨何等／衆生能受 爲說故

【房山摩提訖】 種種言詞者以四無礙 依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受 爲說故

【大正摩提訖】種言辭者以四無礙 依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受 爲說故
 【福州摩提訖】種言辭者以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受 爲說故
 【興聖寺刊本】種言辭者以四無碍智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故
 【大正留支訖】種言辭者以四無礙智依何等何等名字章句隨何等何等衆生能受而爲說故

四種功德成就別釈

第一・第二・第三功德成就細別釈

種種方便

【真福寺本】復有義種種方便者 示現外道 耶洸如是如是種種過失故
 【興聖寺寫本】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是 種種過失故
 【科註法華論】復有義種々方便者 示現外道 邪法如是如是種々過失故（卷三、十九表）
 【叡山版】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【智全会入本】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【日藏会入本】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【論記所引】論復有義下…（一二三二下七）

第一種種方便者下…（一二三二下八）

示現外道 邪法等者…（一二三二下九）
 如是如是非一之義（一二三二下一〇）
 種種過失者…（一二三二下一一）
 【敦煌摩提訖】復有義種々方便者 示現外道 耶法如是 種々過失故
 【房山摩提訖】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【大正摩提訖】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【福州摩提訖】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【興聖寺刊本】復有義種種方便者 示現外道 邪法如是如是種種過失故
 【大正留支訖】又復有義種種方便者種種方便 示現外道所有邪法如是如是種種過失故（五下）

（真福寺本注墨）

【真福寺本】復

示現功德諸佛

法
正¹¹⁹ 如是如是種種⁹ 故

【興聖寺写本】復

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【科註法華論】復

示現 諸佛

正法如是如是種々功德故（卷三、十九表）

【叡山版】復種種方便

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【智全会入本】復種種方便

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【日藏会入本】復種種方便

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【論記所引】

示現 諸佛

正法者…（一二二下―一二三）

如是如是義如上知（一二三下―一四）

種種功德者…（一二三下―一四）

【敦煌摩提訖】

示現 諸佛

正法如是如是種々功德故

【房山摩提訖】

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【大正摩提訖】

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【福州摩提訖】

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【興聖寺刊本】

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

【大正留支訖】

示現 諸佛

正法如是如是種種功德故

種種方便

示現 諸佛所有 正法如是如是種種功德故

【真福寺本】

如經舍利弗 吾從成佛已來廣演言教無數方便引道衆生於諸著處令得解脫故

【興聖寺写本】

如經舍利弗 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【科註法華論】

如經舍利弗 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故（卷三、十九裏）

【叡山版】

如經舍利弗 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【智全会入本】

如經舍利弗 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

99 「へ（ひとがしら）」のような筆跡の下に、墨書で小さい丸印が付されている。

【日藏会入本】如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故
【論記所引】第二如經舍利弗吾從已下…（二三上二）

（敦煌摩提傍書）
經

【敦煌摩提識】如雖 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【房山摩提識】如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【大正摩提識】如經 吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【福州摩提識】如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

【興聖寺刊本】如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故（卷下、第二紙）

【大正留支識】如經舍利弗吾從成佛已來廣演言教無數方便引導衆生於諸著處令得解脫故

（真福寺本注朱）
者方便

【真福寺本】復無數方便。令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【興聖寺寫本】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【科註法華論】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故（卷三、二十表）

【觀山版】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【智全会入本】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【日藏会入本】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【論記所引】論復無數下…（二三上二）

釋方便句…（二三上二）

一令入諸善法故者…（二三上二—二三）

二斷諸疑故者…（二三上二—四）

（敦煌摩提傍書）
者方便

【敦煌摩提識】復無數方便／／令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【房山摩提識】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【大正摩提識】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故

【福州摩提訖】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故
【興聖寺刊本】復無數方便者方便令入諸善法故復方便者斷諸疑故
【大正留支訖】又無數方便者方便令入諸善法故又方便者斷諸疑故

【真福寺本】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【興聖寺寫本】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【科註法華論】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故（卷三、二十表）
【叡山版】復方便者令入增上勝智中故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【智全會入本】復方便者令入增上勝智中故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【日藏會入本】復方便者令入增上勝智中故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【論記所引】三令入增上勝智 故者：（二三上一四—一五）

四依四攝法攝取衆生令得解脫故者：（二三上一五一—一六）

（敦煌摩提傍書）

法攝

【敦煌摩提訖】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝／攝取衆生令得解脫故
【房山摩提訖】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【大正摩提訖】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【福州摩提訖】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【興聖寺刊本】復方便者令入增上勝智 故復方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故
【大正留支訖】又方便者令入增上勝智中故又方便者依四攝法攝取衆生令得解脫故

諸著

【真福寺本】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著 界者 著欲色無色界故
【興聖寺寫本】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著 界者 著欲色无色／故
【科註法華論】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著 界者 著欲色无色界故（卷三、二十表）
【叡山版】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著諸界者 著欲色無色界故（十六裏）

【智全会入本】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著諸界者 著欲色無色界故
【日藏会入本】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著諸果者 著欲色無色界故
【論記所引】論言著者…（一二三下一六）

言著 者彼處處著者…（一二三下一六一一七）

或著 界下列

著 界下釋：（一二四上一一二）

【敦煌摩提訖】諸著 者彼處著或著 界或著諸地或著 分或著 乘故著 界者 著欲色无色界故
【房山摩提訖】諸著 者彼處處著或著 界或著諸地或著 分或著 乘故著 界者 著欲色無色界故
【大正摩提訖】諸著 者彼處處著或著 界或著諸地或著 分或著 乘故著 界者 著欲色無色界故
【福州摩提訖】言著 者彼處處著或著 界或著諸地或著 分或著 乘故著 界者 著欲色無色界故
【興聖寺刊本】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘故著 界者 著欲色無色界故
【大正留支訖】諸著處者彼處處著或著諸界或著諸地或著諸分或著諸乘 著諸界者謂著欲色無色界故

【真福寺本】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至非想非非想 及 滅盡定地 故
【興聖寺寫本】著 地者 著戒／ 三昧初禪定地 乃至 非非相 及 滅盡定地 故
【科註法華論】著諸地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至非想非非想 及 滅盡定地 故（卷三、二十裏）
【叡山版】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【智全会入本】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【日藏会入本】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【論記所引】著 地者 著戒取 三昧初禪定地等者…（一二三四上四一五）
【敦煌摩提訖】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【房山摩提訖】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【大正摩提訖】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【福州摩提訖】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至 非非想 及 滅盡定地 故
【興聖寺刊本】著 地者 著戒取 三昧初禪定地 乃至非想非非想 及 滅盡定地 故
【大正留支訖】著諸地者謂著界故依於三昧取禪定地謂初禪地乃至非想非非想地及取滅盡定地等故

【真福寺本】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰⁰耶見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等／

【興聖寺写本】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰¹耶見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【科註法華論】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰²邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故（卷三、二十一表）

【叡山版】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰³邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【智全会入本】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰⁴邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【日藏会入本】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰⁵邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【論記所引】 言著 分者 著在家出家分者 著己同類作種種業¹⁰⁶邪見等故…（一三四上二七—下二）

著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等者…（一三四下四—五）

【敦煌摩提訳】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種と業¹⁰⁷耶見等故著出家分者著名聞利養種と諸覺煩惱等故

【房山摩提訳】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰⁸邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【大正摩提訳】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹⁰⁹邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【福州摩提訳】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹¹⁰邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【興聖寺刊本】 著 分者 著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹¹¹邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【大正留支訳】 著 諸分者 謂著在家出家分故著在家分者著己同類作種種業¹¹²邪見等故著出家分者著名聞利養種種諸覺煩惱等故

【真福寺本】 著 乘者 著聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹¹⁰⁴斯陀含阿那含阿羅漢等故（第十六紙）

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】 著 乘者 聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹¹⁰⁴斯陀含阿那含阿羅漢等故

【科註法華論】 著 諸乘者 著聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹¹⁰⁴斯陀含阿那含阿羅漢等故（卷三、二十二表）

拙稿「二〇二B」五二頁の当該箇所（三二五行目）では、「已」と翻刻しているが、意味上から「己」に改める。
同上の当該箇所（三二五行目）では、「邪」と翻刻しているが、「耶」に訂正する。

『日藏』第二十三卷（一三六頁下三行目）では、「已」となっているが、意味上から「己」に改める。

『大正藏』第二十六卷（一五頁上二三行目）では、「已」となっているが、意味上から「己」に改める。

「恒」の右上に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「洹」とある。

【叡山版】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【智全会入本】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【日藏会入本】**着** 乗者**着**聲聞乘菩薩乘故**着**聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【論記所引】著 乗者 聲聞乘菩薩乘故者先標（一三六上六）

著聲聞乘者下正釋…（一三六上六）

樂持小乘戒者…（一三六上九）

【敦煌摩提訢】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【房山摩提訢】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【大正摩提訢】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【福州摩提訢】著 乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【興聖寺刊本】**着** 乗者**着**聲聞乘菩薩乘故**着**聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故
【大正留支訢】著 諸乗者**著**聲聞乘菩薩乘故著聲聞乘者樂持小乘戒求須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢等故

【真福寺本】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故
【興聖寺写本】著大乘者 著利養／／恭敬等 著分別現種種法相乃至佛地故（第十二紙）
【科註法華論】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故（卷三、二十二裏）
【叡山版】著大乘者**謂**著利養供養恭敬等故著分別觀種種法相乃至佛地故
【智全会入本】著大乘者**謂**著利養供養恭敬等故著分別觀種種法相乃至佛地故
【日藏会入本】**着**大乘者**謂**著利養供養恭敬等故**着**分別觀種種法相乃至佛地故
【論記所引】著大乘者 著利養供¹⁰⁵恭欲等者…（一三六上二—一二）

著分別觀種種法相乃至佛地故者…（一三六上二五—一六）

【敦煌摩提訢】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種と法相乃至佛地故（三一五下）
【房山摩提訢】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故

105 当該箇所は、『日藏』第二十三卷（一三九頁上八行目）でも「利養供恭敬」となっているが、『科註』卷三（二十二丁裏）所引の『論記』では「利養恭敬」となっている。

【大正摩提訖】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故
【福州摩提訖】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故
【興聖寺刊本】著大乘者 著利養供養恭敬等 著分別觀種種法相乃至佛地故
【大正留支訖】著大乘者 謂著利養供養恭敬等 故著分別觀種種法相乃至佛地故

種種知見・種種念觀

【真福寺本】復種種知見者自身成就不可思議 境界不與 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸者¹⁰⁶ 故
【興聖寺寫本】復種種知見者自身成就不可思議 境界 与 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼垢 故
【科註法華論】復種々知見者自身成就不可思議 境界不與 諸聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故 (卷三、二十三裏)
【叡山版】復種種知見者自身成就不可思議 境界 與 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故
【智全会入本】復種種知見者自身成就不可思議 境界不與 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故
【日藏会入本】復種種知見者自身成就不可思議 境界不與 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故
【論記所引】論復種種知見者下… (一三七上一〇)
自身成就下釋… (一三七上一一—一二)
境界者… (一三七上一四)
不可思議
故云不與 聲聞菩薩共故… (一三七下七八)
如經已下指文 (一三七下一〇)
經

(敦煌摩提傍書)
【敦煌摩提訖】復種と知見者自身成就不可思議 境界 與 聲聞菩薩 故如雖舍利弗如來知見方便到於彼堦 故
【房山摩提訖】復種種知見者自身成就不可思議 境界 與 聲聞菩薩 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故
【大正摩提訖】復種種知見者自身成就不可思議 境界 與 聲聞菩薩 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故 (一五中)
【福州摩提訖】復種種知見者自身成就不可思議 境界 與 諸聲聞菩薩 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故
【興聖寺刊本】復種種知見者自身成就不可思議 境界 與 聲聞菩薩等 故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故

106 「者」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【大正留支訳】又復種種知見者自身成就不可思議勝妙境界 與諸聲聞菩薩等故如經舍利弗如來知見方便到於彼岸 故

【真福寺本】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【興聖寺写本】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【科註法華論】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故（卷三、二十四裏）

【叡山版】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故（十七表）

【智全会入本】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【日藏会入本】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【論記所引】論到彼岸者…（二七下二二）

論到彼岸者勝餘一切諸菩薩故者…（一三七下二一—二三）

【敦煌摩提訳】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【房山摩提訳】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故（第十四紙）

【大正摩提訳】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【福州摩提訳】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【興聖寺刊本】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【大正留支訳】到彼岸者勝餘一切諸菩薩故

【真福寺本】復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無鄣無尋力無 畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【興聖寺写本】復種種念現者如經舍利弗如來知見廣大深遠无鄣无尋力无 畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【科註法華論】復種々念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠无障无寻力无所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故（卷三、二十五表）

【叡山版】復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無 畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【智全会入本】復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【日藏会入本】復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【論記所引】論復種種念觀者下…（一三八上六）

本經云舍利弗如來知見廣大深遠無量無礙力無所畏

禪定解脫三昧（一三八上七一—八）

論以無量爲無障 力無 畏之下（一三八上八—九）

加不共法根力菩薩分 又三昧下（一三八上九）

加三摩跋提…（一三八上九—一〇）

爲皆已具足…（一三八上一〇）

（敦煌摩提傍書）

經

【敦煌摩提記】

復種と念觀者如雖舍利弗如來知見廣大深遠无鄣无尋力无 尋不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【房山摩提記】

復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無 畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【大正摩提記】

復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無 畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【福州摩提記】

復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【興聖寺刊本】

復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

【大正留支記】

又復種種念觀者如經舍利弗如來知見廣大深遠無障無礙力無所畏不共法根力菩提分禪定解脫三昧三摩跋提皆已具足故

第一・第二・第三功德成就再別釈

【真福寺本】

又第一成就可但衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家 自在淨降伏故

【興聖寺写本】

又第一成就可但衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家 自在淨降伏故

【科註法華論】

又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家 自在淨降伏故（卷三、二十五裏）

【叡山版】

又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故

【智全会入本】

又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故

【日藏会入本】

又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故

【論記所引】

論又第一成就下…（一三八下九）

論又第一成就可化衆生依止善知識 成就故者…（一三八下一〇—一一）

第二成就根熟衆生令得解脫故者…（一三八下一六）

107 「生」の上に小さい丸印と「衆」の右傍に倒置符が付されている。拙稿「一〇二二B」五二頁の当該箇所（三三五行目）の注五二九では、「衆」の右に見せ消し記号があるとしているが、正確には倒置符であるため、ここに訂正する。

108 「家」の上に小さい丸印と「力」の右下に倒置符が付されている。同上五一頁の当該箇所（三三六行目）の注五三一では、倒置符を見落としているため、ここに補う。

第三成就力家 自在淨降伏故者…(一三九上一)

- 【敦煌摩提訖】 又第一成就可化衆生依止善知識 成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故
- 【房山摩提訖】 又第一成就可化衆生依止善知識 成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故
- 【大正摩提訖】 又第一成就可化衆生依止善知識 成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故
- 【福州摩提訖】 又第一成就可化衆生依止善知識 成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故(第十二紙)
- 【興聖寺刊本】 又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故(卷下、第三紙)
- 【大正留支訖】 又第一成就可化衆生依止善知識而成就故第二成就根熟衆生令得解脫故第三成就力家得自在淨降伏故(六上)

第四功德成就別釈

- 【真福寺本】 第四說成就者復有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有海故
- 【興聖寺寫本】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【科註法華論】 第四說成就者復有七種一者種々成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故(卷三、二十六裏)
- 【叡山版】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【智全会入本】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【日藏会入本】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【論記所引】 論第四說成就者 有七種下…(一三九上九)

論一者種種成就者…(一三九上一二)

如經 深入無際成就一切未曾有法故…(一三九上一五—一六)

- 【敦煌摩提訖】 第四說成就者 有七種一者種々成就如雖舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【房山摩提訖】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【大正摩提訖】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【福州摩提訖】 第四說成就者 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【興聖寺刊本】 第四說成就者復有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故
- 【大正留支訖】 第四 成就復 有七種一者種種成就如經舍利弗諸佛如來深入無際成就一切未曾有法故

（真福寺本注朱）
（真福寺本注墨）

故

【真福寺本】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 洙。如經如來能種種分別巧說諸洙言辭柔濡悅可衆心故

【興聖寺写本】

二者言語成就 得五種義妙音聲

說 故。如經如來能種種分別巧說諸洙言辭柔濡悅可衆心故

【科註法華論】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法故。如經如來能種々分別巧說諸洙言辭柔軟悅可衆心故（卷三、二十七表）

【觀山版】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法 如經如來能種種分別巧說諸洙言辭柔濡悅可衆心故

【智全会入本】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法故。如經如來能種種分別巧說諸洙言辭柔軟悅可衆心故

【日藏会入本】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法故。如經如來能種種分別巧說諸洙言辭柔軟悅可衆心故

【論記所引】論 二者言語成就者：（一二九下四）

得五種美妙音聲

說 法者：（一二九下五）

故言語圓滿悅可衆心：（一四〇上二）

【敦煌摩提訖】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法 如雖如來能種々分別巧說諸洙法如辭柔濡悅可衆心故

【房山摩提訖】

二者言語成就 得五種美妙音聲

說 法 如經如來能種種分別巧說諸洙法言詞柔耍悅可衆心故

【大正摩提訖】

二者言／成就 得五種美妙音聲

說 法 如經如來能種種分別巧說諸洙法言辭柔軟悅可衆心故

【福州摩提訖】

二者言語成就 得五種美妙音聲聞

說 法故。如經如來能種種分別巧說諸洙法言辭柔軟悅可衆心故

【興聖寺刊本】

二者言語成就 佛得五種美妙音聲

說 諸法故。如經如來能種種分別巧說諸洙法言辭柔軟悅可衆心故

【大正留支訖】

二者言語成就 謂得五種美妙音聲言語

說 法 如經如來能種種分別巧說諸洙法言辭柔軟悅可衆心故

【真福寺本】

三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有洙器衆生心已滿足故

【興聖寺写本】

三者相成就如經生心已止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【科註法華論】

三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故（卷三、二十七裏）

【觀山版】

三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故（十七裏）

【智全会入本】

三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

109 原本では、「語言」は「說」の右傍に書かれている。また、「語言」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。

【日藏会入本】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【論記所引】 論三者相成就者…（一四〇上五） 有法器衆生心已滿足者…（一四〇上五六）

【敦煌摩提訖】 三者相成就如雖 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【房山摩提訖】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【大正摩提訖】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【福州摩提訖】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【興聖寺刊本】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【大正留支訖】 三者相成就如經 止舍利弗不須復說故有法器衆生心已滿足故

【真福寺本】 四者□成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【興聖寺写本】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【科註法華論】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故（卷三、二十八裏）

【叡山版】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【智全会入本】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【日藏会入本】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【論記所引】 論四者堪成就者…（一四〇下二二）

一切可化衆生 知如來成就 希有 功德能說法者…（一四〇下二二三）

【敦煌摩提訖】 四者**勘**成就 一切可化衆生 知如來成就**第一**希有 功德能說法故如雖舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【房山摩提訖】 四者堪成就 一切可化衆生 知如來成就**第一**希有 功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【大正摩提訖】 四者堪成就 一切可化衆生 知如來成就**第一**希有 功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【福州摩提訖】 四者堪成就 一切可化衆生皆知如來成就 希有 功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【興聖寺刊本】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝妙**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【大正留支訖】 四者堪成就**所有**一切可化衆生皆知如來成就 希有**勝**功德能說法故如經舍利弗佛所成就第一希有難解之法故

【真福寺本】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼。究竟實相故言實相¹¹⁰者謂如來藏法身之體不變義故
【興聖寺写本】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相者謂如來藏法身之體不變義故
【科註法華論】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相者謂如來藏法身之體不變義故
【叡山版】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相者謂如來藏法身之體不變義故
【智全会入本】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相者謂如來藏法身之體不變義故
【日藏会入本】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相者謂如來藏法身之體不變義故
【論記所引】 論五者無量種成就者：(一四一下二) 不可盡者：(一四一下三)

論云如經 唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故：(一四一下四—五)

實相 者下：(一四一下六)

乃是如來藏：(一四一下七—八)

乃是法身之體：(一四一下八—九)

不變者：(一四一下九)

【敦煌摩提訖】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故 實相 者謂如來藏法身之體不變故
【房山摩提訖】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故 實相 者謂如來藏法身之體不變故
【大正摩提訖】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故 實相 者謂如來藏法身之體不變故
【福州摩提訖】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故 實相 者謂如來藏法身之體不變義故
【興聖寺刊本】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相 者謂如來藏法身之體不變義故
【大正留支訖】 五者無量種成就說不可盡如經舍利弗唯佛與佛說法諸佛如來能知彼法究竟實相故言實相 者謂如來藏法身之體不變義故

【真福寺本】 六者覺慧成就□來所說一切諸法唯佛如來自證得故如經舍利弗唯佛如來知一切法故(第十七紙)

【興聖寺写本】 六者覺慧成就如來所說一切諸法 如來自證得故如經舍利弗唯佛如來知一切法故

【科註法華論】 六者覺慧成就如來所說一切諸法唯佛如來自證得故如經舍利弗唯佛如來知一切法故(卷三、三十裏)

110 「法」は行末に書かれており、墨書で「彼」の下に小さい丸印と「法」の右上に挿入符が付されている。

【叡山版】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【智全会入本】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【日藏会入本】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【論記所引】 論六者覺體成就者…(一四二上二)

如來說一切諸法 如來自證得故者…(一四二上二—一三)

論指經云舍利弗**唯佛**如來知一切法者…(一四二上二—一六)

【敦煌摩提訖】 六者覺體成就如來說一切諸法 如來自證得故如**雖**舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【房山摩提訖】 六者覺體成就如來說一切諸法 如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【大正摩提訖】 六者覺體成就如來說一切諸法 如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【福州摩提訖】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【興聖寺刊本】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【大正留支訖】 六者覺體成就如來說一切諸法**唯佛**如來自證得故如經舍利弗**唯佛**如來知一切法故

【真福寺本】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【興聖寺写本】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼／何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【科註法華論】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故 (卷三、三十一表)

【叡山版】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【智全会入本】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【日藏会入本】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等故如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【論記所引】 論七者隨順衆生意爲說脩行法成就者…(一四二下四)

論彼法何等如是等者…(一四三下二)

論如經 唯佛 能說一切法者…(一四三下五)

【敦煌摩提訖】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等 如**雖**舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【房山摩提訖】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等 如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【大正摩提訖】 七者隨順衆生意爲說脩行法成就彼法何等如是等 如經舍利弗**唯佛**如來能說一切法故

【福州摩提訖】 七者隨順衆生意爲說修行法成就彼法何等如是等 如經舍利弗唯佛如來能說一切法故
【興聖寺刊本】 七者隨順衆生意爲說修行法成就彼法何等如是等故 如經舍利弗唯佛如來能說一切法故
【大正留支訖】 七者隨順衆生意爲說修行法成就彼法何等如是等故 如經舍利弗唯佛如來能說一切法故

第四成就再別釈

【真福寺本】 第一種種法門攝取衆生故第二令心¹¹¹不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【興聖寺写本】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【科註法華論】 第一種々法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故 (卷三、三十二表)
【叡山版】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故 (十八表)
【智全会入本】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故 (卷五、一四四上)
【日藏会入本】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故 (卷五、一四六下)
【論記所引】 論第一種種法門已下… (一四四上八)

第一種種法門攝取衆生故者… (一四四上九—一〇)

第二令 不散亂住故者… (一四四上一〇—一一)

第三令取故者… (一四四上一一—一二)

第四令得解脫故者… (一四四上一四)

【敦煌摩提訖】 第一種と法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故 (三二六上)
【房山摩提訖】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【大正摩提訖】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【福州摩提訖】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【興聖寺刊本】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故
【大正留支訖】 第一種種法門攝取衆生故第二令 不散亂住故第三令取故第四令得解脫故

112 111 「心」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

『智全』卷上では「不散亂故者」となっているが、『日藏』第二十三卷(一四七頁上七行目)では「不散亂住故者」となっており、『科註』卷三(三十二丁表)所引の『論記』では「不散亂住故者」となっている。ここでは、『日藏』と『科註』に依って「住」を補う。

【真福寺本】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故
(興聖寺写本注)

故

【興聖寺写本】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就。第七令得脩行不退失故

【科註法華論】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故 (卷三、三十二表)

【觀山版】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【智全会入本】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【日藏会入本】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【論記所引】第五令彼脩行 得對治法故者… (一四四上一六)

第六能令 脩行進趣成就故者… (一四四下一)

第七令得脩行不退失故者… (一四四下三一四)

【敦煌摩提訖】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令 脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【房山摩提訖】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令 脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【大正摩提訖】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令 脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【福州摩提訖】第五令彼脩行成就得對治法故第六能令得脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【興聖寺刊本】第五令彼脩行成就得對治法故第六 令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故 (卷下、第四紙)

【大正留支訖】第五令彼脩行成就得對治法故第六 令彼脩行進趣成就故第七令得脩行不退失故

【真福寺本】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故

【興聖寺写本】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故

【科註法華論】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故 (卷三、三十二裏)

【觀山版】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故

【智全会入本】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故

【日藏会入本】此七種法爲諸衆生自身所作善成就故

【論記所引】此七種法下… (一四四下五一六)

正爲 衆生…（一四四下六）

【敦煌摩提訖】此七種法爲諸衆生自身所作 成就故
【房山摩提訖】此七種法爲諸衆生自身所作 成就故
【大正摩提訖】此七種法爲諸衆生自身所作 成就故
【福州摩提訖】此七種法爲諸衆生自身所作 成就故
【興聖寺刊本】此七種法爲諸衆生自身所作 善成就故
【大正留支訖】此七種法爲諸衆生自身所作 善成就故

証法・說法

【真福寺本】又與教但令得成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故
【興聖寺写本】又与教但令得成就者与二種法令彼成就何等爲二 与證法 二与證 說法 一与證法 一令成就者謂依證法而授与故
【科註法華論】又與教化 成就者 依證法 故（卷三、三十三表）

【叡山版】又與教化令得成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授与故
【智全会入本】又與教化令得成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故
【日藏会入本】又與教化令得成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故
【論記所引】論又與教化 成就者下…（一四四下一五） 彼等三種依證次第…（一四四下一七）

【敦煌摩提訖】又與教化 成就者 依證法 故

【房山摩提訖】又與教化 成就者 依證法 故

【大正摩提訖】又與教化 成就者 依證法 故

【福州摩提訖】又與教化令 成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故

【興聖寺刊本】又與教化令 成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故

【大正留支訖】又與教化令 成就者與二種法令彼成就何等爲二 與證法 二與 說法 一與證法 令成就者謂依證法而授與故

【真福寺本】二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得脩行即彼前文句再說應知

【興聖寺写本】二与說法令成就者謂依說法而說与故法此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知（第十三紙）

【科註法華論】 又說 成就者 依說法 故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知（卷三、三十三表）
【觀山版】 二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【智全会入本】 二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【日藏会入本】 二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【論記所引】 論又說 成就者 依說法 說 故者（一四五上二）
此二種法如向前說者…（一四五上三）

論依此二種法有何以第而得修行者…（一四五上三四）

論即彼前文句再說應知者…（一四五上九）

【敦煌摩提記】 又說 成就者 依說法 故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【房山摩提記】 又說 成就者 依說法 故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知（第十五紙）
【大正摩提記】 又說 成就者 依說法 故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知（一五下）
【福州摩提記】 二與說法令成就者謂依說法 說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【興聖寺刊本】 二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知
【大正留支記】 二與說法令成就者謂依說法而說與故 此二種法如向前說依此二種法有何次第而得修行即彼前文句再說應知

五種証法

【真福寺本】 又依證法 有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何躰法故
（興聖寺写本注）
【興聖寺写本】 又依證法 有五種一者何等法二者云何。三者何似法四者何。法五者何躰法故
【科註法華論】 又依證法 有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何躰法故（卷三、三十三裏）
【觀山版】 又依證法 有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何躰法故
【智全会入本】 又依證法 有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何躰法故
【日藏会入本】 又依證法 有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何躰法故
【論記所引】 論又依證 有五種下…（一四五下一〇）
一者下列（一四六上四）

法 相

何等法者下釋：（一四六上四）

【敦煌摩提訳】 又依證法 有五種一者何等法三者何似法四者何相法五者何體法故
【房山摩提訳】 又依證法 有五種一者何等法三者何似法四者何相法五者何體法故
【大正摩提訳】 又依證法 有五種一者何等法三者何似法四者何相法五者何體法故
【福州摩提訳】 又依證法復有五種一者何等法二者云何法三者何似法四者何相法五者何體法故
【興聖寺刊本】 又依證法復有五種一者何等法三者何似法四者何相法五者何體法故
【大正留支訳】 又依證法復有五種一者何等法三者何似法四者何相法五者何體法故（六中）

（真福寺本注墨）

湊

【真福寺本】 何等。者謂聲聞法辟支佛法 佛海故云何法者謂起種種 諸事說故
【興聖寺写本】 何等法者謂聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者謂起種種種諸事說故
【科註法華論】 何等法者 聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者 起種々 事說故（卷三、三十四表）
【叡山版】 何等法者謂聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者謂起種種 諸事說故（十八裏）
【智全会入本】 何等法者謂聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者謂起種種 諸事說故
【日藏会入本】 何等法者謂聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者謂起種種 諸事說故
【論記所引】 一何等法者下：（一四六上四―五）

論 何等法者 聲聞法辟支佛法 佛法故者：（一四六上二〇）

113

論云何法者 起種種 事說故者：（一四六上二―二二）
【敦煌摩提訳】 何等法者 聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者 起種々 事說故
【房山摩提訳】 何等法者 聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者 起種種 事說故
【大正摩提訳】 何等法者 聲聞法辟支佛法 佛法故云何法者 起種種 事說故
【福州摩提訳】 何等法者 謂聲聞法辟支佛法諸佛法故云何法者 謂起種種 諸事說故

113 当該箇所は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷（一四九頁上九行目）では「説法故者」となっているが、『科註』卷三（三十四丁裏）所引の『論記』では「説故者」となっている。こゝでは、『科註』のテキストに従う。

【興聖寺刊本】何等法者謂聲聞法辟支佛法諸佛法故云何法者謂起種種諸事說故
【大正留支記】何等法者謂聲聞法辟支佛法諸佛法故云何法者謂起種種諸事說故

【真福寺本】何似洩者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無三乘故
【興聖寺寫本】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無一乘故
【科註法華論】何似法者依三種門得清淨故何相法者三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無一乘故（卷三、三十四表）
【觀山版】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無三乘故
【智全会入本】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無三乘故
【日藏会入本】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無三乘故
【論記所引】論何似法者依三種門得清淨故者：（一四六上二二三）
論何相法者三種義一相法故者：（一四六上二四）

【敦煌摩提記】何似法者依三種門得清淨故何相法者三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者無量乘唯一佛乘無一乘故
【房山摩提記】何似法者依三種門得清淨故何相法者三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者無量乘唯一佛乘無一乘故
【大正摩提記】何似法者依三種門得清淨故何相法者三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者無量乘唯一佛乘無一乘故
【福州摩提記】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無一乘故
【興聖寺刊本】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無三乘故
【大正留支記】何似法者依三種門得清淨故何相法者謂三種義一相法故何躰法者無躰故無躰者謂無量乘唯一佛乘無一乘故

五種証法別釈

（真福寺本注墨）

非因緣法

【真福寺本】復有義何等法者謂有爲法無爲法等云何法者謂因緣洩／／／等
【興聖寺寫本】復有義何等法者謂有爲法无爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等
【科註法華論】復有義何等法者謂有爲法無爲法云何法者謂因緣法非因緣法等（卷三、三十五表）
【觀山版】復有義何等法者謂有爲法無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【智全会入本】復有義何等法者 謂有爲 無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【日藏会入本】復有義何等法者 謂有爲法無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【論記所引】二復有義下：（一四六上五）

復有義下第二番釋：（一四六下二）

何等法者 謂有爲法無爲法者：（一四六下二）

論云何法者謂因緣法非因緣法等者：（一四六下三—四）

【敦煌摩提訖】復有義何等法者 謂有爲法无爲法 云何法者謂因緣法非因緣法等

【房山摩提訖】復有義何等法者 謂有爲法無爲法 云何法者謂因緣法非因緣法等

【大正摩提訖】復有義何等法者 謂有爲法無爲法 云何法者謂因緣法非因緣法等

【福州摩提訖】又復有義何等法者 謂有爲法無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【興聖寺刊本】又復有義何等法者 謂有爲法無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【大正留支訖】又復有義何等法者 所謂有爲 無爲法等云何法者謂因緣法非因緣法等

【真福寺本】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者謂生等三相沍不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰

【興聖寺写本】何似法者 謂常法无常法如是等何相法者謂生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰

【科註法華論】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者 生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰（卷三、三十五表）

【叡山版】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者謂生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰故

【智全会入本】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者謂生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰故

【日藏会入本】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者謂生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰故

【論記所引】論何似法者 謂常法無常法如是等者：（一四六下五）

論何相法者 三相法不生等三相法者：（一四六下六—七）

論何躰法者謂五陰躰非五陰躰者：（一四六下八）

【敦煌摩提訖】何似法者 謂常法无常法如是等何相法者 生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰

【房山摩提訖】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者 生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰

【大正摩提訖】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者 生等三相法不生等三相法何躰法者謂五陰躰非五陰躰

【福州摩提訊】何似法者 謂常法無常法如是等何相法者謂生等三相法不生等三相法何體法者謂五陰體非五陰體 (第十三紙)

【興聖寺刊本】何似法者 謂常法無常法 等何相法者謂生等三相法不生等三相法何體法者謂五陰體非五陰體

【大正留支訊】何似法者 所謂常法無常法 等何相法者謂生等三相法不生等三相法何體法者謂五陰體非五陰體故

【真福寺本】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰 (第十八紙)

【興聖寺寫本】又似何法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰

【科註法華論】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰 (卷三、三十五裏)

【叡山版】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見 等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰故

【智全會入本】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見 等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰故

【日藏會入本】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見 等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰故

【論記所引】三 又何似法者下：(一四六上六) 論又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰：(一四六下一〇一二)

【敦煌摩提訊】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見 等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰

【房山摩提訊】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰

【大正摩提訊】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰

【福州摩提訊】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰

【興聖寺刊本】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 謂五陰能取所取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰 (卷下、第五紙)

【大正留支訊】又何似法者謂無常法有爲法因緣法又何相法者謂可見相等法又何體法者 所謂五陰能取可取以五陰是苦集躰故又五陰者是道諦躰故

五種說法

(真福寺本注墨)

說

【真福寺本】復有異義依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化衆生故

【興聖寺寫本】復有異義依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者謂依如來所說／故何似法者謂能教化／衆生故

【科註法華論】復有 依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者 依如來所說法故何似法者 能教化可化衆生故 (卷三、三十六表)

【叡山版】復有異義依說法 何等法者 謂名句字身等故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化衆生故 (十九表)

【智全会入本】復有異義依說法說 何等法者 謂名句字身等故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化衆生故

【日藏会入本】復有異義依說法說 何等法者 謂名句字身等故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化衆生故

【論記所引】四復有異義依說法下：（二四六上七）

論云何等法（二四六上八）

論復有 依說法下：（二四七上二）

何等法者 謂名句字身 故者：（一四七上二）

論云何法者 依如來所說法故者：（一四七上三一四）

論何似法者 能教化可化衆生故者：（一四七上四一五）

【敦煌摩提訖】復有 依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者 依如來所說法故何似法者 能教化可化衆生故

【房山摩提訖】復有 依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者 依如來所說法故何似法者 能教化可化衆生故

【大正摩提訖】復有 依說法 何等法者 謂名句字身 故云何法者 依如來所說法故何似法者 能教化可化衆生故（二六上）

【福州摩提訖】體復有異義依說法說何等法者 謂名句字身 故云何法者謂依如來所說法故何似法者 能教化可化衆生故

【興聖寺刊本】復有異義依說法說 何等法者 謂名句字身 故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化衆生故

【大正留支訖】復有異義依說法說 何等法者 所謂名句字身等故云何法者謂依如來所說法故何似法者謂能教化可化者 故

【真福寺本】何相法者依音聲取故以依音聲取彼洺故何躡法者謂假名躡法相義故

【興聖寺寫本】何相法有依音聲取故以依音聲取彼法故何躡法者諸假名躡法相義故

【科註法華論】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何躡法者 假名躡法相 故（卷三、三十六表）

【觀山版】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者謂假名體法相義故

【智全会入本】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者謂假名體法相義故

【日藏会入本】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者謂假名體法相義故

【論記所引】乃至何體法：（二四六上八）

論何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故者：（二四七上六）

論何體法者 假名體法相 故者：（一四七上七）

【敦煌摩提訖】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何躡法者 假名躡法相 故

【房山摩提訖】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者 假名體法相 故
 【大正摩提訖】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者 假名體法相 故
 【福州摩提訖】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者 謂假名體法相 故
 【興聖寺刊本】何相法者依音聲取故以依音聲取彼法故何體法者 謂假名體法相 義故
 【大正留支訖】何相法者依音聲取 以依音聲取彼法故何體法者 謂假名體法相 義故

三種義

【真福寺本】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知
 (興聖寺寫本注) 論曰、或釋曰、
 【興聖寺寫本】○自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知
 【科註法華論】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【叡山版】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知
 【智全會入本】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知
 【日藏會入本】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知
 【論記所引】論自此已下 依 三種義示現已下…(一四八下二)

一者決定義下列(一四八下二)

【敦煌摩提訖】自此以下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【房山摩提訖】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【大正摩提訖】自此以下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【福州摩提訖】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【興聖寺刊本】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義
 【大正留支訖】自此已下 依 三種義示現一者決定義二者疑義三者依何事疑義應當善知

決定義

【真福寺本】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

(卷四、一表)

【興聖寺写本】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【科註法華論】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心（卷四、一表）

【叡山版】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【智全会入本】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【日藏会入本】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【論記所引】決定義者下釋：（一四八下二三）

論決定義者下：（一四八下八）

論有聲聞下：（一四八下九）

方便證得深法者：（一四八下二二）

名生決定心：（一四八下一七）

【敦煌摩提訖】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心（三一六下）

【房山摩提訖】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【大正摩提訖】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【福州摩提訖】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【興聖寺刊本】決定義者有聲聞方便證得 深法作決定心

【大正留支訖】決定義者有聲聞方便 得證 深法作決定心

【真福寺本】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故

【興聖寺写本】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲无爲法故

【科註法華論】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故（卷四、一裏）

【叡山版】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故

【智全会入本】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故

【日藏会入本】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故

【論記所引】論於聲聞道中下：（一四九上一）

論如是二種證法下：（一四九上二）

【敦煌摩提訖】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲无爲法故

【房山摩提訖】於聲聞道中得方便涅盤證故如是三種證法示現有爲無爲法故
【大正摩提訖】於聲聞道中得方便涅槃證故如是三種證法示現有爲無爲法故
【福州摩提訖】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故
【興聖寺刊本】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故
【大正留支訖】於聲聞道中得方便涅槃證故如是二種證法示現有爲無爲法故

【真福寺本】如經尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法門到於涅槃故
【興聖寺写本】如經尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於炎故
【科註法華論】如經尔時大衆中有諸聲聞漏尽阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃故（卷四、二表）
【叡山版】如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法門到於涅槃故
【智全会入本】如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法門到於涅槃故
【日藏会入本】如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法門到於涅槃故
【論記所引】如經下指：（一四九上六）

（敦煌摩提傍書）
經

【敦煌摩提訖】如雖尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃故
【房山摩提訖】如經尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃盤故
【大正摩提訖】如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃故
【福州摩提訖】如經尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃故
【興聖寺刊本】如經尔時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢 乃至亦得此法 到於涅槃故
【大正留支訖】如經爾時大衆中有諸聲聞漏盡阿羅漢次第乃至亦得此法 到於涅槃故

疑義

【真福寺本】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【興聖寺写本】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【科註法華論】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故（卷四、二裏）
【叡山版】疑義者謂 聲聞辟支佛等有不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故

【智全会入本】疑義者謂 聲聞辟支佛等有不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【日藏会入本】疑義者謂 聲聞辟支佛等有不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【論記所引】論疑義者下…(一五〇上二)

謂 聲聞下…(一五〇上二)
一切聲聞辟支佛 所不能 知故…(一五〇上三四)

是故生疑 而今不知是疑所趣…(一五〇上七八)

【敦煌摩提訖】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知 是故生疑如雖而今不知是義所趣故
【房山摩提訖】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【大正摩提訖】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【福州摩提訖】言疑義者諸 聲聞辟支佛等 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【興聖寺刊本】疑義者謂 聲聞辟支佛 不能 知故是故生疑如經而今不知是義所趣故
【大正留支訖】言疑義者謂諸聲聞辟支佛等 不能得知 是故生疑如經而今不知是義所趣故

依何事疑

【真福寺本】依何事 疑義者聞如來說聲聞解脫 我解脫不異 是故 生疑
【興聖寺写本】依何事 疑義者聞如來說聲聞解脫 我解脫不異 是故 生疑
【科註法華論】依何事 疑 者 如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑(卷四、三表)
【叡山版】依何事義 疑 者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑(十九裏)
【智全会入本】依何事 疑 者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑
【日藏会入本】依何事義 疑 者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑
【論記所引】論依何事 疑 者已下…(一五〇下一五)

論如來說聲聞解脫 我解脫不異 是故 生疑者…(一五〇下一六一七)

【敦煌摩提訖】依何事 疑 者 如來說聲聞解脫 我解脫不異 是故 生疑
【房山摩提訖】依何事 疑 者 如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑(第十六紙)
【大正摩提訖】依何事 疑 者 如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑
【福州摩提訖】依何事 疑義者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故謂生疑

【興聖寺刊本】 依何事 疑義者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異 是故 生疑
【大正留支訳】 依何事 疑義者聞如來說聲聞解脫與我解脫不異不別是故 生疑

【真福寺本】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數數 說於甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【興聖寺写本】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數數 說於甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【科註法華論】 生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數々 說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞（卷四、三表）
【叡山版】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數數 說於甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【智全会入本】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 〃數數 說於甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【日藏会入本】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數數 說於甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【論記所引】 論生疑者下…（二五一上二）
生疑者生因中疑此 云何者…（二五一上三）
故云此事云何（二五一上四—五）
論云何已下廣陳…（二五一上五）

說 甚深境界…（二五一上五—六）

故云何前說甚深…（二五一上二〇）

故言後說甚深不同聲聞…（二五一上二〇—二二）

【敦煌摩提訳】 生疑者生因中疑此 云何 云何 如來數々 說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【房山摩提訳】 生疑者生因中疑此 云何 云何 如來數數 說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【大正摩提訳】 生疑者生因中疑此 云何 云何 如來數數 說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【福州摩提訳】 生疑者生因中疑此事云何此事 云何云何 如來數數 說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【興聖寺刊本】 謂生疑者生因中疑此事云何 云何 如來數數宣說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞
【大正留支訳】 謂生疑者生因中疑此事云何此事 云何此以如來數數爲說 甚深境界前說甚深後說甚深不同聲聞（六下）

【真福寺本】 如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【興聖寺写本】 如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【科註法華論】 如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故（卷四、四表）

【叡山版】如是等是故生疑如經爾時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【智全会入本】如是等是故生疑如經爾時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【日藏会入本】如是等是故生疑如經爾時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【論記所引】如是等者：(一五上二一—二二)
如經下指：(一五上二二)

四衆不解(二五上三)

所以生疑：(一五上三)

【敦煌摩提訖】如是等是故生疑如雖尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【房山摩提訖】如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【大正摩提訖】如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【福州摩提訖】以如是等是故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【興聖寺刊本】以如是 故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言故
【大正留支訖】以如是 故生疑如經尔時舍利弗知四衆心疑 乃至而說偈言

四種事

【真福寺本】自此已下示現依 四種事說一者決定心二／因受記三者取受記四者與受記應 知
【興聖寺寫本】自此已下示現依 四種事說一者決定心二者因受記三者取受記四者與授記應 知(第十四紙)
【科註法華論】自此已下示現依 四種事說一者決定心二者因受記三者取受記四者與受記應 知(卷四、四裏)
【叡山版】自此已下示現依 四種事說一者決定心二者因受記三者取授記四者與受記應 知
【智全会入本】自此已下示現依 四種事說一者決定心二者因受記三者取授記四者與受記應 知
【日藏会入本】自此已下示現依 四種事說一者決定心二者因受記三者取授記四者與授記應 知
【論記所引】論自此已下 四種事說下：(一五上二八)
【敦煌摩提訖】自此以下 依 四種事說一者決定心者二¹⁴因受記三者取受記四者與受記應 知
【房山摩提訖】自此已下 依 四種事說一者決定心二者因受記三者取受記四者與授記應 知

「是故」に対して「二字異無之」との傍注がある。

決定心

【大正摩提訳】 自此已下 依 四種事説一者決定心二者因受記三者取受記四者與授記應 知
 【福州摩提訳】 自此已下 依 四種事説一者決定心二者因授記三者取授記四者與授記應 知
 【興聖寺刊本】 自此已下 示現 依 四種事説一者決定心二者因受記三者取受記四者與授記應 知（卷下、第六紙）
 【大正留支訳】 自此以下 依 示現 四種事説一者決定心二者因授記三者取授記四者與授記應 當善知

【真福寺本】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【興聖寺写本】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人／是故知如來有決定心¹⁵
 【科註法華論】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心（卷四、四裏）
 【叡山版】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【智全会入本】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【日藏会入本】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【論記所引】 論 云何決定心下…（一五二上二五）

論已生驚怖者令斷驚怖者…（一五二下一四）

論爲利益二種人故者…（一五三上六）

如來已下…（一五三下七）

【敦煌摩提訳】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖 爲利益二種人故 如來有決定心
 【房山摩提訳】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖 爲利益二種人故 如來有決定心
 【大正摩提訳】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖 爲利益二種人故 如來有決定心
 【福州摩提訳】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖 爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【興聖寺刊本】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心
 【大正留支訳】 云何決定心已生驚怖者令斷驚怖以爲利益二種人故是故 如來有決定心

驚怖者五種

【真福寺本】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃（第十九紙）

取

【興聖寺写本】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【科註法華論】¹¹⁶此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃（卷四、六表）

【叡山版】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【智全会入本】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【日藏会入本】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【論記所引】論此驚怖有五種已下…（一五三下九）

論一者損驚怖下…（一五三下一六）

如所聲聞下（一五四上二）

取小爲實（一五四上二）

而作是言下…（一五四上二）

【敦煌摩提訖】此驚怖有五種應知一者損驚怖如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【房山摩提訖】此驚怖有五種應知一者損驚怖如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【大正摩提訖】此驚怖有五種應知一者損驚怖如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【福州摩提訖】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂如聲聞取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【興聖寺刊本】此驚怖有五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而作是言如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【大正留支訖】此驚怖者五種應知一者損驚怖謂小乘衆生如所聞聲取以爲實謗無大乘而起如是心如來說言阿羅漢果究竟涅槃

【真福寺本】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故

【興聖寺写本】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故

【科註法華論】¹¹⁷我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故（卷四、六裏）

117 116
「謂小乘衆生」に対して「五字異無之」との傍注がある。
「如是驚怖故」に対して「五字異無之」との傍注がある。

【叡山版】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故（二十表）
 【智全会入本】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故
 【日藏会入本】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖故
 【論記所引】言畢竟取證…（一五四上二三）
 【敦煌摩提訖】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃 故
 【房山摩提訖】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃 故
 【大正摩提訖】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃 故
 【福州摩提訖】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃 故
 【興聖寺刊本】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖
 【大正留支訖】我畢竟取如是涅槃是故羅漢不入涅槃如是驚怖

【真福寺本】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦
 【興聖寺写本】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行并行久受勤苦
 【科註法華論】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦（卷四、七表）
 【叡山版】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦
 【智全会入本】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦
 【日藏会入本】二者多事驚怖謂大乘衆生 生如是心 我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦
 【論記所引】論二者多事驚怖下…（一五四上二二）

謂大乘衆生下…（一五四上二三）

佛道長遠

久受勤苦…（一五四上二四）

【敦煌摩提訖】二者多事驚怖以大乘衆生 生如是心 我 无量无边劫 行菩薩行
 【房山摩提訖】二者多事驚怖以大乘衆生 生如是心 我 无量无边劫 行菩薩行
 【大正摩提訖】二者多事驚怖以大乘衆生 生如是心 我 无量无边劫 行菩薩行
 【福州摩提訖】二者多事驚怖以大乘衆生 生如是心 我 无量无边劫 行菩薩行
 我 无量无边劫 行菩薩行 久受勤苦

【興聖寺刊本】 二者多事驚怖謂大乘衆生

生如是心

我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦

【大正留支訳】

二者多事驚怖謂大乘衆生聞菩薩道劫數長遠種種苦行起如是心佛道長遠我於無量無邊劫中行菩薩行久受勤苦

(真福寺本注墨)

心

【真福寺本】 以是念故生驚怖心

起取異乘。故如是驚怖

【興聖寺写本】 以是念故生驚怖心

起取異乘心故如是驚怖

【科註法華論】 以是念故生驚怖心

起取異乘心故如是驚怖¹¹⁹(卷四、七表)

【叡山版】 以是念故生驚怖心

起取異乘心故如是驚怖

【智全会入本】 以最念故生驚怖心

起取異乘心 如是驚怖

【日藏会入本】 以最念故生驚怖心

起取異乘心故如是驚怖

【論記所引】 注釈なし

(敦煌摩提傍書)

異

【敦煌摩提訳】

生驚怖心

起取／乘心故

【房山摩提訳】

生驚怖心

起取異乘心故

【大正摩提訳】

生驚怖心

起取異乘心故

【福州摩提訳】 如是念故生驚怖心

趣取異乘心故

【興聖寺刊本】 以是念故生驚怖心

起取異乘心故如是驚怖

【大正留支訳】

如是念故生驚怖心以是故起取異乘心 如是驚怖

【真福寺本】

三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見

不善法故如是驚怖

【興聖寺写本】

三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見

不善法故如是驚怖

【科註法華論】

三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種々身見

不善法故如是驚怖¹²⁰(卷四、七裏)

【叡山版】

三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見

不善法故如是驚怖

「如是驚怖」に対して「異四字無之」との傍注がある。

「如是驚怖」に対して「異四字无之」との傍注がある。

【智全会入本】 三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見 不善法故如是驚怖
 【日藏会入本】 三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見 不善法故如是驚怖
 【論記所引】 論三者顛倒驚怖下：（一五四下二）
 【敦煌摩提訊】 三者顛倒驚怖 分別我、所 身見 不善法故
 【房山摩提訊】 三者顛倒驚怖 分別我、所 身見 不善法故
 【大正摩提訊】 三者顛倒驚怖 分別我、所 身見 不善法故
 【福州摩提訊】 三者顛倒驚怖謂心分別有我我所 身見諸不善法故
 【興聖寺刊本】 三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見 不善法故如是驚怖
 【大正留支訊】 三者顛倒驚怖謂心分別有我我所種種身見諸不善法 如是驚怖

（真福寺本注墨）

起

【真福寺本】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等。如是心言我不應 證於是如小乘之法
 【興聖寺寫本】 四者心悔驚怖悔驚怖者謂大德舍利弗等起如是心言我／應 證於是如小乘之法
 【科註法華論】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應 證於是如小乘之法（卷四、七裏）
 【叡山版】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應 證於是如小乘之法
 【智全会入本】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應 證於是如小乘之法
 【日藏会入本】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應 證於是如小乘之法
 【論記所引】 論四者 悔驚怖者下：（一五四下八）
 大德身子：（一五四下九）

我不應 證 小乘涅槃：（一五四下二〇）

（敦煌摩提傍書）

悔驚怖

【敦煌摩提訊】 四者 悔驚怖／／者謂大德舍利弗等 我不應 證 如是小乘法
 【房山摩提訊】 四者 悔驚怖悔驚怖者謂大德舍利弗等 我不應 證 如是小乘法
 【大正摩提訊】 四者 悔驚怖悔驚怖者謂大德舍利弗等 我不應 證 如是小乘法
 【福州摩提訊】 四者 悔驚怖悔驚怖者謂大德舍利弗等起如是心言我不應 證 如是小乘之法（第十四紙）

【興聖寺刊本】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應證於如是小乘之法
【大正留支訳】 四者心悔驚怖 謂大德舍利弗等起如是心言我不應修證 如是小乘之法

(真福寺本注墨) 心

【真福寺本】 如是悔已 即¹²¹自止即此悔心 名爲驚怖此義應知

【興聖寺写本】 如是悔已心怖 自止即此悔心 名爲驚怖是義應知

【科註法華論】 如是悔已心即自止即此悔心 名爲驚怖此義應知 (卷四、七裏)

【叡山版】 如是悔已心即自止即此悔心 名爲驚怖此義應知

【智全会入本】 如是悔心已即自止即此 心悔名爲驚怖此義應知

【日藏会入本】 如是悔已心即自止即此悔心 名爲驚怖此義應知

【論記所引】 言自止者：(二五四下二一)

【敦煌摩提訳】 自止即此悔心 名爲驚怖 應知

【房山摩提訳】 自止即此悔心 名爲驚怖 應知

【大正摩提訳】 自止即此悔心 名爲驚怖 應知

【福州摩提訳】 如是悔已心即自止即此悔心 名爲驚怖 應知

【興聖寺刊本】 如是悔已心即自止即此悔心 名爲驚怖此義應知

【大正留支訳】 如是悔已心即自止即此 心悔名爲驚怖此義應知

【真福寺本】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖故

【興聖寺写本】 我五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑／我等如是驚怖故

【科註法華論】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖故¹²² (卷四、八表)

【叡山版】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖故

【智全会入本】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖故

122 121
原本は、「已即」となっているが、「已」と「即」の間が欠損しているため、補入記号の有無は不明。
「如是驚怖故」に対して「異五字无之」との傍注がある。

【日藏会入本】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖故
【論記所引】 論五者誑驚怖下…（一五四下一四）

上慢四衆…（一五四下一五）

【敦煌摩提訊】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞 作如是心云何如來誑於我等 故
【房山摩提訊】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞 作如是心云何如來誑於我等 故
【大正摩提訊】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞 作如是心云何如來誑於我等 故
【福州摩提訊】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞 作如是心云何如來誑於我等 故
【興聖寺刊本】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人作如是心云何如來誑於我等如是驚怖
【大正留支訊】 五者誑驚怖謂增上慢聲聞之人起如是心云何如來誑於我等如是驚怖

因授記

【真福寺本】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
（興聖寺写本注） 復

【興聖寺写本】 因受記者如經心心舍利弗不須說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【科註法華論】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故（卷四、九表）
【叡山版】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【智全会入本】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【日藏会入本】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【論記所引】 論因受記者已下…（一五五下一四）
經

【敦煌摩提訊】 因授記者如雖止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【房山摩提訊】 因授記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【大正摩提訊】 因授記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故（一六中）
【福州摩提訊】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故
【興聖寺刊本】 因受記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故

「是」の左傍に見せ消ち記号あり。

【大正留支訳】 因授記者如經止止舍利弗不須復說若說是事一切世間諸天人等皆生驚怖故

【真福寺本】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故

【興聖寺写本】 以因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故

【科註法華論】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故（卷四、九裏）

【叡山版】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故（二十裏）

【智全会入本】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故

【日藏会入本】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故

【論記所引】 論因授記 生驚怖者下…（一五六上五）

一者欲令下釋…（一五六上七）

令彼 大衆推覓甚深 境界故者…（一五六上七八）

【敦煌摩提訳】 因授記 生驚怖者有三種義一者欲令彼 大衆推覓甚深 境界故

【房山摩提訳】 因授記 生驚怖者有三種義一者欲令彼 大衆推覓甚深 境界故

【大正摩提訳】 因授記 生驚怖者有三種義一者欲令彼 大衆推覓甚深 境界故

【福州摩提訳】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深 境界故

【興聖寺刊本】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推覓甚深妙境界故

【大正留支訳】 此因授記皆生驚怖者有三種義一者欲令彼諸大衆推求甚深妙境界故

【真福寺本】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法坐而起去故

（興聖寺写本注）
來

【興聖寺写本】 二者欲令 大衆／尊重心畢竟欲聞如是說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法坐而起去故

【科註法華論】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故（卷四、十表）

【叡山版】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法坐而起去故

【智全会入本】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故
【日藏会入本】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲 令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故
【論記所引】 論 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞 故者：（二五六上一〇）

論三者爲 令 上慢 離座 去故者：（二五六上一二）

【敦煌摩提訖】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞 故三者爲 令 增上慢聲聞 離法座而 去故（三一七上）

【房山摩提訖】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞 故三者爲 令 增上慢聲聞 離法座而 去故

【大正摩提訖】 二者欲令 大衆生尊重心畢竟欲聞 故三者爲 令 增上慢聲聞 離法座而 去故

【福州摩提訖】 二者欲令 彼諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者爲欲令 增上慢聲聞 離法座而 去故

【興聖寺刊本】 二者欲令 彼諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者 欲令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故（卷下、第七紙）

【大正留支訖】 二者欲令 彼諸大衆生尊重心畢竟欲聞如來說故三者 欲令諸增上慢聲聞之人捨離法座而起去故（七上）

【真福寺本】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【興聖寺寫本】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能驚敬信故

【科註法華論】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故（卷四、十表）

【觀山版】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【智全会入本】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說即能 敬信故

【日藏会入本】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說即能 敬信故

【論記所引】 論 第二請下：（二五六下一）

示現過去 佛教化衆生者：（二五六下一二）

如經下指經文（二五六下四）

【敦煌摩提訖】 第二請 示現過去無量 佛教化衆生如雖是會无数 乃至聞佛所說則能驚／信故

【房山摩提訖】 第二請 示現過去無量 佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【大正摩提訖】 第二請 示現過去無量 佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【福州摩提訖】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【興聖寺刊本】 第二請者 示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數 乃至聞佛所說則能 敬信故

【大正留支訳】第二請者示現過去無量諸佛教化衆生如經是會無數次第乃至聞佛所説則生 敬信故

(真福寺本注墨) 今

【真福寺本】第三請者示現 現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【興聖寺写本】第三請者示現今現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【科註法華論】第三請者示現今現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安穩多所饒益故 (卷四、十裏)

【叡山版】第三請者示現今現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安穩多所饒益故

【智全会入本】第三請者示現今現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安穩多所饒益故

【日藏会入本】第三請者示現今現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安穩多所饒益故

【論記所引】論第三請 示現今現在佛教化衆生者：(一五六下七)

如經下指文也：(一五六下一〇)

(敦煌摩提傍書) 經

【敦煌摩提訳】第三請 示現 現在佛教化衆生如雖今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【房山摩提訳】第三請 示現 在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【大正摩提訳】第三請 示現 現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【福州摩提訳】第三請者示現 現在佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安隱多所饒益故

【興聖寺刊本】第三請者示現今 佛教化衆生如經今此會中如我等比 乃至長夜安穩¹²⁴多所饒益故

【大正留支訳】第三請者示現今 佛教化衆生如經今此會中如我等比次第乃至長夜安隱多所饒益故

取授記

【真福寺本】取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不説汝今諦聽如是等故

【興聖寺写本】取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不説汝今諦聽如是等故

【科註法華論】取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不説汝今諦聽如是等故 (卷四、十一表)

124 拙稿「二〇二B」五六頁の当該箇所(四一一行目)では注記し忘れているが、興聖寺写本における「隱」の箇所は、興聖寺刊本では「穩」となっている。

「法」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【叡山版】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【智全会入本】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【日藏会入本】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【論記所引】 論取授記者下…（一五六下一四）

以舍利弗等欲得授記者…（一五六下一五）

如經佛告驚子 汝以三請豈得不說汝今諦聽者指文（一五六下一七一五七上一）

如是等故者結文勢…（一五七上一）

【敦煌摩提記】 取授記者以舍利弗等欲得授記如雖佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【房山摩提記】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故（第十七紙）
【大正摩提記】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經／告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【福州摩提記】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝以三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【興聖寺刊本】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝已三請豈得不說汝今諦聽如是等故
【大正留支記】 取授記者以舍利弗等欲得授記如經佛告舍利弗汝已三請豈得不說汝今諦聽如是等故

與授記

【真福寺本】 與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說¹²⁵法三者依何等義四者令住五者依法六者遮（第二十紙）
【興聖寺写本】 与受記者有六種應知一者未聞令聞二者說 三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【科註法華論】 與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說 三者依何等義四者令住五者依法六者遮（卷四、十二表）
【叡山版】 与授記者有六種應知一者未聞令聞二者說 三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【智全会入本】 與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說 三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【日藏会入本】 與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說 三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【論記所引】 論與授記者有六種已下…（一五九上四）

論一者下列（一五九下三）

【敦煌摩提訖】與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【房山摩提訖】與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【大正摩提訖】與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【福州摩提訖】與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【興聖寺刊本】與授記者有六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮
【大正留支訖】與授記者六種應知一者未聞令聞二者說三者依何等義四者令住五者依法六者遮

未聞令聞

【真福寺本】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故
【興聖寺寫本】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃至說之如憂曇花如是等故
【科註法華論】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故（卷四、十二裏）
【叡山版】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故（二十一表）
【智全会入本】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故
【日藏会入本】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故
【論記所引】論未聞令聞者如經如是妙法已下：（一五九下六）
【敦煌摩提訖】未聞令聞者如雖舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等故
【房山摩提訖】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇花如是等故
【大正摩提訖】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇華如是等／
【福州摩提訖】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇花如是等故
【興聖寺刊本】未聞令聞者如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇鉢華如是等故
【大正留支訖】未聞者令聞如經舍利弗如是妙法諸佛如來時乃說之如優曇鉢華如是等故

說

【真福寺本】說法者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演說諸法如是等故種種因緣者所謂三乘

「諸」の上の「説」には、右傍に見せ消し記号が付されている。

【興聖寺写本】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説¹²⁵諸法如是等 種種因緣者所謂三乘

【科註法華論】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種々因緣者所謂三乘（卷四、十三裏）

【叡山版】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【智全会入本】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【日藏会入本】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【論記所引】

論説者如經舍利弗下…（一六〇下二）
如是等 故種種下釋…（一六〇下二）

種種因緣者 謂三乘者…（一六〇下三）

【敦煌摩提訳】

説者如雖舍利弗我以無數方便種々因緣譬喻言辭演説諸法如是等 種々因緣者 謂三乘

【房山摩提訳】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言詞演説諸法如是等 種種因緣者 謂三乘

【大正摩提訳】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 種種因緣者 謂三乘

【福州摩提訳】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言詞演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【興聖寺刊本】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【大正留支訳】

説者如經舍利弗我以無數方便種種因緣譬喻言辭演説諸法如是等 故種種因緣者所謂三乘

【真福寺本】

彼三乘者唯有名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故

【興聖寺写本】

彼三乘者唯 名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故（第十五紙）

【科註法華論】

彼三乘者唯有名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故（卷四、十四表）

【叡山版】

彼三乘者唯有名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故

【智全会入本】

彼三乘者唯有名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故

【日藏会入本】

彼三乘者唯有名字章句言説非有實義 以彼實義不可説故

【論記所引】

論彼三乘 唯 名字章句 説非有實義 故者…（一六一上八）

論以彼實義不可説故者…（一六一上三）

【敦煌摩提訳】

彼三乘 唯 名字章句 説非有實義 以彼實義不可説故

【房山摩提訖】 彼三乘 唯 名字章句 說非有實義故以彼實義不可說故
 【大正摩提訖】 彼三乘者 唯 名字章句 說非有實義故以彼實義不可說故
 【福州摩提訖】 彼三乘者 唯 有名字章句言說非有實義故以彼實義不可說故
 【興聖寺刊本】 彼三乘者 唯 有名字章句言說非有實義 以彼實義不可說故
 【大正留支訖】 彼三乘者 唯 有名字章句言說非有實義 以彼實義不可說故

依何等義

【真福寺本】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【興聖寺寫本】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【科註法華論】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以□大事因緣故出現於世如是等故（卷四、十四裏）
 【觀山版】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【智全會入本】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【日藏會入本】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【論記所引】 論 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事已下：（一六二下八）

故言諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世：（一六二下一一—一二）

【敦煌摩提訖】 依何等義者如雖舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【房山摩提訖】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【大正摩提訖】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【福州摩提訖】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【興聖寺刊本】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故
 【大正留支訖】 依何等義者如經舍利弗諸佛世尊唯以一大事因緣故出現於世如是等故

彼一大事者依四種義

【真福寺本】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四
 【興聖寺寫本】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四

【科註法華論】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四（卷四、十五裏）

【觀山版】 彼一大事者依四種義應善當知何者爲四

【智全会入本】 彼一大事者依四種義應善當知何等爲四

【日藏会入本】 彼一大事者依四種義應善當知何者爲四

【論記所引】 彼一大事者下：（二六二上七）

初彼一大事者已下（二六二下一七）

標四 義釋 何等爲四者徵起（二六二下一七一—二六三上一）

【敦煌摩提訖】 彼一大事者依四種義應 知何者爲四

【房山摩提訖】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四

【大正摩提訖】 彼一大事者依四種義應 知何者爲四

【福州摩提訖】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四

【興聖寺刊本】 彼一大事者依四種義應 知何等爲四

【大正留支訖】 一大事者依四種義應當善知何等爲四

【真福寺本】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事

【興聖寺写本】 一者无上義唯除如來一切 智智更无餘事

【科註法華論】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事（卷四、十六表）

【觀山版】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事

【智全会入本】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事

【日藏会入本】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事

【論記所引】 一者無上義下正釋：（二六三上一）

論 一者無上義者標 一切 智智更無餘事者釋：（二六三上八）

【敦煌摩提訖】 一者无上義 除 一切 智智更无餘事

【房山摩提訖】 一者無上義 除 一切 智智更無餘事

【大正摩提訖】 一者無上義 除 一切 智智更無餘事

【福州摩提訖】 一者無上義唯除如來一切義智更無餘事

【興聖寺刊本】 一者無上義唯除如來一切 智智更無餘事

【大正留支訖】 一者無上義唯除如來一切 智知更無餘事

【真福寺本】 如經欲開佛知 見令衆生智得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故

【興聖寺寫本】 如經欲開佛知 見令衆生如得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故

【科註法華論】 如經欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故（卷四、十六表）

【叡山版】 如經欲開 知佛見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故

【智全会入本】 如經欲開 知佛見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故

【日藏会入本】 如經欲開 知佛見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證以如實智知彼 義故

【論記所引】 如經下指文 佛知見者下釋：（一六三上一）

如來能證 如實 知彼 義故者：（一六三上一五一六）

【敦煌摩提訖】 如雖欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證 如實 知彼 義故

【房山摩提訖】 如經欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證 如實 知彼 義故

【大正摩提訖】 如經欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 佛知見者如來能證 如實 知彼 義故

【福州摩提訖】 如經欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 故佛知見者如來能證以如實 知彼深義故

【興聖寺刊本】 如經欲開佛知 見令衆生智得清淨故出現於世 故佛知見者如來能證 如實 知彼 義故（卷下、第八紙）

【大正留支訖】 如經欲開佛知 見令衆生知得清淨故出現於世 故佛知見者如來能證以如實 知彼深義故

【真福寺本】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 洵身平等者佛性法身更無差別故

【興聖寺寫本】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 法身平等者佛性法身更無差別故

【科註法華論】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 法身平等者佛性法身更無差別故（卷四、十六裏）

【叡山版】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 法身平等者佛性法身更無差別故（二十一裏）

【智全会入本】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 法身平等者佛性法身更無差別故

【日藏会入本】 二者同義以 聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世 法身平等者佛性法身更無差別故

【論記所引】論一者同義下…（一六三下五）

法身平等已下…（一六三下八）

佛性法身更無差別故者…（一六三下一〇—一一）

【敦煌摩提訖】

二者同義以聲聞辟支佛と法身平等故如雖欲示衆生佛知見故出現於世法身平等者佛性法身更无差別故

【房山摩提訖】

二者同義以聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身更無差別故

【大正摩提訖】

二者同義以聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身更無差別故

【福州摩提訖】

二者同義以聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身更無差別故

【興聖寺刊本】

二者同義以聲聞辟支佛佛法身平等故如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身更無差別故

【大正留支訖】

二者同義謂諸聲聞辟支佛佛法身平等如經欲示衆生佛知見故出現於世故法身平等者佛性法身無差別故

【真福寺本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【興聖寺写本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【科註法華論】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故（卷四、十七表）

【叡山版】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【智全会入本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【日藏会入本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【論記所引】

論三者不知義下…（一六四上二）

以一切聲聞辟支佛不能知彼真實處故者…（一六四上三一—四）

聞

（敦煌摩提傍書）

【敦煌摩提訖】

三者不知義以一切聲聞辟支佛不能知彼真實處故

【房山摩提訖】

三者不知義以一切聲聞辟支佛不能知彼真實處故

【大正摩提訖】

三者不知義以一切聲聞辟支佛不能知彼真實處故

【福州摩提訖】

三者不知義以一切聲聞辟支佛不能知彼真實處故

【興聖寺刊本】

三者不知義以一切聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【大正留支訳】 三者不知義謂諸 聲聞辟支佛等不能知彼真實處故

【真福寺本】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【興聖寺写本】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【科註法華論】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世 (卷四、十七裏)

【叡山版】 此言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【智全会入本】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【日藏会入本】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【論記所引】 爲究竟唯一… (一六四上九)

【敦煌摩提訳】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如雖欲令衆生悟佛知見故出現於世

【房山摩提訳】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【大正摩提訳】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世 (一六下)

【福州摩提訳】 言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世

【興聖寺刊本】 不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世故

【大正留支訳】 此言不知真實處者不知究竟唯一佛乘故如經欲令衆生悟佛知見故出現於世故 (七中)

【真福寺本】 四者入義爲 令證不退轉地示現欲與無量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世

【興聖寺写本】 四者 爲 令證不退轉地示現欲与无量无 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世

【科註法華論】 四者 爲 令證不退轉地示現欲與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見道故出現於世 (卷四、十八表)

【叡山版】 四者因義爲欲令證不退轉地示現 与無量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世

【智全会入本】 四者因義爲欲令證不退轉地示現 與無量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世

【日藏会入本】 四者因義爲欲令證不退轉地示現 與無量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世

【論記所引】 論四者 爲 令證不退轉地下… (一六四上一二)

示現下釋 如經下指… (一六四上一四)

示現 與無量 智業故者… (一六四上一五)

【敦煌摩提訖】 四者 爲 令證不退轉地示現 與无量 智業故如雖欲令衆生入佛知見 故出現於世 （三二七下）

【房山摩提訖】 四者 爲 令證不退轉地示現 與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見道故出現於世

【大正摩提訖】 四者 爲 令證不退轉地示現 與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見道故出現於世

【福州摩提訖】 四者 爲 令證不退轉地示現 欲與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世故 （第十五紙）

【興聖寺刊本】 四者入義爲 令證不退轉地示現 欲與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世故

【大正留支訖】 四者 令證不退轉地示現 欲與无量 智業故如經欲令衆生入佛知見 故出現於世故

【真福寺本】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實脩行故

【興聖寺写本】 又 示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修／故

【科註法華論】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故（卷四、十八表）

【叡山版】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【智全会入本】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【日藏会入本】 又又示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【論記所引】 論又 示者爲諸菩薩有疑心者下：（一六四下一五）

令知如實修行故者：（一六四下一七）

【敦煌摩提訖】 又 示者爲諸菩薩有疑心者令知如實脩行故

【房山摩提訖】 又 示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【大正摩提訖】 又 示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【福州摩提訖】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【興聖寺刊本】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【大正留支訖】 又復示者爲諸菩薩有疑心者令知如實修行故

【真福寺本】 又悟入者未發菩提心者令發 心故 已發心者令入海故

【興聖寺写本】 又悟入者未發菩提心者令發 心故 已發心者令入法故

『智全』巻上の当該箇所（一六五頁上二行目）には、「又」の上に「廻」があるが、「廻」は前の行から続く『論記』の本文であり、「又」以降が会入された『法華論』のテキストである。

【科註法華論】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故（巻四、十八表）

【觀山版】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【智全会入本】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【日藏会入本】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【論記所引】 論又悟入者下…（一六五上四）

悟者未發**菩提**心 令發 心故（一六五上四—五）

令入者…（一六五上五）

令入法故未發圓心…（一六五上五—六）

【敦煌摩提訖】 又悟／者未發**菩提**心者令發 心故入者已發心者令入法故

【房山摩提訖】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【大正摩提訖】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【福州摩提訖】 又悟入者未發**菩提**心者令發**菩提**心故 已發心者令入法故

【興聖寺刊本】 又悟入者未發**菩提**心者令發 心故 已發心者令入法故

【大正留支訖】 又悟入者未發 心者令發 心故 已發心者令入法故

【真福寺本】 又復悟 者令外道衆生生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故（第二十一紙）

【興聖寺写本】 又復悟 者令外道衆生／覺悟故又復入者令得聲聞 果者入大菩提故

【科註法華論】 又復悟 者令外道衆生生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故（巻四、十八裏）

【觀山版】 又復悟入者令外道衆生生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故

【智全会入本】 又復悟入者令外道衆生生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故

【日藏会入本】 又復悟入者令外道衆生生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故

【論記所引】 論復悟 者令外道衆生生覺悟故下…（一六五下五）

【敦煌摩提訖】 復悟 者令外道衆生生覺悟故 復入者令得聲聞 果者入大菩提故

【房山摩提訖】復悟 者令外道衆生覺悟故 復入者令得聲聞 果者入大菩提故
 【大正摩提訖】復悟 者令外道衆生覺悟故 復入者令得聲聞 果者入大菩提故
 【福州摩提訖】又復悟 者令外道衆生覺悟故又復入者令得聲聞小 果者入大菩提故
 【興聖寺刊本】又復悟 者令外道衆生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入大菩提故
 【大正留支訖】又復悟 者令外道衆生覺悟故又復入者令得聲聞小乘果者入 菩提故

令住

【真福寺本】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法
 【興聖寺寫本】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法
 【科註法華論】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故(卷四、十九表)
 【叡山版】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故(二十二表)
 【智全會入本】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故(卷六本、一七一上)
 【日藏會入本】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故(卷六本、一七四下)
 【論記所引】論令住者下：(一七一上四) 但以一佛乘故爲衆生說法：(一七一上四—五)

【敦煌摩提訖】令住者如雖舍利弗如來但以一佛乘故爲衆生說法
 【房山摩提訖】令住者如經舍利弗如來但以一佛乘故爲衆生說法
 【大正摩提訖】令住者如經舍利弗如來但以一佛乘故爲衆生說法
 【福州摩提訖】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故
 【興聖寺刊本】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故
 【大正留支訖】令住者如經舍利弗 但以一佛乘故爲衆生說法故

依法

【真福寺本】依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喻因緣念觀方便說洹是法皆爲一佛乘故如是等故
 【興聖寺寫本】依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喻因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

拙稿「二〇二B」五八頁の当該箇所（四四〇行目）の注六八五では、「翻坎」としているが、「坎」を「と」（二の字点）に訂正する。

【科註法華論】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故（卷四、十九裏）

【觀山版】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【智全会入本】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【日藏会入本】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【論記所引】 論依法者已下：（一七三下九） 論牒文云方便 譬喩因緣念觀方便說法：（一七六下六一七）

【敦煌摩提詁】 依法者如雖舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等

【房山摩提詁】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等（第十八紙）

【大正摩提詁】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等

【福州摩提詁】 依法者如經舍利弗是過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【興聖寺刊本】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【大正留支詁】 依法者如經舍利弗 過去諸佛以無量無數方便種種譬喩因緣念觀方便說法是法皆爲一佛乘故如是等故

【真福寺本】 言譬喩者如依牛 有乳酪生糝粳糝乃至醍醐 醍醐爲第一

（興聖寺写本注） 言辭喩者如依牛 有乳酪生糝粳糝乃至提提 醍醐¹²⁹ 爲第一

【興聖寺写本】 言辭喩者如依牛 有乳酪生糝粳糝乃至提提 醍醐爲第一

【科註法華論】 譬喩者如依牛 有乳酪生酥熟酥 醍醐 醍醐爲第一（卷四、二十表）

【觀山版】 言譬喩者如依牛 故得有乳酪生酥熟酥乃至醍醐此五味中醍醐爲第一

【智全会入本】 言譬喩者如依牛 故得有乳酪生酥熟酥乃至醍醐此五味中醍醐爲第一

【日藏会入本】 言譬喩者如依牛 故得有乳酪生酥熟酥乃至醍醐此五味中醍醐爲第一

【論記所引】 譬喩已下：（一七三下一一）

有乳已下：（一七三下一五）

【敦煌摩提詁】 譬喩者如依牛 有乳酪生糝孰糝乃至醍醐 醍醐爲第一

【房山摩提詁】 譬喩者如依牛 有乳酪生酥熟酥乃至醍醐 醍醐爲第一

「唯」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【大正摩提訳】	譬喻者如依牛	有乳酪生酥熟酥	醍醐	醍醐爲第一
【福州摩提訳】	言譬喻者如依牛	故得有乳酪生	蘇熟蘇乃至醍醐	比五味中醍醐爲第一
【興聖寺刊本】	言譬喻者如依牛	有乳酪生	蘇熟蘇乃至醍醐	醍醐爲第一
【大正留支訳】	言譬喻者如依牛	故得有乳酪生	酥熟酥及以醍醐	此五味中醍醐 第一
【真福寺本】	小乘 如	乳大乘	如提醐故	
【興聖寺写本】	小乘 如	乳大乘	如提醐故	
【科註法華論】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	(卷四、二十裏)
【叡山版】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【智全会入本】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【日藏会入本】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【論記所引】	論小乘已下…(二七四上二)			
	小乘 如	乳大	如醍醐…(二七四上二)	
		論云大乘	如醍醐…(二七四上二三)	
【敦煌摩提訳】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【房山摩提訳】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【大正摩提訳】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【福州摩提訳】	小乘 不如其猶如	乳大乘爲最猶	如醍醐故	
【興聖寺刊本】	小乘 如	乳大乘	如醍醐故	
【大正留支訳】	小乘 不如其猶如	乳大乘爲最猶	如醍醐	
【真福寺本】	此譬喻唯 ¹³⁰	明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故		
【興聖寺写本】	此譬喻	明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故		

【科註法華論】此譬 唯明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故（卷四、二十一表）

【觀山版】此譬喻唯明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【智全会入本】此譬喻唯明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【日藏会入本】此譬喻唯明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【論記所引】論此譬喻下：（一七四下四）

故云此譬喻 明大乘無上：（一七四下六）

諸聲聞等下：（一七四下八）

亦同大乘無上 故者：（一七四下九—一〇）

【敦煌摩提訖】此譬喻 明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上 故

【房山摩提訖】此譬喻 明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上 故

【大正摩提訖】此譬 唯明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上 故

【福州摩提訖】此譬喻 明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【興聖寺刊本】此譬喻 明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【大正留支訖】此 喻所明大乘無上諸聲聞等亦同大乘無上義故

【真福寺本】聲聞同者此中示現諸佛如來 洵身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無 差別故此

【興聖寺写本】聲聞同者此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無 差別故此

【科註法華論】聲聞同者此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無 差別故此

【觀山版】聲聞同者此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 人辟支佛等法身平等無 差別故此

【智全会入本】聲聞同者此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 人辟支佛等法身平等無 差別故此

【日藏会入本】聲聞同者此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 人辟支佛等法身平等無 差別故此義

【論記所引】論聲聞同者：（一七四下一七）

論示 諸佛如來法身之性者：（一七五上九—一〇）

同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身者：（一七五上一二）

平等無 差別故者：（一七五上一五）

(敦煌摩提傍書)

聞

【敦煌摩提記】 聲聞同者 示 諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無有差別故此 譬喻示現因緣 如向 說

【房山摩提記】 聲聞同者 示 諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無有差別故此 譬喻示現因緣 如向 說

【大正摩提記】 聲聞同者 示 諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無有差別故此 譬喻示現因緣 如向 說

【福州摩提記】 聲聞同者 此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無有差別故此義皆是譬喻示現因緣之義如向前說

【興聖寺刊本】 聲聞同者 此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞 辟支佛等法身平等無有差別故此 譬喻示現因緣之義如向前說(卷下、第九紙)

【大正留支記】 聲聞同者 此中示現諸佛如來法身之性同諸凡夫聲聞之人辟支佛等法身平等無有差別故此義皆是譬喻示現因緣之義如前所說

此¹³¹ 譬喻示現者…(一七五下五—六)

論因緣 如向 說者…(一七五下)

【真福寺本】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等種種觀故

【興聖寺寫本】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘傍中真如法身界實際 人無我法無我等種種觀故

【科註法華論】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等種種觀故(卷四、二十二裏)

【觀山版】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 法性及人無我法無我等種種觀□

【智全會入本】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 法性及人無我法無我等種種觀故

【日藏會入本】 言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 法性及人無我法無我等種種觀故

【論記所引】 論念 觀者下…(一七五下二—)

於小乘諦中人無我等者…(一七五下二—)

於大乘諦中真如法 界實際 法無我人無我等 觀故者…(一七五下二—)

【敦煌摩提記】 念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等 觀故

【房山摩提記】 念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等 觀故

131 当該箇所は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷(一七九頁上九—一〇行目)では「此義譬喻」となっているが、『科註』卷四(二十二丁裏)所引の『論記』では「此譬喻」となっている。こ
こでは、『科註』のテキストに従う。

132 当該箇所は、『智全』卷上では「論中人無我」となっているが、『日藏』第二十三卷(一七九頁上二七行目)では「論中人無我」となっており、『科註』卷四(二十二丁裏)所引の『論記』では
「諦中人無我」となっている。ここでは、私に校訂した「諦中人無我」のテキストを用いる。

【大正摩提訖】言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等 觀故

【福州摩提訖】言念 觀者於小乘諦中人無我等於大乘諦中真如法 界實際 法界法性及人無我法無我等種種觀故

【興聖寺刊本】言念 觀者 小乘諦中人無我等 大乘諦中真如法 界實際 人無我法無我等種種觀故

【大正留支訖】言念 觀者 小乘諦中人無我等 大乘諦中真如 實際 法界法性及人無我法無我等種種觀故

【真福寺本】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故

【興聖寺寫本】言方便者於小乘中現陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故 (第十六紙)

【科註法華論】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中修 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故 (卷四、二十三表)

【觀山版】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故 (二十二裏)

【智全會入本】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故

【日藏會入本】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故

【論記所引】論方便者：(一七六上一二)

小乘中觀陰等者：(一七六上一二)

破陰界入 (一七六上一三)

是厭煩惱 (一七六上一三)

離三界 (一七六上一三一四)

苦得 (一七六上一四)

小解脫故：(一七六上一四)

大乘中觀諸波羅蜜等者：(一七六上一五)

六度四攝法等：(一七六上一六)

故云攝取自身他身利益對治法故：(一七六下一)

【敦煌摩提訖】方便者 小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸婆羅蜜 四攝法攝取自身他身利益對治法故

【房山摩提訖】方便者 小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故／大乘中 諸波羅蜜 四攝法攝取自身他身利益對治法故

【大正摩提訖】方便者 小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中修 諸波羅蜜 四攝法攝取自身他身利益對治法故 (一七上)

【福州摩提訖】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中修 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故

遮

【興聖寺刊本】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜 四攝法攝取自身他身利益對治法故
【大正留支訳】言方便者於小乘中觀陰界入厭苦離苦得解脫故於大乘中 諸波羅蜜以四攝法攝取自身他身利益對治法故

（真福寺本注墨）

如是等故

【真福寺本】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三

◎

【興聖寺写本】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【科註法華論】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故（卷四、二十四表）

【叡山版】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【智全会入本】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【日藏会入本】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有二如是等故

【論記所引】

論遮者如 舍利弗已下：（一七六下一六）

十方世界皆：（一七七上三）

【敦煌摩提訳】

遮者如雖舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【房山摩提訳】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【大正摩提訳】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【福州摩提訳】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【興聖寺刊本】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【大正留支訳】

遮者如經舍利弗十方世界中尚無一乘何況有三如是等故

【真福寺本】

無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃

【興聖寺写本】

无 二乘者謂无／乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃

【科註法華論】

無有 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃（卷四、二十四裏）

【叡山版】

無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃

【智全会入本】

無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃

【日藏会入本】 無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【論記所引】 論無 二乘者下…（二七七上七）

唯佛如來者…（二七七上九）

證大菩提下…（二七七上九—一〇）

究竟滿足一切智慧名大涅槃者…（二七七上一二）

【敦煌摩提訖】 无 二乘者 无 二乘 涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【房山摩提訖】 無 二乘者 無 二乘 涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【大正摩提訖】 無 二乘者 無 二乘 涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【福州摩提訖】 無 二乘者 無 二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【興聖寺刊本】 無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯佛如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃
【大正留支訖】 無 二乘者謂無二乘所得涅槃唯有如來證大菩提究竟滿足一切智慧名大涅槃

【真福寺本】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【興聖寺寫本】 非諸聲聞辟支佛業等有 并 法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【科註法華論】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知（卷四、二十五表）
【叡山版】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【智全会入本】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【日藏会入本】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【論記所引】 論非諸聲聞下…（二七八上一二）

故云非諸二乘

等有涅槃法…（二七八上一四）

唯一佛乘者…（二七八下二）

一佛乘者下…（二七八下四）

【敦煌摩提訖】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【房山摩提訖】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知
【大正摩提訖】 非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知

【福州摩提訖】

非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應 知

【興聖寺刊本】

非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義／應 知

【大正留支訖】

非諸聲聞辟支佛 等有涅槃法唯一佛乘故一佛乘者依四種義說應當善知（七下）

【真福寺本】

如來依此六種授記是故前說何等法云何¹³³海似何法何相法何¹³³躰法如是示現

【興聖寺写本】

如來依此六種受記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【科註法華論】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現（卷四、二十六表）

【叡山版】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【智全会入本】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【日藏会入本】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【論記所引】

論如來依此六種授記已下：（二七九下三）

是故已下：（二七九下五）

【敦煌摩提訖】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【房山摩提訖】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【大正摩提訖】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【福州摩提訖】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【興聖寺刊本】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【大正留支訖】

如來依此六種授記是故前說何等法云何法何似法何相法何¹³³躰法如是示現

【真福寺本】

何等法者謂未曾開法 云何¹³³海者謂種種言語譬喻 說故何似法者 唯爲一大事故

【興聖寺写本】

何等法者謂未曾開法故 云何法者謂種種言語譬喻 說故何似法者 爲一大事故

【科註法華論】

何等法者謂未曾開法 云何法者謂種種言語譬喻 說故何似法者 唯爲一大事故（卷四、二十六表）

【叡山版】

何等法者謂未曾開法 云何法者謂種種言辭譬喻 說故何似法者 唯爲一大事故

「法」は行末に書かれており、墨書で「者」の上に小さい丸印と「法」の右上に挿入符が付されている。
拙稿「二〇二二B」五九頁の当該箇所（四五七行目）では「唯」と翻刻しているが、見たままで言うと、口偏に旁が「生」からなる字であり、「唯」の誤写と思われる。

【智全会入本】	何等法者謂未曾開法	云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故
【日藏会入本】	何等法者謂未曾開法	云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故
【論記所引】	何等法者下：（一七九下六）			
	論何等法者謂未曾開法者：（一七九下七—八）			
	論云何法者謂種種言辭譬喻	說故者：（一七九下九—一〇）		
	論何似法者	唯爲一大事故者：（一七九下一一）		
【敦煌摩提詁】	何等法者謂未曾聞	云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故（三二八上）
【房山摩提詁】	何等法者謂未曾聞	故云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故
【大正摩提詁】	何等法者謂未曾聞	故云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故
【福州摩提詁】	何等法者謂未曾聞	故云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者所謂	唯爲一大事故
【興聖寺刊本】	何等法者謂未曾聞	故云何法者謂種種言辭譬喻	說故何似法者	唯爲一大事故
【大正留支詁】	何等法者謂未曾聞	故云何法者謂種種言辭譬喻顯	說故何似法者所謂	唯爲一大事故
【真福寺本】	何相法者爲隨衆生器說諸佛洹故何鉢。者	唯	一乘鉢法 ¹³⁴ 故	（第二十二紙）
【興聖寺写本】	何相法者爲隨衆生器說佛諸佛法故何鉢	1135	一乘鉢	故
【科註法華論】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何鉢	唯	一乘鉢	故（卷四、二十六表）
【叡山版】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體	唯	一乘鉢	故（二十三表）
【智全会入本】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體	唯	一乘體	故
【日藏会入本】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體	唯	一乘體	故
【論記所引】	論何相法者	隨衆生器說諸佛法故者：（一七九下一四）		
	論何體法者	唯	一乘體	故者：（一七九下一七一—一八〇上二）
【敦煌摩提詁】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體	唯	一乘體	故
【房山摩提詁】	何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體	唯	一乘體	故

「諸」の上の「謂」には、左傍に見せ消ち記号が付されている。

【大正摩提訳】 何相法者爲隨衆生器說／佛法故何體法者 唯一乘體 故
【福州摩提訳】 何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體法者所謂唯 一乘體 故
【興聖寺刊本】 何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體法者 唯一乘體 故
【大正留支訳】 何相法者爲隨衆生器說諸佛法故何體法者所謂唯有一乘體 故

【真福寺本】 一乘躰者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之躰以因 果 行觀不同故
【興聖寺写本】 一乘躰者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之躰以因 果 行觀不同故
【科註法華論】 一乘躰者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之躰以因 果 行觀不同故（卷四、二十七表）
【叡山版】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故
【智全会入本】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故
【日藏会入本】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故
【論記所引】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身…（一八〇上五）

論聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體者…（一八〇上二〇）

以因 果 行觀不同故者…（一八〇上二二）

【敦煌摩提訳】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身 聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 觀行 不同故
【房山摩提訳】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身 聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 觀行 不同故
【大正摩提訳】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身 聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故
【福州摩提訳】 一乘體者所謂 諸佛如來平等法身 聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因緣果 行觀不同故
【興聖寺刊本】 一乘體者 謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故
【大正留支訳】 一乘體者所謂 諸佛如來平等法身彼諸聲聞辟支佛乘非彼平等法身之體以因 果 行觀不同故

說法為断四種疑

【真福寺本】 自此已下如來說法爲断四種疑 應知何等 四種

原本では、「(一者)疑」と「(二者)疑」の注がある行の上方欄外に、朱書で「或本」とある。
「堪」は行末に書かれており、墨書で「説」の上に小さい丸印と「堪」の右上に挿入符が付されている。

【興聖寺寫本】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【科註法華論】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	應知何等	爲四種(卷四、二十七裏)
【叡山版】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【智全會入本】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【日藏會入本】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【論記所引】	論自此已下	說法爲斷四種疑	應知已下…	(一八〇下七)
			何等已下徵起(一八〇下九)	
【敦煌摩提詁】	自此以下	說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【房山摩提詁】	自此已下	說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【大正摩提詁】	自此已下	說法爲斷四種疑	應知何等	四種
【福州摩提詁】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	心應知何等	四種
【興聖寺刊本】	自此已下	如來說法爲斷四種疑	心應知何等	四種
【大正留支詁】	自此以下	如來說法爲斷四種疑	心應知何等	四疑
(真福寺本注朱)	疑	疑 ¹³⁷	疑	疑
【真福寺本】	一者。何時說二	者。云何知是增上慢人三者。云何。說四者	云何如來不堪 ¹³⁸	成妄語
【興聖寺寫本】	一者	何時說二	者。云何知是增上慢人三者	云何堪說四者
【科註法華論】	一者疑	何時說二	者疑	云何知是增上慢人三者疑
【叡山版】	一者	何時說二	者	云何知是增上慢人三者
【智全會入本】	一者	何時說二	者	云何知是增上慢人三者
【日藏會入本】	一者	何時說二	者	云何知是增上慢人三者
【論記所引】	一者已下	列敷(一八〇下九)		
	何時說下釋…	(一八〇下九—一〇)		

何時說

【敦煌摩提訖】一者 何時說二 者 云何知 增上慢 三者 云何勘說四者 云何 不 成妄語
【房山摩提訖】一者 何時說二 者 云何知 增上慢 三者 云何堪說四者 云何 不 成妄語
【大正摩提訖】一者 何時說二 者 云何知 增上慢 三者 云何堪說四者 云何 不 成妄語
【福州摩提訖】一者 疑何時說二 者 云何知是 增上慢人 三者 疑云何堪說四者 疑云何如來不 成妄語 (第十六紙)
【興聖寺刊本】一者 疑何時說二 者 疑云何知是 增上慢人 三者 疑云何堪說四者 疑云何如來不 成妄語 (卷下、第十紙)
【大正留支訖】一 疑何時說二 疑云何知是 增上慢人 三 疑云何堪說四 疑云何如來不 成妄語

【真福寺本】何時說者諸佛如來於何等時發起種種方便說法為斷彼疑
【興聖寺寫本】何時說者諸佛如來於／等時發起種種方便說法為斷彼疑
【科註法華論】何時說者諸佛如來於何等時發起種々方便說法為斷彼疑 (卷四、二十八表)
【叡山版】何時說者諸佛如來於何等時發起種種方便說法為斷彼疑
【智全会入本】何時說者諸佛如來於何等時發起種種方便說法為斷彼疑
【日藏会入本】何時說者諸佛如來於何等時發起種種方便說法為斷彼疑
【論記所引】初 何時說者諸佛如來於何等時 起種種方便說法為斷彼疑者：(一八〇下二一一二)
【敦煌摩提訖】何時說者諸佛如來於何等時 起種々方便說法為斷彼疑
【房山摩提訖】何時說者諸佛如來於何等時 起種種方便說法為斷彼疑 (第十九紙)
【大正摩提訖】何時說者諸佛如來於何等時 起種種方便說法為斷彼疑
【福州摩提訖】何時說者諸佛如來於何等時 起種種方便說法為斷彼疑
【興聖寺刊本】何時說者諸佛如來於何等時 發起種種方便說法為斷彼疑
【大正留支訖】何時說者諸佛如來於何等時 起種種方便說法為斷此疑

【真福寺本】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 謂劫濁 等故
【興聖寺寫本】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 謂劫濁 等故
【科註法華論】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故 (卷四、二十八表)

【叡山版】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 謂劫濁 等故
 【智全会入本】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 謂劫濁 等故
 【日藏会入本】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 謂劫濁 等故
 【論記所引】注釈なし
 【敦煌摩提詁】如雖佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故
 【房山摩提詁】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故
 【大正摩提詁】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故
 【福州摩提詁】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故
 【興聖寺刊本】如經佛告舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁 等故
 【大正留支詁】如經 舍利弗諸佛出於五濁惡世 所謂劫濁如是等故

云何知増上慢

【真福寺本】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 説 法云何知彼是増上慢
 【興聖寺写本】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 説 法云何知彼是増上慢
 【科註法華論】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 説 法云何知彼是増上慢 (卷四、二十八裏)
 【叡山版】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 而説諸法云何知彼是増上慢
 【智全会入本】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 而説諸法云何知彼是増上慢
 【日藏会入本】云何知是増上慢 者如來不爲増上慢人 而説諸法云何知彼是増上慢
 【論記所引】論云何知 増上慢 者如來不爲増上慢人 説 法已下… (一八三下一三)

云何知彼是増上慢人者… (一八三下一六)

(敦煌摩提傍書)

増

【敦煌摩提詁】云何知 増上慢 者如來不爲／上慢人 説 法云何知彼是増上慢
 【房山摩提詁】云何知 増上慢 者如來不爲増上慢人 説 法云何知彼是増上慢

139 当該箇所は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷（一八七頁下一一行目）では「増上人者」となっているが、『科註』卷四（二十九丁表）所引の『論記』では「増上慢人者」となっている。こ

こでは、『科註』に依って「慢」を補う。

【大正摩提訖】云何知 增上慢 者如來不爲增上慢人 說 法云何知彼是增上慢
 【福州摩提訖】云何知 增上慢 者如來不爲增上慢人 說 法云何知彼是增上慢
 【興聖寺刊本】云何知是 增上慢 者如來不爲增上慢人 說 法云何知彼是增上慢
 【大正留支訖】云何知是 增上慢人 者如來不爲增上慢人 而說諸法云何知彼是增上慢

【真福寺本】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法無有是處 等故

【興聖寺寫本】爲斷彼疑故如經者若有比丘實得阿羅漢者若不信是法无有是處 等故

【科註法華論】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法无有是處 等故（卷四、二十九表）

【觀山版】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法無有是處如是等故（二十三裏）

【智全会入本】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法無有是處如是等故

【日藏会入本】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法無有是處如是等故

【論記所引】爲斷下指：（一八四上二）

【敦煌摩提訖】爲斷彼疑 如雖 若有比丘實得阿羅漢者若不信是法无有是處 等故

【房山摩提訖】爲斷彼疑 如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信是法無有是處 等故

【大正摩提訖】爲斷彼疑 如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信是法無有是處 等故

【福州摩提訖】爲斷彼疑故如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信是法無有是處 等故

【興聖寺刊本】爲斷彼疑 如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信此法無有是處 等故

【大正留支訖】爲斷此疑 如經 若有比丘實得阿羅漢者若不信是法無有是處如是等故

云何堪說

【真福寺本】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

【興聖寺寫本】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

【科註法華論】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

【觀山版】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

【智全会入本】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前无佛如是等故

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前无佛如是等故（卷四、二十九裏）

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故（卷六末、一八五下）

【日藏会入本】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來 不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故（卷六末、一八九上）

【論記所引】論云何堪說者下：（一八五下六）

云從佛聞 而起謗心云何如來 不成不堪說法人：（一八五下七一八）

爲斷下指 是等故結：（一八五下九）

【敦煌摩提訊】云何勘說者從佛聞法而起謗心云何如來

不成不勘說法人爲斷此疑如雖除佛滅度後現前无佛如是等故

【房山摩提訊】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

【大正摩提訊】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

【福州摩提訊】云何堪說者從佛聞法而起謗心 如來應是不堪說人云何如來不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

【興聖寺刊本】云何堪說者從佛聞法而起謗心云何如來

不成不堪說法人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

【大正留支訊】云何堪說者從佛聞法而起謗心 如來應是不堪說人云何

不成不堪說 人爲斷此疑如經除佛滅度後現前無佛如是等故

云何不成妄語

【真福寺本】云何如來不成妄語者此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【興聖寺寫本】云何如來不成妄語者是以如來先說／異今說法異云何如來不成妄語

【科註法華論】云何如來不成妄語者此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語（卷四、三十裏）

【叡山版】云何如來不成妄語者此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【智全会入本】云何如來不成妄語者此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【日藏会入本】云何如來不成妄語者此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【論記所引】論云何 不成妄語者下：（一八七下七）

佛先說（一八七下八）

三乘法異今說（二八七下八）

一乘法異：（二八七下八一九）

云

（敦煌摩提傍書）

【敦煌摩提訊】云何 不成妄語者 如來先說法異今說法異／何如來不成妄語

【房山摩提訊】云何 不成妄語者 如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

拙稿「二〇二B」六〇頁の当該箇所（四七四行目）では、「塔^{*}」と翻刻しているが、厳密には「塔」に見える字である。その字の左下には、見せ消し記号が付されている。

【大正摩提訳】云何 不成妄語者 如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【福州摩提訳】云何如來不成妄語者 以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【興聖寺刊本】云何如來不成妄語者 此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【大正留支訳】云何如來不成妄語者 此以如來先說法異今說法異云何如來不成妄語

【真福寺本】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【興聖寺写本】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【科註法華論】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 應當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故（卷四、三十裏）

【叡山版】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【智全会入本】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【日藏会入本】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【論記所引】次爲斷下指文：（一八七下八）

爲斷此疑下指文：（一八七下一〇） 諸佛如來言無虛妄：（一八七下一一）

【敦煌摩提訳】爲斷此疑 如雖舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【房山摩提訳】爲斷此疑 故如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【大正摩提訳】爲斷此疑 故如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【福州摩提訳】爲斷此疑 故如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【興聖寺刊本】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【大正留支訳】爲斷此疑 如經舍利弗汝等 應當一心信解受持佛語諸佛如來言無虛妄無有餘乘唯一佛乘故

【真福寺本】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【興聖寺写本】乃至童子戲聚沙爲佛塔¹⁴⁰ 塔如是諸人等皆已成佛道者

【科註法華論】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者（卷四、三十一表）

「支」の左に傍線が引かれており、「支」の右傍には「菰」（發）の異体字とある。
「支」の左に傍線が引かれており、その下方欄外には「菰」（發）の異体字とある。

【敦煌摩提訳】

謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞

未發 心者之所能得（二八八上一四―一五）

故云發 大心（二八八上一四）

修大行 者所作 證佛 非諸凡夫定性

【論記所引】論謂發菩提心下…（二八八上一〇）

【日藏会入本】謂發菩提心行菩薩道者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故

【智全会入本】謂發菩提心行菩薩道者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故

【叡山版】謂發菩提心行菩薩道者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故（卷四、三十一裏）

【科註法華論】謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故（卷四、三十一裏）

【興聖寺写本】謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故

【真福寺本】謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞本來未發菩提心者之所能得故

發¹⁴¹

發¹⁴²

【大正留支訳】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【興聖寺刊本】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【福州摩提訳】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者（二七中）

【大正摩提訳】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【房山摩提訳】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【敦煌摩提訳】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

聚沙低頭 尚皆 成佛…（二八八上六一七）

【論記所引】論乃至童子戲已下…（二八八上五）

【日藏会入本】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【智全会入本】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【叡山版】乃至童子戲聚沙爲佛 塔如是諸人等皆已成佛道者

【房山摩提訳】 謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞 未發菩提心者之所能得故
 【大正摩提訳】 謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞 未發菩提心者之所能得故
 【福州摩提訳】 謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞 未發菩提心者之所能得故
 【興聖寺刊本】 謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞 未發菩提心者之所能得故
 【大正留支訳】 謂發菩提心行菩薩行者所作善根能證菩提非諸凡夫及決定聲聞 未發菩提心者之所能得故 (八上)

【真福寺本】 如是乃至小低頭等皆亦如是

(興聖寺写本注) 如是乃至小低頭等亦如是

【興聖寺写本】 如是乃至小低頭等亦如是

【科註法華論】 如是乃至小低頭等皆亦如是 (卷四、三十二表)

【叡山版】 如是乃至小低頭等皆亦如是

【智全会入本】 如是乃至／低頭等皆亦如是

【日藏会入本】 如是乃至小低頭等皆亦如是

【論記所引】 論如是乃至小低頭等 亦如是者：(一八八上一五—一六)

【敦煌摩提訳】 如是乃至小低頭等 亦如是

【房山摩提訳】 如是乃至小低頭等 亦如是

【大正摩提訳】 如是乃至小低頭等 亦如是

【福州摩提訳】 如是乃至小低頭等皆亦如是

【興聖寺刊本】 如是乃至小低頭等皆亦如是

【大正留支訳】 如是乃至小低頭等皆亦如是

譬喩品第三

143 拙稿「二〇二二B」六〇頁の当該箇所(四七七行目)では、「低」と翻刻しているが、見たままでは、人偏に「尸+ユ」(「尼」の異体字)のような旁からなる字である。
 144 「頭等亦」(拙稿「二〇二二B」六〇頁では「頭等」¹⁴³と翻刻した)の箇所は、原本では「湏等之」のようにも見える。
 145 「智」の右傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外には「如」とある。

法華經本文引用

（真福寺本注墨）

而

【真福寺本】

尊者舍利弗 說偈言

【興聖寺写本】

譬喻品第三 舍利弗 說偈 （第十七紙）

【子注法華論】

尊者舍利弗 說偈 （卷下、第一紙三面）

【科註法華論】

尊者舍利弗而說偈言（卷四、三十二裏）

【叡山版】

譬喻品 尊者舍利弗 說偈言（二十四表）

【智全会入本】

釋譬喻品 尊者舍利弗 說偈言

【日藏会入本】

釋譬喻品 尊者舍利弗 說偈言

【論記所引】

論舍利弗 說偈已下…（一九一上二〇）

【敦煌摩提訖】

譬喻品第三 舍利弗 說偈

【房山摩提訖】

譬喻品第三 舍利弗 說偈

【大正摩提訖】

譬喻品第三 舍利弗 說偈

【福州摩提訖】

譬喻品第三 舍利弗 說偈

【興聖寺刊本】

譬喻品第三尊者舍利弗而說偈言

【大正留支訖】

譬喻品第三尊者舍利弗所說偈言

【真福寺本】

金色三十二 十力諸解脫 同共一海_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆以失（第二十三紙）

（興聖寺写本注）

同共一法_中

【興聖寺写本】

金色三十二 十力諸解脫 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆以失

【子注法華論】

金色三十二 十力諸解脫 同共一法_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆以失

【科註法華論】

金色三十二 十力諸解脫 同共一法_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是等功德 而我皆已失（卷四、三十二裏）

【叡山版】

金色三十二 十力諸解脫 同共一法_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆已失

【智全会入本】

金色三十二 十力諸解脫 共同一法_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆已失

【日藏会入本】

金色三十二 十力諸解脫 同共一法_中 而不得此事 八十種妙好 十八不共法 如是諸功德 而我皆已失

【論記所引】

論金色三十二下…（一九一下二）

【敦煌摩提訖】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是諸功德	而我皆已失	(三一八下)
【房山摩提訖】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是諸功德	而我皆已失	
【大正摩提訖】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆已失	
【福州摩提訖】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆以失	
【興聖寺刊本】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆以失	(卷下、第十一紙)
【大正留支訖】	金色三十二	十力諸解脫	同共一法中	而不得此事	八十種妙好	十八不共法	如是等功德	而我皆已失	

引用偈文解釈

【真福寺本】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言	
【興聖寺写本】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言 ¹⁴⁶	
【科註法華論】	此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身	(卷四、三十三表)
【叡山版】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言	
【智全会入本】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言	
【日藏会入本】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言	
【論記所引】	論此偈示現何義下…(一九一下一六)	舍利弗自訶嘖身一句…(一九一下一七)	
【敦煌摩提訖】	此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身	
【房山摩提訖】	此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身	
【大正摩提訖】	此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身	
【福州摩提訖】	釋曰此偈示現何義尊者舍利弗自訶嘖身言		
【興聖寺刊本】	論曰此偈示現何義	舍利弗自訶嘖身言	
【大正留支訖】	釋曰此偈示現何義尊者舍利弗自訶嘖身言		

【真福寺本】我不見諸佛不往佛所及聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是故舍利弗作如是等訶嘖自身

146 拙稿「二〇二二B」六〇頁の当該箇所(四八一行目)では、「呵」と翻刻しているが、原本通りの「哥」に訂正する。以降、同様の例は逐一注記しない。

「利」の右上に倒置符が付されている。

【興聖寺写本】 我不見諸佛不乘往 / 所及 聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是不故 舍利弗作如是等哥噴自身
【科註法華論】 我不見諸佛不 往 佛所 聞 法不供養恭敬諸佛無利益衆生事 未得法退是 故 舍利弗 呵責自身 (卷四、三十三裏)
【觀山版】 我不見諸佛不 往諸佛所及不聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是 故 舍利弗作如是等呵責自身
【智全会入本】 我不見諸佛不 往諸佛所及不聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是 故 舍利弗作如是等呵責自身
【日藏会入本】 我不見諸佛不 往諸佛所及不聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是 故 舍利弗作如是等呵責自身
【論記所引】 我不見下… (一九二上二)
我不見 佛者… (一九二上二二) 是 故下結成 (一九二上二)

不 往 佛所 聞 法者… (一九二上二二)

不供 敬者… (一九二上二五—二六)

無利 生者… (一九二上二七)

未得法退者… (一九二下二—二)

論稱訶責… (一九二下八)

【敦煌摩提訖】 我不見諸佛不 住 佛所 聞 法不供養恭敬諸佛無利益衆生事 未得法退是 故 舍利弗 呵噴自身¹⁴⁷
【房山摩提訖】 我不見諸佛不 往 佛所 聞 法不供養恭敬諸佛無利益衆生事 未得法退是 故 舍利弗 呵責自身
【大正摩提訖】 我不見諸佛不 往 佛所 聞 法不供養恭敬諸佛無利益衆生事 未得法退是 故 舍利弗 呵責自身
【福州摩提訖】 我不見諸佛不 住諸佛所及 聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是 故尊者舍利弗作如是言呵責自身
【興聖寺刊本】 我不見諸佛不 往 佛所及 聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退是 故 舍利弗作如是等呵責自身
【大正留支訖】 我不見諸佛不 往諸佛所及 聞佛說法不供養恭敬諸佛無利益衆生事於未得法退 尊者舍利弗作如是等呵責自身

(真福寺本注朱) 諸 示現

【真福寺本】 不見。佛者。 不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故不往佛所者示現教化衆生力故

【興聖寺写本】 不見 佛者 不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故不往佛所者示現教化衆生力故

【科註法華論】 不見 者 不見諸佛如來大人 相 生恭敬供養心故 往 者示現教化衆生力故 (卷四、三十四裏)

【觀山版】不見諸佛者示現不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故不往佛所者示現教化衆生力故
【智全会入本】不見諸佛者示現不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故 往佛所者示現教化衆生力故
【日藏会入本】不見諸佛者示現不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故 往佛所者示現教化衆生力故
【論記所引】論不見者下：（一九二下一四）

論往 者示現教化衆生力者：（一九二下一七）

【敦煌摩提訖】不見者 不見諸佛如來大人 相 生恭敬供養心／往 者示現教化衆生力故
【房山摩提訖】不見者 不見諸佛如來大人 相 生恭敬供養心故 往 者示現教化衆生力故
【大正摩提訖】不見者 不見諸佛如來大人 相 生恭敬供養心故 往 者示現教化衆生力故
【福州摩提訖】不見者 示現不見諸佛如來大人之相 生恭敬供養心故 住佛所者示現教化衆生力故
【興聖寺刊本】不見 佛者示現不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故不往佛所者示現教化衆生力故
【大正留支訖】不見 佛者示現不見諸佛如來大人之相不生恭敬供養心故 往佛所者示現教化衆生力故

【真福寺本】放金色光明者示現見佛自身異身獲得無量諸 功德故聞說法 者示現能作利益一切衆生 故
【興聖寺写本】放金色光明者示現見佛自身異身獲得無量諸佛功德故聞說法 者示現能作利益一切衆生 故
【科註法華論】放金色光明者 見佛自身異身 得無量 功德故聞 者 能作利益一切衆生 故（卷四、三十五表）
【觀山版】放金色光明者示現 佛自身異身獲得無量諸 功德故聞說法 者示現能作利益一切衆生 故（二十四裏）
【智全会入本】放金色光明者示現／自身異身獲得無量諸 功德故聞說法 者示現能作利益一切衆生 故
【日藏会入本】放金色光明者示現 佛自身異身獲得無量諸 功德故聞說法 者示現能作利益一切衆生 故
【論記所引】論放金色光明者：（一九三上七）

故云放金色光明者 見佛自身異身 得無量 功德故：（一九三上九—一〇）

論聞 者 能作利益 衆生 故者：（一九三上一四）

故云能作利益一切衆生 故（一九三上一六）

【敦煌摩提訖】放金色光明者 見佛自身異身 得無量 功德故聞 者 能作利益一切衆生 故
【房山摩提訖】放金色光明者 見佛自身異身 得無量 功德故聞 者 能作利益一切衆生 故
【大正摩提訖】放金色光明者 見佛自身異身 得無量 功德故聞 者 能作利益一切衆生 故

「不」は行末に書かれており、墨書で「共」の上に小さい丸印と「不」の右上に挿入符が付されている。

【福州摩提訳】 放金色光明者示現見佛自身異身獲得無量 功德故聞説法示現者 能作利益一切衆生 故
【興聖寺刊本】 放金色光明者示現見佛自身異身獲得無量諸 功德故聞説法 者示現能作利益一切衆生 故
【大正留支訳】 放金色光明者示現見佛自身異身獲得無量諸 功德故聞説法 者示現能作 一切衆生之利益故

【真福寺本】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八。共法者示現遠離諸不鄣導故¹⁴⁸
【興聖寺写本】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【科註法華論】 力者 衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者 遠離諸 鄣導故（卷四、三十五表）
【叡山版】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【智全会入本】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【日藏会入本】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【論記所引】 論力者 衆生有疑依十 力断 疑故者：（一九三下二）
論供養者示現能教化衆生力故者：（一九三下七）

論十八不共法者 遠離諸 障礙故者：（一九三下二）
【敦煌摩提訳】 力者 衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者 遠離諸 鄣導故
【房山摩提訳】 力者 衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者 遠離諸 障礙故（第二十紙）
【大正摩提訳】 力者 衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現／教化衆生力故十八不共法者 遠離諸 障礙故
【福州摩提訳】 示現力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【興聖寺刊本】 力者示現衆生有疑依十 力断 疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 鄣導故
【大正留支訳】 力者示現衆生有疑依十種力断彼疑故供養者示現能教化衆生力故十八不共法者示現遠離諸 障礙故

【真福寺本】 恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脱故以人無我 法無我 一切諸 法悉 平等故
【興聖寺写本】 恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脱故以人無我乘法无我法无我 一切諸 法悉 平等故
【科註法華論】 恭敬者 生無量 德依如來教得解脱故 人無我 法無我 一切 法 平等故（卷四、三十五裏）

【叡山版】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我及法無我 一切諸法悉平等故

【智全会入本】恭敬者示現出生無量福德依如來／得解脫故以人無我及法無我 一切諸法悉平等故

【日藏会入本】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我及法無我 一切諸法悉平等故

【論記所引】論恭敬者 生無量 德依如來教得解脫故者…（一九三下一五）

論人無我 法無我 一切 平等故者…（一九四上三）

【敦煌摩提訖】恭敬者 生無量福德依如來教得解脫故 人無我 法無我 一切 法 平等故

【房山摩提訖】恭敬者 生無量福德依如來教得解脫故 人無我 法無我 一切 法 平等故

【大正摩提訖】恭敬者 生無量福德依如來教得解脫故 人無我 法無我 一切 法 平等故

【福州摩提訖】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我 法無我 一切諸佛法悉皆平等故

【興聖寺刊本】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故證人無我 法無我 一切諸法悉平等故

【大正留支訖】恭敬者示現出生無量福德依如來教得解脫故以人無我及法無我 一切諸法悉皆平等

【真福寺本】是故 舍利弗自呵嘖身言我未得如是洵 於未得中退故

【興聖寺寫本】是／ 舍利弗自呵嘖身言我未得如法是 相未得中退故

【科註法華論】是故 舍利弗自呵嘖身言 我未得如是法 於未得中退故（卷四、三十六表）

【叡山版】是故 舍利弗自呵嘖身言我未得如是法 於未得中退故

【智全会入本】是故 舍利弗自呵嘖身言我未得如是法 於未得中退故

【日藏会入本】是故 舍利弗自呵嘖身言我未得如是法 於未得中退故

【論記所引】論是故下結…（一九四上一〇）

結自 責 我未得下…（一九四上一〇）

言未得如是法者…（一九四上一二）

於未得中退者…（一九四上一二—一二）

【敦煌摩提訖】是故 舍利弗自呵嘖身 我未得如是法 於未得中退故

【房山摩提訖】是故 舍利弗自呵嘖身 我未得如是法 於未得中退故

【大正摩提訖】是故 舍利弗自呵嘖身 我未得如是法 於未得中退故

七譬喻

【福州摩提訢】 是故 舍利弗自呵責身言我未得如是法故於未得中退故
【興聖寺刊本】 是故 舍利弗自呵責身言我未得如是法 於未得中退故
【大正留支訢】 是故尊者舍利弗自呵責身言我未得如是法故於未得中退故

【真福寺本】 自此已下 爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知
(興聖寺写本注)

染

【興聖寺写本】 自此已不 爲七種具足煩惱深¹⁴⁹性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知

【科註法華論】 自此已下 爲七種具足煩惱 性衆生說七 譬喻對治七種增上慢 應知(卷五、一表)

【叡山版】 自此已下次爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知

【智全会入本】 自此已下次爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知

【日藏会入本】 自此已下次爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知

【論記所引】 論自此已下 爲七種具足已下：(一九四下四)

初自此已下標七三名(一九四下七一八)

【敦煌摩提訢】 自此以下 爲七種具足煩惱 性衆生說 譬喻對治七種增上慢 應知

【房山摩提訢】 自此已下 爲七種具足煩惱 性衆生說 譬喻對治七種增上慢 應知

【大正摩提訢】 自此已下 爲七種具足煩惱 性衆生說七 譬喻對治七種增上慢 應知

【福州摩提訢】 自此已下次爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知(第十七紙)

【興聖寺刊本】 自此已下 爲七種具足煩惱染性衆生說七種譬喻對治七種增上慢心此義應知

【大正留支訢】 自此以下次爲七種具足煩惱染性衆生說七種 喻對治七種增上慢心此義應知

【真福寺本】 又 三種染慢無煩惱入三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知
【興聖寺写本】 又 三種染慢无煩惱入三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知

【科註法華論】又 三種染 無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三 平等 應知（卷五、一表）

【觀山版】又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知

【智全会入本】又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知

【日藏会入本】又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知

【論記所引】三種已下：（一九四下九）

【敦煌摩提訖】三種染 无煩惱人三昧解脫見等染慢 應知

【房山摩提訖】三種染 無煩惱人三昧解脫見等染慢 應知

【大正摩提訖】又 三種染 無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三 平等 應知

【福州摩提訖】又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三 平等此義應知

【興聖寺刊本】又 三種染慢無煩惱人三昧解脫見等染慢對治此故說三種平等此義應知

【大正留支訖】又復次爲三種染慢無煩惱人三昧解脫身等染慢對治此故說三種平等此義應知

七種具足煩惱性人

【真福寺本】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【興聖寺写本】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢／人二者求耳耳解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【科註法華論】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人（卷五、一裏）

【觀山版】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人（二十五表）

【智全会入本】何等七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【日藏会入本】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【論記所引】何者已下列：（一九四下八）

初何者七種下：（一九四下九）

【敦煌摩提訖】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【房山摩提訖】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【大正摩提訖】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【福州摩提訖】何者七種具足煩惱染性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人

【興聖寺刊本】何者七種具足煩惱 性人 一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者求大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人（卷下、第十二紙）
【大正留支訳】何者七種具足煩惱染性衆生一者求勢力人二者求聲聞解脫人三者 大乘人四者有定人五者無定人六者集功德人七者不集功德人（八中）

七種増上慢

【真福寺本】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心
（興聖寺写本注）云

【興聖寺写本】何等七種増上慢心 〇何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心
【科註法華論】七種増上慢 者顛倒求諸功德増上慢 （卷五、二裏）

【叡山版】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心
【智全会入本】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心
【日藏会入本】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心
【論記所引】論七種増上慢 者下…（一九五下一〇）

顛倒求諸功德増上慢者…（一九五下一一）

【敦煌摩提訳】七種増上慢 者顛倒求 功德増上慢

【房山摩提訳】七種増上慢 者顛倒求 功德増上慢

【大正摩提訳】七種増上慢 者顛倒求 功德増上慢 （二七下）

【福州摩提訳】七種増上慢心者云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心

【興聖寺刊本】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心

【大正留支訳】何等七種増上慢心 云何七種譬喩對治一者顛倒求諸功德増上慢心

（真福寺本注墨） 如是倒取

【真福寺本】謂 世間中諸煩惱熾然増上而求天人勝妙境界有漏果報 〇 對治此故爲説火宅譬喩應知（第二十四紙）
【興聖寺写本】〇 世間中諸煩惱 熾然増上而求天人勝妙境界有漏果報 對治此故 説火宅譬喩應知

151 150
「何」の上に補入記号が付されており、その上方欄外に「云」とある。
「世」の上に小さい丸印と「謂」の右下に倒置符が付されている。

【科註法華論】 以世 間 諸煩惱 熾然 而求天人 妙境 果報 對治此故 說火宅譬喻應知 (卷五、二裏)
【叡 山 版】 謂以世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報如是倒取對治此故爲說火宅譬喻應知
【智全会入本】 謂以世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報如是倒取對治此故爲說火宅譬喻應知
【日藏会入本】 謂以世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報如是倒取對治此故爲說火宅譬喻應知
【論記所引】 以世 門 諸煩惱下… (一九五下一一—一二) 對治已下… (一九五下一二)

故云熾然… (一九六上一)

故云而求天人 妙境 果報… (一九六上一—三)

言對治者… (一九六上一—三)

說火宅譬喻者… (一九六上一—五)

【敦煌摩提訖】 以世 間 諸煩惱 熾然 而求天人 妙境界 果報 對治此故 說火宅譬喻應知
【房山摩提訖】 以世 間 諸煩惱 熾然 而求天人 妙境界 果報 對治此故 說火宅譬喻應知
【大正摩提訖】 以世 間 諸煩惱 熾然 而求天人 妙境界 果報 對治此故 說火宅譬喻應知
【福州摩提訖】 以世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報 對治此故爲說火宅譬喻應知
【興聖寺刊本】 謂 世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報如是倒取對治此故爲說火宅譬喻應知
【大正留支訖】 謂 世 間中諸煩惱染熾然增上而求天人 勝妙境界有漏果報 對治此故爲說火宅譬喻應知

(真福寺本注墨)

向

【真福寺本】 二者聲聞人一切決定增上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知
【興聖寺写本】 二者耳耳人一向決定增上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 顛倒取對治此故 說窮子譬喻應知
【科註法華論】 聲聞人一向 增上慢 我乘與如來乘 無差別 如是 顛倒取對治此故 說窮子譬喻應知 (卷五、三裏)
【叡 山 版】 二者聲聞人一向決定增上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知
【智全会入本】 二者聲聞人一向決定增上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知

152 当該箇所は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷 (一九九頁下一四行目) では「天妙境」となっているが、『科註』卷五 (三丁表) 所引の『論記』では「天人妙境」となっている。ここでは、『科註』に依って「人」を補う。

153 「切」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【日藏会入本】二者聲聞人一向決定増上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知
【論記所引】 論聲聞人一向 増上慢者：（一九六上一二）

我乘與如來乘 無差別者：（一九六上一五）

爲顛倒：（一九六上一七）

說窮子譬：（一九六上一七）

【敦煌摩提訖】 聲聞人一向 増上慢 我乘與如來乘 无差別 如是顛倒取對治此故 說窮子譬喻應知

【房山摩提訖】 聲聞人一向 増上慢 我乘與如來乘 無差別 如是顛倒取對治此故 說窮子譬喻應知

【大正摩提訖】 聲聞人一向 増上慢 我乘與如來乘 無差別 如是顛倒取對治此故 說窮子譬喻應知

【福州摩提訖】二種聲聞人一向決定増上慢心自言我乘與如來乘 無差別故如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知

【興聖寺刊本】二者聲聞人一向決定増上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知

【大正留支訖】二者聲聞 一向決定増上慢心自言我乘與如來乘等無差別 如是 倒取對治此故爲說窮子譬喻應知

【真福寺本】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

【興聖寺寫本】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意无別耳耳辟支佛乘如是顛倒取對治此故 說雲雨譬喻應知（第十八紙）

【科註法華論】 大乘人一向 増上慢 無別聲聞辟支佛乘 顛倒取對治此故 說 雨譬喻應知（卷五、三裏）

【叡山版】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

【智全会入本】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

【日藏会入本】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

【論記所引】 論大乘人一向 増上慢者：（一九六下五） 對治已下：（一九六下七）

【敦煌摩提訖】 大乘人一向 増上慢 无別聲聞辟支佛乘 顛倒取對治此故 說 雨譬喻應知（三一九上）

【房山摩提訖】 大乘人一向 増上慢 無別聲聞辟支佛乘 顛倒取對治此故 說 雨譬喻應知

【大正摩提訖】 大乘人一向 増上慢 無別聲聞辟支佛乘 顛倒取對治此故 說 雨譬喻應知

【福州摩提訖】三者大乘人一向決定増上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

【興聖寺刊本】三者大乘人一向次定增口慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知¹⁵⁴
【大正留支訳】三者大乘 一向決定增上慢心起如是意無別聲聞辟支佛乘如是 倒取對治此故爲說雲雨譬喻應知

(真福寺本注墨) 謂

【真福寺本】四者實無而有增上慢心人以有世間有漏三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 到取對治此故爲說化城譬喻應知
【興聖寺写本】四者實無而有增上慢心 以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是顛倒取對治此故 說化城譬喻應知
【科註法華論】實無而有增上慢 人以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想 對治此故 說化城譬喻應知 (卷五、四表)
【叡山版】四者實無而有增上慢心 已有世間有漏三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知 (二十五裏)
【智全会入本】四者實無而有增上慢心 已有世間有漏三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知
【日藏会入本】四者實無而有增上慢心 已有世間有漏三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知
【論記所引】論實無而有增上慢 人者下… (一九六下一二) 以有已下… (一九六下一三)

故云以有世間 乃至生涅槃想 (一九六下一五)

三昧三摩跋提者… (一九六下一五) 對治已下… (一九七上三)

【敦煌摩提訳】實無而有增上慢 人以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想 對治此故 說化城譬喻應知
【房山摩提訳】實無而有增上慢 人以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想 對治此故 說化城譬喻應知
【大正摩提訳】實無而有增上慢 人以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想 對治此故 說化城譬喻應知
【福州摩提訳】四者實無而有增上慢 人以有世間 漏三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知
【興聖寺刊本】四者實無而有增上慢心 以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知
【大正留支訳】四者實無而有增上慢心 以有世間 三昧三摩跋提實無涅槃而生涅槃想如是 倒取對治此故爲說化城譬喻應知

【真福寺本】五者散乱增上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知
(興聖寺写本注) 慢

【興聖寺写本】五者散乱增上／心實無有定過去雖有大乘善根而／／

【科註法華論】散乱 心實無有定過去 有大乘善根而不覺知 (卷五、四裏)

【叡 山 版】五者散亂増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知
【智全会入本】五者散亂増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知
【日藏会入本】五者散亂増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知
【論記所引】論散亂 心下…（一九七上一三）

故云散亂 心實無有定…（一九七上一四）

故云過去 有大乘善根…（一九七上一五）

故云而不覺知…（一九七上一六一七）

【敦煌摩提詁】散乱 心實無有定過去 有大乘善根而不覺知

【房山摩提詁】散乱 心實無有定過去 有大乘善根而不覺知

【大正摩提詁】散亂 心實無有定過去 有大乘善根而不覺知

【福州摩提詁】五者散亂増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知

【興聖寺刊本】五者散乱増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知

【大正留支詁】五者散亂増上慢心實無有定過去雖有大乘善根而不覺知

（真福寺本注朱）

【真福寺本】不知覺故不求大乘 於陝劣心中生虛妄解 爲第一乘如是倒取對治此故爲說繫實珠譬喻應知

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】／／／不求大乘如是於殊¹⁵⁷劣 心中生虛妄解 以爲第一乘如是倒取對治此／ 說繫實珠譬／應知

【科註法華論】彼 不求大乘 於狹劣心中生虛妄解 以爲第一乘 對治此故 說繫實珠譬喻應知（卷五、五表）

【叡 山 版】不覺知故不求大乘 於狹劣心中生虛妄解 謂以爲第一乘如是倒取對治此故爲說繫實珠譬喻應知

【智全会入本】不覺知故不求大乘 於狹劣心中生虛妄解 謂以爲第一乘如是倒取對治此故爲說繫實珠譬喻應知

【日藏会入本】不覺知故不求大乘 於狹劣心中生虛妄解 謂以爲第一乘如是倒取對治此故爲說繫實珠譬喻應知

「謂」は、本文の「爲第一」の「爲」の右傍に書かれている。

墨書で「知」の上に小さい丸印と「覺」の右上に倒置符が付されている。

「Ⅱ」で示した箇所は、「小十刀」（上が「小」、下が「刀」）の字画からなる字であるが、その字の右傍には見せ消ち記号が付されており、その上方欄外には「劣」とある。

【論記所引】

乃至大乘等：（一九七上一七）

故云於狹劣心中生虛妄解 以爲第一乘：（一九七下一二三）

故云對治此故 說繫實珠譬喻：（一九七下四）

【敦煌摩提訖】 彼

不求大乘

於狹劣心中生虛妄解

以爲第一乘

對治此故

說繫實珠譬喻應知

【房山摩提訖】 彼

不求大乘

於狹劣心中生虛妄解

以爲第一乘

對治此故

說繫實珠譬喻應知

【大正摩提訖】 彼

不求大乘

於狹劣心中生虛妄解

以爲第一乘

對治此故

說繫實珠譬喻應知

【福州摩提訖】 不覺知故不求大乘

不覺知故不求大乘

於狹劣心中生虛妄解

以爲第一乘

對治此故

說繫實珠譬喻應知

【興聖寺刊本】 不覺知故不求大乘

不覺知故不求大乘

狹劣心中生虛妄解

爲第一乘

如是倒取

對治此故爲說繫實珠譬喻應知

【大正留支訖】 不覺知故不求大乘

狹劣心中生虛妄解謂

第一乘如是倒取對治此故爲說繫實珠譬喻應知

【真福寺本】 六者實有

功德

增上慢心聞

大乘法

取非大乘如是倒取對治此故爲說

王解 髻中明珠與之譬喻應知

【興聖寺寫本】 六者實有

功德

增上慢心聞

說大乘第一乘對治此而取非大乘如是倒取對治此故

說 王解 髻中明珠與之譬喻應知

【科註法華論】 有

功德人

說大乘

而取非大乘

對治此故 說 王解 髻中明珠與之譬喻應知

【觀山版】 六者實有

功德

增上慢心聞

說大乘

而取非大乘如是倒取對治此故爲說輪王解

髻中明珠與之譬喻應知

【智全會入本】 六者實有

功德

增上慢心聞

說大乘

而取非大乘如是倒取對治此故爲說輪王解

髻中明珠與之譬喻應知

【日藏會入本】 六者實有

功德

增上慢心聞

說大乘

而取非大乘始是倒取對治此故爲說輪王解

髻中明珠與之譬喻應知

【論記所引】

論有 功德人

說大乘者：（一九七下一一）

故云說大乘

而取非大乘：（一九七下一三）

治此執（一九七下一三一—一四）

故 說最上乘（一九七下一四）

故譬王解 髻中明珠與之（一九七下一四）

喻意（一九七下一四）

應知（一九七下一五）

【敦煌摩提訖】

有 功德人

說大乘法

而取非大乘

對治此故

說 王解

髻中明珠與之¹⁵⁸

譬喻應知

【房山摩提訖】有 功德人 說大乘法 而取非大乘 對治此故 說 王解 髻中明珠與之譬喻應知
【大正摩提訖】有 功德人 說大乘法 而取非大乘 對治此故 說 王解 髻中明珠與之譬喻應知
【福州摩提訖】六者 有實功德人增上慢心聞佛說大乘法 而取非大乘如是倒取對治此故爲說輪王解 髻中明珠與之譬喻應知
【興聖寺刊本】六者實有 功德 增上慢心聞 大乘 取非大乘如是倒取對治此故爲說 王解 髻中明珠與之譬喻應知 (卷下、第十三紙)
【大正留支訖】六者實有 功德 增上慢心聞 大乘 取非大乘如是倒取對治此故爲說輪王解自髻中明珠與之譬喻應知

【真福寺本】七者實无 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根故聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【興聖寺写本】七者實无 功德 增上慢心於第一乘不曾彼集諸善根故聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故 說醫師譬喻應知
【科註法華論】无 功德 人於第一乘不 集諸善根 說第一乘 不取 爲第一 對治此故 說醫師譬喻應知 (卷五、五裏)
【叡山版】七者實無 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根故聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【智全会入本】七者實無 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根故聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【日藏会入本】七者實無 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根故聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【論記所引】論無 功德 人下… (一九八上二)

故云於第一乘不 集 善根 聞說大乘 不取 爲大 (一九八上四—五)

治此病故… (一九八上五)

【敦煌摩提訖】无 功德 人於第一乘不 集諸善根 說第一乘 不取 爲第一 對治此故 說醫師譬喻應知
【房山摩提訖】无 功德 人於第一乘不 集諸善根 說第一乘 不取 爲第一 對治此故 說醫師譬喻應知
【大正摩提訖】无 功德 人於第一乘不 集諸善根 說第一乘 不取 爲第一 對治此故 說醫師譬喻應知
【福州摩提訖】七者 無實功德增上慢人於第一乘不曾脩集諸善根本聞說第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【興聖寺刊本】七者實無 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根故聞 第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知
【大正留支訖】七者實無 功德 增上慢心於第一乘不曾脩集諸善根本聞 第一乘心中不取以爲第一如是倒取對治此故爲說醫師譬喻應知

七種對治

【真福寺本】 第一人者示以世間中種種善根三昧功德方便令喜 然後令人入 涅槃故

【興聖寺写本】	第一人者	以世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大乘涅槃故
【科註法華論】	第一人者	以世間 種々善根三昧功德方便令	戲 後令入 涅槃故（卷五、六裏）
【叡山版】	第一人者示	世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大 涅槃故（二十六表）
【智全会入本】	第一人者示	世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大 涅槃故
【日藏会入本】	第一人者示	世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大 涅槃故
【論記所引】	論第一人者已下…（一九九下一七）		
【敦煌摩提詁】	第一人者	以世間 種種善根三昧功德方便令	戲 後令入 涅槃故者…（二〇〇上一二）
【房山摩提詁】	第一人者	以世間 種種善根三昧功德方便令	戲 後令入 涅槃故
【大正摩提詁】	第一人者	以世間 種種善根三昧功德方便令	戲 後令入 涅槃故（一八上）
【福州摩提詁】	第一人者	以世間 種種善根三昧功德方便令喜	戲然後令入大 涅槃故
【興聖寺刊本】	第一人者示	世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大 涅槃故
【大正留支詁】	第一人者示	世間中種種善根三昧功德方便令喜	然後令入大 涅槃故
【真福寺本】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【興聖寺写本】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【科註法華論】	第二人者以三爲一令入大乘故		（卷五、七表）
【叡山版】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【智全会入本】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【日藏会入本】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【論記所引】	論 ¹⁶⁰ 第二人者以三爲一令入大乘故者…（二〇二上一）		
【敦煌摩提詁】	第二人者以三爲一令入大乘故		
【房山摩提詁】	第二人者以三爲一令入大乘故		

「以」は、『智全』巻上と『日藏』（二〇六頁上一〇行目）にはないが、『科註』巻五（七丁表）所引の『論記』にはある。ここでは、『科註』に依って「以」を補う。

【大正摩提訖】 第二人者以三爲一令入大乘故
【福州摩提訖】 第二人者以三爲一令入大乘故
【興聖寺刊本】 第二人者以三爲一令入大乘故
【大正留支訖】 第二人者以三爲一令入大乘故（八下）

（真福寺本注朱）
異

【真福寺本】 第三人者令知種種乘。諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生牙故
【興聖寺写本】 第三人者令知種種乘 諸佛如來平等說法隨法諸衆生善根種子而生牙故
【科註法華論】 第三人者令知種々乘 諸佛如來平等說法隨 衆生善根種子 生牙故（卷五、七裏）
【叡山版】 第三人者令知種種乘異諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生牙故
【智全会入本】 第三人者令知種種乘異諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生芽故（卷七本、二〇三上）
【日藏会入本】 第三人者令知種種乘異諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生芽故（卷七本、二〇六下）
【論記所引】 論 第三人者令知種種乘下…（二〇三上五）

【敦煌摩提訖】 第三人者令知種と乘 諸佛如來平等說法隨 衆生善根種子 生牙故
【房山摩提訖】 第三人者令知種種乘 諸佛如來平等說法隨 衆生善根種子 生芽故（第二十一紙）
【大正摩提訖】 第三人者令知種種乘 諸佛如來平等說法隨 衆生善根種子 生芽故
【福州摩提訖】 第三人者令知種種乘 諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生芽故
【興聖寺刊本】 第三人者令知種種乘異諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生芽故
【大正留支訖】 第三人者令知種種乘 諸佛如來平等說法隨 諸衆生善根種子而生芽故

（真福寺本注墨）
故涅槃城

【真福寺本】 第四人者方便令入涅槃城。者所謂諸 禪三昧城 過彼城已然後令入大 涅槃城故（第二十五紙）
（興聖寺写本注） 涅槃
【興聖寺写本】 第四人者方便令入涅槃城／真城者所謂諸 禪三昧城 過彼城已然後令入大 涅槃城故

同上の当該箇所（五二三行目）では、「憶」と翻刻しているが、原本の字は、人偏に「意」の旁であるため、「億」に訂正する。

【科註法華論】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 諸 禪三昧城 過彼城已 令入大 涅槃城故（卷五、八表）

【叡山版】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸佛禪三昧城故過彼城已然後令入大 涅槃城故

【智全会入本】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸佛／三昧城故過彼城已然後令入大 涅槃城故

【日藏会入本】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸佛禪三昧城故過彼城已然後令入大 涅槃城故

【論記所引】 論 第四人者已下…（二〇八上一二）

初方便下施權（二〇八上一二） 後過彼下顯實…（二〇八上一二三）

過彼城已 令入大 涅槃城故者…（二〇八上一五）

【敦煌摩提詁】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 諸 禪三昧城 過彼城已 令入大 般涅槃城故

【房山摩提詁】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 諸 禪三昧城 過彼城已 令入大 般涅槃城故

【大正摩提詁】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 諸 禪三昧城 過彼城已 令入大 涅槃城故

【福州摩提詁】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸 禪三昧城 過彼城已然後令入大 般涅槃城故

【興聖寺刊本】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸 禪三昧城 過彼城已然後令入大 涅槃城故

【大正留支詁】 第四人者方便令入涅槃城故涅槃城者 所謂諸 禪三昧城 故過彼城已然後令入大 涅槃城故

【真福寺本】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【興聖寺写本】 第五人者示現過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【科註法華論】 第五人者示 過去 善根令憶念 教令人三昧故（卷五、八裏）

【叡山版】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【智全会入本】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【日藏会入本】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【論記所引】 論 第五人者已下…（二二三下六）

示現過去 善根令憶念者…（二二三下六七）

教令人三昧故者…（二二三下七）

「第」の前の「故」の上には小さい丸印があり、「第」の右傍には倒置符のような墨付けが確認されるが、意味上は「故」と「第」を置き換える必要がない。

【敦煌摩提訳】 第五人者示 過去 善根令憶念 教 入三昧故
【房山摩提訳】 第五人者示 過去 善根令憶念 教 入三昧故
【大正摩提訳】 第五人者示 過去 善根令憶念 教 入三昧故
【福州摩提訳】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故
【興聖寺刊本】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故
【大正留支訳】 第五人者示其過去所有善根令憶念已然後教令人三昧故

【真福寺本】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【興聖寺写本】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【科註法華論】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故（卷五、八裏）
【叡山版】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【智全会入本】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【日藏会入本】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【論記所引】 論第六人者説大乘法已下：（二二四下六）

文云説大乘經以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故：（二二四下八一〇）

【敦煌摩提訳】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【房山摩提訳】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【大正摩提訳】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【福州摩提訳】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故（第十八紙）
【興聖寺刊本】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故
【大正留支訳】 第六人者説大乘法以此法門同十地行滿諸佛如來密與授記故

【真福寺本】 第七人者根本 焚爲令焚故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻

【興聖寺寫本】 第七人者根未 熒爲令熒故如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【科註法華論】 第七人者根未 熒爲令熒故 示現 涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻（卷五、十表）
 【叡山版】 第七人者根未 純熟爲令熟故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【智全会入本】 第七人者根未 純熟爲令熟故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【日藏会入本】 第七人者根未 純熟爲令熟故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【論記所引】 論 第七人者根未 熟爲令熟故 示現 涅槃量者…（二二六下一六）
 爲此下結…（二二七下一〇）
 【敦煌摩提訖】 第七人者根未 孰爲令孰故 示現 涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【房山摩提訖】 第七人者根未 熟爲令熟故 示現 涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【大正摩提訖】 第七人者根未 熟爲令熟故 示現 涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【福州摩提訖】 第七人者根未 淳熟爲令熟故 示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【興聖寺刊本】 第七人者根未 淳熟爲令熟故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說此七種譬喻
 【大正留支訖】 第七人者根未 淳熟爲令熟故 如是示現得涅槃量爲是義故如來說 七種譬喻

三種平等

三種無煩惱人染慢

【真福寺本】 何等三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
 【興聖寺寫本】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
 【科註法華論】 何者三種無煩惱人 染慢 顛倒信故 （卷五、十裏）
 【叡山版】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三（二二六裏）
 【智全会入本】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
 【日藏会入本】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
 【論記所引】 何者三種已下…（二九四下一〇）
 論何者三種無煩惱人 染慢 顛倒 故下…（二二七下一四）

164

【敦煌摩提訳】 何者三種无煩惱人 染慢 顛倒信故
【房山摩提訳】 何者三種無煩惱人 染慢 顛倒信故
【大正摩提訳】 何者三種無煩惱人 染慢 顛倒信故
【福州摩提訳】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
【興聖寺刊本】 何等三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三
【大正留支訳】 何者三種無煩惱人三種染慢所謂三種顛倒信故何等爲三

【真福寺本】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等 應知
【興聖寺写本】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等 應知
【科註法華論】 一者信種々乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染 說三種平等 應知（卷五、十一表）
【叡山版】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等此義應知
【智全会入本】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等此義應知
【日藏会入本】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等此義應知
【論記所引】 論一者信種種乘已下：（二八上一六） 論爲對治此三種染 說三種平等已下：（二八下二）

【敦煌摩提訳】 一者信種と乗 二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染 說三種平等 應知
【房山摩提訳】 一者信種種乘 二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染 說三種平等 應知
【大正摩提訳】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染 說三種平等 應知
【福州摩提訳】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等 應知
【興聖寺刊本】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等 應知
【大正留支訳】 一者信種種乘異二者信世間涅槃異三者信彼此身異爲對治此三種染慢故說三種平等 應知

【真福寺本】 何者爲名三種平等云何對治一者乘平等謂与聲聞授菩提¹⁶⁵記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故
（興聖寺写本注） 提

「薩」の左傍に傍線、右傍に見せ消し記号が付されており、その上方欄外には「提」とある。

【興聖寺写本】何者名爲三種平等云何對治一者乘平等謂與聲聞授菩薩¹⁶⁵記唯有大乘无二乘故是乘平等无差別故

【科註法華論】一者乘平等 與聲聞授 記唯有大乘無二乘故 (卷五、十二裏)

【叡山版】何者名爲三種平等云何對治一者乘平等謂與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故

【智全会入本】何者名爲三種平等云何對治一義乘平等謂與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故

【日藏会入本】何者名爲三種平等云何對治一義乘平等謂與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故

【論記所引】論一者乘平等下…(二一八下六)

與聲聞 記三釋大綱(二一八下八)

唯有下文也…(二一八下八)

故云唯有大乘無二乘故…(二一八下九—一〇)

【敦煌摩提訖】一者乘平等 與聲聞授 記唯有大乘无二乘故

【房山摩提訖】一者乘平等 與聲聞授 記唯有大乘無二乘故

【大正摩提訖】一者乘平等 與聲聞授 記唯有大乘無二乘故

【福州摩提訖】何者名／三種平等云何對治一者乘平等 與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別也

【興聖寺刊本】何者名爲三種平等云何對治一者乘平等謂與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故(卷下、第十四紙)

【大正留支訖】何者名爲三種平等云何對治一者乘平等謂與聲聞授菩薩記唯有大乘無二乘故是乘平等无差別故

【真福寺本】二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等无差別故

【興聖寺写本】二者世間 并 平等以多寶如來入於 𡇗𡇗 世間涅槃彼此平等无差別故

【科註法華論】二者世間涅槃平等以多寶如來入 涅槃世間涅槃 平等 故(卷五、十一裏)

【叡山版】二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等无差別故

【智全会入本】二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等无差別故

【日藏会入本】二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等无差別故

【論記所引】論一者世間涅槃平等下…(二一八下一四)

多寶一文而已（二一九上五）

【敦煌摩提訖】 二者世間涅槃平等以多寶如來入 涅槃世間涅槃 平等 故（三一九下）

【房山摩提訖】 二者世間涅槃平等以多寶如來入 涅槃世間涅槃 平等 故

【大正摩提訖】 二者世間涅槃平等以多寶如來入 涅槃世間涅槃 平等 故

【福州摩提訖】 二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等無差別故

【興聖寺刊本】 二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等無差別故

【大正留支訖】 二者世間涅槃平等以多寶如來入於涅槃世間涅槃彼此平等無差別故

【真福寺本】 三者法身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故¹⁶⁷

【興聖寺寫本】 三者 身平等多寶如來已入 并 復示現身自身他身／平等無差別故

【科註法華論】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故（卷五、十二表）

【叡山版】 三者法身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

【智全会入本】 三者法身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

【日藏会入本】 三者法身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

【論記所引】 論三者 身平等已下：（二一九上八）

多寶已下：（二一九上二〇）

言多寶如來已入涅槃復示現身者：（二一九上三一—四）

自身是多寶佛（二一九上二六）

他身是衆生：（二一九上二六—二七）

自他 平等無差別故：（二一九下四）

【敦煌摩提訖】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

【房山摩提訖】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

【大正摩提訖】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等無差別故

167 「法」の中央に、朱書で小さい丸印が付されている。

【福州摩提訖】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等 無差別故
【興聖寺刊本】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等 無差別故
【大正留支訖】 三者 身平等多寶如來已入涅槃復示現身自身他身法身平等 無差別故

授記所由

【真福寺本】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【興聖寺寫本】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【科註法華論】 是 無煩惱人染慢 見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身 平等故 (卷五、十三表)
【叡山版】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【智全會入本】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【日藏會入本】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【論記所引】 論是 無煩惱人下… (二一九下九)

故見彼此 所作差別… (二一九下一一)

論以不知彼此下… (二一九下一七)

凡聖佛性法身 平等… (二二〇上一)

【敦煌摩提訖】 是 無煩惱人染慢 見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身 平等故
【房山摩提訖】 是 無煩惱人染慢 見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身 平等故
【大正摩提訖】 是 無煩惱人染慢 見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身 平等故
【福州摩提訖】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別以不知彼此佛性法身悉平等故
【興聖寺刊本】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別 不知彼此佛性法身悉平等故
【大正留支訖】 如是三種無煩惱人染慢之心見彼此身所作差別 不知彼此佛性法身悉平等故

【真福寺本】 即謂彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知
【興聖寺寫本】 即謂彼人我證此法 彼人不得此 對治 故與諸聲聞授／應知 (第十九紙)
【科註法華論】 即 彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知 (卷五、十三表)

【叡山版】即謂彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知（二十七表）
 【智全会入本】即謂彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知
 【日藏会入本】即謂彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知
 【論記所引】即 彼人下…（二二〇上丁）

彼人不得…（二二〇上四）

對治此故下結歸（二二〇上六）

【敦煌摩提訖】即 彼人我證此法 彼人不得此 對治 故與／聲聞授記應知
 【房山摩提訖】即 彼人我證此法 彼人不得此 對治 故與諸聲聞授記應知
 【大正摩提訖】即 彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知
 【福州摩提訖】即 彼人我證此法故彼人不得此法 對治 故與諸聲聞授記應知
 【興聖寺刊本】即謂彼人我證此法 彼人不得 對治此故與諸聲聞授記應知
 【大正留支訖】謂即 此人我證此法故彼人不得此 對治 故與諸聲聞授記應知

声聞菩薩得記不同

【真福寺本】彼聲聞等 爲實成佛故與授記爲不成佛與授記耶
 【興聖寺写本】彼聲聞菩薩 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記也
 【子注法華論】彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記耶（卷下、第十七紙二面）
 【科註法華論】彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記也（卷五、十三裏）
 【叡山版】問曰彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記耶
 【智全会入本】問曰彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記耶（卷七末、二二〇下）
 【日藏会入本】問曰彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記耶（卷七末、二二四下）
 【論記所引】論彼聲聞等下…（二二〇下六）
 問諸聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記…（二二〇下八—九）
 【敦煌摩提訖】彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記也
 【房山摩提訖】彼聲聞等 爲實成佛故與授記 記爲不成佛與授記也

【大正摩提訖】 彼聲聞等 爲實成佛故與授 記爲不成佛與授記也

【福州摩提訖】 問曰彼聲聞等 爲實成佛故與授 記爲不成佛與授記也

【興聖寺刊本】 彼聲聞等 爲實成佛故與授 記爲不成佛與授記耶

【大正留支訖】 問曰彼聲聞等 爲實成佛故與授 記爲不成佛與授記耶

【真福寺本】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何 虛妄與之授記

【興聖寺寫本】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何 虛妄 授記

【子注法華論】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種々功德若不成佛者云何 靈妄與之授記

【科註法華論】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量 功德若不成佛者云何 虛妄 授記 (卷五、十四表)

【觀山版】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何 虛妄與之授記

【智全會入本】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何 虛妄與之授記

【日藏會入本】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何 虛妄與之授記

【論記所引】 若不成者 虛妄 授記… (一一〇下111)

【敦煌摩提訖】 若實成佛者菩薩何故／无量劫脩集无量 功德若不成佛者云何 虛妄 授記

【房山摩提訖】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量 功德若不成佛者云何 虛妄 授記

【大正摩提訖】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量 功德若不成佛者云何 虛妄 授記

【福州摩提訖】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何與之虛妄 授記

【興聖寺刊本】 若實成佛者菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛者云何與之虛妄 授記

【大正留支訖】 若實成佛 菩薩何故於無量劫脩集無量種種功德若不成佛 云何與之虛妄 授記

(真福寺本注朱) 謂聲聞

【真福寺本】 彼聲聞等得授記者得決定心非 成就法性故

【興聖寺寫本】 彼聲聞等得授記者得決定心非 成就法性故

【子注法華論】 彼聲聞等得授記者得決定心非 謂聲聞成就法性故 (卷下、第十七紙三面)

【科註法華論】 彼聲聞 授記者得決定心非 成就法性故 (卷五、十四表)

【叡山版】	答曰彼聲聞等得授記者得決定心非謂聲聞成就法性故		
【智全会入本】	答曰彼聲聞等得授記者得決定心非謂聲聞成就法性故		
【日藏会入本】	答曰彼聲聞等得授記者得決定心非謂聲聞成就法性故		
【論記所引】	論彼聲聞授記者下…(二二上三)		
	初令得決定心故(二二上四)		
	非	爲成就法性(二二上四)	
	故云得決定心非	成就法性故(二二上二〇—二二)	
【敦煌摩提訖】	彼聲聞授記者得決定心非	成就法／故	
【房山摩提訖】	彼聲聞授記者得決定心非	成就法性故	
【大正摩提訖】	彼聲聞授記者得決定心非	成就法性故	
【福州摩提訖】	荅曰彼聲聞授記者得決定心非謂聲聞成就法性故		
【興聖寺刊本】	彼聲聞等得授記者得決定心非謂聲聞成就法性		
【大正留支訖】	答曰彼聲聞等得授記者得決定心非謂聲聞成就法性		
【真福寺本】	如來依彼三種平等說一乘法故		
【興聖寺写本】	如來依彼三種平等說一乘法故		
【科註法華論】	如來依三種平等說一乘法故(卷五、十四表)		
【叡山版】	如來依彼三種平等說一乘法故		
【智全会入本】	如來依彼三種平等說一乘法故		
【日藏会入本】	如來依彼三種平等說一乘法故		
【論記所引】	次依三種平等說一乘法故(二二上五)		
【敦煌摩提訖】	如來依三種平等說一乘法故		
【房山摩提訖】	如來依三種平等說一乘法故		
【大正摩提訖】	如來依三種平等說一乘法故		
【福州摩提訖】	如來依三種平等說一乘法故		

【興聖寺刊本】如來依彼三種平等說一乘法

【大正留支訳】如來依彼三種平等說一乘法（九上）

【真福寺本】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足（第二十六紙）

【興聖寺写本】以如來法身与彼聲聞法身平等无量故与授記非即具足脩行功德故是／菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【科註法華論】以如來法身与彼聲聞法身無異故与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足（卷五、十四表）

【觀山版】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【智全会入本】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【日藏会入本】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【論記所引】後以佛 法身 無異故 与 記非爲具足脩行功德故…（二二上五一六）

是故菩薩下…（二二上七七）

論文是故菩薩功德具足…（二二上二五一六）

【敦煌摩提訳】以如來法身与彼聲聞法身 无異故 与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【房山摩提訳】以如來法身与彼聲聞法身 無異故 与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【大正摩提訳】以如來法身与彼聲聞法身 無異故 与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【福州摩提訳】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故 与授記非即具足脩行功德故是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【興聖寺刊本】以如來法身与彼聲聞法身平等無異故 与授記非即具足脩行功德 是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

【大正留支訳】以佛 法身 聲聞法身平等無異故 与授記非即具足脩行功德 是故菩薩功德具足諸聲聞人功德未具足

受記不同

【真福寺本】言授記者有六處示現五 是如來記一者菩薩記

【興聖寺写本】言授記者有六處示現五者是如來記一者菩薩記

【科註法華論】言授記者有六處示現五者 如來記一者菩薩記（卷五、十五表）

【觀山版】言授記者有六處示現五 是如來記一者菩薩記

【智全会入本】言授記者有六處示現五 是如來記一者菩薩記

【日藏会入本】言授記者有六處示現五 是如來記一者菩薩記
【論記所引】論言授記者 六處示現已下…（二二三上二七）

五者下…（二二三下二）

初五 如來記此別（二二三下二）

後一 菩薩記此通（二二三下二二三）

【敦煌摩提訖】言授記者有六處示現五者 如來記一者菩薩記

【房山摩提訖】言授記者有六處示現五者 如來記一者菩薩記

【大正摩提訖】言授記者有六處示現五者 如來記一者菩薩記

【福州摩提訖】言授記者有六處示現五者 如來記一者菩薩記

【興聖寺刊本】言授記者 六處示現五 是佛 記一 菩薩記

【大正留支訖】言授記者 六處示現五 是佛 記一 菩薩記

（真福寺本注朱）

【真福寺本】如來記者謂 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識 名号不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人。同一名故俱時與記

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】如來記者謂 舍利弗摩訶摩訶迦葉¹⁶⁸木¹⁶⁹所知識故名号不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時与記

【科註法華論】如來記者 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名号不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記（卷五、十五表）

【叡山版】如來記者謂 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名號不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記（二十七裏）

【智全会入本】如來記者謂 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名號不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記

【日藏会入本】如來記者謂 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名號不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記

【論記所引】如來記者已下…（二二三下三） 故云與別記（二二三下四）

滿願等五百 千二百人 名 俱時者…（二二三下四—五）

【敦煌摩提訖】如來記者 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名号不同故 与別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時与記

「ホ」の右傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「等」とある。

「II」で示した箇所は、「血+从」（上が「血」、下が「从」）の字画からなる字であるが、その字の右傍には「衆」とある。

【房山摩提訖】如來記者 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名不同故 與別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記（第二十二紙）

【大正摩提訖】如來記者 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名號不同故 與別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記（二八中）

【福州摩提訖】如來記者謂大德舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識故名号不同故 與別記富樓那等五百人等 千二百人等同一名故俱時與記

【興聖寺刊本】如來記者謂 舍利弗摩訶 迦葉等衆所知識 名号不同故 與別記富樓那等五百人 千二百人等同一名故俱時與記

【大正留支訖】如來記者謂 舍利弗大 迦葉等衆所知識 名號不同故別與 記富樓那等五百人 千二百 等同一名故俱時與記

【真福寺本】學無學等俱同一号又復非 衆所知識故一時与記

【興聖寺写本】与學无學等俱同一号又復非 衆所知識故一時與記

【科註法華論】學無學等俱同一号 非 衆所知識故一時與記（卷五、十五裏）

【觀山版】學無學等俱同一号又復非是衆所知識故一時與記

【智全会入本】學無學等俱同一號又復非是衆所知識故一時與記

【日藏会入本】學無學等俱同一號又復非是衆所知識故一時與記

【論記所引】名爲一時…（二三下一四）

【敦煌摩提訖】學无學等俱同一名 非 衆所知識故一時与記

【房山摩提訖】學無學等俱同一号 非 衆所知識故一時與記

【大正摩提訖】學無學等俱同一號 非 衆所知識故一時與記

【福州摩提訖】學無學等俱同一号又復非是衆所知識故一時與記

【興聖寺刊本】學無學等皆同一号又復非是衆所知識故同 與記

【大正留支訖】學無學等皆同一號又復非是衆所知識故同 與記

【真福寺本】与 提婆達多 記者示現如來無怨惡故

【興聖寺写本】与菩提婆達多 記者示現如來无怨惡故

【科註法華論】與 提婆達多 記者示現如來無怨 故（卷五、十六表）

【觀山版】與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故

【智全会入本】與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故

【日藏会入本】與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故

【論記所引】論與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故者：（二四上二）

【敦煌摩提訖】與 提婆達多 記者示現如來无怨惡故

【房山摩提訖】與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故

【大正摩提訖】與 提婆達多 記者示現如來無怨 故

【福州摩提訖】與 提婆達多授 記者示現如來無怨惡故

【興聖寺刊本】與 提婆達多 記者示現如來無怨惡故（卷下、第十五紙）

【大正留支訖】如來與彼提婆達多授別記者示現如來無怨惡故

【真福寺本】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家脩菩薩行者皆證佛果故

【興聖寺寫本】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【科註法華論】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故（卷五、十六裏）

【叡山版】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【智全会入本】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【日藏会入本】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【論記所引】論與比丘尼及諸天女 記者者：（二四下九）

示現已下：（二四下二一）

若俗若道修菩薩行 皆（二四下二一）

當證佛：（二四下二一—二三）

論云修菩薩行 皆證佛果：（二五上二—二）

【敦煌摩提訖】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家脩菩薩行者皆證佛果故

【房山摩提訖】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【大正摩提訖】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【福州摩提訖】與比丘尼及諸天女授佛 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【興聖寺刊本】與比丘尼及諸天女 記者示現女人在家出家修菩薩行者皆證佛果故

【大正留支記】 與比丘尼及諸天女授佛記者示現女人在家出家修菩薩行 皆證佛果故

【真福寺本】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚嘆 言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【興聖寺写本】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚嘆 言我不輕汝汝¹⁷⁰等皆當 作佛者示現 衆生皆有佛性故

【科註法華論】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現 禮拜讚歎 言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故 (卷五、十七裏)

【叡山版】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚歎作如是言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【智全会入本】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚歎作如是言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【日藏会入本】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚歎作如是言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【論記所引】 論菩薩授記者下：(二二六下一) 示現下釋：(二二六下四)

【敦煌摩提訳】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現 禮拜讚嘆 言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【房山摩提訳】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現 禮拜讚歎 言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【大正摩提訳】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現 禮拜讚歎 言我不輕汝汝等皆當 作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【福州摩提訳】 與授記菩薩授記者如下文不輕菩薩品中示現應知禮拜讚歎作如是言我不輕汝汝等皆當得作佛者示現諸衆生皆有佛性故

【興聖寺刊本】 菩薩授記者如 不輕菩薩品 示現應知禮拜讚嘆 言我不輕汝汝等皆當得作佛者示 諸衆生皆有佛性故

【大正留支記】 與授記菩薩 記者如下 不輕菩薩品中示現應知禮拜讚歎作如是言我不輕汝汝等皆當得作佛者示現 衆生皆有佛性故

声聞得記不得記

【真福寺本】 言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【興聖寺写本】 言聲聞 受記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【科註法華論】 言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞 (卷五、十八裏)

【叡山版】 言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【智全会入本】 言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【日藏会入本】 言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

170 拙稿「二〇二B」六四頁の当該箇所(五五二行目)では、「汝¹⁷⁰木等皆當」と翻刻しているが、「等」は翻刻ミスによる衍字であり、正確には「汝木皆當」(「木」は「等」の略字)である。

【論記所引】論言聲聞 授記者已下…（二二八上一〇）

一者決定下…（二二八上一二）

【敦煌摩提訖】言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞（三二〇上）

【房山摩提訖】言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【大正摩提訖】言聲聞 授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【福州摩提訖】言聲聞人得授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【興聖寺刊本】言聲聞人得授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【大正留支訖】言聲聞人得授記者聲聞有四種一者決定聲聞二者增上慢聲聞

【真福寺本】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者
（興聖寺写本）^提

【興聖寺写本】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者^提

【科註法華論】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者（卷五、十八裏）

【觀山版】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【智全会入本】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【日藏会入本】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【論記所引】二種聲聞下…（二二八上一三）

【敦煌摩提訖】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【房山摩提訖】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【大正摩提訖】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【福州摩提訖】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者（第十九紙）

【興聖寺刊本】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

【大正留支訖】三者退菩提心聲聞四者應化聲聞二種聲聞如來与授記謂應化聲聞退已還發菩提心者

「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「提」とある。

〔真福寺本注墨〕

【真福寺本】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

〔興聖寺写本注〕

【興聖寺写本】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【科註法華論】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【叡山版】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【智全会入本】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【日藏会入本】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【論記所引】 言根未熟 佛 不與 記者…（二二八下一―）

【敦煌摩提記】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【房山摩提記】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【大正摩提記】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【福州摩提記】 若決定者増上慢者 二種聲聞根未熟故如來不與授記應化聲聞是大菩薩與授記菩薩與授記者方便令發菩提心故

【興聖寺刊本】 決定 増上慢 二種聲聞根未熟故如來不與授記

【大正留支記】 若決定者増上慢者 二種聲聞根未熟故 不與授記

菩薩與 授記者方便令發菩提心故

三乘一乘

【真福寺本】 又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩薩¹⁷⁴提記

〔興聖寺写本注〕

【興聖寺写本】 又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩薩¹⁷⁴授記

【科註法華論】 又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞 授記（卷五、二十表）

174 173
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「提」とある。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

授記菩薩与

菩薩与 〇 授記者方便令發菩提心故

菩薩与授記菩薩与授記者方便令發菩提心故¹⁷³提

菩薩與授記菩薩 授記者方便令發菩提心故（卷五、十九表）

菩薩與授記菩薩 授記者方便令發菩提心故（二十八表）

菩薩與授記菩薩與授記者方便令發菩提心故

菩薩與授記菩薩 授記者方便令發菩提心故

論云菩薩與 記者方便令發 心故…（二二八下一七）

菩薩与授記菩薩与 記者方便令發 心故

菩薩與授記菩薩 授記者方便令發 心故

菩薩與授記菩薩 授記者方便令發 心故

菩薩與授記菩薩與授記者方便令發菩提心故

菩薩與授記菩薩與授記者方便令發菩提心故

菩薩與 授記者方便令發菩提心故

菩薩與 授記者方便令發菩提心故

【叡山版】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩提記

【智全会入本】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩提記

【日藏会入本】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩提記

【論記所引】論又依何義 故已下…(二三六下三)

問曰依何義理 佛 說三乘名爲一乘…(二三六下四)

依同義故已下…(二三六下五)

【敦煌摩提訖】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞 授記

【房山摩提訖】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞 授記

【大正摩提訖】又依何義 故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞 授記

【福州摩提訖】又依何義者故如來說三乘名爲一乘依同義故與諸聲聞大菩提記

【興聖寺刊本】又依何義 佛 說三乘名爲一乘依同義故授諸聲聞大菩提記

【大正留支訖】又依何義 佛 說三乘名爲一乘依同義故授諸聲聞大菩提記

【真福寺本】同義者以如來法身聲聞法身 平等無老別故以諸聲聞辟支佛 異乘 故有老別 以彼二乘非 大乘故

【興聖寺寫本】同義者以如來法身聲聞法身 平等無老別故以諸聲聞辟支佛 異乘 故有老別 以彼二乘非所 大乘故

【科註法華論】同義者以如來法身聲聞法身 平等無老別故以 聲聞辟支佛 異乘 故有老別 以彼 非 大乘故(卷五、二十表)

【叡山版】言同義者以如來法身聲聞法身彼此 平等無差別故以諸聲聞辟支佛等異乘 故有差別 以彼二乘非 大乘故

【智全会入本】言同義者以如來法身聲聞法身彼此 平等無差別故以諸聲聞辟支佛等異乘 故有差別 以彼二乘非 大乘故

【日藏会入本】言同義者以如來法身聲聞法身彼此 平等無差別故以諸聲聞辟支佛等異乘 故有差別 以彼二乘非 大乘故

【論記所引】法身 平等已下…(二三六下六)

以 聲聞已下…(二三六下六—七) 以彼 非 大乘故下…(二三六下七)

【敦煌摩提訖】同義者以如來法身聲聞法身 平等無老別故以 聲聞辟支佛 異乘 故有老別 以彼 非 大乘故

【房山摩提訖】同義者以如來法身聲聞法身 平等無差別故以 聲聞辟支佛 異乘 故有差別 以彼 非 大乘故

【大正摩提訖】同義者以如來法身聲聞法身 平等無差別故以 聲聞辟支佛 異乘 故有差別 以彼 非 大乘故

【福州摩提訖】言同義者以如來法身聲聞法身 平等無差別故以諸聲聞辟支佛 異乘不同故有差別不以彼二乘非 大乘故

【興聖寺刊本】言同義者以佛 法身聲聞法身彼此平等無差別故以諸聲聞辟支佛 異乘 故有差別 以彼二乘非 大乘故
【大正留支訳】言同義者以佛 法身聲聞法身彼此平等無差別故以諸聲聞辟支佛等 乘不同故有差別 以彼二乘非 大乘故

十無上

無上義

【真福寺本】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 二乘海中不說此義
【興聖寺写本】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 法中不說此義
【科註法華論】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 法中不說此義（卷五、二十表）
【叡山版】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 二乘法中不說此義
【智全会入本】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 二乘法中不說此義
【日藏会入本】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 二乘法中不說此義
【論記所引】故云不離我身是無上義…（二二六下一三）

一切二乘

法中（二二七上五）

未曾說此（二二七上五）

【敦煌摩提訳】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 法中不說此義
【房山摩提訳】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 法中不說此義
【大正摩提訳】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛 法中不說此義
【福州摩提訳】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛等二乘法中不說此義
【興聖寺刊本】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛等二乘法中不說此義
【大正留支訳】如來說言不離我身是無上義一切聲聞辟支佛等二乘法中不說此義

【真福寺本】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄（第二十七紙）

【興聖寺写本】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄

【科註法華論】以不能 解故 是 故諸菩薩 行菩薩行非爲虛妄（卷五、二十一表）

【叡山版】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄

【智全会入本】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄
【日藏会入本】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄
【論記所引】以不能解故…（二七上五）

是故菩薩下…（二七上六一七）

故云非爲虛妄（二七上九）

【敦煌摩提訖】以不能解故是故諸菩薩行／／非爲虛妄
【房山摩提訖】以不能解故是故諸菩薩行菩薩行非爲虛妄
【大正摩提訖】以不能解故是故諸菩薩行菩薩行非爲虛妄
【福州摩提訖】以其不能如實解故是故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄
【興聖寺刊本】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄
【大正留支訖】以其不能如實解故以是義故諸菩薩等行菩薩行非爲虛妄

（卷五、二十一表）

【真福寺本】無上義者自餘殘脩多羅明無上義／／有十種應知
【興聖寺寫本】無上義者自餘殘脩多羅明無上義無上義有十種應知
【科註法華論】無上義者餘殘脩多羅明無上義無上義有十種應知
【叡山版】無上義者自餘殘脩多羅明無上義無上義者有十種應知
【智全会入本】無上義者自餘殘脩多羅明無上義無上義者有十種應知
【日藏会入本】無上義者自餘殘脩多羅明無上義無上義者有十種應知
【論記所引】論無上義者餘殘脩多羅明已下…（二八下二）

論無上義下…（二八下七）

（敦煌摩提傍書）无
【敦煌摩提訖】／上義者餘殘脩多羅明無上義無上義有十種應知
【房山摩提訖】無上義者餘殘脩多羅明無上義無上義有十種應知
【大正摩提訖】無上義者餘殘脩多羅明無上義無上義有十種應知
【福州摩提訖】無上義者餘殘脩多羅明無上義無上義者略有十種應知何者爲十

【興聖寺刊本】 無上義者 餘殘修多羅明無上義無上義者略有十種此義應知何等爲十
【大正留支訳】 無上義者自餘 經文 明無上義無上義者略有十種此義應知何等爲十（九中）

一無上七無上

【真福寺本】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發 先所脩行善根不滅同後得果故
（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發 前所修行善根不滅同後得果故（第二十紙）

【科註法華論】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩／者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故（卷五、二十二表）

【叡山版】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故

【智全会入本】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故（卷八本、二三九上）

【日藏会入本】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故（卷八本、二四三上）

【論記所引】 論 一者示現種子無上故已下…（二三九上六）

故云示現種子無上故説 雨譬喻…（二三九下一〇一一）

論汝等下…（二四〇上四）

論謂發菩提心下…（二四〇上四—五）

故云謂發菩提心退已還發 前所修行善根不滅同後得果故…（二四〇上二—三）

【敦煌摩提訳】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故
【房山摩提訳】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故
【大正摩提訳】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故
【福州摩提訳】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故
【興聖寺刊本】 一者示現種子無上故説雲雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故（卷下、第十六紙）
【大正留支訳】 一者示現種子無上故説 雨譬喻汝等所行是菩薩道者謂發菩提心退已還發者前所修行善根不滅同後得果故

（真福寺本注朱）

修

故

【真福寺本】

二者示現

無上故說大通智勝如來本事等

176

【興聖寺写本】

二者示現明行

無上故說大通智勝如來本事等故

【科註法華論】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等故（卷五、二十三裏）

【叡山版】

二者示現修行

無上故說大通智勝如來本事等故（二十八裏）

【智全会入本】

二者示現修行

無上故說大通智勝如來本事等故

【日藏会入本】

二者示現修行

無上故說大通智勝如來本事等故

【論記所引】

論二者示現修行力無上故已下…（二四〇下三）

論云說大通智勝如來本事等故…（二四〇下一）

【敦煌摩提訳】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等故

【房山摩提訳】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等故

【大正摩提訳】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等故

【福州摩提訳】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等故

【興聖寺刊本】

二者示現修行

無上故說大通智勝如來本事等

【大正留支訳】

二者示現行

無上故說大通智勝如來本事等

【真福寺本】

三者示現增長力無上故說商主一譬喩

177

【興聖寺写本】

三者示現增長力無上故說商主譬喩

【科註法華論】

三者示現增長力無上故說商主譬喩（卷五、二十四表）

【叡山版】

三者示現增長力無上故說商主譬喩

【智全会入本】

三者示現増上力無上故說商主譬喩

【日藏会入本】

三者示現增長力無上故說商主譬喩

【論記所引】

論三者示現增長力無上故說商主譬喩者…（二四〇下一四）

【敦煌摩提訖】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【房山摩提訖】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【大正摩提訖】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【福州摩提訖】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【興聖寺刊本】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【大正留支訖】	三者示現增長力	无	上故說商主	譬喻
【真福寺本】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【興聖寺写本】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【科註法華論】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	(卷五、二十四裏)
【叡山版】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【智全会入本】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【日藏会入本】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【論記所引】	論四者示現令解	无	上說故繫實珠譬喻者：(二四一上一四)	
【敦煌摩提訖】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【房山摩提訖】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【大正摩提訖】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【福州摩提訖】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【興聖寺刊本】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【大正留支訖】	四者示現令解	无	上故說繫實珠譬喻	
【真福寺本】	五者示現清淨	國土	无	上故示現多寶如來塔
【興聖寺写本】	五者示現清淨	國土	无	上故示現多寶如來塔
【科註法華論】	五者示現清淨	國土	无	上故示現多寶如來塔(卷五、二十五表)
【叡山版】	五者示現清淨	國土	无	上故示現多寶如來塔

【智全会入本】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【日藏会入本】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【論記所引】 論五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔者…(二四一下四)

【敦煌摩提訖】 五者示現清淨 國土无上故示現多寶如來塔

【房山摩提訖】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【大正摩提訖】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【福州摩提訖】 五者示現清淨一切國土無上故示現多寶如來塔

【興聖寺刊本】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【大正留支訖】 五者示現清淨 國土無上故示現多寶如來塔

【真福寺本】 六者示現說無上故說 髻中明珠譬喻

【興聖寺写本】 六者示現說无上故說 髻中明珠譬喻

【科註法華論】 六者示現說无上故說 髻中明珠譬喻 (卷五、二十五裏)

【叡山版】 六者示現說無上故說解髻中明珠譬喻

【智全会入本】 六者示現說無上故說解髻中明珠譬喻

【日藏会入本】 六者示現說無上故說解髻中明珠譬喻

【論記所引】 論六者示現說無上故說 髻中明珠譬喻者…(二四二上一四)

【敦煌摩提訖】 六者示現說无上故說 髻中明珠譬喻

【房山摩提訖】 六者示現說無上故說 髻中明珠譬喻

【大正摩提訖】 六者示現說無上故說 髻中明珠譬喻

【福州摩提訖】 六者示現說無上故說 髻中明珠譬喻

【興聖寺刊本】 六者示現說無上故說解髻中明珠譬喻

【大正留支訖】 六者示現說無上故說解髻中明珠譬喻

(真福寺本注墨)

故

【真福寺本】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等。
【興聖寺写本】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【科註法華論】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故（卷五、二十六表）
【叡山版】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【智全会入本】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【日藏会入本】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【論記所引】 論七者示現教化衆生無上故下…（二四二下—一〇）
【敦煌摩提詁】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【房山摩提詁】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故（第二十三紙）
【大正摩提詁】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故（一八下）
【福州摩提詁】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等故
【興聖寺刊本】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等
【大正留支詁】 七者示現教化衆生無上故地中踊出無量菩薩摩訶薩等

八無上

【真福寺本】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提
（興聖寺写本注）
【興聖寺写本】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提¹⁷⁸
【科註法華論】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提¹⁷⁹（卷五、二十七裏）
【叡山版】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提
【智全会入本】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提
【日藏会入本】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提
【論記所引】 論八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提已下…（二四四上—四）

「薩」の右傍には傍線、左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外には「提」とある。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

【敦煌摩提訖】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提
 【房山摩提訖】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提
 【大正摩提訖】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提
 【福州摩提訖】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提
 【興聖寺刊本】 八者示現成大菩提無上者示現三種佛菩提
 【大正留支訖】 八者示現成大菩提無上故示現三種佛菩提故

【真福寺本】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 (興聖寺写本注) 提 應
 【興聖寺写本】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出尺氏宮去 伽耶城／遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【科註法華論】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故 (卷五、二十八裏)
 【叡山版】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【智全会入本】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故 (卷八末、二六〇下)
 【日藏会入本】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故 (卷八末、二六五下)
 【論記所引】 論一者 應化佛菩提已下：(二六〇下一七)

故云隨所應見而爲示現：(二六一上一二)

【敦煌摩提訖】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【房山摩提訖】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【大正摩提訖】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【福州摩提訖】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現故如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【興聖寺刊本】 一者 應化佛菩提隨所應見而爲示現 如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得 阿耨多羅三藐三菩提故
 【大正留支訖】 一者 示現 佛菩提隨所應見而爲示現 如經皆謂如來出釋氏宮去 伽耶城不遠坐於道場得成阿耨多羅三藐三菩提故

「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、「薩」の右傍に「提」とある。
 「應」と「見」の間に小さい丸印が付されており、その右傍に「應」とあるが、本諸本対校で「應應見」となっているテキストは見当たらない。
 「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「提」とある。

【真福寺本】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故
(興聖寺写本注)

【興聖寺写本】 二者 報佛菩提¹⁸³十地行満足得常^冊證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故

【科註法華論】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故 (卷五、三十表)

【觀山版】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故 (二十九表)

【智全会入本】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故

【日藏会入本】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛以來無量無邊百千萬億那由他劫故

【論記所引】 論二者 報佛菩提已下：(二六二上五)

十地有四：(二六二上六—七)

得常涅槃證者：(二六二上一〇)

論如經 我實成佛下：(二六二上一三一—四)

已來者：(二六二下一五)

量无

(敦煌摩提傍書) 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如^雖善男子我實成佛已來无／邊百千萬億那由他劫故 (三二〇下)

【房山摩提訊】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃^盤證故如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故

【大正摩提訊】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故

【福州摩提訊】 二者^{示現} 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故

【興聖寺刊本】 二者 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故

【大正留支訊】 二者^{示現} 報佛菩提十地行満足得常涅槃證故如經善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫故

(真福寺本注墨) 義

【真福寺本】 三者 洺佛菩提謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變 ◎故如經如來如實知見三界之相 乃至不如三界見於三界故

（興聖寺写本注）

【興聖寺写本】

三者

法佛菩薩¹⁸⁴謂如來藏性淨 并 常恒清涼不變

故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【科註法華論】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故（卷五、三十一裏）

【叡山版】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

義故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【智全会入本】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

義故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【日藏会入本】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

義故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【論記所引】

論三者

法佛菩薩提已下：（二六三下四）

論謂如來藏下：（二六三下七）

性淨涅槃者：（二六四上一）

故言謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變¹⁸⁵

故（二六四上一四—一五）

論如經

乃至

見於三界故：（二六四上一五）

【敦煌摩提訖】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【房山摩提訖】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【大正摩提訖】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【福州摩提訖】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

義故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【興聖寺刊本】

三者

法佛菩薩謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變

義故如經如來如實知見三界之相

乃至不如三界見於三界故

【大正留支訖】

三者

示現法佛菩薩提謂如來藏性淨涅槃常恒清涼不變等義

如經如來如實知見三界之相 次第乃至不如三界見於三界故

【真福寺本】

三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故無有生死若退若出者謂常恒清

涼不變義故

【興聖寺写本】

三界相者謂衆生界即 并 界不離衆生界有如來藏故無有生死若有若出者謂常恒清

涼不反義故

【科註法華論】

三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故無有生死若退若出者謂常恒清

涼不變 故（卷五、三十三表）

【叡山版】

三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故無有生死若退若出者謂常恒清

涼不變義故

185 184 「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「提」とある。

当該箇所は、『智全』巻上と『日藏』第二十三卷（二六九頁上九行目）では「常性清淨」となっているが、『科註』巻五（三十二丁裏）所引の『論記』では「常恒清淨」となっている。また、同箇所『科註』所引の『論記』の「淨」には、右傍に「涼イ」との異本注記がある。ここでは、『科註』とその異本注記に依って校訂した「常恒清涼」のテキストを用いる。

【智全会入本】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變**義**故

【日藏会入本】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變**義**故

【論記所引】 論三界相者下…（二六四下）

故云謂衆生界即涅槃界…（二六五上二六一一七）

故云不離 有 藏…（二六五下）

即是不離（二六五下）

三界衆生 有如來藏…（二六五下）

論無有生死若退若出者謂常恒清淨 不變 故者…（二六五下）

【敦煌摩提訖】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變 故

【房山摩提訖】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變 故

【大正摩提訖】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變 故

【福州摩提訖】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清淨清涼不變**義**故

【興聖寺刊本】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變**義**故

【大正留支訖】 三界相者謂衆生界即涅槃界不離衆生界有如來藏故**無**有生死若退若出者謂常恒清涼不變**義**故

【真福寺本】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**躰**不即衆生界不離衆生界故

【興聖寺写本】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**躰**不即衆生界不離衆生界故

【科註法華論】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故（卷五、三十四裏）

【叡山版】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故

【智全会入本】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故（卷九本、二六六下）

【日藏会入本】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故（卷九本、二七一上）

【論記所引】 論亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故者…（二六六下五—六）

【敦煌摩提訖】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故

【房山摩提訖】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故

【大正摩提訖】 亦無在世及滅度者謂如來藏真如之**體**不即衆生界不離衆生界故

「四」の上の「有」の右傍には、見せ消ち記号が付されている。

【福州摩提訖】

亦無在世及滅度者謂如來藏真如之體不即衆生界不離衆生界故

【興聖寺刊本】

亦無在世及滅度者謂如來藏真如之體不即衆生界不離衆生界故（卷下、第十七紙）

【大正留支訖】

亦無在世及滅度者謂如來藏真如之體不即衆生界不離衆生界故

（真福寺本注朱）

相

【真福寺本】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種。者是無常故（第二十八紙）

（興聖寺写本注）

非

【興聖寺写本】

非實。虛非如非真者謂離四種／故有有¹⁸⁶四種相者是無常故

【科註法華論】

非實非虛非如非異者謂離四種相故有 四種相者是無常故（卷五、三十五裏）

【叡山版】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故

【智全会入本】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故

【日藏会入本】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故

【論記所引】

論 非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故者：（二六七下一二）

【敦煌摩提訖】

非實非虛非如非異者謂離四種相故有 四種相者是無常故

【房山摩提訖】

非實非虛非如非異者謂離四種相故有 四種相者是無常故

【大正摩提訖】

非實非虛非如非異者謂離四種相故有 四種相者是無常故

【福州摩提訖】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故（第二十紙）

【興聖寺刊本】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故

【大正留支訖】

非實非虛非如非異者謂離四種相 有 四種相者是無常故

【真福寺本】

不如三界見於三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無 錯謬故

【興聖寺写本】

不如三界見於三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來現見无 錯謬故

【科註法華論】

不如三界見 三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故（卷五、三十七裏）

「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

【叡山版】

不如三界見於三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故

【智全会入本】

不如三界見於三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故

【日藏会入本】

不如三界見於三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故

【論記所引】

論不如三界見 三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故者…(二六九上二〇—二二)

【敦煌摩提傍書】

論是故經言如來明見無 錯謬故者…(二六九下四)

【敦煌摩提傍書】

不如三界見 三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無 錯謬故

【房山摩提傍書】

不如三界見 三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故

【大正摩提傍書】

不如三界見 三界者 如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故 (一九上)

【福州摩提傍書】

不如三界見 三界者 謂佛如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無 錯謬故

【興聖寺刊本】

不如三界見於三界者 謂佛如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無 錯謬故

【大正留支訳】

不如三界見於三界者 謂佛如來能見能證真如法身凡夫不見故是故經言如來明見無有錯謬故

【真福寺本】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿 非謂菩提不滿足故

【興聖寺写本注】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故

【科註法華論】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故 (卷五、三十九裏)

【叡山版】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故 (二十九裏)

【智全会入本】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故

【日藏会入本】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故

【論記所引】

論我本行菩薩道今猶未滿者已下…(二七〇下一六)

【言行菩薩道】

未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟者…(二七一上五—六)

【敦煌摩提傍書】

我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿 非謂菩提不滿足故 (二七一下八)

【房山摩提訖】 我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故
【大正摩提訖】 我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故
【福州摩提訖】 我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足故
【興聖寺刊本】 我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足也
【大正留支訖】 我本行菩薩道今猶未滿者以本願故衆生界未盡願非究竟故言未滿者非謂菩提不滿足也
(九下)

(真福寺本注墨) 善

【真福寺本】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常命。巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【興聖寺寫本】 所成壽命復倍上數者此文宗 示現如來 常命 巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【科註法華論】 所成壽命復倍上數者 示現如來 常命 方便顯多數 過上數量不可數知故(卷五、四十一裏)
【叡山版】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常命善巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【智全會入本】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常命善巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【日藏會入本】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常命善巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【論記所引】 論所成壽命復倍上數者下：(二七一下一一)
初示現如來 常命者：(二七一下一一二)
方便已下：(二七一下一二)
假喻顯多：(二七一下一三)

【敦煌摩提訖】 所成壽命復倍上數者 示現如來 常命 方便顯多數 過上數量不可數知故
【房山摩提訖】 所成壽命復倍上數者 示現如來 常命 方便顯多數 過上數量不可數知故
【大正摩提訖】 所成壽命復倍上數者 示現如來 常命 方便顯多數 過上數量不可數知故
【福州摩提訖】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常念善巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【興聖寺刊本】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常命善巧方便顯多數 過上數量不可數知故
【大正留支訖】 所成壽命復倍上數者此文 示現如來 常 善巧方便顯多數故過上數量不可數知

(真福寺本注朱) 毀

【真福寺本】 我淨土 不壞而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【興聖寺写本】 我淨土第一義諦之所攝故 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【科註法華論】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦 攝故（卷五、四十二裏）

【叡山版】 我淨土 不壞而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【智全会入本】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【日藏会入本】 我淨土 不壞而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【論記所引】 論我淨土 不毀下…（二七五上三）

見燒者…（二七五上三）

論言報佛如來真實淨土第一義諦 攝故者…（二七六下四）

【敦煌摩提訳】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦 攝故

【房山摩提訳】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦 攝故

【大正摩提訳】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦 攝故

【福州摩提訳】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【興聖寺刊本】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

【大正留支訳】 我淨土 不毀而衆見燒盡者報佛如來真實淨土第一義諦之所攝故

九無上・十無上

【真福寺本】 九者示現涅槃無上故說醫師譬喻

【興聖寺写本】 九者示現 友 无上故說醫師譬喻

【科註法華論】 九者示現涅槃無上故說醫師譬喻（卷五、四十四表）

【叡山版】 九者示現涅槃無上故說醫師譬喻

【智全会入本】 九者示現涅槃無上故說醫師譬喻

【日藏会入本】 九者示現涅槃無上故說醫師譬喻

【論記所引】 論九者示現涅槃無上故說醫師譬喻者…（二七七下二）

論醫師者…（二八二下三）

【敦煌摩提訳】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩
【房山摩提訳】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩
【大正摩提訳】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩
【福州摩提訳】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩
【興聖寺刊本】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩
【大正留支訳】 九者示現涅槃無上故説醫師譬喩

(真福寺本注朱)

經文¹⁸⁸

【真福寺本】 十者示現勝妙力 無上故自餘殘脩多羅説示現應知¹⁸⁹
【興聖寺写本】 十者示現勝妙力 無上故自餘殘脩多羅説示現應知
【科註法華論】 十者示現勝妙力 無上故説餘殘脩多羅 應知(卷六、一表)
【叡山版】 十者示現勝妙力 無上故自餘殘脩多羅説示現應知
【智全会入本】 十者示現勝妙力 無上故自餘殘脩多羅説示現應知(卷九末、二八四下)
【日藏会入本】 十者示現勝妙力 無上故自餘殘脩多羅説示現應知(卷九末、二八九下)
【論記所引】 論十者示現勝妙力 無上故下：(二八四下一六)
餘殘脩多羅説 應知者：(二八五上一)
【敦煌摩提訳】 十者示現勝妙力 無上故 餘殘脩多羅説 應知
【房山摩提訳】 十者示現勝妙力 無上故 餘殘脩多羅説 應知
【大正摩提訳】 十者示現勝妙力 無上故説餘殘脩多羅 應知
【福州摩提訳】 十者示現勝妙力 無上故 餘殘脩多羅説 應知
【興聖寺刊本】 十者示現勝妙力 無上故 餘殘脩多羅説示現應知
【大正留支訳】 十者示現勝妙力 無上故自餘 經文 示現應知

「經文」は、本文の「殘脩」の右傍付近に書かれており、その行の上方欄外には「或本」とある。
「餘殘脩多羅」の各字左傍に、朱書で小さい丸印が付されている。

多宝如来塔

【真福寺本】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【興聖寺写本】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【科註法華論】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故（卷六、二表）
【叡山版】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【智全会入本】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【日藏会入本】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【論記所引】	論多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者下…（二八五下三）

初示現諸佛實相境界中者…（二八五下一〇）

【敦煌摩提訖】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【房山摩提訖】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【大正摩提訖】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【福州摩提訖】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【興聖寺刊本】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故
【大正留支訖】	多寶如来塔顯示	一切佛土清淨者示現諸佛實相境界中種種衆寶間錯莊嚴故

【真福寺本】	示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶	八者同一塔坐
【興聖寺写本】	示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現无量佛六者離穢七者多寶塔八者同一塔坐（第二十一紙）	
【科註法華論】	なし	

【叡山版】	示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶	八者同一塔坐
【智全会入本】	示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶	八者同一塔坐
【日藏会入本】	示現有八種一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶	八者同一塔坐

【論記所引】 注釈なし

【敦煌摩提訖】 なし

【房山摩提訖】 なし

【大正摩提訖】 なし

【福州摩提訖】 示現有八 一者塔二者量三者異四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

【興聖寺刊本】 示現有八 一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

【大正留支訖】 示現有八 一者塔二者量三者略四者住持五者示現無量佛六者離穢七者多寶 八者同一塔坐

【真福寺本】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間 無漏善根所生非 世間有漏善根 生故

【興聖寺寫本】 〃者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間 無漏善根所生非 世間有漏善根 所生故

【科註法華論】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨 出世間 無漏善根所生非 世間有漏善 所生故（卷六、三裏）

【叡山版】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間清淨無漏善根所生非是世間有漏善根之所生故（三十表）

【智全会入本】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間清淨無漏善根所生非是世間有漏善根之所生故

【日藏会入本】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間清淨無漏善根所生非是世間有漏善根之所生故

【論記所引】 論塔者示現如來舍利住持故者…（二八六下二）

論量者方便示現一切佛國土清淨等者…（二八七上四）

出世 無漏善根所生者…（二八七下二）

非 世間有漏善根 生故者…（二八七下五一六）

【敦煌摩提訖】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨 出世間 無漏善根所生非 世間有漏善根 所生故

【房山摩提訖】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨 出世間 無漏善根所生非 世間有漏善 所生故（第二十四紙）

【大正摩提訖】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨 出世間 無漏善根所生非 是世間有漏善 所生故

【福州摩提訖】 塔有示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛國土清淨莊嚴是出世間清淨無漏善根所生非是世間有漏善根之所生故

【興聖寺刊本】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛 土清淨莊嚴是出世間 無漏善根所生非 世間有漏善根 生故

【大正留支訖】 塔者示現如來舍利住持故量者方便示現一切佛 土清淨莊嚴是出世間清淨無漏善根所生非是世間有漏善根之所生也

【真福寺本】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 湣身故住持者示現諸佛如來湣身自在身力故
 【興聖寺写本】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在。故力¹⁹¹
 【科註法華論】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故（卷六、五表）
 【叡山版】略者 多寶如來身一體示現攝取一切諸佛真法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【智全会入本】略者 多寶如來身一體示現攝取一切諸佛真法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【日藏会入本】略者 多寶如來身一體示現攝取一切諸佛真法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【論記所引】論略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者：（二八七下二三）

論住持者示現諸佛如來法身自在身力故者：（二八八上八）

【敦煌摩提記】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【房山摩提記】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【大正摩提記】略者 多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【福州摩提記】異者示現多寶如來身一體示現攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在身力故
 【興聖寺刊本】略者示現多寶如來身一體 攝取一切佛 法身故住持者示現諸佛如來法身自在 力故（卷下、第十八紙）
 【大正留支記】略者示現多寶佛 身一體 攝取一切諸佛真法身故住持者示現諸佛如來法身自在 力故

【真福寺本】示現無量佛者示現彼此所作諸業無差別故遠離穢不淨者示現一切諸佛國土平等清淨故
 （興聖寺写本注）
 【興聖寺写本】示現無量佛者示現彼此所作諸業無差別故遠離穢不淨者示現一切諸佛國土平等清淨故
 【科註法華論】示現無量佛者示現彼此所作 業無差別故遠離穢不淨者示現一切 佛國土平等清淨故（卷六、五裏）
 【叡山版】示現無量佛者示現彼此所作諸業無差別故遠離穢不淨者示現一切諸佛國土平等清淨故
 【智全会入本】示現無量佛者示現彼此所作諸業無差別故遠離穢不淨者示現一切諸佛國土平等清淨故
 【日藏会入本】示現無量佛者示現彼此所作諸業無差別故遠離穢不淨者示現一切諸佛國土平等清淨故
 【論記所引】論示現無量佛者示現彼此所作 業無差別故者：（二八八上二六）

192 191 拙稿「二〇二B」六六頁の当該箇所（六〇三行目）の注九五では、「力」の右に見せ消し記号があるとしているが、正確には、「力」の右傍に付されている墨付けは倒置符である。「示」と「彼」の間に補入記号が付されており、その上方欄外に「現」とある。

【福州摩提訖】言多寶者示現一切諸佛國土同實性故同一塔坐者示現化佛非化佛法佛報佛等皆爲成大事故
【興聖寺刊本】多寶者示現一切佛土同實性故同一塔坐者示現化佛非化佛法佛報佛等皆爲成大事故
【大正留支訖】多寶者示現一切諸佛國土同實性故同一塔坐者示現化佛非化佛法佛報佛等皆爲成大事故

第十勝妙義（法力・持力・修力）
法力

【真福寺本】自此已下示現 洺力持力脩力應知
（興聖寺写本注）

法

【興聖寺写本】自此已下示現 〇¹⁹⁶力持力修力應知

【科註法華論】自此已下示現法力持力修力應知（卷六、八表）

【叡山版】自此已下示現法力持力修力應知

【智全会入本】自此已下示現法力 修力應知

【日藏会入本】自此已下示現法力持力修力應知

【論記所引】論自此 下示現法力 修力應知已下…（二九〇下三）

【敦煌摩提訖】自此以下示現法力 脩行／應知

【房山摩提訖】自此已下示現法力 修力應知

【大正摩提訖】自此已下示現法力持力修力應知

【福州摩提訖】自此已下示現法力 修力應知

【興聖寺刊本】自此已下示現法力 修力應知

【大正留支訖】自此已下示現法力持力修力應知

【真福寺本】洺力者五種門示現一者證 二者信 三者供養 四者開法 五者讀誦持說門（第二十九紙）
（興聖寺写本注）
者

196 「現」と「力」の間に補入記号が付されており、その上方欄外に「法」とある。

【興聖寺写本】	法力者五種門示現一者證 二者住 三者供養 四者聞法 五〇讀誦持説	
【科註法華論】	法力者五種門示現一者證 二者信 三者供養 四者聞法 五者讀誦持説	(卷六、八裏)
【叡山版】	法力者五種門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【智全会入本】	法力者五種門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【日藏会入本】	法力者五種門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【論記所引】	論法力者五種門示現下：(二九〇下一三)	
【敦煌摩提訳】	法力者五種門示現一者證 二者信 三者供養 四者聞法 五者讀誦持説	
【房山摩提訳】	法力者五種門示現一者證 二者信 三者供養 四者聞法 五者讀誦持説	
【大正摩提訳】	法力者五種門示現一者證 二者信 三者供養 四者聞法 五者讀誦持説	
【福州摩提訳】	法力者五種門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【興聖寺刊本】	法力者五 門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【大正留支訳】	法力者五 門示現一者證門二者信門三者供養門四者聞法門五者讀誦持説門	
【真福寺本】	四種 門弥勒 品中示現一法門常精進菩薩品中示現	
(興聖寺写本注)		
【興聖寺写本】	四種 門弥勒 ¹⁹⁸ 品中示現一法門常精進菩薩品中示現	
【科註法華論】	四種 門弥勒 品中示現一法門常精進菩薩品 示現	(卷六、八裏)
【叡山版】	四種法門彌勒 品中示現一法門常精進菩薩品中示現	(三十裏)
【智全会入本】	四種法門彌勒 品中示現一法門常精進菩薩品中示現	
【日藏会入本】	四種法門彌勒 品中示現一法門常精進菩薩品中示現	
【論記所引】	後四種 門下：(二九〇下一四一五)	
【敦煌摩提訳】	四種 門弥勒 品中示現一法門常精進菩薩品 示現	
【房山摩提訳】	四種 門弥勒 品中示現一法門常精進菩薩品 示現	

「五」と「讀」の間に補入記号が付されており、その上方欄外に「者」とある。
「勤」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「勤」とある。

【大正摩提訖】 四種 門彌勒 品中示現一法門常精進菩薩品 示現
【福州摩提訖】 四種 門彌勒 品中示現一法門常精進菩薩品中示現
【興聖寺刊本】 彌勒菩薩品中示現四 門常精進菩薩品中示現一門
【大正留支訖】 彌勒菩薩品中示現四 門常精進菩薩品中示現一門

証門

【真福寺本】 於勒 品中四種門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【興聖寺写本】 於勒 品中四種門者一 者證聞如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【科註法華論】 彌勒 品中四種門者一 者證 如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故 (卷六、八裏)
【叡山版】 彌勒 品中四種門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【智全会入本】 彌勒 品中四種門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【日藏会入本】 彌勒 品中四種門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【論記所引】 論四種門者下：(二九一上二)
論一者證 如經我說是如來壽命長遠時 恒河沙 衆生得無生法忍故已下：(二九一上二四一五)

【敦煌摩提訖】 彌勒 品中四種門者一 者證 如雖我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【房山摩提訖】 彌勒 品中四種門者一 者證 如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【大正摩提訖】 彌勒 品中四種門者一 者證 如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【福州摩提訖】 彌勒 品中四種門者一 者證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙等 衆生得無生法忍故
【興聖寺刊本】 彌勒菩薩品中四法門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙 衆生得無生法忍故
【大正留支訖】 彌勒菩薩品中四法門者一 是證門如經我說是如來壽命長遠時六百八十萬億那由他恒河沙等 衆生得無生法忍故

【真福寺本】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【興聖寺写本】 此言无生法忍者 謂初地證智應知
【科註法華論】 此言無生法忍者 謂初地證智應知 (卷六、九裏)
【叡山版】 此言無生法忍者 謂初地證智應知

【智全会入本】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【日藏会入本】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【論記所引】 論 此言無生 忍者已下：（二九一下一）

初地名：（二九五下一五）

言證智者：（二九五下一五）

【敦煌摩提訳】 此／无生法忍者 謂初地證智應知
【房山摩提訳】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【大正摩提訳】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【福州摩提訳】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【興聖寺刊本】 此言無生法忍者 謂初地證智應知
【大正留支訳】 此言無生法忍者所謂初地證智應知

【真福寺本】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故
（興聖寺写本注） 多有存歟 提 提

【興聖寺写本】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故

【科註法華論】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故（卷六、十裏）

【叡山版】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故

【智全会入本】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故（卷十本、二九六下）

【日藏会入本】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故（卷十本、三〇一上）

【論記所引】 論 八生乃至一生得阿耨 菩提者下：（二九六下五）

皆證初地菩提道故（二九六下六七）

【敦煌摩提訳】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故
【房山摩提訳】 八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提 故

「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「提」とある。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

「生」と「者」の間に小さい丸印が付されており、その右傍に「一生」とあるが、本諸本対校で「一生」「生者」となっているテキストは見当たらない。

【大正摩提訳】	八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提故	
【福州摩提訳】	八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提故	
【興聖寺刊本】	八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提故	
【大正留支訳】	八生乃至一生得阿耨多羅三藐三菩提者謂證初地菩提法故（二〇上）	
【真福寺本】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故
（興聖寺写本注）	一生 ²⁰¹	
【興聖寺写本】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故
【科註法華論】	八生乃至一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故（卷六、十一表）
【叡山版】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分乃八生乃至一生 證初地故
【智全会入本】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分乃八生乃至一生 證初地故
【日藏会入本】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分乃八生乃至一生 證初地故
【論記所引】	論八生 一生者已下：（二九六下一〇）	
次謂諸下釋		
言凡夫決定能證初地：（二九六下一二）		
後隨力下結（二九六下一〇—一二）		
（敦煌摩提傍書）		隨分
【敦煌摩提訳】	八生乃至一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力／＼ 八生乃至一生 證初地故
【房山摩提訳】	八生乃至一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故
【大正摩提訳】	八生乃至一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故（一九中）
【福州摩提訳】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地歡喜地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故
【興聖寺刊本】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地	隨力隨分 八生乃至一生 證初地故
【大正留支訳】	八生 一生者謂諸凡夫決定能證初地故	隨力隨分 八生乃至一生 皆證初地故

【真福寺本】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
(興聖寺寫本注)
【興聖寺寫本】言阿耨多羅三藐三菩提²⁰²者以離三界中分段生死隨分能見如真如佛性²⁰⁴ 名得菩提非謂究竟滿足如來方便²⁰⁵ 毘故
【科註法華論】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故(卷六、十二裏)
【叡山版】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【智全会入本】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【日藏会入本】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【論記所引】論言阿耨多羅下…(二九七上三)

離 分段 死…(二九七上五)

分見 真如…(二九七上五)

非謂究竟已下…(二九七上六)

言方便涅槃者…(二九七上七)

【敦煌摩提記】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【房山摩提記】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【大正摩提記】言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【福州摩提記】此言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界中分段生死隨分能見 真如佛性者 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故(第二十一紙)
【興聖寺刊本】此言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界 分段生死隨分能見 真如佛性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故
【大正留支記】此言阿耨多羅三藐三菩提者以離三界 分段生死隨分能見 真如法性 名得菩提非謂究竟滿足如來方便涅槃故

信・供養・聞法

【真福寺本】二信門 如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

205 204 203 202
当該字は「多」の誤写と見られるが、左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「多」とある。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。
原本の字は、「段」のくずし字と見られる。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

(興聖寺写本注)

【興聖寺写本】二信 者如經復有八世界微²⁰⁶ 衆生皆起阿耨多羅三藐三菩²⁰⁷薩²⁰⁸心故

【科註法華論】 信 者如經復有八世界微塵 衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故 (卷六、十二表)

【叡山版】二信門者如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故 (三十一表)

【智全会入本】二信門者如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【日藏会入本】二信門者如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【論記所引】 論信 者如經復有八世界 乃至發 菩提心故者：(二九七上一二)

【敦煌摩提訖】 信 者如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【房山摩提訖】 信 者如經復有八世界微塵 衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【大正摩提訖】 信 者如經復有八世界微塵 衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【福州摩提訖】二 信門者如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【興聖寺刊本】二信門 如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【大正留支訖】二信門 如經復有八世界微塵數衆生皆發阿耨多羅三藐三菩提心故

【真福寺本】三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大洹利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【興聖寺写本】三供養 者如經 是諸菩薩摩訶薩法得大／利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【科註法華論】 供養 者如經 是諸菩薩摩訶薩 得大²⁰⁹法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故 (卷六、十二表)

【叡山版】三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大²¹⁰法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【智全会入本】三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大²¹¹法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【日藏会入本】三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大²¹²法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【論記所引】 論供養 者如經 是諸菩薩 乃至雨曼陀羅華如是等故者：(二九七下一二)

【敦煌摩提訖】 供養 者如經佛說 是諸菩薩摩訶薩 得大²¹³法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【房山摩提訖】 供養 者如經 是諸菩薩摩訶薩 得大²¹⁴法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

207 206
拙稿「二〇二B」六七頁の当該箇所(六一八行目)では、「微」と翻刻しているが、原本通りの「微」(「微」の異体字)に訂正する。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

【大正摩提訖】 供養 者如經 是諸菩薩摩訶薩 得大法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故
 【福州摩提訖】 三供養門者如經 是諸菩薩摩訶薩 得大法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故
 【興聖寺刊本】 三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故（卷下、第十九紙）
 【大正留支訖】 三供養門 如經 是諸菩薩摩訶薩 得大法利時於虛空中雨曼陀羅華如是等故

【真福寺本】 四者聞海門 如隨喜品 說應知
 【興聖寺写本】 四 聞法 者應 如隨喜品 說應知
 【科註法華論】 聞法 者 如隨喜品 說應知（卷六、十二裏）
 【叡山版】 四 聞法門 如隨喜品 說應知
 【智全会入本】 四 聞法門 如隨喜品 / 應知
 【日藏会入本】 四 聞法門 如隨喜品 說應知
 【論記所引】 論聞法 者 如隨喜品 說應知者：（二九九上二）
 【敦煌摩提訖】 聞法 者 如隨喜品 說應知
 【房山摩提訖】 聞法 者 如隨喜品 說應知
 【大正摩提訖】 聞法 者 如隨喜品 說應知
 【福州摩提訖】 四 聞法門者 如隨喜品所說應知
 【興聖寺刊本】 四 聞法門 如隨喜品所說應知
 【大正留支訖】 四 聞法門 如隨喜品所說應知

読誦持説門

【真福寺本】 一海門常精進菩薩品示現者謂讀誦解説書寫等得六根清淨故
 （興聖寺写本注）
 【興聖寺写本】 一法門常精進菩薩品示現者諸讀／²⁰⁸ 説書寫等得六根清淨故

208 「二」の箇所は、「解」（異体字）の誤写と見られるが、左傍に見せ消ち記号が付されており、その下方欄外に「解」（異体字）とある。

【科註法華論】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故（卷六、十三表）	
【觀山版】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【智全会入本】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【日藏会入本】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【論記所引】	論 一 法門 常精進菩薩品示現者下…（三〇〇上八）	
	謂讀誦下…（三〇〇上一五）	
	論謂讀誦下…（三〇〇下三）	
	六根者…（三〇〇下四）	
	清淨者…（三〇〇下五）	
	若讀（三〇〇下六）	
	若誦（三〇〇下六）	
	若解說（三〇〇下六）	
	若書寫（三〇〇下六）	
【敦煌摩提訖】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【房山摩提訖】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【大正摩提訖】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【福州摩提訖】	一 法門 常精進菩薩品示現者謂讀誦解說書寫等得六根清淨故	
【興聖寺刊本】	常精進菩薩品中 一 法門	者謂讀誦解說書寫等得六根清淨
【大正留支訖】	常精進菩薩品中 一 法門	者謂讀誦解說書寫等得六根清淨
【真福寺本】	如經若善男子善 女人受持洹華經若讀若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德	乃至 千二／意功德故
【興聖寺写本】	如經若善男子善男 女人受持法花經若讀／誦若解說若書寫是人當得八百眼功德	乃至 千二百意功德故
【科註法華論】	如經若善男子善 女人受持法華經若讀若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德	乃至 千二百意功德故（卷六、十四表）
【觀山版】	如經若善男子善 女人受持法華經若讀若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德	乃至 千二百意功德故
【智全会入本】	如經若善男子善 女人受持法華經若讀若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德	乃至 千二百億功德故

【日藏会入本】如經若善男子善 女人受持法華經若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德 乃至 千二百億功德故
【論記所引】如經已下：(三〇一上三) 八百眼 千二百意：(三〇一上三)

【敦煌摩提訖】如雖若善男子善 女人受持法華雖若誦若誦若解說若書寫／／得八百眼功德 乃至 千二百意功德故

【房山摩提訖】如經若善男子善 女人受持法花經若誦若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德 乃至 千二百意功德故(第二十五紙)

【大正摩提訖】如經若善男子善 女人受持法華經若誦若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德 乃至 千二百意功德故

【福州摩提訖】如經若善男子善 女人受持法花經若誦若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德 乃至 千二百意功德故

【興聖寺刊本】如經若善男子善 女人受持法華經若誦若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德 乃至 千二百意功德故

【大正留支訖】如經若善男子善 女人受持法華經若誦若誦若解說若書寫是人當得八百眼功德次第乃至得千二百意功德故

【真福寺本】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知

【興聖寺寫本】以此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知

【科註法華論】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知(卷六、十五裏)

【叡山版】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 正位此義應知

【智全会入本】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 正位此義應知

【日藏会入本】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 正位此義應知

【論記所引】論此得六根清淨者下：(三〇五下五)
凡夫讀誦持說(三〇五下六—七)
書寫力故得六根淨：(三〇五下七)

經 論云未入初地 位(三〇五下八)

【敦煌摩提傍書】此得六根清淨者謂 凡夫人以雖力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知

【房山摩提訖】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知

【大正摩提訖】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 位 應知

【福州摩提訖】此得六根清淨者謂諸凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 正位 應知

【興聖寺刊本】此得六根清淨者謂 凡夫人以經力故得勝根用未入初地菩薩 正位 應知

【大正留支訳】 此得六根清浄者謂諸凡夫 以經力故得勝根用未入初地菩薩正位此義應知

(真福寺本注朱) 故

【真福寺本】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等

【興聖寺写本】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等 (第二十二紙)

【科註法華論】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等 (卷六、十六表)

【叡山版】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等故

【智全会入本】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等故

【日藏会入本】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等故

【論記所引】 如經下指 如是等結：(三〇五下九)

直以肉眼 (三〇六上四)

能見 大千 (三〇六上四)

故云父母所生：(三〇六上四)

【敦煌摩提訳】 如雖以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等

【房山摩提訳】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等

【大正摩提訳】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等

【福州摩提訳】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等

【興聖寺刊本】 如經以父母所生清浄肉眼見於三千大千世界如是等故

【大正留支訳】 如經以父母所生清浄肉眼見于三千大千世界如是等故

【真福寺本】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸根平用 應知眼所見者聞香能知

【興聖寺写本】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸佛根牙用 應知眼所見者聞香能知

【科註法華論】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲知香 味 觸 法等 用 應知眼 見者聞香能知 (卷六、十六裏)

【叡山版】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸根互用此義應知眼所見者聞香能知 (三十一裏)

【智全会入本】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸根互用此義應知眼所見者聞香能知

【日藏会入本】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸 根互用此義應知眼所見者聞香能知
【論記所引】 論又六根清浄者下…(三〇六上一二)

於一一根下…(三〇六上一三一四)

【敦煌摩提訳】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲知香 味 觸 法等諸 根互用 應知眼 見者聞香能知 (三二下)

【房山摩提訳】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲知香 味 觸 法等諸 根互用 應知眼 見者聞香能知

【大正摩提訳】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲知香 味 觸 法等 用 應知眼 見者聞香能知

【福州摩提訳】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲知香 味 覺 觸 法等諸 根互用 應知眼所見者聞香能知

【興聖寺刊本】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法等諸 根互用 應知眼所見者聞香能知

【大正留支訳】 又六根清浄者於一一根中悉能具足見色聞聲辨香別味覺觸知法 諸 根互用此義應知眼所見者聞香能知

【真福寺本】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説洳故聞香知者此是知境以鼻根知故²⁰⁹ (第三十紙)

【興聖寺写本】 如經尺提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是知境以鼻根知故²¹⁰

【科註法華論】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是智境 鼻根知故 (卷六、十七表)

【叡山版】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法故聞香知者此是知境以鼻根知故

【智全会入本】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法故聞香知者此是知境以鼻根知故

【日藏会入本】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法故聞香知者此是知境以鼻根知故

【論記所引】 如經已下…(三〇六上一七) 論釋云知者此是智境 鼻根知故…(三〇六下一四)

【敦煌摩提訳】 如雖釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是知境 鼻根知故

【房山摩提訳】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是智境 鼻根知故

【大正摩提訳】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是智境 鼻根知故

【福州摩提訳】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法 聞香知者此是智境以鼻根知故

【興聖寺刊本】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法故聞香知者此是智境以鼻根知故

【大正留支訳】 如經釋提桓因在勝殿上五欲娛樂乃至説法故聞香知者此是知境以鼻根知故

「知」(墨書)の下に朱書で「日」が書き加えられて、「智」になっている。

拙稿「二〇二二」六八頁の当該箇所(六三二行目)では、「鼻」と翻刻しているが、原本通りの「鼻」(「鼻」の異体字)に訂正する。

持力

【真福寺本】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力者如經應知
【興聖寺写本】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品觀持品等廣說法力 如經應知
【科註法華論】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 應知（卷六、十七裏）
【叡山版】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 如經應知
【智全会入本】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品 等廣說法力 如經應知
【日藏会入本】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 如經應知
【論記所引】	論持力者有三法門示現下…（三〇七上二）	

次如法師已下…（三〇七上二）

三品法師勸持（三〇七上三）

安樂行²¹¹…（三〇七上三）

結云法力應知（三〇七上三一四）

【敦煌摩提訖】	持者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 應知
【房山摩提訖】	持者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 應知
【大正摩提訖】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 應知
【福州摩提訖】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力 如經應知
【興聖寺刊本】	持力者有三種法門示現	如法師品安樂行品勸持品等廣說法力者如經應知
【大正留支訖】	持力者有三法門示現	持力者有三法門示現持力如法師品安樂行品 等廣說法力 如經應知

【真福寺本】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故
（興聖寺写本注）
【興聖寺写本】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提²¹²薩²¹²提²¹²故

212 211 「法師。勸持。安樂行。」は、『智全』卷上と『日藏』第二十三卷（三一二頁上五―六行目）と『科註』卷六（十七丁裏）所引の『論記』テキストにおいて、割注になっている。
「薩」の左傍に見せ消ち記号が付されており、その上方欄外に「提」とある。

【科註法華論】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故（卷六、十七裏）

【觀山版】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【智全会入本】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【日藏会入本】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【論記所引】其心決定知水必近…（三〇七七）

受持此經得佛性水成
菩提故者…（三〇八上六）

【敦煌摩提訖】其心決定知水必近者受持此雖得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【房山摩提訖】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【大正摩提訖】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【福州摩提訖】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【興聖寺刊本】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

【大正留支訖】其心決定知水必近者受持此經得佛性水成阿耨多羅三藐三菩提故

修 行 力

【真福寺本】脩行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護洩力

【興聖寺写本】修行力 者五門示現一者說力二者行／力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【科註法華論】修行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力（卷六、十八裏）

【叡山版】脩行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【智全会入本】修行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【日藏会入本】修行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【論記所引】注釈なし

【敦煌摩提訖】なし

【房山摩提訖】なし

【大正摩提訖】修行力 者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【福州摩提訖】修行力無上者五門示現一者說力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【興聖寺刊本】修 行 力 者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力（卷下、第二十紙）
【大正留支訳】修 行 力 者五門示現一者説力二者行苦行力三者護衆生諸難力四者功德勝力五者護法力

【真福寺本】説力者有三種法門神力品中示現

【興聖寺写本】説力者有三種法門神力品中示現

【科註法華論】説力者有三種法門神力品中示現（卷六、十九裏）

【叡山版】説力者有三種法門神力品中示現

【智全会入本】説力者有三種法門神力品中示現

【日藏会入本】説力者有三種法門神力品中示現

【論記所引】論説力者有三種 示現下：（三〇八下四）

神力品下：（三〇八下五）

【敦煌摩提訳】説力者有三種法門神力品中示現

【房山摩提訳】説力者有三種法門神力品中示現

【大正摩提訳】説力者有三種法門神力品中示現

【福州摩提訳】説力者有三種法門神力品中示現

【興聖寺刊本】説力者有三種法門神力品中示現

【大正留支訳】説力者有三 法門神力品 示現（一〇中）

【真福寺本】一 出廣長舌 者令憶念故二 聲咳²³聲者説偈令聞故 聞聲已如實脩行不放逸故三 彈指 覺悟衆生者令脩行者得覺悟故

【興聖寺写本】一 出廣長舌 者令憶念故二 者 嚙²³宛聲者説偈令聞故 聲聞已如實脩行不放逸故三 彈指令覺悟 者令脩行者得覺悟故

【科註法華論】一 出廣長舌 者 憶念故二 嚙²³宛聲者説偈令聞故 聞聲已如實脩行不放逸故三 彈指令覺悟 者令脩行者 覺悟故（卷六、十九裏）

【叡山版】一 出廣長舌 者令憶念故二 聲咳²³聲者説偈令聞故令聞聲已如實脩行不放逸故三 彈指令覺悟衆生者令脩行者得覺悟故（三十二表）

【智全会入本】一 出廣長舌 者令憶念故二 聲咳²³聲者説偈令聞故令聞聲已如實脩行不放逸故三 彈指令覺悟衆生者令脩行者得覺悟故

213 拙稿「二〇二B」六八頁の当該箇所（六三八行目）では、「聲亥」と翻刻しているが、原本の字により近い「嚙宛」に訂正する。

『科註』卷六（二十丁表）所引の『論記』では、「咳」が置かれるはずの箇所一字分の空白があり、「咳」がない。

【日藏会入本】 一者出廣長舌 者令憶念故二者 嚙咳聲者說偈令聞故令聞聲已如實修行不放逸故三者彈指令覺悟衆生者令修行者得覺悟故
【論記所引】 一者已下…（三〇八下六）

論一者出廣長舌 憶念故者…（三〇九上二五）

論二者 嚙咳聲者說偈令聞故 聞聲已如實修行不放逸故者…（三〇九下二一一三）

論三者彈指令覺悟 者令修行者 覺悟故者…（三一〇上五）

【敦煌摩提訖】 一 出廣長舌 者 憶念故二 嚙咳聲者說偈令聞故 聞聲已如實修行不放逸故三 彈指令覺悟 者令修行者 覺悟故

【房山摩提訖】 一者出廣長舌 憶念故二者 嚙咳聲者說偈令聞故 聞聲已如實修行不放逸故三 彈指令覺悟 者令修行者 覺悟故

【大正摩提訖】 一 出廣長舌 者 憶念故二 嚙咳聲者說偈令聞故 聞聲已如實修行不放逸故三 彈指令覺悟 者令修行者 覺悟故

【福州摩提訖】 一者出廣長舌相者令憶念故二者謂嚙咳聲者說偈令聞故令聞聲已如實修行不放逸故三者彈指令覺悟衆生 令修行者得覺悟故

【興聖寺刊本】 一者出廣長舌 令憶念故二者謂嚙咳聲 說偈令聞故令聞聲已如實修行不放逸故三者彈指 覺悟衆生 令修行者得覺悟故

【大正留支訖】 一者出廣長舌 令憶念故二者謂嚙咳聲 說偈令聞故令聞聲已如實修行不放逸故三者彈指 覺悟衆生 令修行者得覺悟故

【真福寺本】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

（興聖寺写本注） 品

【興聖寺写本】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩。示現教化衆生故

【科註法華論】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生 （卷六、二十一裏）

【叡山版】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

【智全会入本】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故（卷十末、三一三下）

【日藏会入本】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故（卷十末、三一八下）

【論記所引】 論行苦行力者藥王菩薩品示現者…（三一三下四）

論教化衆生 行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生者…（三一六下五一六）

【敦煌摩提訖】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生 行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生

【房山摩提訖】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生

【大正摩提訳】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生 行苦行 者妙音菩薩品示現教化衆生 (一九下)
【福州摩提訳】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故
【興聖寺刊本】 行苦行力者藥王菩薩品示現教化衆生故又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故
【大正留支訳】 行苦行力者藥王菩薩品示現 又行苦行力者妙音菩薩品示現教化衆生故

【真福寺本】 護衆生 諸難力者觀世音 菩薩品 施羅尼品示現
(興聖寺写本注) 觀欵

【興聖寺写本】 護衆生 諸難力者現世音 品示現教化衆生故護衆生諸難力品施羅尼品示現
【科註法華論】 護衆生 難 觀世音 品 陀羅尼品示現 (卷六、二十三裏)

【叡山版】 護衆生 諸難力者觀世音 菩薩品 陀羅尼品示現

【智全会入本】 護衆生 諸難力者觀世音 菩薩品 陀羅尼品示現

【日藏会入本】 護衆生 諸難力者觀世音 菩薩品 陀羅尼品示現

【論記所引】 論護衆生 諸難 者觀世音 品 陀羅尼品示現者…(三一七上一六)

【敦煌摩提訳】 護衆生 諸難力者觀世音 品 施羅尼品示現

【房山摩提訳】 護衆生 諸難 者觀世音 品 施羅尼品示現

【大正摩提訳】 護衆生 難 觀世音 品 陀羅尼品示現

【福州摩提訳】 護衆生故護衆生諸難力者觀世音 菩薩品 施羅尼品示現

【興聖寺刊本】 護衆生 諸難力者觀世音 菩薩品 施羅尼品示現

【大正留支訳】 護衆生 諸難力者觀世自在菩薩品 陀羅尼品示現

【真福寺本】 功德勝力者妙莊嚴王品示現 依過去 功德彼二童子有如是力故

(興聖寺写本注)

【興聖寺写本】 功德勝力者妙莊嚴王品示現 依過去 功德彼二童子有如是力故

「品」示現教化衆生故護衆生諸難力」の「品」の右傍と、「力」の下に、見せ消ち記号が付されている。
「是」と「故」の間に補入記号が付されており、その上方欄外に「力」とある。

【科註法華論】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故（卷六、二十四裏）
【觀山版】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【智全会入本】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【日藏会入本】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【論記所引】	論功德勝力者妙莊嚴王品示現已下：（三二上二）	論依過去	功德彼	童子有如是力者：（三二上二）
【敦煌摩提訖】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【房山摩提訖】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【大正摩提訖】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【福州摩提訖】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【興聖寺刊本】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【大正留支訖】	功德勝力者妙莊嚴王品示現	依過去	功德彼	童子有如是力故
【真福寺本】	護洺力者普賢菩薩品及後品	示現		
【興聖寺写本】	護洺力者普賢菩薩品及後品中示現			
【科註法華論】	護洺力者普賢菩薩品及後品中示現（卷六、二十六表）			
【觀山版】	護洺力者普賢菩薩品及後品	示現		
【智全会入本】	護洺力者普賢菩薩品及後品	示現		
【日藏会入本】	護洺力者普賢菩薩品及後品	示現		
【論記所引】	論護洺力者普賢菩薩品及後品中示現者：（三二上二七）			
【敦煌摩提訖】	護洺力者普賢菩薩品及後／	示現		
【房山摩提訖】	護洺力者普賢菩薩品及後品中示現			
【大正摩提訖】	護洺力者普賢菩薩品及後品中示現			
【福州摩提訖】	護洺力者普賢菩薩品及後品中示現			
【興聖寺刊本】	護洺力者普賢菩薩品及後品	示現		

【大正留支訳】 護法力者普賢菩薩品及後品 示現

受持名

【真福寺本】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
(興聖寺写本注) 觀 欵

【興聖寺写本】 又説言受持現世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【科註法華論】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故 (卷六、二十七裏)

【觀山版】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙等諸佛名號彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【智全会入本】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙等諸佛名號彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故

【日藏会入本】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙等諸佛名號彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【論記所引】 論又説言受持觀世音 菩薩名 乃至平等者下…(三二五下一一)

有二種義下…(三二五下一三)
初有二種義者標(三二五下一四)

次一者信力故下列(三二五下一四—一五)

【敦煌摩提訳】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【房山摩提訳】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【大正摩提訳】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【福州摩提訳】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故 (第二十二紙)
【興聖寺刊本】 又説言受持觀世音 菩薩名 及 受持六十二億恒河沙 諸佛名 彼功德平等者有二種義一者信力故二者畢竟知故
【大正留支訳】 又 言受持觀世自在菩薩名號若人受持六十二億恒河沙等諸佛名號 福德 等者有二種義一者信力故二者畢竟知故

(真福寺本注朱) 求

【真福寺本】 信力者有二種一者於我身如 觀世音自在無異畢竟信力故二 謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故
(興聖寺写本注) 觀 欵

【興聖寺写本】 信力者有二種一者求我身如 現世音自在無異畢竟信 故二者謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是／／／
【科註法華論】 信力者有二種一者求我身如 觀世音 畢竟信 故二者 生恭敬心如彼功德我亦 畢竟得故(卷六、二十八表)

【觀山版】信力者有二種一者求我身如 觀世音自在無異畢竟信力故二 謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故

【智全会入本】信力者有二種一者求我身如 觀世音自在無異畢竟信力故二 謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故

【日藏会入本】信力者有二種一者求我身如 觀世音自在無異畢竟信力故二 謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故

【論記所引】後信力者下釋：(三二五下一五)

信力 有二者：(三二九上三) 生恭敬者：(三二九上四—五)

【敦煌摩提訖】信力者有二種一者示我身如 觀世音 畢竟信 故二者 生恭敬心如彼功德我亦 畢竟得故

【房山摩提訖】信力者有二種一者求我身如 觀世音 畢竟信 故二者 生恭敬心如彼功德我亦 畢竟得故

【大正摩提訖】信力者有二種一者求我身如 觀世音 畢竟信 故二者 生恭敬心如彼功德我亦 畢竟得故

【福州摩提訖】信力者有二種一者求我身如彼觀世音 無異畢竟信 故二者 生恭敬心如彼功德我／如是畢竟得故

【興聖寺刊本】信力者有二種一者求我身如 觀世音自在無異畢竟信 故二 謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故

【大正留支訖】信力者有二種一者 我身如彼觀世 自在無異畢竟信 故二者謂於彼生恭敬心如彼功德我亦如是畢竟得故

【真福寺本】畢竟知者 決定知海界故言法界者名爲海性

【興聖寺写本】畢竟知者 決定知法界故言法界者名爲法性

【科註法華論】畢竟知者 決定知法界故 法界者名 法性 (卷六、二十八表)

【觀山版】畢竟知者 謂能決定知法界故言法界者名爲法性 (三十二裏)

【智全会入本】畢竟知者 謂能決定知法界故言法界者名爲法性

【日藏会入本】畢竟知者 謂能決定知法界故言法界者名爲法性

【論記所引】次畢竟知者下：(三二五下一六)

畢竟知者 (三二九上六)

知一切法 (三二九上六)

皆真法界 (三二九上六)

決定不疑故 (三二九上六一七)

法界者 法性異名：(三二九上七)

【敦煌摩提訖】畢竟知者 決定知法界故 法界者名 法性

【房山摩提訖】畢竟知者 決定知法界故 法界者名 法性 (第二十六紙)

「能證」は行末に書かれており、墨書で「薩」の下に小さい丸印と「能證」の各字右上に挿入符が付されている。

【大正摩提訳】 畢竟知者 決定知法界故 法界者名 法性
【福州摩提訳】 畢竟知者 謂能決定知法界故 言法界者名 爲法性
【興聖寺刊本】 畢竟知者 謂能決定知法界故 言法界者名 爲法性
【大正留支訳】 畢竟知者 謂能決定知法界故 言法界者名 爲法性

【真福寺本】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 法身者 謂真如法身
【興聖寺写本】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 身者 謂真如法身
【科註法華論】 彼法性 入初地菩薩能證入 一切諸佛菩薩平等 身故平等 身者 謂真如法身（卷六、二十八表）
【叡山版】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 法身者 謂真如法身
【智全会入本】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 法身者 謂真如法身
【日藏会入本】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 法身者 謂真如法身
【論記所引】 彼法性 入 地菩薩能 入 一切諸佛菩薩平等 身故者…（三二九上二〇—二一）

論云諸佛菩薩…（三二九上二四）

平等 身者…（三二九上二五）

平等 身者 謂真如法身者…（三二九上二六）

【敦煌摩提訳】 彼法性 入初地菩薩能證入 一切諸佛菩薩平等 身故平等 身者 謂真如法身
【房山摩提訳】 彼法性 入初地菩薩能證入 一切諸佛菩薩平等 身故平等 身者 謂真如法身
【大正摩提訳】 彼法性 入初地菩薩能證入 一切諸佛菩薩平等 身故平等 身者 謂真如法身
【福州摩提訳】 彼法性者名爲入初地菩薩能證入 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 身者 謂真如法身
【興聖寺刊本】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身故平等 法身者 謂真如法身
【大正留支訳】 彼法性者名爲 一切諸佛菩薩平等 法身 平等 身者 真如法身

【真福寺本】 初地菩薩 。 能入是故受持六能證²¹⁷ 十二億恒河沙等諸佛名号 受持觀世音 名字 功德無差別（第三十一紙）

（興聖寺写本注）

觀款

【興聖寺写本】	初地菩薩	能證能入是故受持六	十二	恒河沙等諸佛名号	受持現世音	名字	功德无老別
【科註法華論】		是故受持六	十二	恒河沙	受持觀世音	菩薩名	功德無老別（卷六、三十二表）
【觀山版】	初地菩薩	乃能證能入是故受持六	十二	億恒河沙等諸佛名號	受持觀世音	名號所得	功德無差別
【智全会入本】	初地菩薩	乃能證能入是故受持六	十二	億恒河沙等諸佛名號	受持觀世音	名號所得	功德無差別
【日藏会入本】	初地菩薩	乃能證能入是故受持六	十二	億恒河沙等諸佛名號	受持觀世音	名號所得	功德無差別
【論記所引】		是故下結…（三三五下三一—四）					
		是故下結…（三二九下二）					

【敦煌摩提詠】	是故受持六	十二	恒河沙	佛名	受持觀世音	名	功德无老別
【房山摩提詠】	是故受持六	十二	恒河沙	佛名	受持觀世音	菩薩名	功德無差別
【大正摩提詠】	是故受持六	十二	恒河沙	佛名	受持觀世音	菩薩名	功德無差別
【福州摩提詠】	初地菩薩乃至證入是故受持六	十二	恒河沙等諸佛名号有能受持觀世音	名号所得功德無差別			
【興聖寺刊本】	初地菩薩乃能證入是故受持六	十二	億恒河沙等諸佛名号	受持觀世音	名字	功德無老別	
【大正留支詠】	初地菩薩乃能證入是故受持六	十二	億恒河沙等諸佛名號有能受持觀世自在菩薩名號所得功德無差別				

跋文

【真福寺本】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解
【興聖寺写本】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品／向處分易解
【科註法華論】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解（卷六、三十二裏）
【觀山版】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如前處分易解
【智全会入本】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如前處分易解
【日藏会入本】	第一序品	示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如前處分易解
【論記所引】	論第一序品已下…（三三〇—三三一）	

序分 七 成（三三〇—三三一）

顯圓功德（三三〇—三三一—三四）

方便 五分…（三三〇—三四）

餘二十六 (三三〇上四)

品喻平無上 (三三〇上四—五)

各各分雪… (三三〇上五)

今爲易解… (三三〇上六)

處分太易 (三三〇上六)

- 【敦煌摩提訖】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解 (三三二上)
- 【房山摩提訖】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解
- 【大正摩提訖】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解
- 【福州摩提訖】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解
- 【興聖寺刊本】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解
- 【大正留支訖】第一序品示現七種功德成就第二方便品有五分示現破二明一餘品如向處分易解

尾題

- 【真福寺本】妙法蓮華經論優婆提舍一卷
- 【興聖寺写本】法華論 一通 (第二十三紙)
- 【科註法華論】妙法蓮華經論優婆提舍 卷六^終 (卷六、三十三表)
- 【叡山版】妙法蓮華經論
- 【智全会入本】妙法蓮華經論優婆提舍 卷第十^末
- 【日藏会入本】妙法蓮華經論優婆提舍 卷第十^末
- 【論記所引】注釈なし
- 【敦煌摩提訖】法華論 一卷
- 【房山摩提訖】妙法蓮華經 優波提舍一卷
- 【大正摩提訖】妙法蓮華經論優婆提舍 (二〇上)
- 【福州摩提訖】妙法蓮華經論 一卷^{十二}
- 【興聖寺刊本】妙法蓮華經 優波提舍 卷下
- 【大正留支訖】妙法蓮華經 憂波提舍 卷下

文献表

略号

真福寺本	真福寺藏本、菩提流支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』一卷、日本古写経研究所所持データ
真福寺本注墨	上記、真福寺本の本文行間などに見られる墨書で書かれた注記。
真福寺本注朱	上記、真福寺本の本文行間などに見られる朱書で書かれた注記。
七寺一巻本	七寺藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一卷、日本古写経データベース
七寺二巻本	七寺藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』二巻、日本古写経データベース
興聖寺写本	興聖寺藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』一卷、日本古写経データベース（拙稿「二〇二二」参照）
興聖寺写本注	上記、興聖寺写本の本文行間などに見られる注記。
興聖寺刊本	興聖寺藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』二巻（拙稿「二〇二二」参照）
金剛寺本	金剛寺藏本、文治三年（一一八七年）書写、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』巻上、日本古写経データベース
聖語藏甲本	聖語藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』一卷、第六類乙種写経 No.3455
聖語藏甲本注	上記、聖語藏甲本の本文行間に見られる注記。
聖語藏乙本	聖語藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経優婆提舍論』一卷、第六類乙種写経 No.3456
聖語藏丙本	聖語藏本、菩提留支訳『妙法蓮華経憂婆提舍』二巻、第五類甲種写経 No.1847
子注法華論	円弘撰『妙法蓮華経論子注』三巻（巻上現存、巻中散逸、巻下の半分程度散逸、本書中に大字で示される『法華論』。 聖語藏本、『法華経論子注』巻上、第五類甲種写経 No.1987（校合②参照）
科註法華論	『特別展 アンニョンハセヨ！元暁法師—日本がみつめた新羅・高麗仏教—』（八四頁）に、巻下の一部分の影印を掲載。 慶安五年（一六五二年）版、日真撰『科註妙法蓮華経論』六巻、本書中に大字で示される菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華経優婆提舍』。 京都大学附属図書館所蔵（京都大学貴重資料デジタルアーカイブ https://rinda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00017876 ）
叡山版	寛永二年（一六二五年）版、菩提流支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一卷、身延山大学国際日蓮学研究所所蔵（叢書Ⅱに影印収録）
正保三年版	正保三年（一六四六年）版、菩提流支訳『妙法蓮華経優婆提舍』一卷、身延山大学附属図書館所蔵（坂本日深文庫、叢書Ⅱに影印収録）
論疏補入本	正徳四年（一七二四年）版の古蔵撰『法華論疏』に会入された『法華論』（校合②参照）
咸潤校讎本	上記、論疏補入本の頭注
智全会入本	『智証大師全集（旧版）』巻上所収の円珍撰『法華論記』に会入された菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華経優婆提舍』

日藏会入本
房山摩提訳
房山流支訳
敦煌摩提訳
初雕摩提訳
再雕摩提訳
大正摩提訳
福州摩提訳
初雕留支訳
再雕留支訳
大正留支訳
論記所引
授決集所引
論疏所引
玄賛所引
述文賛所引
論述記所引

『日本大蔵經（旧版）』第二十三卷所収の円珍撰『法華論記』に会入された菩提流支共曇林等訳『妙法蓮華經優波提舍』
房山雲居寺石経本、勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷
（中国佛教协会编《房山石经（辽金刻经）传声虚堂》中国佛教图书文物馆、一九八八年）
房山雲居寺石経本、菩提流支等訳『妙法蓮華經優波提舍』二卷
（中国佛教协会编《房山石经（辽金刻经）传声虚堂》中国佛教图书文物馆、一九八八年）
敦煌本、首欠の『法華論』一卷
（黄永武博士主編《敦煌寶藏》第二〇册、新文豐出版公司、一九八一年／中國國家圖書館編《國家圖書館藏敦煌遺書》第一一〇册、北京圖書館出版社、二〇〇九年）
※矢吹慶輝編著『鳴沙餘韻解説』（九七頁）に依ると勒那摩提訳。
上記、敦煌摩提訳の本文行間に見られる傍書（傍書は書写者による訂正か）。
高麗初雕本、勒那摩提訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷（《域外漢籍珍本文庫》編纂出版委員会編『高麗本大蔵經初刻本輯刊』第二十五冊、西南師範大学出版社・人民出版社、二〇一二年）
高麗再雕本、勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷（《高麗大蔵經》編輯委員会編『高麗大蔵經』第二十八冊、綾装書局、二〇〇四年）
勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華經論優波提舍』一卷（《大正蔵》第二十六卷、大正蔵番号一五二〇、大正一切経刊行会、一九二六年）
宋建炎二年（一一二八年）刊、福州開元禪寺版、勒那摩提共僧朗等訳『妙法蓮華經優波提舍』一卷、宮内庁書陵部所蔵
（宮内庁書陵部収蔵漢籍集覽―書誌書影・全文影像データベース― https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki/bib_frame?id=007075_0577）
高麗初雕本、菩提留支共曇林等訳『妙法蓮華經優波提舍』巻下（《域外漢籍珍本文庫》編纂出版委員会編『高麗本大蔵經初刻本輯刊』第二十五冊、西南師範大学出版社・人民出版社、二〇一二年）※初雕留支訳は巻上欠。
高麗再雕本、菩提留支共曇林等訳『妙法蓮華經優波提舍』二卷（《高麗大蔵經》編輯委員会編『高麗大蔵經』第二十九冊、綾装書局、二〇〇四年）
菩提留支共曇林等訳『妙法蓮華經優波提舍』二卷（《大正蔵》第二十六卷、大正蔵番号一五一九、大正一切経刊行会、一九二六年）
円珍撰『法華論記』十卷（『智全』巻上）所引の『法華論』を私に抽出。
円珍撰『授決集』二卷（《大正蔵》第七十四卷）所引の『法華論』を私に抽出。
吉蔵撰『法華論疏』三卷（中井本勝「二〇一七A」「二〇一七B」参照）
基撰『妙法蓮華經玄賛』十卷（《大正蔵》第三十四卷）所引の『法華論』を私に抽出。
憬興撰『無量寿経連義述文賛』三卷（《大正蔵》第三十七卷）所引の『法華論』を私に抽出。
義寂・義一撰『法華經論述記』二卷或いは三卷の内、上巻部分が現存。『正統蔵經』第四十六卷所収）所引の『法華論』。
聖語蔵本、『法華略記』第五類、甲種写経 No.1986（校合②参照）

文句記所引 湛然撰『法華文句記』（『大正藏』第三十四卷）所引の『法華論』を私に抽出。
 私志記所引 智雲撰『妙経文句私志記』（『正統藏経』第二十九卷）所引の『法華論』を私に抽出。
 開示抄所引 貞慶撰『法華開示抄』二十八卷（『大正藏』第五十六卷）所引の『法華論』を私に抽出。

テキスト・目録・辞書類

- 〔一九二二—一九二二〕 仏書刊行会編『大日本仏教全書』東京…仏書刊行会
- 〔一九一四—一九二一〕 日本大蔵経編纂会編『日本大蔵経』京都…蔵経書院
- 〔一九一八—一九一九〕 園城寺事務所編『智証大師全集』滋賀…園城寺事務所
- 〔一九一七〕 井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』東京…現代仏教家人名辞典刊行会
- 〔一九二〇〕 田中智学監修『本化聖典大辞林』下巻、東京…国書刊行会
- 〔一九二四—一九三四〕 高楠順次郎編『大正新脩大蔵経』東京…大正一切経刊行会
- 〔一九三〇—一九三九〕 昭和新纂国訳大蔵経編輯部編『昭和新纂国訳大蔵経』東京…東方書院
- 〔一九三三—一九三五〕 小野玄妙編『仏書解説大辞典』東京…大東出版社
- 〔一九三三—一九三六〕 望月信亨編著『望月仏教大辞典』京都…世界聖典刊行協会
- 〔一九三六〕 黒板勝美編輯・発行『真福寺善本目録』続輯
- 〔一九三七〕 叡山学会「山王院蔵書目録」『叡山学報』第十三号
- 〔一九三八〕 宇井伯寿監修『佛教辞典』東京…大東出版社
- 〔一九四〇—一九四三〕 渋谷亮諦編『昭和現存天台書籍総合目録』東京…明文社
- 〔一九四九〕 高楠順次郎・望月信亨編『知証大師全集』京都…世界聖典刊行協会
- 〔一九五二—一九五九〕 立正大学宗学研究所編『日蓮聖人遺文…昭和定本』総本山身延山久遠寺
- 〔一九五五—一九六〇〕 諸橋轍次著『大漢和辞典』東京…大修館書店
- 〔一九七五—一九八九〕 西義雄・玉城康四郎監修・河村孝照編『新纂大日本統蔵経』東京…国書刊行会
- 〔一九八一〕 中村元著『仏教語大辞典』東京…東京書籍
- 〔一九八六〕 斎藤昭俊・成瀬良徳編著『日本仏教人名辞典』東京…新人物往来社

- 〔一九九二〕 日本仏教人名辞典編纂委員会編『日本仏教人名辞典』京都…法蔵館
- 〔一九九五〕 河村孝照著『天台学辞典』東京…国書刊行会
- 〔一九九八〕 智山伝法院編『真福寺文庫撮影目録』下巻、京都…真言宗智山派宗務庁
- 〔二〇〇二〕 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典』第二版、東京…岩波書店
- 〔二〇〇五〕 藤堂明保・加納喜光編『学研新漢和大字典』東京…学研教育出版
- 〔二〇〇七〕 天台宗典編纂所編『天台電子佛典CD3』(天台CD3) 滋賀…天台宗典編纂所
- 〔二〇一〇〕 横山紘一著『唯識仏教辞典』東京…春秋社
- 〔二〇二一〕 国際仏教学大学院大学・日本古写経研究所編『日本現存八種一切経対照目録』改訂版

著作・論文・解題・図録類

赤尾栄慶

- 〔一九八九〕 『授決集』の一考察―「華嚴円教兼歴別決」について―『智証大師研究』七七五―七八七頁

浅井円道

- 〔一九七五〕 『上古日本天台本門思想史』京都…平楽寺書店

- 〔一九八九〕 「日蓮の智証大師観」『智証大師研究』一九五―二〇七頁

池田宗謙

- 〔二〇一二〕 『最澄と比叡山』東京…青春出版

池田魯参

- 〔一九七八A〕 「円珍『法華論記』における天台研究の特質」『駒澤大学仏教学部論集』第九号、九二―一〇七頁

- 〔一九七八B〕 「円珍の『法華論記』について」『印度学仏教学研究』第二十七卷第一号、三三二―三三六頁

石田尚豊

- 〔一九八九〕 「円珍請来目録と録外について」『智証大師研究』九七九―一〇四四頁

石田茂作

- 伊藤瑞叡 「一九三〇」 『写経より見たる奈良朝仏教の研究』 東京…東洋文庫
- 「一九八三」 『法華論』より見たる『十地経論』の性格について―『法華論』の作者・訳者をも論明する―（『日蓮教團の諸問題―宮崎英修先生古稀記念―』一九九三―二二八頁）
- 稲葉伸道 「二〇一九」 『研究ノート』尾張国真福寺開山能信百年忌法要にみる室町中期の真福寺『一門』（『愛知県史研究』第二十三巻、一八―三二頁）
- 今枝愛真 「一九七三」 『寺門伝記補録（解題）』（『大日本仏教全書』第九十九巻、解題三、一九二頁下―一九四頁下）
- ヴェルノ・ヘリッリス 「二〇〇八」 「円珍の法身観について」（『学習院大学人文科学論集』第十七号、一―三二頁）
- 横超慧日 「一九六九」 『法華思想』京都…平楽寺書店
- 大阪市立美術館等編 「二〇〇八」 『国宝三井寺展』（智証大師帰朝一二五〇年特別展）
- 大竹晋 「二〇一一」 『法華経論・無量寿経論 他』新国訳大蔵経一四、釈経論部一八、東京…大蔵出版
- 「二〇一三」 『元魏漢訳ヴァスバンドウ釈経論群の研究』東京…大蔵出版
- 大村西崖・中野義照 「一九二二」 『日本大蔵経仏書解題』巻上、京都…藏経書院
- 岡本一平 「二〇二〇」 「円弘撰『円弘師章』の逸文研究」（『身延論叢』第二十五号「特集 円弘と妙法蓮華経論子注」三九―八九頁）
- 「二〇二二」 「書評 望月海慧・金炳坤編『法華経研究叢書Ⅱ 妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』（『日蓮学』第五号、二七―三八頁）
- 奥野光賢

〔一九九二〕 円珍の『法華論』解釈をめぐって」『印度学仏教学研究』第四十一卷第一号、一四五—一五〇頁

〔二〇〇二〕 『仏性思想の展開—吉蔵を中心とした『法華論』受容史—』東京…大蔵出版

〔二〇〇五〕 『吉蔵の法華経観』(駒澤短期大学研究紀要』第三十三号、二二—三三頁)

〔二〇二〇A〕 『三論宗関係文献の本文問題』(駒澤大學佛教學部研究紀要』第七十八號、一三—二七頁)

〔二〇二〇B〕 『三論宗関係文献の本文問題(続)』(駒澤大學佛教學部論集』第五十一號、五九—七六頁)

落合俊典・国際仏教学大学院大学

〔二〇〇七〕 『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』研究成果報告書

小野勝年

〔一九八二〕 『入唐求法行歴の研究』智証大師円珍篇、上巻、京都…法蔵館

〔一九八三〕 『入唐求法行歴の研究』智証大師円珍篇、下巻、京都…法蔵館

〔一九八九〕 『智証大師と「大日経義釈」の序』(『智証大師研究』一一—一六頁)

小山田和夫

〔一九九〇〕 『智証大師円珍の研究』東京…吉川弘文館

園城寺編

〔一九九八〕 『園城寺文書』第一巻、智証大師文書

片山由美

〔二〇一四A〕 『コータン語『法華経綱要』の研究』(『法華文化研究』第四十号、一一—三四頁)

〔二〇一四B〕 『コータン語『法華経綱要』の試訳』(『身延論叢』第十九号、五九—七四頁)

〔二〇一四C〕 *The Khotanese Summary of the "Saddharmapuṇḍarikasūtra" and the "Saddharmapuṇḍarikopadesa"* (Acta Tibetica et Buddhica 第七号、八二—一〇二頁)

金山真瓜・兜木正亨

〔一九四八〕

『印度に於ける法華経の流布—法華経解説(六)—』(『法華』第三十五卷第二号、三六—四六頁。後に兜木正亨著・桐谷征一編『法華経と日蓮聖人』兜木正亨著作集第三巻、一九八五年、九二—一〇二頁、大東出版社に再録)

兜木正亨著・桐谷征一編

河村孝照

- 「一九八五」『法華經と日蓮聖人』兜木正亨著作集第三卷、東京…大東出版社

- 「一九八九A」『円珍の法華論記と大日経指帰』《宗教研究》第二七九号、二四六—二四七頁

- 「一九八九B」『法華論記』に関する一考察』《法華文化研究》第十五号、一一—二五頁

- 「一九八九C」『智證大師法華論記にみえる佛身觀』《智證大師研究》九四五—九七八頁

- 「一九九九」『法華論』解題』《法華文化研究》第二十五号、一一—三頁

神田大輝

- 「二〇二一」『広蔵院日辰の『法華論』受容について』《印度学仏教学研究》第六十九卷第二号、三三—三八頁

木内央

- 「一九七三」『法華論記（解題）』《大日本仏教全書》第九十七卷、解題一、一四二頁上—一四四頁中

清田寂雲

- 「一九七三」『法華論と法華論科文について』《伝教大師研究》三七三—三九〇頁

- 「一九八三」『円珍の『菩提場経略義釈』について』《密教文化》第一九八三卷第一四三号、一四—三頁

金天鶴

- 「二〇一二」『金沢文庫所蔵、円弘の『妙法蓮華経論子注』について』《印度学仏教学研究》第六十卷第二号、一五四—一六一頁

- 「二〇一九」『円弘は新羅僧侶か—『法華経論子注』の引用文献を中心として—』《身延山大学仏教学部紀要》第二十号、一一—一六頁

- 「二〇二〇」『『法華経論子注』写本の流通と思想』《身延論叢》第二十五号「特集 円弘と妙法蓮華経論子注」、一一—三二頁

金炳坤

- 「二〇一〇」『紀国寺慧浄の『法華経續述』考(1)—新発見の史料をもとに—』《身延論叢》第十五号、一〇九—一四六頁

- 「二〇一一」『法華章疏における五分釈の展開』《印度学仏教学研究》第五十九卷第二号、六一五—六一八頁

- 「二〇一二A」『紀国寺慧浄の『法華経續述』考(2)—韓国の現存本をもとに—』《身延論叢》第十七号、三三—九一頁

- 「二〇一二B」『西域出土法華章疏について』《印度学仏教学研究》第六十一卷第一号、四八—四七七頁

- 「二〇一三A」『法華章疏の研究—海東撰述・西域出土本を中心として—』(平成二十四年度 課程博士学位請求論文)『法華弘通会

- 〔二〇一三B〕「六朝古逸『法華經疏』の同本離片に関する一考察」『身延論叢』第十八号、三二―九六頁）
- 〔二〇一三C〕「西域出土法華章疏の基礎的研究」『仏教学研究レビュー』第十三号、五五―一一頁）
- 〔二〇一三D〕「ウイグル語訳『妙法蓮華經玄贊』の研究状況と課題」『身延山大学仏教学部紀要』第十四号、二二―四一頁）
- 〔二〇一四〕「義寂積義一撰『法華經論述記』について」『印度学仏教学研究』第六十三卷第一号、四三―四八頁）
- 〔二〇一五〕「義寂積義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(3)」『法華文化研究』第四十一号、三七―五七頁）
- 〔二〇一六〕「『三平等義』の成立に関する研究」『身延山大学仏教学部紀要』第十七号、一―三四頁）
- 〔二〇一七A〕「流布本『妙法蓮華經優波提舍』考」『宗教研究』第九十巻別冊、三〇六―三〇七頁）
- 〔二〇一七B〕「最澄と『妙法蓮華經論子注』」『元暁と新羅仏教学』神奈川県立金沢文庫・東国大仏教文化研究院HK研究団、四一―八一頁）
- 〔二〇一七C〕「『三平等義』所引の「注云」について」『印度学仏教学研究』第六十六巻第一号、二七四―二六九頁）
- 〔二〇一八A〕「田弘撰『妙法蓮華經論子注』研究史概観」『身延論叢』第二十五号、九一―一八頁）
- 〔二〇一八B〕「世親『法華論』の流伝に関する諸問題―見直されるべきテキストを中心として―」『妙法蓮華經優波提舍の文献学的研究』法華經研究叢書II、一一―六頁）
- 〔二〇二〇C〕「流支訳『法華論』の流布本について―序品を中心として―」(同上、一七―三一頁)
- 〔二〇二〇D〕「〔資料〕『法華論』諸本校合(二)」(同上、一五三―二四〇頁) ※本論文では、校合②と略記。
- 〔二〇二〇E〕「慧浄述『妙法蓮華經續述』の敦煌本について」『身延山大学仏教学部紀要』第二十一号、四三―七〇頁）
- 〔二〇二一A〕「『法華論』諸本校合(三ノ二)」『身延山大学仏教学部紀要』第二十三号、一五―四〇頁）
- 〔二〇二一B〕「『法華論』諸本校合(三ノ四)」『日蓮学』第六号、七一―九七頁）
- 〔二〇二一C〕「流支訳より見たる法華論の変遷について」第七十四回日蓮宗教学研究発表大会配布資料
- 〔二〇二一〕「『法華論』諸本校合(三ノ三)」『日蓮宗教学研究所紀要』第五十号、一二九―一四四頁）
- 〔二〇一四〕「義寂積義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(1)」『身延山大学仏教学部紀要』第十五号、一九―四三頁）
- 〔二〇一五A〕「義寂積義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(2)」『身延論叢』第二十号、五五―六九頁）
- 〔二〇一五B〕「義寂積義一撰『法華經論述記』の文献学的研究(4)」『身延山大学仏教学部紀要』第十六号、二三―三八頁）

日下大癡

〔一九二六〕

「法華論に就て」(『龍谷大学論叢』第二六九号、一—六五頁)

〔一九三六〕

『台学指針』京都・興教書院 ※日下大癡「一九二六」を「法華論に就いて」(一六三—二二七頁)として再録。

窪田哲正

〔二〇一七〕

「日蓮の師、俊範の未紹介資料について」(『法華修行論の研究 円戒と観心』四四五—四七〇頁)

桑名法晃

〔二〇一六〕

『法華論』版本の研究―清水梁山国訳『法華論』の底本を視点として―(『東洋文化研究所報』第二十号、一七一—六二頁)

〔二〇二〇〕

「清水梁山国訳『法華論』の底本について―版本『法華論』の流布と受容を視点として―」(『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、二二—六七頁)

吳鴻燕

〔二〇〇〇〕

「湛然撰『法華五百問論』成立の諸問題」(『駒沢大学仏教学部論集』第三十一号、三三三—三五〇頁)

〔二〇〇七〕

『湛然『法華五百問論』の研究』東京・山喜房仏書林

小松邦彰

〔一九六五〕

「日蓮聖人の智証大師観について」(『印度学仏教学研究』第十三卷第一号、一七四—一七五頁)

〔一九八二〕

「日蓮聖人教学と智証教学の思想的連関」(『日蓮』(日本名僧論集)第九卷、四五—六五頁)

佐伯有清

〔一九八九〕

『智証大師伝の研究』東京・吉川弘文館

〔一九九〇A〕

『円珍』(人物叢書 新装版) 東京・吉川弘文館

〔一九九〇B〕

「円珍と山王院蔵書目録」(『成城文芸』第一三二号、一—五一頁)

〔一九九三〕

『最澄とその門流』東京・吉川弘文館

〔一九九九〕

『悲運の遣唐僧 円載の数奇な生涯』東京・吉川弘文館

佐藤哲英

〔一九三七〕

「山王院蔵書目録に就いて―延長三年筆青蓮院蔵本解説―」(『叡山学報』第十三号、一—二二頁)

塩田義遜

〔一九四三〕

『法華論の研究』《棲神》第二十八号、一—四八頁

〔一九六〇〕

『法華教学史の研究』東京…地方書院

清水俊匡

〔一九九三〕

『定性声聞成仏について—『法華論』四種声聞授記不授記について—』《興隆学林紀要》第七号、三三—五一頁

清水梁山

〔一九二二〕

『国訳法華論開題・国訳妙法蓮華經優婆提舍』《国訳大藏經》論部第五卷、東京…国民文庫刊行会

末光愛正

〔一九八三〕

『古藏の法華論引用に於ける問題』《曹洞宗研究員研究生研究紀要》第十五号、一〇三—一二三頁

高木豊

〔一九八九〕

『円珍の行実に関する日蓮の知識』《智証大師研究》三四三—三六五頁

高崎直道

〔一九七七〕

『法華論記』《増補改訂日本大藏經》第九十七卷、解題一、三四四頁下—三四七頁下

高瀬承厳編

〔一九一八〕

『法華論記』《仏書研究》第四十一号、三頁

武覚超

〔一九八三〕

『宝地房証真の本迹論』《天台学报》第二十五号、一一七—一二三頁

〔一九八八〕

『天台教学の研究』京都…法蔵館

〔二〇〇八〕

『比叡山仏教の研究』京都…法蔵館

武本宗一郎

〔二〇一〇A〕

『最澄鈔『法華論科文』訳注』《論叢アジアの文化と思想》第二十八号、二四二—三六三頁

〔二〇二〇B〕

『守護国界章』における『法華論』釈義とその系譜—『法華論』の「甚深」に関する最澄の釈義を中心に—』《東洋の思想と宗教》第三十七号、六五—八一頁

- 「最澄の『法華論』釈義とその系譜——「成就」解釈の枠組みをめぐる——」『天台学報』第六十四号、一六九—一八〇頁）
- 〔二〇二二〕
- 多田孝正
- 〔一九八六〕
- 「法華論記」『日本仏教典籍大事典』東京…雄山閣、四八三頁）
- 玉城康四郎
- 〔一九八九〕
- 「智証大師円珍における根本立場の展開」『智証大師研究』七八九—八八八頁）
- 田村晃祐
- 〔一九五八〕
- 「護命僧正と大乘戒壇独立」『日本仏教』第一号、三三—四二頁）
- 田村芳朗
- 〔一九六九〕
- 『法華経 真理・生命・実践』東京…中央公論社
- 天台宗寺門派御遠忌局編輯
- 〔一九三七〕
- 『智証大師』滋賀…園城寺
- 苦米地誠一
- 〔一九八八〕
- 「智証大師円珍の密教思想について——在唐時の著作——」『大正大学総合仏教研究所年報』第十号、一四—三一頁）
- 藤野泰二
- 〔二〇一五〕
- 「吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について」『印度学仏教学研究』第六十三卷第二号、二二〇—二二五頁）
- 中井泰二
- 〔二〇一五〕
- 「吉蔵による『法華論』帰敬偈の理解について」『仏教学論集』第三十一・三十二合併号、一一九頁）
- 中井本勝
- 〔二〇一六A〕
- 「吉蔵撰『法華論疏』における『法華論』科文について(1)」『仏教学論集』第三十三号、一一—一八頁）
- 〔二〇一六B〕
- 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(1)」『智慧のともしび アビダルマ佛教の展開』三友健容博士古稀記念論文集、一六三—一八九頁）
- 〔二〇一七A〕
- 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(2)」『身延論叢』二十二号、二二—四一頁）
- 〔二〇一七B〕
- 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(3)」『法華文化研究』四十三号、二五—六七頁）
- 〔二〇一七C〕
- 「吉蔵撰『法華論疏』における法華経解釈について」『印度学仏教学研究』第六十六卷第一号、一〇—一五頁）

- 〔二〇二〇〕 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(4)」「法華文化研究」第四十六号、九九―一二八頁)
- 〔二〇二一〕 「吉蔵撰『法華論疏』の文献学的研究(5)」「身延論叢」第二十六号、二九―六三頁)
- 中野直樹
- 〔二〇二三〕 「真福寺蔵『法華論』は天平勝宝七年の訓点を伝えるか」「『いとくら』」第十二号、五―六頁)
- 日本大蔵経編纂会編
- 〔一九一七〕 『日本大蔵経編纂会会報』第二十三号
- 萩野翔太
- 〔二〇二三〕 「初期日本天台における被接の解釈をめぐって―円珍『法華論記』と『授決集』を中心に―」「岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要」第二十三号、五三―七四頁)
- 平井宥慶
- 〔一九九三〕 「敦煌文献よりみた『法華経』研究」「法華経の受容と展開」法華経研究Ⅻ、六三九―六七八頁)
- 平井俊栄
- 〔一九七八〕 「『大乘三論大義鈔』の著者玄叡について」「駒澤大学仏教学部研究紀要」第三十六号、七五―八七頁)
- 平川彰
- 〔一九七〇〕 「法華経における「一乗」の意味」「法華経の成立と展開」法華経研究Ⅲ、五六五―六〇六頁)
- 〔一九八〇〕 「開三願一の背景とその形成」「法華経の思想と基盤」法華経研究Ⅷ、一三三―一七七頁)
- 深浦正文
- 〔一九五四〕 『唯識学研究』上卷(教史論、京都…永田文昌堂
- 福井康順
- 〔一九八九〕 「智証大師についての二題」「智証大師研究」一〇四五―一〇四九頁)
- 藤井教公
- 〔二〇〇〇〕 「中国仏教における「仏種」の語の解釈をめぐって」「『東洋の思想と宗教』」第十七号、一一―一八頁)
- 〔二〇〇一〕 「天台智顗の『法華経』解釈―如来蔵仏性思想の視点から―」「(勝呂信静編『法華経の思想と展開』法華経研究Ⅻ、三五―一三六九頁)

藤井教公・池邊宏昭ほか

〔二〇〇一〕

〔世親〕『法華論』訳注(1)〔北海道大学文学研究科紀要〕第一〇五号、二二—一二頁〕

藤井教公・池邊宏昭

〔二〇〇二〕

〔世親〕『法華論』訳注(2)〔北海道大学文学研究科紀要〕第一〇八号、一一九五頁〕

〔二〇〇三〕

〔世親〕『法華論』訳注(3)〔北海道大学文学研究科紀要〕第一一一号、一七〇頁〕

藤谷昌紀

〔二〇〇五〕

〔大谷大学図書館所蔵〕『法華開示抄』の諸写本について〔大谷大学真宗総合研究所研究紀要〕第二十二号、三一—五五頁〕

藤丸要

〔二〇二二〕

〔真福寺本〕『華嚴法界義鏡』について—凝然真筆本の紹介と特色—〔印度学仏教学研究〕第七十卷第二号、一七二—一七九頁〕

仏教年鑑社編

〔一九二九〕

『仏教年鑑 昭和五年版』仏教年鑑社

前川健一

〔一九九五〕

〔円珍〕『法華論記』の引用文献—未詳文献の解明を中心に—〔インド哲学仏教学研究〕第三号、八九—一〇三頁〕

〔一九九六〕

〔円珍〕『法華論記』の引用文献—「先覚」と「慈恩」「進公」—〔印度学仏教学研究〕第四十四卷第二号、六四五—六四七頁〕

〔二〇〇二〕

〔円珍〕『法華論記』の法華思想—「釈序品」に於ける『法華玄賛』批判を中心に—〔東洋哲学研究所紀要〕第十八号、三一—二二頁〕

〔二〇〇四〕

〔円珍〕『法華論記』の法華思想(二)「釈方便品」に於ける『法華玄賛』批判(一)〔東洋哲学研究所紀要〕第二十号、八三—九六頁〕

〔二〇〇五〕

〔円珍〕『法華論記』の法華思想(三)「釈方便品」に於ける『法華玄賛』批判〔東洋哲学研究所紀要〕第二十一号、四一—五三頁〕

前島信也

〔二〇一九〕

〔信瑞編〕『浄土三部経音義集』と玄應『一切経音義』〔仏教文化学会紀要〕第二十七号、一一—一三四頁〕

松本知己

〔二〇一三〕

『法華文句』所説の五種声聞について〔印度学仏教学研究〕第六十二卷第二号、五七八—五八三頁〕

松森秀幸

〔二〇一〇〕

〔智度とその著作〕『天台法華疏義續』について〔印度学仏教学研究〕第五十八卷第二号、六〇六—六二〇頁〕

- 丸山孝雄
〔二〇一九〕『法華伝記』の成立年代と「釈志遠伝」の位置づけについて『印度学仏教学研究』第六十八卷第一号、二五〇―二四四頁〕
- 道元徹心
〔一九八〇〕「法華七喻解釈の展開」『法華經の思想と基盤』法華經研究Ⅷ、四三三―四六一頁〕
- 三友健容
〔二〇一五〕「円珍撰『法華論記』における「舍利」表現について」『仏教学研究』第七十一号、二九―四六頁〕
- 三井晶史訳
〔一九八〇〕「アビダルマ仏教における声聞成仏と法華經」『法華經の思想と基盤』法華經研究Ⅷ、二八一―三二二頁〕
〔二〇〇五〕「義寂撰『法華論述記』の一考察」『大乘仏教思想の研究 村中祐生先生古稀記念論文集』一一七―一五六頁〕
- 三井晶史編
〔一九二二〕『楞伽經…現代意訳』仏教經典叢書刊行会
〔一九二二〕『大品般若經…現代意訳』仏教經典叢書刊行会
- 三井晶史編
〔一九三一〕『昭和新聞国訳大藏經』論律部第九卷（覆刻版一九七七年、オンデマンド版二〇〇九年）
- 養輪顕量
〔二〇二〇〕「金天鶴『法華經論子注』写本の流通と思想について」のレスポンス」『身延論叢』第二十五号「特集 円弘と妙法蓮華經論子注」、三三―三七頁〕
- 宮崎展昌
〔二〇一九〕『大藏經の歴史―成り立ちと伝承―』京都…方丈堂出版
- 村中祐生
〔一九八九〕「智證大師における法華經の解釈」『智證大師研究』一〇五一―一〇九六頁〕
- 村山修一
〔一九九四〕『比叡山史…闘いと祈りの聖域』東京…東京美術
- 望月海慧
〔二〇一三A〕「チベット語訳『妙法蓮華註』の序文の構成について」『身延山大学仏教学部紀要』第十四号、一一―二二頁〕

- 〔二〇一三B〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『法師品』和訳」『法華文化研究』第三十九号、一一一五頁）
 〔二〇一四A〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『授記品』和訳」『身延山大学仏教学部紀要』第十五号、一一一八頁）
 〔二〇一四B〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『五百弟子受記品』和訳」『身延論叢』第十九号、三五—五八頁）
 〔二〇一四C〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『授学無学人記品』和訳」（松村壽巖先生古稀記念論文集刊行会編『日蓮教学教団史の諸問題』山喜房仏書林、四一—五一頁）

- 〔二〇一四D〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『見宝塔品』和訳」『日蓮仏教研究』第六号、七一—二二頁）
 〔二〇一五A〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『藥草喻品』和訳」『東洋文化研究所報』第十九号、七七—一〇三頁）
 〔二〇一五B〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『化城喻品』和訳」（身延論叢）第二十号、一一五四頁）
 〔二〇一七A〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『序品』和訳(1)」（身延山大学仏教学部紀要）第十八号、一一三九頁）
 〔二〇一七B〕 *Vasubandhu's Commentary on the Lotus Sutra in Tibetan Literature*. 邦題「チベット文献において言及される世親の『法華論』」『印度学

仏教学研究』第六十五卷第三号、一二五—一二三頁、和文要旨四〇九頁）

- 〔二〇一七C〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『信解品』和訳」『大崎学報』第一七三号、三七—八〇頁）
 〔二〇一八A〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『序品』和訳(2)」（身延山大学仏教学部紀要）第十九号、六三—一二〇頁）
 〔二〇一八B〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『方便品』和訳(1)」（身延論叢）第二十三号、一一四〇頁）
 〔二〇一九A〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『方便品』和訳(2)」（身延論叢）第二十四号、一一七四頁）
 〔二〇一九B〕 「チベット語訳『妙法蓮華註』『譬喻品』和訳」『日蓮仏教研究』第十号、六一—一三〇頁）
 〔二〇二〇A〕 「世親の『法華論』について」（『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、一一一九頁）
 〔二〇二〇B〕 「世親『法華論』のチベット語訳は存在したのか」（『仏教思想の展開』花野充道博士古稀記念論文集、一八一—二二四頁）

望月海慧・金炳坤編

- 〔二〇二〇A〕 Bibliography of the Studies on the Saddharmapuṇḍarīka Sūtra (1844–2020). *Lotus Sutra Studies I*. Minobu: International Institute for Nichiren Buddhism at Minobusan University.
 〔二〇二〇B〕 『妙法蓮華経優波提舍の文献学的研究』法華経研究叢書Ⅱ、身延山大学国際日蓮学研究所

矢吹慶輝

〔一九三三〕『鳴沙餘韻解説 燉煌出土未傳古逸佛典開寶』東京…岩波書店

山川智応

〔一九三四〕『法華思想史上の日蓮聖人』東京…浄妙全集刊行会

山口寿謙

〔一九七七〕『天親の『法華論』と法華経引用文例』『現代宗教研究』第十一号、八〇—八四頁

李炳魯

〔二〇〇九〕『円珍の唐留学と新羅人』『桃山学院大学総合研究所紀要』第三十四卷第三号、一七一—一九頁

渡辺最昌

〔一九三五〕『法華論記』『仏書解説大辞典』第十卷、九二—九三頁

渡辺宝陽

〔一九七五〕『法華論入門』『大法輪』第四十二卷第十二号、七八—八七頁

〔二〇〇三〕『インド仏教の法華経観—世親の『法華論』—』(大法輪閣編集部編『法華経入門—永遠のいのちを生きる—』大法輪閣、一一三—一三四頁)

Terry Rae Abbott

〔一九八五〕*Vasubandhu's commentary to the "Saddharmapuṇḍarīka-sūtra": A study of its history and significance*. Ph.D. diss., University of California, Berkeley.

Berkeley.

〔二〇一三〕*"The Commentary on the Lotus Sutra," Tiantai Lotus Texts, BDK Tripiṭaka Translation Series*, pp.83-149. Berkeley: Bukkyō Dendō Kyōkai America.

拙稿

〔二〇一六〕『円珍『法華論記』における四種声聞授記の解釈について』『宗教研究』第八十九卷別冊、二九五—二九六頁

〔二〇一八A〕『円珍『法華論記』巻第七末における天台章疏の引用について』『印度学仏教学研究』第六十六卷第二号、七一七—七二〇頁

〔二〇一八B〕『円珍『法華論記』における七喻解釈について—吉蔵の解釈との比較を中心として—』『印度学仏教学研究』第六十七卷第一号、一九—三三頁

〔二〇一九A〕『円珍『法華論記』における『六祖壇経』の依用について』『宗教研究』第九十二卷別冊、三二—三三三頁

〔二〇一九B〕『円珍の在唐留学と『法華論記』撰述をめぐって』『国際天台学大会 論文集』五三—五五〇頁

〔二〇二〇〕『円珍『法華論記』の教学思想—十無上を中心として—』『印度学仏教学研究』第六十八卷第二号、二〇二〇年、六四〇—六四三頁

- 「二〇二二」 「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』について」(『印度学仏教学研究』第六十九卷第二号、八八―九一頁)
- 「二〇二二A」 「興聖寺本『法華論』『いとくろ』第十一号、六頁)
- 「二〇二二B」 「興聖寺一切経本『妙法蓮華経憂波提舍』解題・翻刻」(『仙石山仏教学論集』第十三号、一―七六頁)
- 「二〇二三A」 「円珍『法華論記』所引の『法華論』について」(『印度学仏教学研究』第七十一卷第二号、五三一―五三五頁)
- 「二〇二三B」 「真福寺本『法華論』の紹介と史料的价值」(『いとくろ』第十二号、三―四頁)

データベース・ウェブサイト類

- 教育部『異體字字典』(<https://dict.variants.moe.edu.tw/>)
- 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ (<https://rinda.kulib.kyoto-u.ac.jp/>)
- 宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧―書誌書影・全文影像データベース― (<https://db2.sido.keio.ac.jp/kanseki>)
- 国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/>)
- デジタル増上寺三大蔵 (https://jodoshuzensho.jp/zojoji_sandaizo/index.html)
- 日本古写経データベース (<https://koshakyo-database.icabs.ac.jp/about/site>)
- C B E T A 線上閱讀 (<https://cbetaonline.dila.edu.tw/zh/>)
- S A T 大正新脩大蔵経テキストデータベース (<https://21dzk1.u-tokyo.ac.jp/SAT/>)

初出一覧

本研究の一部分は、筆者がこれまでに学会・学術誌などに発表した論文を修正・増訂したものである。それらの初出を示せば、以下の通り。

第一章「円珍の唐留学と『法華論記』の撰述」

二〇一九年一月七日―八日に北京大学で開催された国際天台学大会にて、以下の題目で口頭発表し、大会で配布された論文集に掲載された。
拙稿「円珍の在唐留学と『法華論記』撰述をめぐって」『国際天台学大会 論文集』二〇一九年、五三三―五五〇頁

第二章第二節「『法華論記』所引の『法華論』について」

拙稿「円珍『法華論記』所引の『法華論』について」『印度学仏教学研究』第七十一卷第二号、二〇二三年、五三一―五三五頁

第三章第二節「円珍と吉蔵の七喻解釈」

拙稿「円珍『法華論記』における七喻解釈について―吉蔵の解釈との比較を中心として―」『印度学仏教学研究』第六十七卷第一号、二〇一八年、一九―二三頁

第四章第二節「円珍の四種声聞授記解釈」

拙稿「円珍『法華論記』における四種声聞授記の解釈について」『宗教研究』第八十九卷別冊、二〇一六年、二九五―二九六頁

第四章第三節「『法華論記』巻第七末における天台章疏等の引用」

拙稿「円珍『法華論記』巻第七末における天台章疏の引用について」『印度学仏教学研究』第六十六卷第二号、二〇一八年、七一七―七二〇頁

第五章第二節「円珍の十無上解釈」

拙稿「円珍『法華論記』の教学思想―十無上を中心として―」『印度学仏教学研究』第六十八卷第二号、二〇二〇年、六四〇―六四三頁